

艦娘ぐらし、始めました—Welcome to Kan—Colle world—

嵐山之鬼子 (K C A)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『Dream To New World』艦娘ぐらし、始めました
『より改題』

『艦これ』のプレイヤーだった大学生の青年・三浦 湊（みうら・みなど）。

1週間ぶりにプレイしようとゲームをスタートさせた次の瞬間、彼は自分が海辺、それも鎮守府の敷地内にいることに気が付く。

「まさか、ゲームの世界に取り込まれた!？」 驚く彼だったが、異変はそれだけに留まらない。なんと、彼は「彼女」——艦娘・浦風になっっていたのだ!

提督・大淀・明石の3人だけ己れの事情を話し、助けを求めた「彼女」は、当面、この鎮守府で艦娘として生きていくことになるのだが……。

現実⇒『艦これ』世界の転生(?)物です。ただし、艦これ側の世界設定自体は、これまで私が自ブログやPixiv等でKCA名義で発表してきた艦これ連作短編「風強く波高し」シリーズ(※こちらも外伝「Another」として少しずつここに掲載中)に則っています。

年代的には、Another4の『三姉妹の絆』とほぼ同時期(山本提督の下に五十鈴と名取が来た1カ月後くらいの時間軸/西暦2017年春頃)。この時代の艦娘たちは第三世代型なので人権なども比較的保障されていますし、日本の情勢も10年前に比べれば随分改

善され、〃深海事変〃前に近いレベルになっています（完全に元のようにはいきませんが、世界的にはまだ混乱が続いている地域も多いですが）。

目次

Another 5 2 a. 魅惑の黒に誘われて (転「雲」)	214
Another 5 1. 魅惑の黒に誘われて (起承)	210
15	206
14	202
13	198
12	193
11	189
Another 4. 三姉妹の絆	164
130	
を辞め、ひとりの艦娘 (おんな) としての悦びに身を委ねたかゝ	
Another 3. 任務娘・大淀の奇妙な愛情くいかにして彼は提督	109
Another 2. 時ナラヌ雨ニフラレテ	104
10	99
09	96
08	91
07	87
06	76
「このシリーズにおける特殊な設定の概要」	24
Another 1. 鎮守府戦線、風強く波高し	20
05	14
04	11
03	5
02	1
01	

Another 5 2 b.	魅惑の黒に誘われて (転 [月])	220
Another 5 2 c.	魅惑の黒に誘われて (転 [村])	226
Another 5 3.	魅惑の黒に誘われて (結)	230
Another 5 4.	エピソード	233
Another 5 after.	雨でなくとも相愛傘で	238
16		244
17		248
18		253
19		258
20		262
エピソード		269
Another 6.	歯止めなく如月になっていく私 (オレ)	274
Another EX.	やればできるこ	297
Another 7.	駆逐艦娘・如月は主様に逆らえない	309
Another 8.	鈴谷にそそのかされて熊野に為った提督の話	317

『艦隊これくしょん』と呼ばれるPC用ゲームがある。オンライン専用のいわゆるブラウザゲームで、ジャンルとしては戦略シミュレーションの一種……になるのだろうか。

プレイヤーは「提督」となって、擬人化された第二次大戦時の軍艦「艦娘」を配下のユニットとして集め、育成・指揮して、「深海棲艦」と呼ばれる謎の敵と戦うことになる。

ブラウザゲームとしては相当な好評を博し、ノベライズ・コミカライズなどを経てテレビアニメ化や映画化も果たした、かなりの人気コンテンツだと言ってよいだろう。

「ディープなヲタク」とまではいかないが、ゲームもアニメもそこそこ嗜むグータラ大学生（20歳）の俺も、提督の末席に名を連ね、一時はそれなりに熱中していたこともある——最近は、週に1、2度起動するくらいだけど。

で、だ。

そろそろ日付が変わろうかという深夜、その週に1、2度の提督稼業おっとめのために『艦これ』を立ち上げた瞬間、スタングレネードもかくやという閃光がモニターから溢れ出すなんて事態は、さすがに想像の範囲外だ。

あまりのまばゆさに思わず目を閉じ……ただけでは収まらず、頭がくらくらするような感覚とともに、思わず地面にうずくまってしまった。

——ちよつと待て。「地面にうずくまる」？

俺はいつものように自室で机の前の椅子に座ってプレイしようとしていたはずじゃなかったか？

すごく嫌な予感がする。

（ラノベとかアニメでのお約束だと、コレって「ゲームの世界に引きずり込まれた」ってパターンだよな？）

そういえば、さつきから潮騒の音と海の匂いが耳と鼻に届いているような……。

思い切って目を開けてみる。

(うわあ、やつぱり)

視界に飛び込んできたのは、港というか波止場？

海に面していくつかコンクリートの栈橋が設けられ、それ以外の敷地内もきちんとアスファルトで整地され、近くには工廠らしき建物が見える。

何より、その工廠の隣にある赤レンガの建物は「鎮守府」——『艦これ』世界でプレイヤーたる提督が常駐する執務室を中心に、艦隊運営に必要な各種設備が揃っているはずの建物だろう。

「マジで『艦これ』の世界に落ちまったのかよ」

しやがみこんだまま、思わずそう呟いた、その自分の声にギョツとする。

(なんだ、この可愛らしくも落ち着いた艶のあるソプラノボイスは!?)

一応断っておくと、俺本来の声はダミ声と言わないまでも普通の成人男子の低めの声だ。

世の中には、両声類と称する男なのに女にしか聞こえない高く澄んだ声が出せる人もいるらしいが、生憎そんな特技は持ち合わせていない。

とつさに視線を下の方に向けて、自分の身体を見てみる。

俺の目に映ったのは、黒に近い紺色の襟に黄色のスカーフを結んだ白いセーラー服を着た自分の体、しかも、その「自分の体」にしても、胸のふくらみその他からして、どう見たって女の子のものと思えない代物だった。

「うそだろ承●郎……」

* * *

小杉十郎太か小野大輔ばりのシブい声で「ああ嘘だぜ」と否定してくれる頼もしいスタ●ド使いは存在せず、仕方なく俺は鎮守府の建物の方へと歩き出した。

歩きながらも、自分が「何」になったのか考えてみる。

(このタイプのセーラー服を着てる艦娘は、陽炎型の浦風・磯風・浜

風・谷風の4人。その中でも、袖をこんな風にノースリーブにして、長手袋はめてるのは浦風ひとりだけだよな)

鏡は見えないが、頭に白い帽子をかぶっているし、髪の色も日本人の地毛にはありえない水色なので、たぶん間違いないだろう。

(普通、こういうゲームにインする話の場合、プレイヤーの分身たる提督か、百歩譲って一番お気に入りの「嫁艦」に憑依するモンじゃないのか!?)

俺が一番最初にケツコンカッコカリした「嫁」は空母娘の翔鶴で、その次にお気に入りなのは同じく空母の飛鷹と戦艦娘の榛名あたりだ。いや、ロングストリートヘアの落ち着いて大人びた感じのコが好きなんだよ!

「姉妹艦どころか、艦種さえ違うじゃん」

浦風は、一般に幼いと言われる駆逐艦娘。まあ、陽炎型は駆逐艦としては発育のいい方だし、浦風・磯風・浜風の3人はその中でも(大きめの「胸部装甲」含め)特に大人っぽい容姿ではあるんだけど、それでも外見年齢はせいぜい15、6歳くらいだろう。

「そもそも俺、浦風は持ってなかったしなあ」

なので、本物の浦風(艦娘)については、その容姿と大雑把な性格(明朗快活で面倒見がよく、「ダメ提督製造機」勢のひとりらしい)と、あとはせいぜい広島弁をしゃべるってことくらいしか知らないんだよ。アニメにも出てなかったし。

いろんな意味でこれまで「縁のなかった」艦娘に、まさか自分がなってしまうとは……。

まあ、このテの転生系のお話だと、最初はどこかの孤島とか密林とかに放り出されて、まずサバイバルから始めないといけないケースもあるから、それに比べれば最初から鎮守府付近かんけいしやに現れたぶん、多少はマシなんだと思う。

溜息をつきながらも鎮守府の入口に近づくと、なぜか深刻そうな表情の明石さんと大淀さん(だと思っ、たぶん)が玄関前に待機していて、俺、いや「浦風」の姿を見た途端、こっちに向かって来た。

「いた! いましたよ、大淀!!」

「よかった。早速提督にお知らせしない」と

ふたりに敵意は見えず、むしろホッとしたような顔をしているトコロからして、この場合、自分……というか「浦風」の存在自体はココの人間も多分把握してたつてことだよな。

ありがちなパターンだと、「建造」時の事故（建造したはずの艦娘が工廠に現れなかった）とか、あるいは着任予定の浦風が予定時刻を大幅に過ぎても到着しなかったとか、かな。

（さて、この場合、どう対応するべきなのかね）

おおまかに言つて二択、今の自分の現状を素直に説明するか、否か。さらに説明しない場合は、このまま「浦風」になりすますか、記憶喪失とかで誤魔化すか、だよな。

とは言え、浦風のことをよく知らない俺が彼女のフリをするつてのは、ほぼ無理ゲーだ。記憶喪失のフリの方は、それに比べればまだマシだけど、腹芸とか演技とかがあまり得意じゃない俺の場合、ボロが出る可能性が高い。

となると、少なくとも提督+このふたりくらいには、正直に事情を打ち明けておくべきなんだろうな。

大淀さんが鎮守府内にとつて返し、残った明石さんがこちらに歩み寄ってくるまでの間に、とりあえずそこまでは考えをまとめる。

「あのく、すみません、ここの鎮守府の方ですか？」

そのうえで、先制攻撃つてワケじゃないけど、此方から話しかけてみた。

「は、はい、そうですよ。貴方が、今日着任予定の陽炎型の人ですか？」

おつ、この聞き方だと建造じゃなくて着任パターンの方が。

「はい。陽炎型駆逐艦娘の『浦風』……だと思っんですけど」

顔は見えてないので、実は断言できない。

「？　なんで、そんなに自信なさげなんです？」

まあ、当然、そうなるよね。

「えーと、それには色々複雑な事情がありまして……詳しくは提督のところでご説明します」

「ふーむ。つまり君は、元は単なる一般人の大学生だったが、『艦隊これくしょん』というゲームをプレイしようとしたら、そのゲームの世界に吸い込まれ、気が付いたら艦娘になってしまった、ということなんだね」

「はい、簡潔にまとめると」

我が事ながら、そうやって理路整然と並べられると嘘くさいにもほどがある。

「荒唐無稽だが……君に嘘をついてる様子はないな。明石、バイタルチェックの方は？」

提督さん（20代半ばくらいのスラックとしたイケメン）は、傍らで何かの機械を弄っていた明石さんに話しかける。

「こちらもグリーンです。多少の怖れや不安は見られますけど、少なくともポリグラフィ的な観点からして、彼女が意図的に嘘をついている可能性はかなり低いかと」

あ、この手首と額に巻かれたコード付きのバンドってそういう意図だったんですね。

もう外してよいそうなので、計測用のバンドを外す。多少は信用してもらえたのかと、少し気が楽になった。

「提督、大本営発の資料によると、通常の浦風の言葉づかいはかなり明確な広島弁だとされています。無論、彼女があえて標準語で話している可能性もありますが……」

大淀さんが何かの冊子を見ながら補足する。

えーと、語尾が「じゃ」とか「じゃけん」になるんだっけ？

「そこまでして自分を不審人物だと主張するメリットはない、か」
確かにスパイとかなら自分が疑われないよう、むしろ「普通の艦娘」であることを装おうとするだろうからね。

「わかった。ひとまず君の言うことが事実だと仮定しよう。その上で問うが——君は、これからどうする、いや、「どうしたい」と思っているのかな？」

そこなんだよねえ。

正直、元の世界に戻るアテや手がかりなんて今のところ欠片もないし、とりあえずしばらくはこの世界で暮らさないといけないことは確実だ。

そうなると先立つもの（お金）は勿論、身分保障だとか住む場所だとか色々必要になるだろうし……。

ここは背に腹は代えられない、か。

「あおう、もし差し支えなければ、「この鎮守府に所属する艦娘」として扱っていただけじゃないでしょうか？」

こちらの提案が意外だったのか、提督は少し目を見張った。

「ほう、鎮守府を頼ってくることは予想していたけど、いいのかね？ てつきり艦娘ではなく軍属として雇ってくれと言うかと思っただんだが」

艦娘になるということは、すなわち戦場に出るということだぞ、と提督が念を押してくる。

「正直、恐いと思う気持ちがないとは言えませんが……。でも、この体は艦娘のもので深海棲艦と戦う力がある。そして、深海棲艦から日本を守りたいという気持ちも確かにあるんです」

少々カツコつけてる部分もあるけど、嘘じゃない。

あえて付け加えるなら、そういう正義感に加えて、ゲームでは見守ることしかできなかった（そして度々歯がゆい思いをした）艦娘に自分になった以上、この「力」を目いっぱい有効活用して活躍したい——という子供っぽい自尊心も同程度あったってことかな。

「成程。そういうことなら、此方としても有り難い。三浦君、いや「浦風」には、当初の予定通り私の指揮下に入ってもらおう」

ちなみに、本名は三浦湊（みうら・みなと）だったりする……。んだけど、たぶんこの名前は（少なくともこの世界では）殆ど使うことはないんだろうなあ。

「はい。では……陽炎型1番艦「浦風」、着任しました。よろしくお願い致します！」

うろ覚えの海軍式の敬礼をしつつ、たぶん本物の浦風とは（主に広

島弁じやない点で) 異なるだろう着任の口上あいさつを口にしてみる。

「よろしい。着任を許可する」

提督さんがそう応えると同時に、何か不可視の「線」ラインみたいな代物モノが、自分と相手の間に繋がれたのを感じる。

「よかった。艦娘としてはとびきりイレギュラーですけど、ちゃんと着任けいやくはできたみたいですね」

明石さんがホツとしたような顔で、そんな言葉を漏らす。

なるほど。これが提督と艦娘の間にある絆(物理)なのか。

テレパシーとかニュータイプとかみたく互いに心が筒抜けってわけじゃないけど、目を閉じても「ココに自分がいて、ソコに提督かれがいる」ってことが、何となく感覚として理解できる。

(外見なりだけじゃなく、本当に艦娘になっちゃったんだなあ)

軽い喪失感3割に対して、未知なる体験に対するワクワク感が7割くらいを占めてる自分の好奇心の強さに、ちよつと苦笑する。

(まあ、今更悩んでも仕方ないよな!)

* * *

それから、当面の実務的な話し合いに入る。

まず、自分の「正体」については、今この執務室にいる4人の間でのみ共有することになった。

鎮守府の他の艦娘たちや職員、そして大本営に対しても、ここにいるのはただの「浦風」で、たまたま適合率とやらが低かったため、他の普通(?)の浦風とは少し言動が異なる——そういう形で押し切るのだという。

「「適合率」って?」

「そこからですか」

ここで簡単に、艦娘についての説明を明石さんから聞くこととなった。

この世界における艦娘とは、艦娘としての適性を持つと認められた若い女性(ローティーンから20代半ばくらい)が軍に打診され、本人が志願したうえで、特殊な「手術」(適合処置)を受けてなる「対霊的武装である艦娘用艤装を装備できるようになった、ある種の霊的

強化人間」らしい。

つまり元々は人間——いや、艦娘になっても生物学的に99%は人間なのだそう。その証拠に、「解体」処置によって基本艤装とのリンクを外して退役した艦娘は、別段普通の人間と変わらず、妊娠や出産なども可能なのだとか（逆に艦娘である間は身体の老化は本来の10分の1以下に抑えられ、月経も訪れないため妊娠もしないらしいけど）。

で、艦娘になる際、「ファーストボーン（FB）」と呼ばれるその型式の最初の艦娘以外は、すべてそのFB艦娘とよく似た容姿・性格に変貌するんだけど、「どこまでそのFB艦と近くなるか」を適合率と言うんだそう。

「適合率が高すぎると、元の人格がほとんど残らないので本人にとってはある意味不幸ですが、逆に低すぎるのも艦娘としてのポテンシャルを引き出すのが困難になります」

「もつとも、適合率って、本来の意味ではFB艦娘じゃなく、わたしたちの「基」になった軍艦……の船魂たましいとの相性を指す用語だったんだけどね。」

大淀さんと明石さんが交互に教えてくれた。

「とは言え、そもそもファーストボーン自体が、未だ該当する艦娘がない船魂に、もつとも相性のよい女性が巡り合った時に生まれるものだから、適合率は極めて高いのよ。だから、現在はFB艦娘の適合率を100として、それを基準に以降の艦娘の適合率を計測するようになった……つてのが現状ね」

流石に工作艦娘はかせけいだけあってか、このあたりの説明は明石さんの独壇場だ。

「ちなみに三浦さん、もとい「浦風」の適合率はジャスト30%。艦娘として正常に動作できるギリギリの値つてところかな」

理想は50〜70%くらいらしい。それ以上だと「自分の人格が塗りつぶされ」かねないんだそう。高すぎると危険、低過ぎてもダメって某人型決戦兵器のシンクロ率みたいだなあ。

「でも本来のと派生した意味とで同じ呼び名なのはややこしいです

ね」

「確かにね。だから、後者については区別するために『浸食率』とも言われているわ」

ちよ、それ、字面からして、どう考えてもアカンやつやん！

「ま、まあ、それはさておき。実際の艦娘としての特性その他については、駆逐艦娘向けの座学講義を週3回開催していますから、それに参加してください」

成程、アニメでやってた駆逐艦の子たちに足柄さんが授業してたみたいなアレか。

「わかりました」

その後は、艦娘……というよりこの鎮守府の一員として暮らしているための日常の心得的な規則全般をひと通り教わってから、大淀さんに艦娘たちが非番時を過ごす建物、通称『艦娘寮』へ案内してもらった。

「駆逐艦の子は普通ふたり部屋なんですけど、今ちようど偶数で、『浦風』さんが入ると奇数なので、しばらくこの部屋をひとりで使ってもらうことになりますね」

マジか！ いきなり中学生くらいの女の子と同ルームメイト居って言われると確かに困ったろうから、ラッキーだったかも。

「荷物については、届いていた分はすでに部屋に置いてあります」

「——え？」

確かに、4畳半ほどの広さの部屋の隅には、元の世界とほとんど同じに見えるゆうパ○クの大きめの箱が3つ積まれていた。

「ま、待つてください。コレってもしかして……」

「はい、『本来のその体の持ち主である浦風さん』の所持品ものでしょうね」

なんてこった……そう言えば、確かにこの鎮守府には陽炎型の浦風が赴任することになっていたんだよね。

つまり、自分（の魂？）がこの身体に憑依（？）したことで、この身体の本来の持ち主（の魂？）は、身体の奥底に押し込められたか、最悪体外にはじき出されてしまったのかもしれない。

自分は悪くない、むしろ自分も被害者だ——そうは思うのだが、
理屈^{それ}だけでは割り切れない罪悪感に襲われる。

「……………」

「何を考えてらっしやるのかおおよそ想像はつきますが、だからこそ、貴方は自分を粗末にしないでくださいね」

そうだ。どうしてこうなったのかわからない以上、今“俺”にできることは、もし「本物が戻って」きた時に困らないよう、浦風として精一杯戦果をあげ、かつ周囲とも良好な関係を築いておくことだろう。

今までどこかふわふわした夢みたいな気分でいたけど、そう自覚したことで急速に覚悟が決まる。

「——了解しました。陽炎型駆逐艦・浦風、これより艦隊勤務に於いてベストを尽くします」

“俺”、いや“私^{うち}”は、大淀さんに向かって敬礼しつつ、そう口に出すことで、艦娘・浦風として真摯に生きることが改めて自らに誓った。

「あ！ 扶桑さん、お疲れ様です。今戻られたのですか？」

「ええ、扶桑以下、第一艦隊6人、無事帰投したわ——あら、その子は？」

寮の設備（大浴場や食堂、談話室など）の説明のあと、次は鎮守府内の他の施設も案内してもらおう……というところで、出撃から戻り、提督に報告してきたばかりの扶桑さんとバツタリ顔を合わせた。ちようどいいタイミングだし、今入渠している子もいないらしいので、まずはこの鎮守府所属する艦娘達と顔合わせをすることになり、寮の前の広場のようになった場所に、全員が呼び出された。

「初めまして。陽炎型駆逐艦11番艦、浦風です。本日より本艦隊所属となりました。どうぞよろしくお願いします」

集められた艦娘たちの前に立って、ビシツと敬礼しながら挨拶の口上を述べる。

見たところ、ここの提督の指揮下にある艦娘は12人。

戦艦は扶桑のみ。空母も祥鳳のみ。

重巡は足柄と……衣笠、かな。

軽巡は多摩と那珂。

残りの6人が駆逐艦か。

オーソドックスな白と紺のセーラー服の子は吹雪……いや、三つ編みにしてるから磯波だな。

あの黒セーラーな「けいお〇」っぽい子が白露で、磨眉ポニテが初春だろう。

緑系セーラーでショートヘアなのは、睦月だよな。

まあ、この4人はギリギリ中学生くらいに見えるんだけど……。

残りのふたり——朝潮と雷はヤバイ。どう見たって小学生だ。朝潮は小学校でも高学年っぽいからまだしも、雷はガチで10歳以下にしか見えない。

ゲームプレイしてた時は気にしてなかったけど、こんな幼女と言つてもいい年代の子が戦場に赴くとか、送り出す方も精神的にかなりキ

ツそうだなあ。

多少の救いは、今の俺、いや私は、彼女達を見送る提督じゃなく、共に戦う艦娘だつてことか。

各人の自己紹介を聞きながら、頭の片隅でそんなことをツラツラ考える。

「現在、この鎮守府では、基本的には、扶桑さんを旗艦とする第一艦隊と、祥鳳さんを旗艦とする第二艦隊に分かれ、通常の出撃・哨戒任務と遠征任務を毎日交代で実行しています」

おっと、大淀さんが補足説明してくれてる。ちゃんと聞かなきゃ。

「両艦隊とも旗艦・重巡・軽巡・駆逐×3という構成で、12人でちょうど2グループ巧く回っていたのですが……」

あれ？ もしかして、私、いらぬ子？

「いえ、今後は浦風さんには、3日ずつ第一と第二に入ってもらいます。そのぶん、駆逐艦の方たちは一日につきひとりずつ自室で待機——という形で休養をとってください」

なるほど。この鎮守府は原則的には週に一度、日曜を休日にしていくそうだけど、年少組は実質週休二日になるわけか。

「ただし、浦風さんについては、当面週休一日となります」

申し訳なきような大淀さんの言葉に、気にしないでほしいと告げる。

「まあ、配属されたばかりで熟練度も低いですからね。少しでも皆に追いつくためには、経験を積まないと。それに駆逐艦以外の艦娘は元から週休一日なんでしょ。だったら別に問題ありませんよ」

本物のブラック鎮守府はこんな程度じゃないだろうしなあ。

* * *

同僚となる皆への紹介も終わったので、この集まりはそこで解散となり、とりあえず自室にでも戻るか……と思ったところで、早速声をかけられた。

「これ、そこな新人」

振り返ると、扇子を手に白い超ミニワンピースを着たポニテ少女が此方を見つめている。利根と並ぶ「のじゃロリ」娘双璧の片割れ、初春だ

な。

「何か御用ですか、えーと…初春さん？」

特に怪しまれるような真似は（言葉遣い以外）してないはずなんだけど。

「なに、そんなに警戒せずともよい。これでもわらわはこの鎮守府の最古参でな。最先任として何か新人の力になればと思うたまでのこと」

「もつともこの鎮守府自体、発足してまだ半年も経たぬのじゃが」とカカカと笑う初春さん。察するに、あの提督の初期艦なんだろう。

「あー…それは有難うございます。正直、今は右も左もわからない状態です」

むしろ「何がわからないのかすらわかってない」と言うべきか。

「およ？ だったら、今日はもう任務おしごともないし、浦風ちゃんも睦月たちといっしょに行動してみたらいいにやしい！」

初春さんの隣にいた茶色いショートカットの子——（たぶん）睦月が、ニツコリ笑って、そんな提案をする。

「あつ、そうだね。それ、いいと思うよー！」

ふたりより少し年かきに見える黒いセーラー服姿の子——白露（推定）も元気に賛成してくれた。

本音を言うなら、精神年齢20歳の非リア充男子としては、女子中学生的集団と行動を共にするというのに、若干の抵抗感がなきにしもあらずだけど……。

今の私うちは駆逐艦娘・浦風で、今後、任務等々で彼女たちとチームを組む機会は多いだろうし、少しでも早く馴染むためにも、断るという選択肢はないよね。

「えっと、ご迷惑じゃないなら、そうさせてもらっていいですか？」
そんなワケで、私は三人にホイホイついていくことになったのだ。

——これ、フラグじゃないよね？ ついて行ったからって「アッー！」な展開になったりしないよね？

幸いにして薔薇の花も百合の花も咲くことなく（あたりまえだけど）、無事に初春ちゃんたちによる鎮守府内の案内は終わった。艦娘に関連する設備のことがわかったし、道すがら色々雑談してあの3人ともちよつとは仲良くなれたと思う。

「それにしても、鎮守府内にコンビニがあるんだ」

昔の、それこそ旧海軍でいうなら酒保に相当する施設なんだろうけど、そこに（委託とは言え）民間企業が入っているのは、時代の流れなんだろう。

ゲームの『艦これ』では鎮守府の施設なんて、提督の執務室以外は工場と入渠施設、あとはせいぜいアイテム屋と家具屋くらいしかなかったから、意外ではあったけど、よく考えれば艦娘以外の軍人・軍属もいるみたいだし、日常生活には必要ではあるよね。

「申請書を出せば、非番の時なら艦娘も外出はできるんだけど、あれ、結構手続きが面倒なんだよねー」とは、白露ちゃんの談。

確かに、夜中にちよつと小腹が空いてお菓子買いに行きたいからって、わざわざ外出申請出すつても、ねえ？

そういう意味では、たとえ駅の売店に毛が生えた程度の規模とは言え、朝7時～夜中11時の16時間営業してくれる店があるのは地味に有難いかも。

それともうひとつ驚き……というか、ある意味納得だったのは、この「呉鎮守府」には複数（具体的には5つ）の鎮守府が置かれていること。

どうもこの世界における「鎮守府」って言葉にはふた通りの意味があつて、ひとつは場所としての海軍基地そのものを指し、もうひとつが、ひとりの提督が統括・指揮する艦娘の集団（部隊？）の方を指すみたい。

確かに、ゲームの方でも「横須賀」や「舞鶴」といった鎮守府名はサーバーで、そこに何万もの提督が登録していたのだから、辻褄は合うのか。もつとも、さすがに（艦娘指揮官としての）提督自体は何万

人もいなくて、全部で100人弱、予備役を足してもせいぜいその1.5倍くらいらしいけど。

ひとつの鎮守府（部隊）に所属する艦娘は、おおよそ10数人〜50人前後。提督がどれだけの艦娘を一度に編成・指揮できるかはかなり個人差があつて、最大でも4艦隊24人が限界……つと、このあたりもゲームと同じなのかな。

ちなみにウチの井上提督の最大指揮数は18人・3艦隊だから、そこそこ優秀な方らしい。むしろ最大20人以上・4艦隊フルに指揮できる人材なんて、日本全体でも10人はいない超エリートなんだつてさ。

（——なあんで、考え事して現実逃避していたけど、やっぱりやる事はやらないといけないよね）

あの後、「部屋で荷物整理したいから」という理由をつけて、初春ちゃんたちといったん別れ、自室に帰っては来たんだけど……。

「コレ、私が開けちゃつていいのかなあ」

ためらっていたのは、^{われ}私ではない私——この身体の本来的持ち主がこの部屋に送つたであろう荷物の扱いについて。

この身体を^奪奪つてしまったのは不可抗力だとしても、それに甘えて本人の私物にまで手を出すのは、プライバシーの侵害じゃないか、とも思うけど……。

「どうしようもない、か」

着の身着のまま……どころか、^{いしき}魂以外何も持たない状況でコチラに飛ばされてしまったのだ。日用品を別に買い揃えるにせよ、財布すら手元がないから今の状態だと所持金すらゼロなんだし。

覚悟を決めて、まずは積まれている箱を開封していく。

ひとつめは、日曜雑貨の入っている箱だった。タオル数枚に歯ブラシ&歯磨き粉、コップ、それに電気ケトルとマグカップ、紅茶の缶。布製の筆箱に入った筆記用具やノート。シャンプーとボディソープ、そして……。

「このポーチの中身は化粧道具かあ」

よく見れば、それ以外にも、箱には洗顔フォームだとか化粧水とか

も入ってるみたい。

外見年齢的通りなら15、6歳だから、こういうのを持っててもおかしくはないんだろうけど、艦娘とお化粧ってあんまり結びつかないなあ。

「まあ、いいや。私服で外出する時とかに必要になるかもしれないし、しまつとこうつと」

寮の談話室に共用で使えるノートPCがあったから、折を見てネットで使用の方とかも調べておかないと。

「あ、お財布！」

助かったあ、これで一文無しじゃなくなる。

財布の中には数千円分の現金以外にキャッシュカードも入っていて、名義はローマ字で「MINAMI TORA」と記してあった。

（戸浦、それとも渡浦かな？ 名前の方は「南」か「美波」か、あるいはひらがなで「みなみ」とか）

なんとなく直感的に「戸浦美波」が正解のような気がする。

それにしても——「とうらみなみ」か。「みうらみなと」のアナグラムだけど、それって今の状態に何か関係あるのかなあ。

「あつ！ カードあっても、暗証番号わからないと意味ないじゃん」ガツクリ肩を落とし、お金のことは提督が大淀さん達に相談しようかと決意する。

幸いにして、翌日、大淀さんから「艦娘・浦風」の給料用の新しいキャッシュカードを渡されて、その時に暗証番号も改めて設定した事で、お金の心配はなくなるんだけどね。

箱の一番底にはバスタオルが入ってたから、とりあえず歯磨きや洗面だけじゃなく、お風呂も問題ないかな。

ふたつ目の箱を開けると……。

「わー！ こっちは衣類なんだ」

一番上には寝間着がふた組。水色の長袖でトレーナータイプの上下と、半袖でピンク色のロングTシャツタイプという、どちらも比較的シンプルなデザインだ。フリルやリボンがたっぷりついた可愛いネグリジェとか透け透けのベビードールとかでなかったのは、正

直助かる。

(いや、でもまあ、15、6歳の女の子がベビードールはないよね) あ、でも、艦娘の容姿はF^{ファーストボーン}B 以外は、そのFB艦によく似た姿に変化するんだから、戸浦美波が元はもつと年上だった可能性はあるのか。

(私服を見たら、そのヘンも想像つくのかな?)

そう思って、箱から他の服も取り出してみる。

白い長袖ブラウス、紺デニムのミニスカート、オレンジ色のサンドレス、若草色のカーディガン……。

「うーん、よくわかんないや」

身体に当ててみた感じ、大きすぎたり小さすぎるってことはなさそうだから、体格的には今と似たようなものなんだろう。さつき明石さんが計測してくれた浦風の身長は159センチ。ミドルティーンから成人女性までの間なら、どの年代であっても不自然じゃない感じだし。

服の傾向的にも、あまり子供っぽくはないけど大人っぽくもないから……推定年齢14〜19歳ってところかな。

——たぶん、調子に乗ってたんだろう。

厳密には自分のものではないけど、自分のものにしても誰にも咎められない「秘密の箱」を開けて中を確認する作業に、いつしか夢中になっていた。それに、恋人も姉妹もいなかった「俺」にとって、初めて触れる「年頃の少女」の生活の片鱗に、ひそかに興奮していたことも事実だ。

プライバシーの侵害に対する僅かな罪悪感も「だって、この状況じゃあ、しょうがないじゃん」という免罪符で、いつしか鎮静化していたし。

でも、3つめの箱を開けて、何気なく中身を手に取った瞬間、そんな私は、即座に後悔するハメになった。

「ちよ、コレ、下着!」

別に、格別ハレンチだったりセクシーだったりするわけじゃない。むしろ、白や水色、クリームイエローといった控えめな色合いで、素

材も（たぶん）大半がコットン、一部が化繊。柄物は少なく、無地かせいぜいワンポイント程度、形状もごくごくオーソドックス……と、あとになって考えると年頃の女の子としてはかなりおとなしめ（あるいは地味）な代物が揃っていた。

それでも、恋人いない歴〃年齢だった元・男にとって、至近距離で見るとショーツやブラジャー、スリッパ等の視覚はもちろん触覚&嗅覚（なんかやわらかくていいにおひがした）面でのインパクトは鮮烈過ぎた。

「あ、え、ちよつと待つて、もしかして……」

と同時に、つかの間忘れていた現状——今の自分がまぎれもなく女性で、つまりこれからは目の前の下着類（+先に出した衣類）を自分が身に着けないといけないのだったことも、思い出しちゃったんだ。

真っ赤になってわたわたしている私の様子は、他人からは「自分自身の下着を眺めてパニックってるヘンな娘」に見えて滑稽だったろうけど、本人にとっては結構深刻なんだよ？

「と、ともかく！ 荷物の整理を続けないとツ!!」

羞恥とか躊躇とか諸々の感情はいったん棚上げして、十数枚の下着類を取り出し、そつとベッドの上に置くと、3つ目の箱の残る中身を見してみる。

幸い、下にあったのは本——小説やマンガの類いで、おかげでいくらか落ち着きを取り戻すことができたんだ。

本のラインナップは、少女向けラノベが10冊、マンガが同じく10冊、古典名作の文庫版が5冊に、料理の入門書と大戦時の歴史解説書という構成で、元の持ち主がそれなりの本好きかつ割と真面目な性格だったことが見てとれた。

「これで全部かあ」

年頃の女の子としてはあまりに荷物が少ない気もしたが、いまは幸いひとりとは言え、艦娘が増えたら、四畳半程度の広さしかないこの部屋にふたり住むのだから、この程度の私物が限界なのかもしれない。

極力「無念無想」「明鏡止水」の心境を保とうと努力しつつ、取り出した衣類を部屋備え付けのタンスにしまう。

その横の3段組カラーボックスの最上段に本を並べ、残りのこまごました雑貨類は、とりあえず箱のひとつに入れてカラーボックスの上に積んでおく。

「外出許可書を書いて、つぎのお休みの日に籠か何か買って来ないといけないかなあ」

どこぞの干物女やズボラなOLじゃあるまいし、ゆ〇パツクの箱に浴用品や化粧品をしまっているのは、さすがに年頃の女の子としては失格だろう。

——もつとも後日、重巡・足柄さんの部屋を訪問する機会があったんだけど、見事に散らかってるばかりでなく、引越用の段ボール箱をそのまま使っているのを目撃することになった。飢えた狼エ……。

逆に予想外にキツチリしてたのは、軽巡の多摩さん。猫っぽいキラだから、てつきりものぐさで部屋も散らかり放題かと思ったら、すぐキッチンと整理されてたし、さりげなく女の子らしいインテリアとかも置いてあったんだ。

駆逐艦娘のなかだと、実は年少組(?)の朝潮・雷ペアの部屋が、いちばんキレイに整理されてたのは……うん、まあ「委員長」と「ロリおかん」だから納得ではあるかな。初春・睦月組は、可もなく不可もなく普通。磯波・白露組の部屋も、総合的には普通レベルなんだけど、白露ちゃんが散らかしたのを磯波ちゃんが懸命に片付けて、なんとかその均衡を保ってるのがありありとわかるから、ちよつと彼女が不憫だった。

……他人事じゃないのか。私も同居人ルームメイトができたら気を付けないと。自分から汚部屋にするつもりはないけど、白露ちゃん級の散らかし魔が相方にならないことを祈るばかりだ。

一通り部屋の整理にケリをつけ、少々手持無沙汰になったので、お茶でも飲もうかと、寮の談話室（備え付けのポットと急須があるんだ）に行くことにした。

「あら？」

「あー。」

中に入ると、そこには扶桑さんと祥鳳さんがいて、ゆったりお茶を飲んでいるところだった。

此方から話しかけてよいものか戸惑っていたところ、気が付いた扶桑さんが声をかけてくれた。

「貴女は……今日着任した浦風さんね」

「は、はい。陽炎型駆逐艦11番艦の浦風です。未熟者ですが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します！」

敬礼こそしなかつたものの、反射的にビシツと気を付けして、そう答えてしまう。

なにせおふたりとも、見かけは黒髪麗しい和装の大和撫子系美人だ。

駆逐艦娘や軽巡娘くらいのも（感覚的に）年下の子ならともかく、男時代は大人の女性とあまり（というか全然）縁のなかつた自分としては、緊張せざるを得ない。

「えっと、そんなに緊張なさらなくても大丈夫ですよ？ 一応、私達は旗艦を任されていますが、任務中以外は上司ぶるつもりはありませんから」

私が緊張しているのを見て取ったのか、祥鳳さんが、ちよつと困つたような顔で、そう言ってくれる。

「そうね。私たちのことは、貴女より少しだけ年長のお姉さんとして頼りにしてちょうだい。よかつたら、こちらに来て、一緒にお茶を飲まない？」

扶桑さんも優しい笑顔を浮かべて誘ってくれた。

（うわ、ふたりとも滅茶苦茶いい人だあ）

お言葉に甘えてご一緒させてもらおう。

『艦これ』的には、扶桑さんは「ネガティブ思考な不幸艦」、祥鳳さんは「影の薄い不遇艦」というイメージだったんだけど、目の前で優しい笑みを浮かべて新米駆逐艦娘である此方を気遣ってくれるその様子は「素敵な大人の女性」という感じで、初っ端から個人的好感度MAXかも。

「まあ……それじゃあ、記憶を？」

「ええ、全部ってわけではないんですけど……」

雑談に交えて、大淀さんたちとの事前の打ち合わせで決めておいたカバーストーリー“身上話”を、さりげなく披露しておく。

ちなみに、その大まかな内容としては「適合率が低いせいとか、艦娘になった際アクシデントが発生し、肉体的には問題なく艦娘・浦風なのだが、元の人間だった頃の記憶も、軍艦としての記憶も、どちらも曖昧になってしまい、困惑している」というもの。

実際、その両方の記憶を完全に失うとまではいかないものの、似たようなケースは過去に数例あったらしいから、説得力はそれなりにあるんだろう。

「なので、艦娘としてはトンチンカンな事をやらかしてしまうかもしれないけど、しばらくは大目に見てくださると助かります」

「もちろんよ。何か困ったことがあったら言っただけだよ」

「ええ、私も、できる限り協力しますから」

予防線を張った私に対して、おふたりは本気で同情してくれてるみたいで、少なからず罪悪感が……。

(すみません、扶桑さん、祥鳳さん。この借り(?)は随ぶ伴か艦として精一杯働くことで返します)

心の中でそう謝罪しておく。

* * *

そんなこんなでしばらく旗艦のふたりとお茶した後、今度は寮を出て、先ほどは外から見ただけだった鎮守府内のコンビニへ足を運んでみた。

「営業時間から予想はしてたけど、セブ●レなんだ」

散々コラボした口〇ソンじゃないのかーと、一瞬思ったものの、よく考えればコラボしてたのは俺がいた（現実？）世界の話で、この「艦これ世界」においては、海軍はセブン●レブンの方と仲が良いのかもしれない。

正直、店の規模としては非常に狭い。外から見ると3メートル立方くらいの殆ど「ガラスの箱」と言ってもよい小さな建物で、入口付近にレジカウンター&バックヤード（？）があるため、実質店舗面積はさらにその7割くらいしかないんじゃないだろうか。

店内には、食料品と生活雑貨を中心にした商品が所狭しと並べてある。品揃え自体は意外に多いが、スペースの関係かどれも1個か2個しかないので、運が悪いと売り切れが続出しそうだ。

「いらっしやいませー、何をお探ですか？」

コンビニにしては珍しく店員さんが話しかけてきたが、確かに目当てのものを探すのは苦労しそうだ。

「いえ、今日から此処に着任したので、どんなものが置いているか見に来ただけなん……」

返事しながら振り返って、私は目を見張った。

「——え、まさか、陽炎姉さん!？」

カウンターの内側にいたのは、焦げ茶色の長めの髪を黄色いリボンでツイントールにまとめた16、7歳くらいの勝気そうな少女。セ●イレ店員の緑の制服を着て、胸には「穂村」と書かれた名札が付いている。

それだけならどこにでもいそうなものだが、顔立ち・雰囲気・声の3つの要素が見事に浦風の姉妹艦・陽炎型の長女にあたる駆逐艦娘を連想させるのだ。

「あははっ、よく言われますけど、そんなに似てますか？ 写真とかで見た限りでは、本人としてはそれほど似てるとは思わないんですけど」

苦笑しているその様子からして、たぶん以前も同様の指摘を受けたことがあるんだろう。

「す、すみません。失礼なことを……あ、私は本日より呉鎮守府に着

任した陽炎型駆逐艦・浦風です」

艦娘らしさを演出するためにも、スチャツと右手で敬礼をする。

「ああ、これはどうも。わたしは、この呉鎮守府支店の店員の穂村陽子です。支店長と交代でこの店に詰めてますから、ご要望などがあれば気軽に申しつけてくださいね」

穂村さんは気さくな人柄のようで、他に客がないこともあつてか、しばらく私の雑談（というか質問）に付き合ってくれた。

その話の中でわかつたんだけど、この店は、コンビニとしては少々異色なことに客からの注文に応じて希望する商品を仕入れてくれたりもするらしい。おそらく、気軽に基地を出られない艦娘のニーズに応えるためなんだろうなあ。

「支店長も女性ですから、下着のサイズなんかもバッチリですよ♪」
いくら商取引しょうげんとは言え、男性に細かいサイズを知られるのはやはり気まずい。その点では、ひと安心と言えるかもしれない。

「甘味なんかは間宮さんがあるからそれほど必要ないかもしれませんが、スナック菓子とかは欲しい商品があれば言ってください」

「よかつたら、お近づきの徴に」と某有名製菓会社の新商品らしきモノをいくつか渡してくれる。

「店頭配布用の試供品サンプルです。よかつたら感想をアンケートに書いてください」

「なるほど、そういうことでしたら遠慮なく」

2、3日分のお茶請けが浮いたと内心喜びつつ、私はとりあえずお菓子の入った袋を置きに自室へ戻ることにした。

Another 1. 鎮守府戦線、風強く波高し

佐世保鎮守府——横須賀や呉と並んで、いまや世界でも有数の軍港として名高い都市の、中枢部とも言える施設。

その廊下を、白い軍服を着た少年が、足取り重く歩んでいた。年のころは13か14、未だ15歳にはなっていないだろう。今のご時世、志願者なら13歳から学徒兵として軍に入れるとは言え、その歳で士官用制服をまとつていているというのは、いささか尋常ではない背景を窺わせる。

ほどなく目当ての部屋の前にたどりついた少年は、ドアの前に立ち、ためらいながらもノックした。

「入りましたまえ」

「——失礼します」

中の人物の許可を得てドアを開け、部屋に足を踏み入れる。

室内は、「鎮守府総司室」という名前からするといささか簡素ではあるが、それでも少年の居室などとは比べ物にならない程、設備が整っていた。

「風嶋少佐、参りました」

少年が姿勢を正して挨拶すると、正面の執務机で何やら書類にサインをしていた人物——この施設の総責任者であり、帝国海軍の中でも重鎮と言うべき地位にある佐世保鎮守府総司令官・秋山好之が、書類を脇にどけて彼の方を見た。

年の頃は50歳をいくらか過ぎたくらいだが、長身で恰幅のよい体躯と鋭い目付き、そこに居るだけで緊張を強いられる迫力などからは、いかなる衰えも感じ取れない。

そのことが、目の前の人物が現役、それも一流の軍人であり、司令官であることを物語っている。少年のような俄か仕立てのなんちゃって士官などとは根本から格が違った。

「うむ。御苦労」

視線で促されて、少年は執務机の前に歩み寄る。

「風嶋少佐。なぜ、此処に呼び出されたか理解しているかね？」

穏やかながら威厳のある総司令の声に、気圧されたように目を伏せる少年。

「——はい」

心当たりはあり過ぎるほどあった。

* * *

風嶋一輝（かぎしま・かずき）は、わずか3カ月ほど前までは、北関東の地方都市で公立中学に通う、ごく普通の中学生だった。

無論、深海から攻めて来た謎の侵略者達のことにはニュースや学校の授業などで知っていたし、各地の鎮守府からの戦果発表に一喜一憂はしていた。

そもそも、船乗りだった一輝の父親は、「奴ら」に船を沈められて亡くなったのだ。結果、すでに母親を6歳の頃に亡くしていた一輝は、いわゆる「身寄りのない子」として、施設で暮らすことになった。

そういう事情もあって、周囲の同級生達と比べれば、風嶋少年は「人類の敵」との戦いにはかなり意識を向けていた方だろう。

もつとも、軍属の学徒兵ならいざ知らず、それらの「戦い」は、一輝たち普通の少年少女にとって、関わるのはまだ先（現在の日本における徴兵年齢は20歳だ）の話である。

いや、そのはずだったのだが……幸か不幸か一輝は、決して「普通」ではなかったのだ。

有意識艦隊同調能力者。そう名づけられた特殊な人間が、数十万人にひとりという割合で存在している。

「人類の敵」と雌雄を決するための最前線で戦う有意識艦——俗に「艦隊むすめ」あるいは「艦娘^{かんむす}」と呼ばれる「兵器」を指揮するために不可欠な特殊能力で、彼ら艦娘隊の提督が現在の人類社会を支えているといっても過言ではなかった。

その日、彼を施設に迎えに来た山本と名乗る青年士官は、一輝もまた、その有意識艦隊同調能力者であることを告げ、軍に入るか否かの決断を迫ったのだ。

迷うことはほとんどなかった。

もともと一輝は、父の仇である「奴ら」は憎かったが、同時に、同

年代の少年たちと比べてすら小柄で体格も貧相な自分が軍に入ってもロクな役に立たないであろうことも理解していた。だから、志願兵にはならなかったのだ。

しかし、今、肉体的な不利に左右されない「指揮官」という立場で、「奴ら」と戦う機会が与えられたのだ。ローティーンチャンスの少年が短絡的にそれにとびついたのも、無理のないことだろう。

青年士官個人としては、彼のようなまだほんの子供と呼んでもいい年少者を軍に引き込むことはいささか気が咎めたが、上官の（しかも一応筋の通った）命令には逆らえない。

さらに言えば、日々激戦をくぐり抜けている身としても、若く頼もしい同僚ができること自体は歓迎すべき話だ。

——せめて、この少年は、自分が面倒を見て、立派な提督となれるよう助力しよう。

軍務を離ればお人よしな好青年である山本大佐は、そう決意し、実際、一輝が新米提督として彼と同じ佐世保に着任して以来、何かと気にかけて、いろいろ手助けやアドバイスをするようになる。

着任当初は、一輝も山本の気遣いに感謝し、そのアドバイスに耳を傾ける素直な新人だった。

しかし、人の心というものは、その立場によって時として恐ろしいほどに変わるものだ。

かつて諸々の要因（身寄りがいないこと、華奢な体格と女顔、内気な性格など）で、いじめられっ子一歩手前だった少年は、艦娘隊提督という「力」を得たことで増長し、次第に周囲から見ると「鼻もちならない高慢なガキ」へと変貌していった。

そして、一輝の傍若無人さは、とくにその指揮する有意識艦——艦娘達に向けられたのだ。

艦娘とは、簡単に言えば「人の姿と意識を持った軍艦」だ。より正確には、人型、それも12〜20歳ぐらいの年若い女性の姿をした「船魂」と、その本体とも言うべき「船体」の1対から構成された、「心を持つ兵器」なのだ。

ちなみに、この船魂、「魂」と言いつつ立派に実体をもっており、そ

れどころか、眠ったり、ご飯を食べたり、風呂に入ったり、男性と●●なことさえできたりする。あるいは昔話などに出てくる「付喪神」に近い存在なのかもしれない。

艦娘の戦闘力は同スケールの通常の艦船の数倍。熟練した提督の指揮下であれば、さらに効率的に戦うことも可能だった。

その上、もつとも重要なのは、通常の兵器と異なり艦娘達は、半ば亡霊めいた存在である「奴ら」——深海棲艦にも有効な攻撃をくり出すことができるという点だ。

物理攻撃がまったく効かないわけではないが、駆逐艦クラスの深海棲艦1体に対して、通常の艦船なら戦艦級が10数体、有利な布陣で対峙し、全力で飽和攻撃を仕掛けてようやく互角……とあつては話にならない。

それに対して、艦娘達の攻撃は、その大きさ・戦力規模に見合った効果を深海艦に対して発揮するのだ。

ただし、深海棲艦の正体や艦娘の開発経緯などについては軍でも一級の秘匿事項とされ、例外を除いて将官以上の者しか真相を知らない。

閑話休題。

艦娘隊を指揮する際は、その指揮官たる提督は、感覚を艦隊の旗艦となる艦娘に同調させるのだが、それはすなわちVRゲームなどとは段違いのリアルさで、戦場の悲惨さと恐怖を体感することに他ならない。

いかに、高い素質を見込まれ提督に抜擢されたとは言え、さすがに促成栽培（配属前に士官学校の教官にマンツーマンで1月程指導を受けた）の天ぷら士官に、そんな戦いの日々在即座に慣れるというのは酷だろう。

ある意味当然のことながら、一輝も参戦後ひと月足らずで心のバランスを崩し、その恐怖を誤魔化すための反動として、周囲に尊大な振る舞いをするようになったのだ。

中でも、思春期特有の異性への反発心と、学校で女生徒から侮られていたコンプレックスからか、部下の艦娘達には特に高圧的な態度で

臨み、作戦の際にもまるで使い捨て部品のような扱いをするようになる。

無論、軍隊とは究極的には「効率的な殺戮」を実行する組織だ。大の虫を活かすために小の虫を殺すような行動が求められることも、決して珍しくはない。

しかし、その作戦のほぼすべてで、大破ないし未帰還の艦を出し、それに対する反省もないとあっては、如何に一定の戦果を上げているとは言え、心情的かつ経済的にも周囲に大きな負担を強いることになる。

この場合、彼の配下に「初雪」や「磯波」、「潮」、「電」、「五月雨」と言った、おとなしめの駆逐艦級艦娘たちが狙ったように集ったことも、結果的にその傾向を助長したのだろう。

駆逐艦娘たちは、そのほぼすべてが彼と同世代ないし年下の12〜15歳くらいの容姿とメンタリテイを持っている。指揮官であり上位者である一輝の無茶ぶりと言ってもよい命令に、逆らったり諫言したりできる者は皆無だった。

同じ駆逐艦娘でも、「響」や「初春」のように精神的余裕のあるタイプや、「白露」、「夕立」のようなハイテンションタイプ、あるいは「曙」「霞」のような口が悪いタイプなら、もう少し違ったのかもしれないが……。

半月前に初めて配属された軽巡娘も「神通」と「名取」であり、あまり自己主張するタイプではない。せめてこれが、姐御肌の「天龍」や「木曾」、委員長タイプの「五十鈴」「由良」あたりなら、年長者(?)としてガツンと言ってくれただろう。

諸々の不運もあって艦隊内で一輝の言動に異を唱えられる者がおらず、山本大佐ら先任士官の注意にも耳を貸すことなく、一輝は暴走していく。

結果、ついに先日、「まだ無謀」と止められつつ南西諸島防衛線へ出撃。僅か1戦で旗艦の「神通」を除く5隻の艦娘が撃沈、彼の元には、2隻の大破した軽巡洋艦娘と、実戦経験のない駆逐艦娘1隻のみが残される結果となったのだ。

彼個人の戦歴としても、そして艦の修理や補充をせねばならない鎮守府としても大きな痛手である。今回は、上司や先輩に制止されたにも関わらず、独断で出撃を強行し返り討ちに遭ったのだから、なおさらだ。

総司令官である秋山中将としては、彼を厳罰に処さざるを得なかった。さらに間の悪いことに、「懲罰」と言う形で執するのちちょうど良い「実験」の案が上層部から降りてきており、諸々の事を考え合わせ、秋山中将は一輝を呼んだのだ。

* * *

「風嶋少佐。先日の独断専行と作戦の失敗、並びに鎮守府内の士気を低下させた責任を問い、貴官を1カ月間の特別懲罰処分とする」

「特別懲罰、ですか？」

聞き慣れない単語に、一輝は首を傾げる。

最悪、一兵卒に降格の上、最前線に送られることも覚悟していたのだが、司令官の口ぶりでは、それとは少し趣きが異なるらしい。

「うむ。鎮守府付属研究所で進められている新兵器開発実験の被験者として協力してもらうことになる。それ以上については、実験が始まってから説明されるだろう」

「そ、そんな……」

要するに、ていのいい人体実験ということではないか！

抗議の言葉を口にした一輝は、けれど首筋にチクリとした痛みを感じるとともに、急速に意識を失い、その場に崩れ落ちる。

「なお、これは任務ではなく、懲罰処分であり、君に拒否権はない」

「もう聞かえてないと思いますよ、総司令」

いつの間にか気配を殺して少年の背後に歩み寄り、首筋に即効性の麻酔薬を注射した男性——山本大佐が、溜め息をつきながら床に倒れた少年の元に屈みこむ。

士官学校を優秀な成績で卒業し、180センチ余りの頑健な体躯を鍛え上げた山本にとって、第二次性徴を迎えたかも怪しい小柄で華奢な少年を、お姫様抱つこの体勢で持ち上げることなど、見戯にも等しかった。

「一応、規則だからな……君には、辛い役目をさせて済まないと思っ
ている」

「いえ、問題ありません。むしろ他の人に押しつけて知らぬフリを
するよりは、自分の目と手の届く範囲に置く方がいくらか安心できま
す」

「うむ。よろしく頼むぞ」

「了解しました。微力を尽くします。では……」

* * *

〈SIDE:??〉

目を覚ました時、手術台のような場所に横たえられ、手足をベルト
のようなもので台に拘束されていた。

「——、ここは？」

意識を取り戻したものの、どこか霞みがかかったように思考が
ぼーっとしており、うまく考えがまとまらない。

（どうしてこんな所にいるんだろう。えっと、最後に覚えているの
は……）

誰か、大柄な男性に叱責されていたような気がする。

「お、目が覚めたのか」

声をかけられた方に視線を向けると、部屋の片隅のパイプ椅子に
座っていた、二十歳過ぎくらいの海軍士官制服を着た青年が、立ち上
がるどころだった。

「ちよつと待ってくれ、今、ロックを外す……つと、その前に聞くが、
俺のことがわかるか？」

手術台に歩み寄り、ベルトに手をかけたところで、青年士官が問い
掛けてきた。

「えっと……山本大佐、ですか？」

自然とその言葉が口をついて出た。

「ああ、その通りだ。では、自分の名前は？」

改めてそう聞かれたことで、自分が自己に関する一切の記憶を喪失
していることに気付いた。

「——その、わかりません」

蚊の鳴くような声で答えると、山本大佐はなぜか安堵したように見えた。

「そんなに気を落とすな……その点については、むしろ予定通りと言ってよい」

？ どういうことなのだろうか？

自分がいぶかしげな顔をしていたからだだろう。

苦笑しながら、山本大佐は現状に至る経緯を説明してくださいました。

自分も元々は軍属だったこと。

とある作戦で、周囲の制止を聞かずに勝手な行動をとったことから作戦は失敗し、味方に大きな被害を出したこと。

それに対する懲罰処分として、1カ月間、ある実験の被験者となることを義務づけられたこと。

実験の妨げにならないよう、一時的に薬で記憶が消されている（正しくは思い出せなくなっている）が、実験終了時に解毒剤のようなものを投与して、元に戻してもらえること。

そういった事柄を、山本大佐は軍人とは思えぬ優しい口調で説明してくださいました。

常識的に考えれば、色々不審な点も多いはずだが、彼の言葉を疑うつもりはなかった。

この人は信頼できる——心の奥で、なぜかそう確信していたからだ。

「ほら、外れたぞ……立てるか？」

「あ、はい」

山本大佐に手を引かれて、手術台の上に身を起こし、台から降りる。

「あ……」

「おっと」

予想外に台が高かったことから目測を誤り、よろけかけたのを、山本大佐が手を引いて抱きとめてくださいました。

キッチンと糊の効いた染みひとつない——けれど、どこか男臭い匂いと微かな潮の香りが漂う彼の制服の胸元にもたれかかると、なぜだかとても安心できるような気がした。

「どうした？ 身体に不調があるのか？」

「あ、いえ、問題ありません」

心配げな山本大佐から、慌てて離れ、しゃんと気をつけをする。

「なら、いいが……そうだ、身繕いをするなら、その隅に鏡があるぞ」
せつかくのお言葉なので、それに甘えて少しだけ時間をいただくことにする。

高さ1メートルほどの斜めに立てられた簡素な姿見を覗き込む。

そこには、13、4歳くらいに見える「少女」が映っていた。

身長は155センチ前後だろうか。年齢を考えると背の高さは平均レベルと言えるだろうが、身体つきも手足も細く、女としての成熟は皆目見受けられない。

対して容貌の方は、我が事ながら、それなりに可愛いと言っても、さほど自惚れにはならないだろう。

砂色に近い薄い色の髪は、肩にかかるくらいの長さで無造作に揃えられ、黒いリボンをうさ耳のような形に結わえている。

服装の方は、改造セーラー服とも言えよいのだろうか。青い襟に黒いスカーフを結んだ白い袖なしのトップと、膝上20センチの青いミニプリーツスカートを着ている。

そのほか、手には白い長手袋をはめ、足には紅白ストライプのニーハイソックスとダークグレイのハーフブーツを履いていた。

パツと見は、前世紀の同人誌即売会にいるコスプレイヤーのような格好だが、布地も縫製もしっかりしており、着ていて動きやすい。見てくれだけの仮装、というわけではなさそうだ。

そして、こういう服装をしそうな存在について、心あたりもあった。

「……もしかして、私、艦娘なのでしょうか」

「正確には、その「候補」と言うべきかな」

思わず呟いた言葉に、山本大佐が律儀に答えを返してくれました。

「候補、ですか？」

「そうだ。機密に触れるので詳しくは説明できないが、素質のある「人間」に有意識艦——艦娘と同等の能力を身に着けさせるという研究が密かに進められていて、君は、そのテストケースに選ばれたのだ

「思ってくれ」

本来なら、それは人体実験のサンプルにされたらと怒りや悲しみを覚えるべき所業なのでしょう。

しかし、その時の私の心に浮かんだのは、そのどちらでもなく、「歓喜」に近い感情でそした。

——これで、自分も戦える！ ○○の仇であるヤツらを自分の手で倒すことができる!!

そんな想いが胸に湧きおこってきたのです。

「ところで、私の名前、あるいはコードネームを教えてくださいませんか？ 自己に関する認識はすべて思い出せないようですので」

鏡を見つめたまま、私は彼に尋ねました。

「そうだな。君は、これから一カ月の間は「島風」と名乗るといい」「しまかせ、ですか」

「島風」という名前を自分でも口にしてみると、その名は非常にしつくりと馴染むような気がします。あるいは、封じられた記憶と関連しているのかもしれませんが。

「私は、山本大佐のもとに配属されるのですか？」

「ああ。気は進まないだろうが……」

「山本大佐——いえ、提督」

私はクルリと振り返って姿勢を正し、彼の目をしっかりと見つめながら、「私の提督」に向かってピツと敬礼をしました。

「島風」、拝命します。半人前の未熟者ですが、以後、よろしくご指導お願いします！」

* * *

「さて、部隊における君の立場に関してだが……」

「島風」の「着任挨拶」を受理した後、山本提督は、今後の待遇について説明する。

「機密に関わる部分も多いので、すべてを周囲に明かさすわけにはいかない。当面、君は「実験試作段階の有意識艦の船魂」として、俺のもとに配属されたことになるので、心得ておいてくれ」

「了解しました。ですが、いくら実験段階とは言え、船体からだの仕様など

を何も知らないのは、さすがに不審に思われないでしょうか?」

「島風」の疑問に、提督はニヤリと笑った。

「それは、問題ない。目を閉じて、意識を心の奥底に集中してみたまえ」

曖昧な表現に首をかしげつつも、素直に上官の指示に従う「島風」。

「何か、自分自身の他に親しい存在を感じないかい?」

先ほど同様、何ともはつきりしない内容だったが、不思議なことに、「島風」には、まさにその言葉通りのモノを感じ取ることができた。

「! あ、あります」

「よし。その存在に心の中で近付こうと意識するんだ」

「了解しました」と口にするより早く、「島風」の自我意識は「それ」と重なり、混じり合う。

「――船体基礎スペック……把握。基本兵装……確認。コンディション……オールグリーン。自己診断プログラム、終了しました」

瞼を閉じたまま、普段といささか異なるハイトーンかつ平坦な声で、そうつぶやくと、ハッと我に返って、目をしばたかせる。

「い、今のは?」

「成功したようだね。「島風」、君の船体の全長と最大速力を教えてくれ」

「はい、全長120.5メートル、最大速力は40.37ノットです」

唐突な提督の問いかけにも、戸惑うことなくスラスラと答える「島風」。

「航続距離と現在の兵装は?」

「速度18ノットで6000海里、現在は12.7センチ連装砲と61センチ四連装魚雷を装備しています……って、提督、これは一体!?!」

「簡単にいえば、通常の有意識艦と同様、今の君の意識の一部は、現在建造中のある駆逐艦の船体と同調している。もう少し慣れれば、至近距離からなら船体を動かすことも可能はずだ」

「どうやら、「人間に艦娘と同等の能力を身に付けさせる」という眉唾

物の題目は、デマではなかったらしい。

「もつとも、船体の方は未だ試験段階で竣工間近……ということになってるし、半月後に竣工しても、いきなり最前線に出す気はないから、安心してくれ」

「——はい」

心情的には、「奴ら」と戦うためならむしろ積極的に前線に出たい気もしたが、一方で、自分が「実験サンプル」であること、数値はともかく戦力自体も未知数であることも理解していたので、「島風」は素直に頷いた。

「さて、本来『人』である君が、ここで有意識艦——艦娘として暮らしていくうえで注意を、事前にいくつかしておこうか。

まず、睡眠については、通常の間と同様、1日6時間程度とつても問題ない。艦娘は作戦行動中は睡眠欲をカットする機能も備わってはいるが、逆に鎮守府にいる間、暇さえあれば居眠りしているような娘もいるからね」

確かに、眠そうにしている艦娘を鎮守府内で目撃したような記憶は、おぼろげながらあったので、「島風」は頷く。

「次に食事について。これも、鎮守府にいるあいだは、皆普通の人間と同じ物を3食食べている」

お茶碗山盛りの弾薬やボーキサイトの塊りをバリバリ貪り食う……などという荒業にチャレンジしなくていいらしいと知って、ホッと胸を撫で下ろす「島風」。

「まあ、装備が大きく破損した場合などは、自己修復が追いつかずに、入渠ドックして特別な処置を受ける必要があるが、君の場合は当面その必要もないだろうから安心したまえ」

「わかりました。それで、あの、提督、おトイレは……」

「うん、それをこれから説明しようと思ったんだ。艦娘もトイレには行くには行くみたいだが、頻度的には普通の人間より少なめだ。

食事をして一定時間後に排泄する——というサイクルができていくようだから、そのあたりは少し気を配ってくれ」

「了解しました……じゃなくて、すみません、私、今行きたいんです

！」

少々はしたないかもしれないが、そろそろ尿意が危険領域に突入しつつあったため、顔を赤らめつつ、「島風」は提督に告白した。

「！ ああ、すまない。そのドアを開けて廊下に出たすぐ右に、男女兼用の職員用手洗いがあるから、そこを使ってくれ」

「は、はい。あの、それでは、しばし失礼します！」

微妙に内股&早歩きで処置室を出て行く「島風」。

しかし……。

「きゃあああーっ!?!」

1分後、トイレの方角から黄色い悲鳴が聞こえてきた。

「おっと、しまった。」あのこと”を説明するのを忘れていたな」

* * *

〈SIDE：Shimakaze〉

「あの、それでは、しばし失礼します！」

とりあえずそれだけ言ってから、私は急いで部屋を出てお手洗いに向かいました。

(うゝ、提督の前であんなコト口にしちゃうだなんて恥ずかしいよお)

とは言え、若い殿方の前で失禁でもしてしまったら、それこそ目もあてられませんし、仕方がなかったのだと割り切るしかないでしょう。

職員用おトイレは、男女兼用ということで男性用小用便器と個室がそれぞれふたつずつ並んでいました。

幸い、中には先客は誰もいなかったため、奥の個室に駆け込み、便座に腰かけます。

「ふう〜」

大丈夫、漏れそうですけど、まだ漏れてはいません。

念のため個室の鍵が閉まっているのを確認してから、ミニスカートをめくり、少し履き込みの深い白いショーツを下ろしたのですが……。

「い、コレって……」

なぜかその下にさらに黒い革製の下着を履かされていました。

Tバックという程ではないにせよ、かなり紐に近い面積で、エッチな写真集とかでモデルさんが履かされていた「そういう目的」の下着っぽい感じですよ。

ただし、^{クロッチ}股布の部分だけは多少布地が多く厚めで、しかも中に何か堅いプラスチックのようなものが当てられています。

「…も、もしかして、コレ、貞操帯とかいうものなんじゃあ」

話にはしか聞いたことのない器具(?)を連想して戸惑いましたが、幸い鍵とかがかかっているワケではないようなので、このまま脱げば用は足せそうです。

私はレザーショーツの脇に指を差し込み、おそろおそろ引き下ろします。

すると、何かショーツのクロッチで押さえつけられていたモノがピヨコンと飛び出してきました。

それが何かを理解した瞬間、私の口からは思わず悲鳴が飛び出していました。

「きゃあああーっ!? な、なんで……なんで私にオチ○チンがあるの?!」

* * *

トイレに駆け付けた提督は、半ばパニックに陥っている「島風」をなだめすかして、なんとか落ち着きを取り戻させた。

「——グスッ……つまり、私は、ホントは男のコで、だから、その……下にツイてるのも当然だ、っっておっしやるんですね」

「ああ、説明が遅れてすまない。君があまりに自然に女性らしく振る舞うものだから、俺もうつかりそのコトを失念していたようだ」

半ベソをかいている「島風」の手を引いて元の部屋に戻り、頭を下げる提督。

「もうそのコトはいいです。でも、どうして、私、こんな格好をさせられているんですか?」

自分が本来は「男」だと知らされてショックを受けたものの、提督に潔く謝罪されたため、「島風」もそれ以上は責められない。なので、

少し別の方向から質問を投げかけた。

「無論、機密保持のためだ。有意識艦の船魂がすべて「女性形」であることは知っているな？」

「はい。だから、”艦娘”なんて呼ばれているんですよ？」

「その通り。だから、いかに”試作艦”と称していても、「男性形の船魂」がその中に混じっているのは目立つし、どこか不審に思われるだろう」

確かに、理屈としては間違っていない。

「故に君には、これから1カ月間は、その格好で女性として暮らしてもらおう」

「そ、そんなこと……私にできるでしょうか？」

両拳を胸元で合わせ、不安そうに目を潤ませながら、提督を見上げる「島風」。本人は意図していないのだろうが、その可憐な佇まいとあいまって、年上の男性には無性に庇護欲をかきたてられずにはいられない仕草だ。

「——大丈夫だ。記憶封印処置と同時に施された暗示で、今の君は自分が女性であることに疑問を持たず、ごく自然に振る舞えるだろう」

思わず抱き寄せたくなる衝動をぐつと堪え、提督は「彼女」の肩に両手を置いて優しく諭した。

「でも……その……スカートの中とか……」

「下着の下に拘束具を着用していただく。あれを着けている限りは、少なくとも下着越しならバレないはずだ。問題は入浴だが、その点は此方で便宜を図ろう。データ確認のためという名目で2日に1回研究所に呼ぶから、そこでシャワーに入ってくれ」

いろいろ考えてあるらしい。それにそもそも「島風」側に拒否権はないのだ。

「うう……わかりました。頑張ります」

まだ完全には納得がいかない感じではあったものの、「島風」が頷いたので、提督も内心ホッと胸を撫で下ろす。

軍人としては「佐世保の若鷹」と呼ばれるほどの器量を持つ山本大

佐であったが、正直女性の扱いは専門外だ。

配下の艦娘たちとの交流で、そのヘンも徐々に慣れてはきたものの、基本的に聞きわけがよく精神的にも大人な子の多い彼女らと違い、「泣いている女の子」の相手は流石に手に余る。

（——って言っても、コイツは本来は男なんだがな）

半ば無意識に「よしよし」と「島風」の頭を撫でながら、心の中で苦笑する提督。

もつとも、彼になでなでされて、「えへへ」と幸せそうに頬を緩めている様子を見てみると、「彼女」が♂だとは（本来の姿を知っている山本ですら）信じ難いのだが。

* * *

〈SIDE：Shimakaze〉

「そろそろ落ち着いたかな？　では、君の「同僚」たちを紹介しよう」
提督に連れられて、私は有意識艦待機所と名付けられた施設へとやって来ました。

待機所と言っても、実質的には出撃中以外の艦娘の生活の場と言ってもよい場所なので、一般職員などには「艦娘女子寮」などと呼ばれているそうです。

実際、「少し古めの木造アパート」といった外観ながら、そのうちのひとつに足を踏み入れると、内部はきれいに掃除され、随所に花が活けてあったり、可愛らしいぬいぐるみが飾られていたり、「女子寮」にふさわしい雰囲気は漂っています。

提督が玄関に置かれた呼鈴ベルを鳴らすと、くすんだ紅色の着物の上からかつぼうぎを着た小柄な女性が奥の方から出てきました。

「あら、提督、ずいぶん遅かったですね」

「すまない、鳳翔さん。ちよつとだけ予想外の事があったものでね」
彼女と気さくに言葉を交わすと、提督はチラと私の方に視線を向けられました。

（ここれって……挨拶しろってことだよな）

「えっと、試作型駆逐艦の「島風」です。これからしばらくの間、こちらでお世話になります。どうぞよろしくお願いします」

私はペコリと頭を下げました。

「まあ、これはご丁寧に。礼儀正しいお嬢さんですね。私は、鳳翔型1番艦「鳳翔」です。出撃時以外は、こちらの寮母のようなことをさせていただけます」

ニコツと優しく笑いかけてくださる鳳翔さんは、外見年齢こそ若い（たぶん20代初めくらい？）ものの、なんだか「お母さん」と呼ぶのがピッタリの暖かい雰囲気的女性で、私は少し緊張が解れたような気がしました。

「今、こちらに何人くらい残ってるかな？」

提督の問いに、ちよつと考え込む鳳翔さん。

「そうですね。遠征中の第二と第三の子たちは省くと……残りは1人ですけど、翔鶴は提督の執務室で書類整理をしているでしょうし、摩耶ちゃんはいつものように裏山で自主トレ、鈴谷ちゃんは酒保でお買い物してるみたいですから……部屋には8人残っていると思いますよ」

「ふむ……じゃあ、ちよつどいいか。鳳翔さん、悪いんだけど、翔鶴を呼んで来てくれないかな。俺は、「島風」を仮配属する第四艦隊の子たちに声をかけるから」

そうして、居間に通された私は、まずは5人の艦娘の子たちと、互いに自己紹介することになりました。

「試作型駆逐艦の「島風」です。佐世保で運用試験を行うことになったので、これからひと月の間、お世話になります。まだ船体からだも未完成の未熟者ですが、どうかよろしくお願いいたします」

慣れてきたせいか、この挨拶の口上もだいぶスラスラ言えるようになってきました。

「古鷹型1番艦「古鷹」です。一応、第四艦隊の旗艦を務めさせていただきます。こちらこそよろしく願いますね」

半袖の白いセーラー服を着た18歳くらいに見えるショートカットの女性——古鷹さんが、礼儀正しく挨拶を返してくださいました。

「長良型2番艦の五十鈴よ。水雷戦隊の指揮ならお任せ。正規配属じゃないのがちよつと残念だけど……わからないコトがあったら、何

でも聞いてちょうだい」

五十鈴さんは、白と赤の袖無しセーラー服を着た高校生くらいのお姉さんです。ちよつと勝気そうですが、その分、いろいろと頼りになりそうかも。

「やあ、僕は白露型2番艦「時雨」さ。これからよろしく」

「こんにちは、白露型4番艦「夕立」よ。よろしくね!」

お揃いの紺地に白襟のセーラー服を着た時雨さんと夕立さんは、姉妹艦なのに随分性格は違うみたい。年は、私と同じか、ひとつくらい上かな？

「——ズドラーストヴィチエ、暁型2番艦「響」だ。短い間だけど、同じ釜の飯を食う仲だ。よろしく頼むよ」

外見は私よりふたつくらい年下に見えるのに、白い長袖セーラー服姿の響さん（ちゃん？）は随分落ち着いた印象の子です。

「あらあら、それじゃあ私が最後かしら」

ちようどその時、紅白の巫女装束姿（ただし袴はミニ丈）の20歳くらいの女性が、居間に入って来ました。

「翔鶴型航空母艦1番艦の「翔鶴」です。第一艦隊の旗艦で、提督の秘書艦も務めさせていただけます。工作中的提督に御用がある時は、ひと声かけてくださいね」

この方も、何て言うかおっとりしてて優しそうな女性です。鳳翔さんが「お母さん」なら、翔鶴さんは「一番上のお姉ちゃん」って感じかな。

それにしても……何と言うか、各人方向性は違うものの、皆さん美人美少女揃いです。ひよつとして、提督のシユミでしようか」

「——何を考えているか大体わかるが、別にそういう艦ばかり狙って集めたワケじゃないからな」

「て、提督う、心を読まないでください!」

「いや、最後の方、口に出してたぞ」

「あうっ!?!」

しまった。「島風」、一生の不覚です。

「うふふ、「島風」ちゃんも可愛いですよ」

翔鶴さんがフォローしてくださいますが、グラビアモデルにも滅多にいない程の銀髪美人にそんな風に言われてもフクザツかも。

とにもかくにも、こうして私の艦娘（見習）生活が幕を開けたのでした。

* * *

「こちらが貴女のお部屋ですよ」

「仲間」との顔合わせの後、寮母役を務める鳳翔に、「島風」は女子寮2階の一室に案内された。

ドアこそ木製で真鍮のノブがついた洋室風のものだが、内装は板壁と畳敷きの完全に和室テイストな部屋だった。

家具と言えば、50センチ四方くらいのちゃぶ台と、物入れを兼ねた木製の箆笥くらい。ベッドもないので、おそらくは襖で閉ざされた押し入れに布団が入っているのだろう。

「ふわあ〜」

よく手入れされ清潔に掃除されてはいたが、今時の標準からすると古臭いと言っても過言ではないその四畳半足らずの部屋に、しかし「島風」はなぜか心引かれるものを感じた。

「素敵なお部屋ですね。ここ、私ひとりで使わせてもらっていいんですか？」

「ええ、構いませんよ。この鎮守府では、同じ提督の下で働く艦娘はふたりでひとつの部屋を使うのですけど、生憎、山本提督の指揮下の艦隊はこれまで偶数だったので、「島風」ちゃんの分が余ってるんです」

その代わり、新しい艦娘が来たら同居してもらうことになると思いますけど——と、鳳翔にすまなさそうに言われて、「島風」はぶんぶんっと首を横に振る。

「い、いえっ、ぜんぜん問題ないです」

「そうですか。良かった……そうそう、テレビとかは1階の娯楽室にあるから、そこで見てくださいね。雑誌とかボードゲームの類いも置いてありますから、暇ができたら覗いてみるといいですよ」

「はっ」

そのほかにも、いくつかの説明をしてから、最後に「おゆはんは、7時からですので、それまでくつろいでいてくださいな」という言葉を残し、鳳翔は「島風」の部屋を出ていった。

* * *

〈SIDE: Shimakaze〉

ボタンと扉がしまり、鳳翔さんの足音が遠のいていくのを確認してから、私は、ようやく肩の力を抜いてちゃぶ台の前に腰を下ろしました。

「——ふう〜」

最初は誰も見ていないのであぐらをかこうかとも思ったのですが、スカートを履いてるせいかな、どうにも落ち着かない感じがしたので、結局、やや崩した正座、俗に「横座り」と呼ばれる姿勢で座ることにしました。

「これから1カ月かぁ」

長いようで短く、短いようで長い時間です。

今日は初日ということで、我ながらかなりお行儀よくできていたと思いますが、2、3日くらいならともかく、ずっとネコを被っているのは少々無理があるでしょう。

かと言って、着任してすぐ、それも仮配属の身で、あまり碎けて馴れ馴れし過ぎるのも問題でしょうし。

「まあ、何事もほどほどにしてくださいかね」

そんな至極無難な結論を下してから、なんとなく私は部屋の中を見回しました。

「有意識艦待機所」という素っ気ない名称から、コンクリ打ちっぱなしの殺風景な部屋や、1部屋に5、6個ベッドが置いてある仮眠室という可能性も覚悟していたのですが、そんな危惧とは無縁の、快適な居住空間をもらえたのはうれしい誤算でした。

期間限定の仮の住まいとは言え、これから毎日過ごす場所です。やはり、落ち着いてリラックスできる場所に越したことはありませんしね。

とりあえず立ち上がって押入れを開けてみると、予想通りそこには

花柄の敷き&掛けの布団が1組畳んで置かれていました。さすがに新品の極上羽布団というワケではありませんが、相応にふかふかで、カバーもきちんと洗濯された清潔なものなので、気持ちよく寝られそうです。

一緒に浴衣、いえ寝巻と呼んだほうがよさそうな一重の着物と帯も用意されていて、至れりつくせりです。

「あれっ、そう言えば……」

ふと、ある事が気になって、私は壁際に置かれた箆筒を開けてみました。

「あー、やっぱり」

予想通りと言うべきか、そこには今着ているのと同じセーラータイプの制服(軍服?)が1揃え綺麗に畳んで入っていました。ほかには、下着とニーソックスの替えが何点かあるだけです。

「そう言えば、艦娘って、基地内ではいつも制服着てるものね」

それどころか、出撃前でもないのに、鎮守府内で擬装——主砲・副砲や飛行甲板などの武装や装甲を装備したままの子も結構います。いえ、鳳翔さんや翔鶴さんみたく、擬装を全部外しているほうが珍しいかも。あのふたりの場合は、寮母や秘書官…もとい秘書艦としての仕事を優先してるからでしょうね。

(そう言えば、私の擬装はどうするんだろ?)

イマイチ自覚があやふやなのですが、私が本物の艦娘ではないとしたら、あまり大仰な装備を着けて動くのは多分無理でしょう。

(もつとも、一応駆逐艦娘ってことになってるみたいだから、極端な重装備ってことは……)

と考えかけて、吹雪型や綾波型はけっこう大きな擬装を抱えていたことを思い出しました。

「アレはさすがに辛いかも。睦月型とか朝潮型くらいののなら、何とかなると思うけど」

さきほど会った時雨さんや夕立さんも、背中の装備は大きめでしたが、手はフリーで、足の方もそれほど極端な重装備じゃなかったように思います。

「まあ、そのヘンのことは、まず提督に相談したほうがよさそうですね」

もつとも、今頃はおそらく執務室に帰って、私の案内その他で遅れたぶんのお仕事を懸命に片付けているでしょうから、これからすぐにお邪魔するのは気がひけます。

とりあえず擬装のことは頭の片隅に置いておくに留め、私は暇をつぶすため、1階の娯楽室とやらに行ってみることにしました。

* * *

寮の玄関から入ってすぐ奥にある8畳くらいの洋室——娯楽室には、3人の先客がいた。

「ああ、「島風」も来たんだね」

「もしかして、暇してるっぽい？」

そのうち二人は、先程顔を合わせたばかりの、同じ部隊の仲間である時雨&夕立姉妹だ。

「あらあら、貴女が噂の新人さんかしら」

そしてもうひとり初めて見る顔だった。黒に近いが僅かに銀色がかった髪を腰近くまで伸ばした、色白で瞳の大きな愛らしい顔立ちの少女だ。年の頃や体格から考えると、おそらくは駆逐艦娘だろう。

「噂になってるのは知りませんが、新人なのは確かですね。

「島風」と言います。よろしくお願いします」

年下（に見える）とは言え、相手は一応「先任」らしいので、「島風」は自分から挨拶しておくことにした。

「あら、礼儀正しい方ね。私は朝潮型4番艦の「荒潮」よ。山本提督配下の第三艦隊に所属しているの。こちらこそ、よろしくお願ひしますわ」

差し出された手をとり、荒潮と握手する「島風」。

鳳翔や翔鶴とは少し違った意味で、おっとりした優しそうな子だった。「良家の子女」とか「育ちの良いお嬢様」といった単語を連想させる。

まあ、ルックスだけなら、ストリートロングの金髪と綺麗な碧眼、ビスクドールのような整った顔立ちの夕立も、十分「お嬢様」っぽいと

言えるのだが……。

「あー、何か、「島風」が失礼なことを考えてるっぽい！」
チラリと視線を走らせただけで、目ざとく「島風」の内心を察知したのか、白露型の四女は憤慨している。

「ご、ごめんなさい、つい……」

そこで否定せずにそんな事を言ってしまうあたり、「島風」も素直なのかイイ性格をしていると言うべきか、判断に迷うところだ。

「ははっ、まあ、確かに夕立は、外見と性格が随分乖離しているからね」

“次女”の立場である時雨が、苦笑しながらとりなす。どうやら彼女にも思考を見抜かれていたようだ。

あとで聞いた話によると、外見は楚々としたご令嬢、中身は能天気娘な夕立だが、いざ戦場に立つと駆逐艦娘有数の火力と攻撃性を発揮するトリガーハッピーと化するのだとか。つくづく艦娘ひとの本性はパツと見ではわからないものらしい。

とは言え、逆に言うと、普段の彼女は気さくで人懐っこい、それこそワンコのような女の子だ。誘われて同じテーブルに座り、雑談している中で「島風」にもそのことがよくわかった。

その姉の時雨は、見かけどおり落ち着いた雰囲気の常識人だし、初対面の荒潮も、名前に反し淑やかで温和なお嬢さんという感じで、「島風」もあまり気負わずに話すことができた。

「うーん、この時間はあんまりおもしろい番組をやっていないのよねえ」

テレビをつけたものの、荒潮はつまらなさそうにチャンネルをポチポチ変えたのち、あきらめて電源を切る。

「それなら、ゲームでもしようか？」

「4人なら、マ○オカートとかおもしろいかも」

この世界では、深海棲艦との戦いが始まったため、1999年末でテレビゲームの進化がほぼストップしたため、2013年現在でも32ビットマシンが最新世代機に当たる。しかも、軍需関係に電子機器類が大幅に割かれているため、それすら貴重品だ。

そのせいかな、この娯楽室に置かれているのは、90年代の日本で普及し、故障が少ないことで知られた京都産の16ビットマシンだった。

「それも悪くはないのだけれど……あ、これなんかどうかしら？」
荒潮が棚から引つ張り出してきたのは、アナログな将棋盤と駒ひとつ揃えだった。

「二応、わたしたちも軍属なのだから、時にはこういう戦略性のある遊戯に興じてみるのもいいんじゃない？」

「うん、たまにはそれも悪くないかもね」

荒潮の提案に、時雨は乗り気のようにうだ。

「あう、わたしそういうのは、ちよつと苦手っぽい」

夕立が辞退したので、荒潮、時雨そして「島風」の3人で総当たり戦（といってもたかだか3戦）をやることになった。

「——えつと、王手」

「む……参った。降参だよ」

結果は、「島風」のひとり勝ち。荒潮は対局後十数分で投了、時雨も20分足らずで詰みに追い込むことになった。

「あー、じゃあ今度はあたしが相手になるー」

3人の対局を見ているうちに興味が湧いてきたのか、夕立も「島風」に挑んでくる——もつとも、10分もたずに王手となり、凹むことになったのだが。

「へえ、貴方、なかなかやるじゃない」

4人が遊んでいる最中に娯楽室に来た五十鈴との対局は接戦となったが、からくも「島風」に勝利の女神が微笑んだ。

しかし、ちよつといい気になりかけたところで、第四艦隊旗艦の古鷹、そしてわざわざ寮母室から夕立たちに呼ばれて来た鳳翔に、あっさり下されてしまう。

「島風」ちゃんは、少し決戦を急ぎ過ぎるくらいがありますね。もう半歩引いて戦局の流れを見ながら駒を動かせば、もつと強くなれますよ」

ニコニコと邪気のない笑顔を寮母から向けられ、素直にハイと頷く

しかない「島風」。

これは記憶が曖昧な本人も気づいていないことだが、「島風」——本来、風嶋少佐である「彼女」の指揮官としての資質と欠点は、まさに艦娘たちとの対局で明らかになっていた。

無策かシンプルな利害計算で突っ込んでくる敵には勝てても、搦め手や戦術レベルの思考ができる相手だと、あっさり敗北を喫する。まるつきり無能というわけではないが、有能とはお世辞にも言い難いだろう。

故に、一兵卒（と軍艦相手に言うのもおかしな話だが）としての思考をベースで動く駆逐艦娘相手には全勝、反対に旗艦としての経験を持つ重巡洋艦の古鷹や、戦歴豊富な鳳翔には全敗という結果になるワケだ。

とは言え、今の「彼女」はあくまで試作型駆逐艦の「島風」だ。提督復帰後とはかく、現時点ではそれほど気にすることはあるまい。

「さ、一段落したところで、皆さんお茶にしませんか？ 先日間宮さんにいただいた芋ようかんを切りますから」

優しい寮母の提案に、娯楽室に集った面々は歓声をあげる。

「うー、美味しい」

初めて口にする給糧艦娘手製の和菓子の味に、「島風」はびっくりする。

「でしょでしょ？ やっぱり間宮のお菓子は最高っばいー！」

「——どうして、キミが得意げなのかな」

そんな彼女の反応に、目を輝かせる夕立と、苦笑する時雨。つくづくいいコンビだ。

「外出した方からお土産に外のお菓子をいただいたこともありますけど、それと比べても、やはりわたしも和菓子は間宮さんのものが好みですわ」

自称神戸娘のお嬢さんも、うっとりした表情で口の中の甘みを堪能しているようだ。

見れば、古鷹も笑顔だし、五十鈴も澄まし顔を装いつつ、何とも幸せそうに頬が緩んでいる。艦娘と言えどやはり女の子、甘い物を食べ

られる機会はうれしらしい。

そんなほのぼのした雰囲気の中、いつしか「島風」も御客様よそも気分が徐々に薄れ、次第にこの女子寮の輪の中に馴染んでいくのだった。

* * *

「島風」が山本提督のもとに仮配属されてから、10日あまりの時間が過ぎた。

当初は、表向き「仮配属の試験艦」、その実、艦娘ではなく人間、しかもオトコノコ（あえて漢字では表さない）ということで、色々緊張していた「島風」だったが、さすがにひとつ屋根の下で寝起きし、同じ釜の飯を食べるようになって1週間も経つと、今の環境にもそれなりに馴染んでくる。

「ごっはんごっはん♪ ……あ、「島風」だ、やつほー」

「やあ、おはよう、「島風」。君も朝ご飯だよ。食堂まで一緒に行かないか？」

「あ、おはよう、夕立、時雨。うん、それじゃあ、ご一緒させてもらうね」

中でも、同じ駆逐艦、かつ船魂としての外見年齢が近い夕立や時雨とは、かなり打ち解けた態度で接するようになっていた。

「連装砲ちゃんも行く？」

——P！

「島風」が、足元をウロチョロしていた身長30センチくらいのブリキのロボットののようなモノに声をかけると、ソイツもしゅたつと片手を上げ、3人のあとについて来る。

「あれれ、何、そのコ、かわいいー！」

見かけのわりに子どもっぽい夕立が目を輝かせてブリキロボを見ている。犬っぽいとよく言われる娘だが、本当に犬だったら、今まさにしっぽをブンブン振ってることだろう。

「ふっふーん、いいでしょー？ このコはね、連装砲ちゃん。私の専用機装なんだ！」

得意げにナイ胸を張る「島風」。

昨日、研究室に呼ばれた際、珍しく名目だけでなく本格的に身体

各部を検査された後、山本大佐から「島風」用の艦装としてこのロボット(?)を引き合わされたのだ。

ひと目で気に入り、その場で「連装砲ちゃん」と自身で命名したこのロボット、以来「島風」はつねに行動を共にするようになっていく。

もつとも、正確にはロボットと言うより、むしろ付喪神と呼ぶ方がふさわしい存在なのだが……まあ、その辺りは深く追求しても無意味だろう。

「へえ、自立行動可能な艦装って言うのも珍しいね」

時雨は感心しているが、大きさはともかく原理的には、空母娘の艦載機も似たようなものだ。自立行動と言えるかは微妙だが、後付け装備の数々にも相応の妖精が宿り、艦娘の戦いに力を貸しているのだから、それほど特異なものでもない。

なんちやつて艦娘である「島風」は、簡単な装甲板や手持ち武器くらいならともかく、本格的な砲塔や燃料タンクなどを装備すると重さで身動きとれなくなる。そのために考え出された苦肉の策だが、今のところ本人および周囲の評判は上々のようだった。

山本提督指揮下に配属された艦娘23人が暮らす佐世保鎮守府・艦娘女子寮7番棟。その一角に設けられた食堂に3人+αが足を踏み入れると、すでに何人かの先客が座っていた。

「グッモーニン！ 3人とも今朝も早いネ。よいことデース」

朝からテンションがやたら高いのは、第二艦隊の旗艦を務める戦艦娘の金剛だ。

自称・英国生まれで、少々日本語がアヤしいのと紅茶マニアな点を除けば、スタイル抜群の美人なうえに、明るく面倒見もよく、そして強い、非の打ちどころのない艦娘だった。

「わたしのリクエストに応えて、今日の朝ご飯はイングリッシュ・ブレックファストを用意してもらったヨ！」

なるほど、いつもにも増してテンションが高いのはそのせいだったらしい。

「へえ、珍しー。どんなのかしら♪」

と、興味津津の夕立はともかく、英国風朝食と聞いて他のふたりは

微妙に顔が引きつっている。

(ね、ねえ、「イギリスの食事は美味しくない(婉曲表現)」って聞いてるけど……)

(いや、さすがに朝食は品数も少ないし、トーストと紅茶が基本だから、そんなヒドいことにはならないんじゃないかな……たぶん) ふたりの顔色に気付いたのか、金剛が「チツチツチツ」と人差し指を顔の前で振る。

「イギリスの食事は、確かに日本や中国、フランスほど繊細な味付けをしていないのは認めますが、きちんとした食材で丁寧な作れば、十分美味しいデース!」

自信ありげな金剛の様子に、顔を見合わせる時雨と「島風」。落ち着いて皿の上を見てみれば、山型パンのトーストやベーコンエッグ&ソーセージ、炒めたマッシュルーム、輪切りのトマトなど、見慣れた食材も多いので、さほど心配することはなさそうだ。

「あ、この赤い豆って、トマトソースで煮てあるんだね」

「ベイクド・ビーンズね。向こうではもう少し甘めだけど、日本風に少し塩を効かせてもらったから、悪くない味でシヨ?」

「このソーセージも市販のものとは違いますね。レバーっぽいというか……私は嫌いじゃないけど」

「それはブラック・プディング。豚肉の代わりに血を腸詰にしたものだよ!」

話を聞いた限り、どうやら金剛自身も調理(あるいはメニュー選定)に参加したようだ。

そのままの流れで、駆逐艦娘3人は、朝食を取りながら金剛から「なぜイギリス料理がまずいと言われるのか」に関する講義ぎょうぎを聞くことになる。

要約すると、「元々イギリスは気候上多彩な野菜が育ちにくく」、「20世紀半ばまで生鮮食品の輸入も少なく」、さらに「産業革命期に郷土料理の多くが衰退した」といった背景から、長らく食文化を軽視する風潮があったらしい。

「へー、へー、へー」と思わぬトリビアに感心しつつ、美味しくその

英国風朝食をたいらげる「島風」たち。

「そもそも、日本のカレーだって、インドからイギリスを経由して伝わったものだヨ。ドウ・ユー・ノー・イット?」

食後のお茶を口にする合い間の金剛の問いに、時雨と「島風」は曖昧に頷いた。

「そう言えば……」聞いたことがある、かも」

「へえ、そうなんだあ。ところで、このオレンジのジャム、あたし、気に入ったっぽい」

「マーマレードと言ってほしいネ」

マイペースな夕立の様子に苦笑しつつ、金剛は手元のスコーンを皿ごと夕立の方に押しやってくれた。

* * *

〈SIDE: Shimakaze〉

朝食後、「機会があれば、イギリスの美味しい郷土料理のことを、また教えてあげるヨー!」という金剛さん（まだしばらくお茶を飲んでるつもりらしい）の言葉に、見送られつつ、私たち3人は食堂を出ました。

「これから、ふたりはどうするの?」

とくに予定がなければ、娯楽室でゲームでもしないか誘うつもりだったのですが……。

「1300から、鎮守府の近くで演習っぽい」

「まあ、相手の艦隊ははるかに格上、しかも戦艦と重巡が主力らしいからね、胸を借りるつもりでいくさ」

生憎とアテが外れたようです。

「演習、がんばってね」と、笑顔でふたりを見送ったものの、私はちよつとだけブルーな気分になっていました。

「いいなあ、ふたりともちゃんとしたお仕事があつて……」

かく言う私は、船体（と言うことになってる試作艦）が、まだ届かないため、今のところ、非番の艦むすたちを訪ねるか、自主トレ（と言ってもジョギングと軽い体操程度です）くらいしかすることがないのです。

鎮守府、しかも艦むす隊の一員というこの職場で、忙し過ぎるのも大変でしょうが、文字通りの無駄飯食らいをしているのは、いささか肩身が狭い気がします。いえ、誰かに嫌みを言われたとか、そういうわけではないのですが……。

「うふふ、そんな「島風」ちゃんに朗報でーす♪」

いきなり背後から話しかけられて、私はびっくりして飛び上がりました。

「わわっ……あ、愛宕さん？」

振り向くと、明るい紺の制服を着た金髪女性が、悪戯っぽい笑顔で佇んでいました。

この方は、山本提督指揮下で、第三艦隊の旗艦を務める重巡洋艦娘の愛宕さん。

第一艦隊が出撃している際は、翔鶴さんに代わって山本提督の秘書艦代理をしていることが多いそうで、私もすでに何度かお話しさせていただいています。

見かけに違わず、気さくで世話好きな、とてもいい人、いえ艦娘なんです……。

「もうっ、「島風」ちゃん、わたしのことは、「お姉ちゃん」って呼んでって言ったでしょ？」

わざとらしく、プンプンと拗ねたフリをする愛宕さん。

「いえ、さすがにそれは……」

どこが琴線に触れたのか、この人は初対面の時から、わたしのことをえらく気に入ってくださったようで、「ねえねえ、ウチの妹こにならない？」と誘って(?)くださるのです。

「そもそも愛宕さん自身、高雄型の2番艦じゃないですか!」

「でもでも、姉にあたる高雄が、今、佐世保にいないのよう」

「摩耶さんは? あの人は高雄型の3番艦なんだから、正真正銘の妹でしょう」

「そうなんだけどねー、あの子、絶対にお姉ちゃんとは呼んでくれないのよね。たまにアネキって言うくらいで」

しょんぼりしている様子は、ちよっと気の毒な気がしないでもあり

ませんが……。

「だからって……私、高雄型どころか巡洋艦ですらありませんよ?」

「ううん、細かい事は言いつこなし! ほら、それにわたしと「島風」ちゃんって、外見はわりと似てると思うし」

「どこがですか!」

私の髪は金髪と言うには少々灰色がかってますし、瞳の色も愛宕さんの綺麗な碧色に対して私のはくすんだ鳶色です。それに体型だって……。

私は、愛宕さんの、戦艦娘にも滅多にいないような脅威の胸部装甲(比喻表現)を見つめます。

—— Orz

「ど、どうしたの、「島風」ちゃん? いきなり床に崩れ落ちて」

なぜでしょう。下に「ツイて」る身としては、巨乳ソッレをこんな間近で目にしたらそれなり嬉しいはずなのに、私の中に猛烈な「敗北感」とか「寂寥感」とでも呼ぶべき感情が湧き起こってきました。

「……いえ、気にしないでください。単なる「持たざる者」のひがみです」

「??」と不要領な顔をしている愛宕さんに、気を取り直して話しかけます。

「それより、私に朗報って何ですか?」

「ああ、それぞれ!」

ニッコリ笑ってパチンと掌を打つ愛宕さん。

「ぱんぱかぱーん! ついに、「島風」ちゃんの船体からだが、ドックに届きました〜!」

* * *

「アハハハ……すごいすごい!」

大海原——と言っても、佐世保鎮守府のすぐ外側だが——を、全力で「航行」しながら、「彼女」は自然と歓声をあげていた。

「速いはやーい! でも、もっとイケるかも……!」

自分でもハイになっているという自覚は一応あるのだが、なぜだかソレを自制しようという気が起こらないのだ。

「そーれー！ 私には、誰も、追いつけないよー！」
そんな、まるでアルコールでも入ったかのような浮かれっぷりを示す「島風」の様子を、随伴兼監督艦として同行している長良は、苦笑しつつも優しい目で見守っていた。

同じ山本提督配下とは言え、所属艦隊が違うので、これまでさほど接点があったわけではないが、試作艦として仮配属中のこの子は、普段は同じ年頃の駆逐艦娘の中では比較的落ち着いた印象があったため、今日の様子は少し意外ではあった。

もつとも、ようやく自分の「船体」が完成して、初めての自分の意識で動かしている最中だというのだから、多少は大目にみてやるべきだろう。

そのあたりの感覚は、船魂こころと船体からだがセットになって生まれてきた、ごく普通の艦娘である長良には、想像するしかない領域の話ではあったが。

ともあれ、体育会系女子な艦娘の長良個人としても、どこぞの引きこもり駆逐艦のような子よりは、こういう元気に跳ね回ってくれるタイプの方が好ましい。

「島風」ちゃん、せっかくだから、ちよつと航行演習おいかけっこしてみよっか？」

「駆けっこしたいんですか？ 負けませんよー！」

* * *

〈SIDE：Shimakaze〉

愛宕さんから知らせを受けて、急いで山本提督のもとに出頭した私は、そのまま工廠へと案内されて、ついに私の「船体」からだと対面するところになりました。

注水されたドックには、大日本帝国海軍伝統のコバルトグレーに塗られた細身の軍艦が浮かんでいます。

全長120メートルあまりと、時雨や夕立のような白露型駆逐艦よりはひと回り大きいですが、それでも巡洋艦や空母、戦艦などが持つ迫力とは比べ物になりません。

けれど……。

(なんでだろ……この「子」のそばにただで安心できるみたい)

「それ」を見た瞬間、私は深い安堵感を感じたのです。

あるいは、それこそが「実験」の影響で、本来人(しかも男)であるはずの私が艦娘と限りなく近い存在となっている証左なのかもしれない。

「船体」との対面後、私はいつぞやの地下研究室へと連れて来られ、山本提督の見守る中、手術台上にうつぶせに手足を固定されました。額や二の腕、太腿、などに何かの機械から伸びたセンサーのようなものがペタペタと貼り付けられます。

「なんだか、悪の組織の人体改造シーンみたいですね」

冗談混じりにそう言うと、提督は苦笑しました。

「はは、完全に否定できないのが辛いところだ。改造というほどじゃないけど、これから、とある「部品」を君に移植することで、船体との霊的回路を開くんだからね」

「成功すれば、貴方も他の艦娘同様、自在に船体を動かせるようになるはずです。ただし、ちよつとくすぐつたいと思うので、念のため暴れないよう固定させていただきました」

改造(?)を担当する技術将校らしき女性が、説明を補足してくれましたが……。

「何、痛みは一瞬です。ご安心なさい」

ちよ、それ全然安心できないんですけど!? せめて麻酔とか……。

「えいつ」

抗議する間もなく、首の後ろ——ちようど髪の毛の生え際あたりに、100円玉くらいの、何かピンヤリしたものが押しつけられ、チクリと肌に針のようなものが突き刺さるのがわかりました。

「あ痛ッー」

確かに「痛み」を感じたのは、ほんの一瞬でした。気が狂うような激痛というワケでもなく、せいぜい予防注射程度の十分我慢できる苦痛です。

ですが、その感覚が続いて、延髄を起点になんとも言い難い痒みの

ようなものが、全身、そして脳に広がっていきます。

冷たい熱。

不快感を伴う快感感。

強いて言うならそんな矛盾した表現が当てはまるのかもしれない。

「くふうう……」

本当なら、体の内側を侵すその「感覚」に、体を丸めてのたうち回りたいところなのですが、手足を手術台に固定されているため、それもかないません。

「愚問かもしれないが、大丈夫か？」

心配げな提督の言葉に答えようとした私は、さっきまでの「違和感」を感じなくなっていることに気付きました。

「だい、じょうぶです」

少し乱れた呼吸を整えつつそう告げると、提督は、計測器の操作をしている技術将校さんの方に目を向けました。

「——計測値、いずれも予測の範囲内です。拘束解除しても問題ありません」

その答えを聞くと、提督は自ら私の手足を戒めているベルトを外してくださいました。

肌が剥き出しの手首や、ニーソックス越しとは言え足首に、若い男性——それも直属の上司である山本提督の手が触れるのは少し面映ゆい気もしますが、変に意識するのは提督に失礼でしょう……あ！

「ひゃんっ!? て、提督……お尻さわっちゃやですう」

無意識に甘えるような口調で懇願してしまいました。

「す、すまない。スカートがまくれ上がっていたので、直したただけなんです……」

真面目な山本提督のことですから他意はなかったのでしょうか、先程から肌が敏感になっている気がするところに不意打ちをもらったため、掠めるように触れられた部位が熱く火照っているのがわかりません。

ようやく自由になった体を手術台の上に身を起こし、ばつが悪そう

に視線を逸らす提督を、上目遣いに見つめます。

そのままなら、上司と部下にあるまじき「微妙な雰囲気」になりかねないところでしたが……。

「はいはい、いちやつくのは後にしてくださいね。まだ実験中なんですから」

ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべた技術士官さんの存在に、救われました。

——いえ、お邪魔虫だなんて、思ってませんからね！

* * *

その後、いくつかの簡単な検査で「特に問題なし」とのお墨付きをもらった「島風」は、早速新たな船体からだの運用試験に励むこととなった。

初日の航行演習で、半数近くの駆逐艦娘より足の速い長良を、余裕をもって引き離すほどのスピードを見せたのは伊達ではなく、運動性能は極めて良好。

その後も鎮守府海域の警備任務や海上護衛任務、あるいは他の提督との演習などに、仮配属された第四艦隊の僚艦とともに挑み、攻撃、回避ともにベテラン艦に劣らぬ能力を示す結果となった。

また、それに伴い、第四艦隊を始めとする仲間の艦娘たちとの距離も急速に縮まっていく。

少し前までは、いくらか馴染んだとは言え、どこかお互いに距離があったのだが、戦友としていくつもの任務を共にした結果、双方にお客様気分が消え、本来の意味での「友達」と呼ぶにふさわしい関係が構築されつつあった。

「やつほー、「島風」く、お泊りに来たっばい」

「いつも済まないね。今日もお世話になるよ」

「いいのかい、私までお邪魔して？」

「うん、もちろん。ささ、入って入って！」

とくに第四艦隊の駆逐艦娘3人とは親しくなり、ついには「島風」がひとり部屋なのをよいことに、多少手狭だが皆で集まりパジャマパーティを企てるまでになっていた。

元々は仲が良かった時雨&夕立が「島風」の部屋に遊びに来るくら

いだったのだが、たまたま響の話題となり、現在姉妹艦である他の暁型艦娘が山本提督配下にいないこともあって、やや浮いている……という話が出たのだ。

陽性のワンコ気質な夕立が「仲間外れはダメっぽい」と、彼女も引っぱり込むことを主張し、優しい気性で気遣いのできる時雨や、他の姉妹艦が存在しないことに一抹の寂しさを覚えていた「島風」も賛成して、「響とお友達作戦」（命名・夕立）が実行されることとなった。

最初は戸惑っていた響も、（まあ、いささかお節介な面はあったが）3人に悪意がないことは理解していたので、少しずつ彼女達の輪に加わる機会が増えていったのだ。

「アレーシユキ——ロシアのお菓子を、鳳翔さんの助けを借りて焼いてみたんだが」

「くんくん……いい匂い、美味しそう！」

「手作りとは、やるね響。僕は間宮さんをお願いして仕入れてもらった三色豆あられを持ってきたよ」

「それじゃあ、せっかくだから金剛さんから分けてもらった茶葉でミルクティー入れるね」

3人寄ればかましいと言われる年頃の女の子が4人いるのだから、そのにぎやかさは推して知るべし（もっとも、ひとりには偽娘なわけだが）。

なにぶん狭い部屋なので4人とも艤装をすべて外しているため、ちよつと遅めのお茶会を楽しんでいるその様は、制服のセーラー服とあいまって、まるつきり女子中学生そのものだった。

ひとしきりお茶とお菓子とお喋りを堪能したのち、いったんちやぶ台周りを片付けて、4人分の布団を敷く。時雨と夕立は隣りの自分の部屋から運び込み、響の分は、この部屋の備え付けの予備でまかした。

その後、4者4様の寝間着に着替える。響は水色のシンプルなコツトンのネグリジェ、時雨は黒を基調に白い水玉模様が入ったワイシャツ型パジャマ、夕立はダブつとした薄桃色のロングTシャツ、そして「島風」は部屋に用意されていた白の浴衣だ。

無論、このまま素直に眠りにつくワケもなく、布団に入ってからがパジャマパーティーの本領だ。幸い明日の任務は夕方からなので、多少夜更かしをしても問題はないだろう。

そして、修学旅行とパジャマパーティーの定番の話題と云えば、恋バナである。行動範囲と接触人数が極端に限られる艦娘の場合、自然とその矛先がひとりの男性に向くわけで……。

「僕は、山本提督のことが好きだよ。上官としてもひとりの男性としてもね」

その中で口火を切ったのは意外なことに控えめに見られがちな時雨だった。

「あたしだって、提督さんのことは大好きよ！ でも、恋人として好きなのかって言われると、ちよつと悩むっぽい」

一番大人びた容姿のわりに、夕立は異性への感情がまだ未分化なのかもしれない。

「私は……そうだな。山本大佐が頼りがいのある立派な男性であることに異論はないが、やはり上司として尊敬している部分大きいと思う」

ふたりの言葉を受けて、あまりそういう事を口にしなそさそうな響も場の雰囲気流されたのか、真情を吐露している。

さて、そうなる、残るひとりにだんまりが許されるわけもなく……。

「え、私？ うーん、考えたこともなかったなあ」

布団にうつ伏せになった姿勢のまま、器用に首を傾げる「島風」。本来の立場はひとまずおくとして、現在の「島風」が、山本提督のことをどう想っているか——それは意外に難問だった。

「たぶん、優しく頼りになるお兄さん」ってのが一番近いと思うけど、だからって、まったく異性として意識してないわけでもないんですよね」

真剣に考えてはみたものの、いまひとつ煮え切らない答えしか出て来ない。

「それに、提督って、その……翔鶴さんとか金剛さんと……」

彼と恋仲にあると噂の艦娘の名を挙げてみる。

「うん、そうだね。少なくとも翔鶴と個人的につきあってるのは間違いないと思う。彼女が秘書艦になって以来、提督の側から熱心にアプローチしていたのは僕も知ってるし」

「え、あたしは、金剛に押し切られたって聞いたっぽい？」

「どちらも正解だな。山本大佐は、第一艦隊の翔鶴と第二艦隊の金剛の両方と『そういう関係』を持っていらっしゃるらしいと、荒潮から聞いたことがある」

無論、他の3人もそのことは承知しているようだ。

「他の艦娘はどうあれ、僕は提督が好きだという自分の気持ちに嘘はつきたくないな」

「逆に私は、すでに相手がいると分かっているからこそ、一步引いた目で見てしまうのかもしれないが……まあ、この場合、どちらが正しく、どちらが間違いというわけでもないだろうね」

時雨と響から対照的な意見が出たが、確かにどちらも一理がある。

「うう、夕立、頭がこんがらがってきたっぽい」

ちよつとヘタレた表情を見せる夕立の頭をよしよしと撫でつつ、改めて自分もそういった感情に向き合ってみるべきか、と考える「島風」。

幸か不幸か、ガールズトークの話題は、そこから微妙に脱線して「戦鬪で負傷したあとのお肌の手入れ」だの「好きな男性を誘惑する方法」だのへと流れていったのだが……。

いずれにせよ、この夜の3人との会話が、後の「島風」の決断を後押しする一因となったことは間違いないだろう。

* * *

「島風」が仮配属されてから3週間あまりの時が流れた。

最初の頃こそ、「試作艦」の「仮」配属ということで、艦娘・本人双方に多少の遠慮のようなものもあったが、「彼女」が船体からだを得て演習や遠征に同行するようになってからは、そんな壁も霧散している。

何より「島風」本人が、ごく自然にここでの駆逐艦娘としての暮らしに適応していた。

そもそも、この国に於ける艦娘の立場は「人の心を持つ兵器」だ。ここ佐世保鎮守府は横須賀と並んで古くから艦娘本拠地として稼働しており、彼女達へのフォローもそれなりにいき届いてはいるが、それでも時には命と作戦の成功を秤にかけて、艦娘たちが後者を選ばされる可能性も決して皆無ではないのだ。

無論、そのことは「島風」だって承知している。

しかし、心を繋いだ戦友達と出撃し、そしてその作戦のおかげで多くの人々が救われるのなら、いざと言う時に犠牲いしづえになる覚悟はある——と「島風」は思うようになっていた。

各人によってその内容は微妙に異なるだろうが、その種の覚悟こそが、乙女にして軍艦たる艦娘が、その本分を悔いなく果たすには不可欠なのだ。

「へっ、そういう意味では、アイツはもう一人前の艦娘って言えるのかもな」

「島風」本人に乞われて、手すきの時に船魂なまみでの戦闘訓練にしばしつきあつた摩耶は、うれしそうな顔で同じ重巡洋艦娘の古鷹にそんな事を語っていた。

「摩耶さんがそんな風に褒めるのって珍しいですね。あの子、そんなに強かつたの?」

「ん? いや、全然。いくらスピードを始めとする身体能力が高くても、圧倒的に経験が足りてないし。でも、自分の長所もちあしを徹底的に活かす割り切りと、諦めないガッツは、戦いでは何より大事だからな。そいつは及第点やつてもいいぜ」

ともあれ、そんな風に山本提督配下の艦娘たちの一員として順調に務めを果たしていた「島風」だが、ある朝、寝間着から制服に着替えながら、ふと自分の身体の変化に気づいた。

「あれ、なんだろう。胸に違和感が……なんか腫れてる?」

蚊の季節には少し早いが、何か虫にでも刺されたのだろうか? それにしても、左右の胸がいつペンにというのは考えにくい。

他のことなら、友人である時雨・夕立姉妹や、女子寮の寮母である鳳翔に相談したいところなのだが、「新型艦娘の試作艦——という設

定になっている、ある実験中の人間(♂)という複雑な事情から、さすがに身体のことについては話しづらい。

やむなく、翔鶴を通じて山本提督に連絡を入れ、彼の立ち合いのもと以前世話になった技術将校の「診察」を受けることになった。

「うーん、結論から言うと、これは「異常」ではありません。むしろ、「島風」の身体が有意識艦としての適応が進んだ結果と言えるでしょう」

10分ほどの触診と問診を終えると、20代半ばくらいに見える女性技術将校は、微妙な表情で、診察結果を告げた。

「? どういうことなんですか?」

「あゝ、つまりですね……」

技術将校は山本の方にチラと視線を走らせたのち、言葉を選ぶのをやめ、事実を端的に明示する。

「アナタの身体が、より艦娘に——女の子に近づいたということですよ。女性なら、アナタぐらいの年頃になれば、ね?」

さすがに此処まで言われれば、そのテのことに疎い「島風」にも理解できた。

「つ、つまり、私の胸に、その……お、オツパイが?」

「はい」

肯定の言葉を聞いた際の「島風」の胸中に浮かび上がったのは、戸惑いと驚愕、そして微かな歓喜の念だった。

「——少し早過ぎないか? 事前の予測では、身体に明確な変化が見られるようになるのは、2カ月以上経過してからだと予測されていたはずだが」

だが、それを「彼女」自身が自覚する前に山本提督の疑問の声に気を取られたため、結果的に「彼女」の内面的な変化については、誰も気づくことなく時が過ぎることとなる。

「はい。これは、「島風」自身の「素質」の高さに加えて、船体との霊的回路が開通したことで、船魂にあたる「島風」にもフィードバックが表れているものと思われます」

「特別懲罰の終了まであと1週間だが……処置解除に関する影響は

？」

「1週間ならギリギリ大丈夫です。ですが、それ以上このままの状態を維持しますと……」

いったん言葉を切った技術将校に見つめられ、もしもじと居心地悪げに体をくねらせる「島風」。

「えっと、何か問題あるんですか？」

「ええ、フェイルセーフポイント限界点を超えてしまった場合、アナタは完全に人から艦娘へと変貌し、現在用意されている手段では戻ることが不可能になります」

技術将校に続けて、山本大佐も口を挟んだ。

「キミが望むなら、特別懲罰処置の期間短縮を上申しておこう。幸い、特別懲罰処置を受けて以来のキミの素行評定は極めて良好だから、上申が通る可能性は低くない」

* * *

〈SIDE：Shimakaze〉

「……とか言われてもねえ」

あの後、提督に「少し考えさせてほしい」と告げて、診察室を出た私は、そのまま寮に戻る気にもなれなかったので、なんとなく鎮守府の外れにある民間用棧橋の方に来て独りで海を眺めています。

本来なら、不名誉な処分であろう「特別懲罰」の期間が減るのは歓迎すべき事柄なのでしょう。

しかし、私は今のこの試作型駆逐艦娘「島風」としての暮らしが嫌ではありません。いえ、むしろ大いに満足していると言って良いでしょう。

記憶があやふやなので、以前の「私」がどういう日々を過ごしていたかは定かではないのですが、少なくとも現在の私は、任務に命の危険が少なからずあることを踏まえても、充実した毎日を送っています。

できれば一日でも長く、みんなと——第四艦隊やその他の山本提督配下の艦娘の皆さんと共に過ごしたいと言うのが偽りない本音でもあるのです。

けれど。

このまま感情に任せて元に戻る機会を逃してしまつてもよいのでしょうか？

技術将校さんは「1週間以内ならギリギリ大丈夫」だと言っていました。

逆に言えば、1週間を過ぎれば——あるいは不測の事態が起これば、元に戻ることにはほぼ不可能になるとも解せます。

「元の私、かあ……」

具体的な記憶はまだ戻っていないものの、いくつかのヒントから、ある程度の人物像は絞られています。

私の外見が「特別懲罰」を受ける前と大きく変わっていないとすれば、年齢は13〜15歳。特別志願による少年兵でもなければ、普通は義務教育を受けているべき年代です。

そして、後方勤務ならともかく、ある意味最前線である鎮守府に、法的にも戦力的にもハンパな存在でもある少年兵は通常配属されません。現に、私はこの佐世保鎮守府内で、艦娘を除いて20歳未満の軍人・軍属を見かけたことはありませんし。

(「だけど、「通常」でないとしたら?)

そう、たとえば……。

「きやつ」「あイタつ!」

上の空で棧橋付近を歩いていた私は、誰かとぶつかってしまったみたいです。

「ご、ごめんなさい、少し考えごととしていたので……おケガはないですか?」

私の方は転ばず踏みとどまれたので、地面に尻もちをついている駆逐艦娘らしきセーラー服姿の少女に手を差し伸べました。

「はわわわ、びっくりしたのです……いい、いえ、問題ありません。わたしの方こそ、前方不注意で申し訳ないのです」

その子の方も、どうやらケガはなかったようで（まあ、艦娘がこの程度で負傷するはずありませんが）、恐縮しながら私の手をとります。

「よっ、と」

握った手に軽く力を入れて地面から引つ張って立たせてあげてから、再度私は彼女に頭を下げました。

「改めてごめんなさい。私は「島風」。現在この佐世保鎮守府の山本提督のもとに試験配備されている、試作型駆逐艦です」

しかし……

「こ、これは、どうもご丁寧に。わたしは暁型4番艦の「電」いなずまです」
背中までくらしいの茶色の髪を髪留めでアップにしたおとなしそうなその子と視線を合わせ、彼女の名乗りを聞いた瞬間、私の脳裏に膨大な「記憶」の波が押し寄せてきました。

——電です。どうか、よろしくお願いいたします

——なるべくなら、戦いたくはないですね

——沈んだ敵も、出来れば助けたいのです

——戦争には勝ちたいけど、命は助けたいって……おかしいですか

(ああ、私、いや、「僕」は……)

特別懲罰任務の開始に際して封印されたはずの記憶。

そのすべてではありませんが少なからぬ部分を、我に返った私は取り戻していました。

「あの……大丈夫……ですか?」

目の前で心配そうな視線を向けてくる少女——「風嶋少佐配下で唯一生き残った駆逐艦娘」である電のその優しさが、逆に辛いです。

物語の記憶喪失とかだと、記憶が戻った時に代わりに記憶喪失期間の記憶をなくしてしまう——というパターンもあるようですが、「島風」として過ごしてきたこの3週間余りの記憶は、今もキチンと私の中にあります。

だからこそ、私は「僕」が如何に無能かつ無慈悲な提督であったか、目の前の電を始め、名取や神通、そして南西諸島で沈んでいった艦娘たちにヒドい仕打ちをしていたかが実感できるのです。

幸い電の方は私がかつての上官だとは気付いていないようなので、

精神力を振り絞って、私はニッコリ笑顔を見せました。

「あはは、平気ですよ。それじゃあ、私はそろそろ行きますねー」
あえて明るくそう言って、踵を返……しかけて、ふと思いついたまま、その言葉を口にしていました。

「そうだ。私の所属する第四艦隊に、あなたの姉妹艦の響がいるんですよ。よかつたら、遊びに来てあげてください。きつと喜ぶと思いますから」

「え……は、はいっ。あ、あのっ……ありがとうございます！」

ペコリと頭を下げる電に今度こそ背を向け、ヒラヒラと手を振りつつ、私は女子寮の自分の部屋に戻り——その日は夕飯時に時雨&夕立が呼びに来るまで、ずっと部屋の中でこれからの自分の進退について考え続けていました。

* * *

「島風」ちゃん、何か悩みがあるようですね」

電と出会った、いや「再会した」日から3日後、食堂でひとりいつもより遅めの朝食をとったあとも、お茶を飲みながら何となくボンヤリしていた「島風」に、鳳翔が話しかけてきた。

「あ……えっと、私ってそんなにわかりやすいですか？」

「そういうわけでもありませんが、わたしは、これでもこの女子寮の寮母ですから」

なるほど。理屈になってない気もするが、相手が鳳翔だと何となく納得できる気がした。

「それに、たぶん時雨ちゃんたちがここにいても、気が付いただろうと思いますよ？」

幸か不幸か第四艦隊の面々は昨日の早朝に出撃していった。

水雷戦隊向け任務なので、本来は「島風」もそこに加わるべきなのだが、「例の一件」を懸念した山本提督が、編成から「彼女」を外したのだ。

代わりに第三艦隊から臨時で荒潮が、重巡洋艦娘の古鷹と交代で入っている。旗艦は五十鈴が務めることになった。

ちなみに、その第三艦隊の面々は遠征に出ている……というか、珍

しいことに山本提督配下の4艦隊すべてが、上からの要請で遠征任務に出ているのだ。

佐世保には、ほかにふたり提督がいるとは言え、この時間帯は他の提督配下の艦隊も、大半が出払っている。

そもそも、有意識艦隊同調能力者の同時制御限界である4つの艦隊を配下に置いている提督など、この鎮守府では山本大佐くらいのもんだ。

もつとも、そのおかげで、「島風」は他の艦娘と顔を合わせることなく考え事に没頭できたのだが。

とは言え、ひとりで悩んでいても答えを出しにくい問題でもある。

「その、ですね。たとえば話なんですけど……」

「島風」は思い切って鳳翔に相談してみることにした。

「ある人が、ぶか……じゃなくて、自分より目下の人にヒドい仕打ち——それこそ命に関わるような非道な真似を、無自覚にしちやっただんです。」

その人は、後で自分の過ちに気付いて後悔してるんですけど、今度はその目下の人に顔を合わせづらくって……。

相手の方も、わた……ある人となんか、もう顔も見たくないだろうし」

たとえば言うには余りに稚拙な誤魔化し方だったが、優しい軽空母娘は、あえてそれに気付かないフリをした。

「でも、会ってしまったんですね？」

「——はい。私は、これからどうすればいいんでしょうか？」

「どうやら他人事に取り繕う余裕もなくなったようだ。」

「そうですね——まず、〴〵その人〴〵が第一にしないといけないことは、その目下の人に心から謝罪することだと思えます」

「で、でも、謝ったからって済む問題じゃ……それに到底許してもらえらるとは！」

「島風」ちゃん」

表情を歪める「島風」に、しかし鳳翔はあえて冷たい言葉を投げかけた。

「謝罪というのは、相手に許してもらうためにするものではありませんよ」

「！」

ガツンと殴られたような衝撃を受ける「島風」。

「じゃ、じゃあ何のために……」

「もちろん、「自分が悪かった」と認めてお詫びすることが第一義です——そして、聡明な人なら、これから何をすべきか話し合う端緒とするでしょうね」

鳳翔の言葉は厳しかったが、その真意がわからないほど「島風」は愚かではなかった。

嗚呼、その通りだ。謝った「だけ」で許してもらおうなどは、自分は何とひとりよがりで甘えていたのだろう。

「相談に乗っていただき、ありがとうございます」

立ち上がり、ペコリと寮母に頭を下げると、「島風」は食堂を出て目的の場所——「風嶋提督配下の有意識艦の待機所」へ向かって走り出した。

* * *

〈SIDE：Shimakaze〉

鳳翔さんからのご忠告をいただいた後、私は電ちゃんにふたりきりで会い——そして誠心誠意頭を下げて謝りました。

最初は面食らっていた電ちゃんですが、(本来は秘密なのですが)事情をかいつまんで説明し、再度頭を下げたことで納得してくれたようです。

「沈んでしまった艦娘は、泣いても謝っても取り返しがつきません。でも、過ちを悔いてやり直そうという人のことは、信じてあげたいと思うのです」

詳しいやりとりは省きますが、電ちゃんは、そう言っただけ私のことを許してくれました。

そのことで少しだけ心が軽くなったのは確かなのですが、それとは別の悩みが出来てしまったのも事実です。

(やり直す……それは、提督として？ それとも……)

このまま一介の艦娘として働きたい、皆の役に立ちたいという気持ちがあるのは確かです。

でも、「風嶋少佐」の配下には、居残り組で無傷だった駆逐艦娘・電ちゃんのほかにも、大破状態で帰還した軽巡娘・神通と、中破状態のために出撃しなかった軽巡娘・名取がまだ残っています。

（私は——提督として彼女達への責任を果たすべきなのでしょうかね？）

タイムリミットはあと3日。

そのままであれば、私は結局、特別懲罰処分が終了する日限までどうするべきか決められず、なりゆきに任せて過ごし、どちらの結果が待っていたとしても後悔したことでしょう。

けれど——幸か不幸か、今の日本は“戦争”をしているのです。そして、敵は此方の事情を斟酌してくれるほど甘くはありませんでした

* * *

「第四艦隊が苦戦!? ああの海域ですか？」

決断の一助でもなればと、「特別懲罰処分が終了後の風嶋少佐の処遇」について山本提督のもとに尋ねに来た「島風」は、執務室の前でその言葉を聞いて凍りついた。

「……どうやら敵の哨戒部隊が普段より多く配置されていたらしい。どれも駆逐艦1、2隻単位の正面から戦えばどうということはない相手だが、波状攻撃で燃料弾薬を消耗させられると、最深部の敵主力艦隊の元に辿り着いたとき、不覚をとりかねない」

「ならば、露払いの護衛部隊を……って、他の艦娘たちも皆遠征に出ているのではね」

世話すべき相手が出払っているため、臨時で秘書艦の代理を務めている鳳翔の言葉に、苦々しく声で山本提督が答えた。

「ああ、厄介なことだね。こういうことなら、艦隊定数ぎりぎりですんじゃなくて、もう2、3人着任してもらえばよかったかな」

「それならわたしは……」

「気持ちには有難いのですが、比較的小型とは言え、あの狭い海域は鳳翔さんのような軽空母は無理です」

山本提督が悔しそうにそう告げるのを聞いて、いてもたってもいられなくなった「島風」は、扉を開けて執務室に飛び込んだ。

「なら、私が行きます!!」

「島風」ちゃん!？」

慌てる鳳翔と対照的に、山本提督の方は「彼女」の気配に気づいていたのか、動揺する様子は見られなかった。

「強力な相手ではないとは言え、交戦回数は多くなることが予想される。しかも、片道で最低2日はかかるだろう。それでも出撃すると言うのか?」

「はいっ!」 “あの子”のように敵までとは言いません。それでも、私は助けられる仲間を助けたい……その手段が自分にあるならなおさらです」

迷いなく言いきる「島風」。

「だが、ふたつ問題がある。ひとつは鎮守府の規則として、単艦での作戦行動は認められない。最低でも、もうひとつは協力してくれる艦娘——それも、駆逐艦ないし軽巡洋艦が必要だ。

そして、もうひとつ。私はすでに4つの艦隊に意識を接続しているため、仮に5つ目の艦隊を構成しても、物理的に指揮する余裕がない」
「大丈夫です、僚艦のアテはあります。そして指揮系統の問題については——提督、“風鳴少佐の配下の艦娘への指揮権”は、未だ剥奪されていませんよね?」

さすがに「島風」がそう言い出すことは予想外だったのか、山本提督は微かに目を見開いた。

「君は……そうか、記憶が……」

一瞬の逡巡の後、彼は大きく頷いた。

「わかった、私の責任において、許可しよう」

「了解! 駆逐艦島風、出撃します!!」

〈エピソード〉

『以上のような経緯をもって、モーレイ海深部探査任務は、2提督による合同作戦によって無事成功。次なる侵攻目標として、キス島周辺

海域を進言する。

なお、作戦に参加した有意識艦は大破2、中破1、小破5ながら、全艦無事に帰投。

問題の試作型駆逐艦「島風」についてだが……』

——ボタン！

「ていとくうー！ 第四艦隊が帰投したよー！」

執務室のデスクで、しかつめらしい顔つきで上層部への報告書をしたためている山本大佐のもとに、旋風のような勢いでひとりの少女が訪れた。

「こちら、ドアはもうちょっと静かに開けなさい。それと、他の娘たちはどうしたんだ？」

「遅いから鎮守府前に置いてきちゃった」

「待て待て！ まがりなりにも旗艦が、それはどうかと思うぞ」

「うそ嘘、ホントは小破した子がいるから、入渠するって。わたしは旗艦だからこそ、提督に報告に来たんだよ……えへへっ♪」

悪戯っ子のような表情で笑う少女に、仕方のない奴だと苦笑を返す山本。

職務関連では公正な態度を心がけている彼だが、ちよつとした「事情」もあつて、この娘相手だと妹を可愛がる兄の如く無意識に多少甘くなるようだ。

秘書艦を務める翔鶴もその辺りの「事情」については心得ているので、あまりうるさく言わない。無論、度が過ぎるようだと言は刺すだろうが……。

ちなみに、言うまでもなくこの少女は、十日程前まで特別懲罰処分によつて「試作型駆逐艦娘」として過ごしていた島風だ。

もつとも、当時の「島風」しか知らない人間が今のこの少女を見たら、あるいは同一人物とは気付かないかもしれない。

別段、背丈や体型、顔立ちが大きく変わったわけではないのだが、サンドベージュ砂色だったセミロングの髪が、ストロベリーエロ腰までくらしいの長さに伸びたうえで、より金色味を帯びた麦藁色ストロベリーエロに変わっている。

さらに、服装もより扇情的に変化し、上着の丈が短くなって完全に

へソ出しだし、スカートにいたっては膝上30センチ近くのマイクロミニ丈で、ちよつと早足で歩いただけで下着が見える状態。しかも、その下に履いているのは、黒のTバックショーツだ。

格好だけではなく、パツと見の雰囲気や性格も、歳相応より落ち着いた印象のあつた以前とは逆に、ハイテンションな元気少女といった趣きになっていた。

「あの時」、当時の第四艦隊を支援すべく、「島風」は〃風嶋少佐配下の電に頭を下げて艦隊を組んでもらい、出撃した。その際、電のほかに小破状態まで復帰していた軽巡洋艦の名取も、ふたりを心配して一緒に来てくれることになったのは嬉しい誤算と言ふべきだろう。

おかげで支援任務自体は成功したのだが、軽巡1、駆逐艦2の水雷戦隊として最小単位での任務はさすがに厳しく、3隻ともボロボロになつて帰投することとなつたのだ。

とくに大破状態だつた「島風」は、帰ると同時に即入渠となつた。ドック入りした船体からだとは別に、本人もフラフラのまま艦娘用特殊浴場に放り込まれた。

意識朦朧とした状態で実は初めての入渠を経験することとなつた「島風」だつたが、警告されていた通り特別処置解除期限を過ぎていたせいか、すでにその体質が完全に変わつていたようで、普通の駆逐艦娘同様、入渠後数時間で完全復活することができた。それは良かったのだが、負傷（艦娘だから損傷と言うべきか？）が治ると同時に、外見も微妙に変化して今の姿へと変わつていたので。

ちなみに、〃下〃は完全に凹状態となつたし、胸はA以上B未満くらいの大きさにまで膨らんでいる。もつとも、本人はすでに覚悟を決めていたため、これで皆に（本当は男のコだと）変な引け目を感じずに済む……と、むしろ喜んでいたようだが。

鎮守府の書類上は、風嶋一輝少佐は予後不良の病氣となつて海軍病院で長期療養。また、試作型駆逐艦は、正式に島風の名称で山本大佐のもとに配属されることとなつた。

元風嶋提督配下の艦娘も、本人達の意志を確認したうえで正式に山本艦隊に所属することとなつた。結果、艦隊の編成が微妙に変化し、

5艦編成だった第三艦隊に名取が加わり、また、第四艦隊は古鷹が予備艦となつて、代わりに電が編入。神通は古鷹同様予備艦として、随時各隊をサポートすることが決定している。

編入に合わせて、電、名取、神通も、島風たちと同じ女子寮に入寮している。部屋割は、軽巡娘ふたりが同室で、荒潮が島風の部屋に移り、代わつて姉妹艦である電が響のルームメイトとなつた。結果、新顔3人も部屋割の変わった3人も仲良く日々を過ごしているので、問題はないだろう。

さて、「人」から「艦娘」、「少年」から「少女」へと、立場と存在が変貌することになった島風だが、少なくとも表面上はあまりその事を気にしているようには見えない。

本人いわく「人間だったの時の記憶は一応あるけど、何年も前に見た映画かドラマのようで、おぼろげで実感がない」らしい。

「ちゃんとわたしが『わたし』だと実感できるのは、この佐世保に試作艦として赴任して以降だもん。だから、別に今の状態に不満はないですよ?」

……と、本人はあつけらかんとしている。

むしろ、事情を知るかつての先輩かつ現在の上官たる山本のほうが、よほど気にしており、何かにつけて彼女のことを気遣つてくれるほどだ。

もつとも、完全に艦娘になつたことで性格にも多少変化があつた島風は、山本のことを兄的存在として素直に慕つており、これ幸いと何かにつけて甘えているようだが。

「提督く、わたし、今回初めての旗艦がんばったんだから、何かごほうび頂戴」

「ああつ、島風、ずるーい! てーとくさん、MVPとつた夕立も何かほしいっぱい」

積極的な島風に刺激されたのか、近頃は夕立もワンコロっぽさを増して、山本提督にじやれついてくるコトが多くなつたのは、良かったのか悪かったのか。

「ふたりとも、提督はまだお仕事なんだから邪魔しちゃダメだよ」

「あの……鳳翔さんがお夕飯作って待っていてるのです」

とは言え、良識派の時雨に加えて、控えめながら電もストツパー役に回ってくれるため、現状ではとくに問題はないようだ。

なお、この場にはいない他の駆逐艦娘のうち、響は我関せず派、荒潮はおもしろがって煽る方に回る派だったりする。

「しようがないなあ。ほら、夕立も行くっ」

「うう、了解っぽい」

ワイワイ騒ぎながらと執務室を出る4人の駆逐艦娘の背中を微笑ましげに眺める山本提督。

軍人としてはある意味失格かもしれないが、それで彼女達が気持ちよく戦えるなら、こんなアットホームな雰囲気も悪くない。

（——がんばれ……そして、これからもよろしく頼む）

口には出せぬ彼の真情を、傍らに侍る銀髪の秘書だけは理解し、優しく微笑んでいた。

——おしまい——

【このシリーズにおける特殊な設定の概要】

佐世保鎮守府。

人類と深海棲艦の戦いのための基地のひとつであるこの軍事施設の一角に設けられた執務室で、セーラー服を着たひとりの少女が、デスクの向こうに腰かけた青年に向かって、敬礼の姿勢をとった。

「本日ヒトニマルマル付けで着任しました駆逐艦、島風です。スビードなら誰にも負けません。どうぞよろしくお願い致します！」

「うむ、歓迎するよ、ファーストボーン艦・島風。今後とも、よろしく頼む」

恒例の着任報告を行う艦娘——島風に対して、青年——山本提督は真面目くさった顔で頷き……そして、プフツと噴き出した。

「ああっ、提督ひつどーい！ せっかく最初くらいはビシツとキメようと思ったのにい」

先程までの凛々しい態度が嘘のように、島風はぶくつと頬を膨らませる。

「いや、すまない。とは言え、「最初」って言うのは無理があるだろう？」

そう、この島風は、もともとこの佐世保鎮守府で試験運用されていた（ということになっている）艦娘であり、すでに何度も山本の指揮下で出撃していたのだから、彼の言うことももつともだった。

「提督、わかってないなあ。私が島風として正式に着任することになったんだから、少しはデリカシー見せてよ」

試験配備期間（まえ）の時は、最初がグダグダだったんだから……と、文句を言う島風。

「ん？ そう言えば確か、トイレで……」

「そんなことは思い出さなくていいの、バカア!!」

真っ赤になってポカポカと提督に殴りかかってくる島風に、提督は笑いながら謝罪する。

「ああ、ごめんごめん。わかった。もう言わないから」

双方とも落ち着きを取り戻したところで、提督は執務室内に備え付

けられた応接セットに島風を座らせ、自分も対面のソファに腰を下ろす。

「提督、お茶が入りました」

タイミングを図っていたのだろう。秘書艦の翔鶴が、トレーに紅茶のカップとクツキーを載せて運んできた。

「ああ、ありがとう、翔鶴。せっかくだから、君も同席してくれるかな」

「はい、提督が望まれるならば……」

1も2もなく頷き、提督のすぐ隣り……からおよそ人ひとりぶんの間隔を空けて、銀色の髪をなびかせながら淑やかに腰掛ける翔鶴の挙措に、島風見惚れる。

(ふわく、あれが正妻空母の魅力ってヤツかあ)

少し前の「彼女」なら、また違う目で見たかもしれないが、今は自らの目標として素直に感嘆と憧れの視線を向けることができた。

「——それで、いつもなら、新任の艦娘には、最初のこういう歓談の場を設けて、それとなく佐世保(ここ)での諸設備やら先任艦娘の紹介やらを行うんだが……」

「必要ありませんよね、それ」

島風の言う通り、彼女はすでにこの鎮守府のことは十分知りつくしている。無論、幹部将校クラスでない知らない秘密などはわからないが、秘書艦や事務艦など特別な役職に就かない限り一介の艦娘にそういう知識は不要だ。

「ああ。だから、逆にこの1カ月間、艦娘として暮らしてきたなかで感じた、問題点や疑問点について聞かせてほしいんだ」

提督にそう問われたものの、島風としては、これまでに不自由を感じた記憶はない。強いて言うなら外出制限があることだが、これはどこの鎮守府や泊地にも共通の決まりごとなので、この場で持ち出すべき事項でもないだろう。

「うーん、酒保の品揃えでちょっと欲しいものがあるくらいかなあ……あ、そうだ！ 提督、ひとつ聞きたいことがあるんですけど」

「ん？ 何だ？ 軍機に触れるようなことでなければ答えるのによ

ぶさかではないが」

「えつと……『ファーストボーン』って何ですか?」

先ほど自分に対して付けられた呼称について、島風は訊いてみた。

「ああ、そうか。艦娘自身はあまり意識しないのかもしれないな。

海軍関係者内でも、それほど頻繁に使う言葉でもないし」

「それを知っている艦娘のあいだでは、差別意識が出ないようあえて口にしない風潮もありますからね」

翔鶴が提督の言葉を補足する。

「え!?、もしかして、あまりよくない意味なの?」

「いやいや、そんなことはないぞ。そうだな、ひと口に『ファーストボーン』と言っても、実は2通りの意味がある。

島風、この深海動乱の初期、劣勢を強いられていた人類側のもとに初めて艦娘が現われたときの概要は知ってるか?」

逆に聞き返されて、島風は、まだ艦娘ではなかった頃に受けた講義で教わった内容を思い出す。

「えーつと、たしか……」1999年の夏、横須賀に旧日本海軍の軍艦の名前を名乗る6人の女性が現れた」んでしたっけ?」

「そうだ。駆逐艦・雪風、軽巡洋艦・北上、重巡洋艦・妙高、潜水艦・伊401、戦艦・長門、空母・鳳翔——その6隻の魂を受け継ぐ最初の艦娘。彼女達は、『第一次深海大戦』が始まる3日前に横須賀の海岸から現れ、人類に深海棲艦の出現に関する警告を発している。

——もつとも、当時の政府中核にまでその話が伝わったのは大戦開始の20時間前だったから、あまり大した備えはできなかつたらしいがな」

「それでも、陸海空の自衛隊の出動準備が整っていたおかげで、開戦時の日本の被害は随分減らせたと言われているのよ」

日本政府の愚かさを自嘲するような提督の言葉を、翔鶴がフオロースする。

「じゃあ、その6人の艦娘が『ファーストボーン』なんですか?」

「狭い意味ではそうだ。もつとも、彼女たちの場合は『オリジナルシックス』、あるいは『ナチュラルボーン』と呼ばれることのほうが

多いな。

で、狭義があれば当然、広義のファーストボーンもいるわけで、その場合は「同一艦種で最初に有意識艦になったことが確認された者」を意味する。島風タイプの艦娘は今のところお前だけだから、当然「ファーストボーン」でもあるわけだ」

提督の説明を聞いて納得顔になる島風。

「ふーん、そうなんだ。一番なのはうれしいけど、早く同型艦が生まれて欲しい気もするし……ちよつとフクザツ」

「こればかりは運の要素も絡むからな。そうそう、ファーストボーンは、同種の艦娘のなかでも、比較的早く戦闘技術に関して熟練する傾向にあるらしいから、期待してるぞ」

「う……ぶれっしやあが。でも、がんばる」

その後、いくつかのとりとめもない会話を交わした後、島風は執務室を出ていった。

にこやかな顔で、新米艦娘を見守っていた提督だが、彼女が退席した途端、表情が一変し、その目に苦悩と悲嘆の入り混じったような複雑な色合いが浮かんでいた。

「ファーストボーン、か」

島風にはあえて言わなかったが、以後の島風型駆逐艦娘は、彼女の構成霊素をサンプルとして「作られる」ことになる。

科学的な意味でのクローンとは厳密には異なるが、ある種のデッドコピーであることには違いはなく、だからこそオリジナルであるファーストボーンと比して、それ以後に生まれた艦娘は性能が僅かに劣化するのだ。

さらに……。

「なあ、翔鶴。いかに深海棲艦の侵攻が脅威だからといって、ここまですて俺達は戦わないといけなのか？」

「提督……」

背中を向け、絞り出すような声で疑問を投げかける山本大佐を、その秘書艦は痛ましげな視線で見つめる。

「——いや、すまない。愚にもつかない世迷い言を言った。忘れて

くれ」

「はい。ですが、ひとつだけ。たとえば、どのような経緯でこの世に生まれたのだとしても、私は提督と会えて、共に戦えることを喜びに思っています」

「……………そうか。ありがとう」

* * *

優秀な提督であり模範的軍人の鑑とも言える山本隼司大佐が、何故あのような愚痴とも嫌悪ともつかない言葉を漏らしたのか。

それは、有意識艦——艦娘の誕生過程にある。

読者諸氏は、あの島風が艦娘と「成った」経緯を覚えているだろうか。

艦娘との同調適性の高い少年に、とある「処置」を施すことで徐々に艦娘へと変えていく——それは、少なくとも日本では初めての試みではあった。

「処置」の内容を簡単に説明するなら、ある霊的なナノマシン（厳密には異なるが）を被験者に注入し、その身体に馴染ませた……と言えるだろうか。

もつとも、普通はそんなことをしても本人の霊体との拒絶反応が出て、しばらく体調を崩すだけに終わる。生きた人間の霊体というのは、それなりに強固なのだ。

かといって、その抵抗を押し崩すほどの量を注入すれば、本人の心身が持たず、死亡ないし廃人化するだろう。

これを解決するには、艦娘との同調適性の高い素体（もの）を選ぶ必要があるのだが、そういう人材は希少で、かつ発見された場合も大抵は提督として徴用されていることが多いのが悩ましいところだ。

しかし——ここまでの話で皆さんは疑問を抱かなかっただろうか？

「では、これまではどうやって艦娘を確保していたのか？」と。

有意識艦は、軍艦の形状をした船体（からだ）と、若い女性の姿をした船魂（こころ）の2つがセットになってひとつの艦娘を構成している。

このうち、船体の方は実際には各鎮守府や泊地の工廠で普通の船と

同様に作られるのだが、それを動かす船魂のほうは霊的存在なので、いわゆる「召喚」することで現世に呼び出すことになる。

しかし、そのままでは実体をもって現世に留まることができないため、それを定着させるための「器」が必要となるのだ。

——ここまで言えばおわかりだろう。

船魂の「器」には、人の死体が利用されているのだ。

それも、水難事故で亡くなった若い女性のもものが、艦娘との同調率が高いとされていた。

また、現在は適した水死体がそろそろ無くなってきたこともあり、志願者を仮死状態にしてから水に沈め、同様の処置を施すことも為されている。

ただ、いったん同調さえしてしまえば、人間であった頃の個人的な特徴はかき消され、容姿その他はその艦娘固有の特徴が表に出るようになる。

また、死体に雑霊が入りこんで動かしているゾンビと異なり、蘇生あるいは新生とでも言うべき過程を経ているため、いわゆる不死者（アンデッド）ではなく、艦娘はきちんと生きた存在でもある。

その証拠に、人間の男性との間に子を為した例も数件確認されているのだ。

しかしながら、戦線の拡大につれ、現在、船魂の「器」の不足が危惧される事態となったため、新たな「器」の確保方法として、島風のように生身の人間を利用する方策が考案されたというわけだ。

死者の尊厳を冒し、あるいは生者の人生を奪うことで、初めて世にできることができる艦娘。

そして、その艦娘の奮戦に支えられて、からくも生存圏を維持しているいまの人類。

生きることは汚れることとは言うものの、これほどの非常（非情？）手段に頼らなければならぬとは、世も未だ——などという思いを、山本のような倫理観あふれる青年は抱かずにはいられないのだった。

0) 基本設定

1990年頃までは、現実の地球とほぼ変わらず。

しかし、90年代初頭から、世界各地の海で、「謎の船影」が確認され始める。

そして、1999年夏、未確認遊泳物体による大侵攻が開始され、地球上の海路の90%以上と空路の70%近くが、未確認遊泳物体——「深海棲艦」と命名された勢力の手に落ちる。

空路も、基本的には空母タイプ深海棲艦の艦載機？によって押さえられているが、数が少ないため、目の届かないところにくらかは細々と生き残っていると言うほうが正解。ただし、それも海から遠い陸地の上の限られたもののみ。洋上は完全に深海棲艦の勢力下にある。

深海棲艦は陸上活動できないのか、内陸部に直接攻めてくることはほとんどなかったが、各国の航空戦力は前述の艦載機によって「第一次深海大戦」の際に、ほぼ壊滅させられている。さらに、内陸部でもカスピ海、死海、アラール海などの大型塩湖には、深海棲艦の出現が確認されている。

以上のような経緯から、陸路で移動可能なユーラシア大陸—アフリカ大陸、南北アメリカ大陸以外の土地の交流は、現状ほぼ途絶えている。また、アラスカ—ロシア、日本—樺太—ロシアは、かろうじて（艦娘の護衛艦隊をつけることで）流通経路が確保されている。

◆深海棲艦について

本文中でも触れているが、純粹に物理的な攻撃で撃破することが困難な存在。

実際、大侵攻時には、先進国御自慢の超長射程ミサイルや大出力のレーザー砲などは、驚くくらいに役に立たなかった。むしろ、至近距離まで接近して放たれた戦闘機のバルカン等の方が、多少なりとも傷をつけただけマシなほど。また、破れかぶれで全速力で体当たり特攻したとある駆逐艦は、それだけで軽巡洋艦サイズの深海棲艦に中破ダメージを与えた。

以上のことから、各国軍部の技術陣は「深海棲艦には、意思なき攻撃は無意味」と認識、有効な兵器の開発を試行錯誤した結果、さま

さまざまな事情から深海棲艦へのアンチユニットである有意識艦「艦娘」が生まれたと言われている。

※実は、この説は正確には間違い。各国がこの結論に達する前に、少なくとも日本には「最初の六人」が出現しているため。ただし、各国が艦娘を受け入れる素地となったことは確か。

◆本シリーズにおける（日本の）艦娘の扱い

・日本に於いて、書類などで正式には「有意識艦」と呼ばれる

・当初（2000年代前半）は、法律上、艦娘は他の艦船同様「物」扱いだった。ただし、多くの現場では人間と同じように扱われており、「国を守ってくれる勇敢なる乙女をモノ扱いすること」に対する批判も強かったため、2000年代後半には法整備が進み、日本国民に準じる権利を有するようになる（ただし、現役時は、その権利の一部は制限されている）。

・艦娘の「本体」ともいえる船魂は半霊的存在だが、建造時に召喚され、一度実体を得て以降は、轟沈する（＝「死ぬ」）まで実体化は解けない。また、実体化後は食欲、睡眠欲など通常の人間に近い生理を有する。

・現在、有意識艦を保有しているのは、日本を始め、アメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランス、ドイツの7カ国。なかでも、日本とアメリカ、イギリスが他の4国を質、量ともに圧している。

1) 『風強く波高し』シリーズの2003年以降の日本の軍制

・自衛隊は日本防衛軍に名称変更&組織改造されており、陸・海・空軍に分かれている。ただし、戦前と異なりシビリアンコントロールは効いている（制度上の軍のTOPである防衛大臣は総理大臣の下位に位置する）。

・戦後50年以上も（深海棲艦が出現したのは1999年）平和だった国柄故か、軍人に志願する人は未だ多くないため、志願者なら15歳（中卒）以上35歳以下なら、よほどのことがない限り（兵卒として）即採用される。

・士官学校は18歳（高卒）で入学、2年間で卒業となっている（卒

業段階で准尉、正式任官後、少尉になる)。ただし、有意識艦指揮者(艦娘の「提督」)の素質を認められたものはこの限りでなく、最短3ヵ月(普通は半年)で促成士官教育を叩き込まれることになる(例外的に士官学校入学後に資質が判明した場合は、通常のカリキュラムで学ぶことも可能)。また、「提督」は任官時に自動的に少佐となる。

・小学校卒業段階で中高教育に6年制の防衛軍付属幼年学校(全寮制で学費免除)を選ぶことも可能。幼年学校在籍者は、士官学校生同様、一種の予備役扱い(とは言え、現場投入された例は現状ほぼ皆無)で、18歳の卒業時に自動的に下士官(伍長)として任官できる。

15歳で入隊して3年後に伍長になるというのは、かなり難しいので、本気で軍人になる気があるなら幼年学校に入学した方がお得ではある(事情が許すなら、ではあるが)。また、優秀な成績(学年TOP 5程度)で卒業した者は、士官学校への推薦枠も得られるので、その意味でも職業軍人になる気があるなら、腹をくくって幼年学校に入る方がお得(しかし、そこまで優遇しても、幼年学校の入試倍率は1.2倍程度という……まあ、軍人の殉職率が自衛隊などとは段違いなので仕方ない部分もあるのだが)。

ちなみに、士官学校は東西2ヵ所、幼年学校は全国に8ヵ所存在する。

2) 艦娘の登場と変遷

・作中でも断片的に語られているが、1999年夏の「第一次深海大戦」の直前に、日本に6人の艦娘と名乗る女性たちが現れ、政府にコンタクトをとったのが、公的な記録に残る「初めての艦娘の登場」である。

・この「最初の六人(オリジナルシックス)」については、純粹に靈的な存在が現世に具現化したもので、半ば精霊(英霊?)じみた存在であり、零世代とも言われ、第一世代以降の艦娘とは一線を画する能力を持つ。

※フアーストボーン／オリジナルシックス

・駆逐艦 雪風

- ・ 軽巡洋艦 北上
- ・ 重巡洋艦 妙高
- ・ 潜水艦 伊401
- ・ 戦艦 長門
- ・ 空母 鳳翔

・「最初の六人」の力は強大ではあったが、いかんせんこの6人だけでは広大な海をカバーしきれない。そのため、言葉は悪いが彼女たちの「量産型」として生み出されたのが、第一世代型の艦娘達である。特殊な「器」を用意し、艦娘の船魂を召喚&「器」に憑依定着させることで、より多くの艦娘を確保することに成功した。その技術は世界各国に拡散され、ようやく深海棲艦に対する反撃ののろしが世界中で上がることになる。ただし、その「器」の材料は女性の水死（以下、検閲削除）。

・ 人道的な観点と、純粋に「器」の「素材」の数の確保が難しいことから、第二世代型艦娘の開発がなされた。これは、艦娘と相性が良いと判断された若い女性を薬で仮死状態にして、フルオロカーボン液の一種で満たされた水槽に沈めたうえで、艦娘の船魂を召喚&憑依させることで、艦娘を生み出す仕組み。ただし、これには被験者の人格や記憶の大半（7割〜9割以上）が失われるという欠点（つまりほぼ別人となってしまう）があったため、志願する側には多大な覚悟が要求された。

・ 第二世代の欠点を克服すべく考案されたのが第三世代型の艦娘。最先端科学と密かに継承されてきた陰陽術、双方の知識と技術を結集して作られた「霊的な疑似ナノマシン」を対象に注入することで、基本機装を装備して水上を自力航行し、深海棲艦と戦う能力を付加する。第一・第二世代で行われた船魂の召喚は、ナノマシン注入後に、被験者が自ら（無意識に）行うこととなる。船魂と本人の霊魂が併存しているため、元の人格・記憶も比較的残りやすいが、それでも幾らかは艦娘としてのパーソナリティに浸食される。また、「艦娘になれる」資質そのものは第二世代と大差なく希少で、十代から二十代の日本人女性100人につき、ひとりかふたり程度。

・第一世代から第二世代の初期には、船魂（こころ）が憑依した人型とは別に、船魂が乗って操り、深海棲艦と戦火を交えるための船体（からだ）（≡実物大の軍艦）が用意され、心と体の2組で一体の艦娘を構成していた。

・しかし、船体が損傷した際の修理回復には莫大な時間と物資が必要とされる。反面、船魂（艦娘）が直接攻撃を叩き込めば、深海棲艦を沈めることも十分可能だという研究結果が発表され、試験的に船魂のみで構成された艦隊によって実施された作戦が良好な結果を得たため、以降はよほど特別な例を除いて大きな船体は作られなくなる。

「お菓子と言えば、確かここ、『間宮』もあるんだよね」

自室のカラーボックスにもらったお菓子をしまったところで、ふと、そんなことを思い出した。

第二次大戦時には、軍艦で勤務する軍人達に大人気を誇った給糧艦・間宮。『艦これ』においても、給糧艦娘として実装され——と言っても、いわゆるNPC的な扱いだけど——彼女が生み出す甘味の数々は、往時と同様に艦娘たちを魅了する……らしい。

実際のゲームでは、一種の課金アイテム的な扱いで、使用すると彼女の造ったアイスクリームを振る舞ってくれて、疲労が回復するんだよな。

一方、コミカライズやアニメ、あるいは二次創作なんかでは、お店を構えていて、非番時の艦娘たちの憩いの場になってる……って描写が多い。

さつき初春さんたちに基地内を案内された時も、赤レンガの本部の横に、いきなり『峠の茶屋』っぽい建物があつて、何かと思ったら「ここが、かの有名な間宮じゃ」って教えてもらったんだ。

「ちよつと興味あるかな」

アニメでも吹雪とか北上とかが、和風パフェっぽいモノを食べてたし……。

「今は——16時過ぎか。晩ごはんまではまだ時間があるし、行つてみようつと」

そんなこんなで甘味処「間宮」に足を運んでみた。

「いらつしやいませー！」

中に入ると、ゲームでお馴染み（って言うほど、使ったことは実はないけど）藤色のブラウスと青いロングスカートの上に割烹着を着た妙齢の女性——間宮さんが、優しい笑顔で出迎えてくれる。

「あら、貴女は確か今日着任した……」

「はい、陽炎型駆逐艦11番艦・浦風です。未熟者ですが、以後、よろしくお願い致します！」

うーん、たった半日で、この自己紹介と敬礼にも慣れて来た感じがするなあ。

「はい、こちらこそよろしく。そうだ！ 浦風さん、よろしかったら着任祝いに何かご馳走しましょうか？」

「えっ!? それは、正直すごく嬉しいですけど……いいんですか？」

「ええ。新しくこの鎮守府に来た艦娘の皆さんには、同じようにさせていただけますから」

せっかくなので、そのお言葉に甘えることにする。

待つこと3分足らずで、間宮さんがお盆に載せて運んできてくれたのは……。

「はい、間宮特製アイスクリームを使用した、クリームみつまめです」

「わあ、美味しそう♪」

公式で艦娘たちの元氣キラキョウの素とされているアイスを実際に口にできるとあって、流石に気分が高揚します（by一航戦の青い方）。

アニメで大井と北上が食べさせっこしてたヤツほど大きくないけど、あと2時間もすれば夕飯だろうから、これくらいでちょうどいいかな。

「で、では早速、いただきます」

長めのスプーンで、まずはアイスの部分からひと匙すくって、口に入れる。

「!! ほわあ〜」

——ヤバい。コンビニの百円アイスは元より、アイス専門店のちよつとお高めのアイスと比べても、こつちの方がメツチャ美味しい!!

顔がだらしなく笑み崩れてるのが自分でもわかる。

そもそも「俺」は甘いものは嫌いじゃないけど格別好きってほどでもない、あれば食べる程度の嗜好だったんだけど、今の「私」は身体が艦娘になったせいか（あるいは単に女の子の味覚だからか）、この間宮アイスを舌に載せただけで「至福」という言葉の意味を頭リクツじゃなく心ハートで理解しちゃってる。

(そりや、こんなの食べたなら、キラキラもしますよ、猿●さん！)
意味不明な独白を心の中で垂れ流しつつ、夢中になってスプーンを進める。

アイスだけじゃなくて、その周囲に盛り付けられたワラビ餅や白玉、寒天、フルーツに至るまで美味し過ぎて手が止まらない。

そして、さらに黒蜜ベースのタレの底に1センチ角ぐらいに切られた小豆色の塊が沈んでいる。

「！…これは……羊羹？」

「はい♪ アイスと並ぶウチの自慢の逸品メニューですね」

すでに様々な「甘さ」を味わってきたばかりなのに、その絶妙なバランスの甘さととろみと舌触りのハーモニーが、新たな感動を舌に巻き起こす！（自分でも言ってる意味がよくわかんなくなってきた）

間宮と言えば羊羹、羊羹と言えば間宮、そんな超有名絶品和菓子をこんなトコロにまで使っているとは、畏るべし甘味処「間宮」！

小さめのお茶碗くらいの器に盛られたクリームつまめを、またたく間に完食した私は、早くも暇さえあればこの店に通う気満々になっていた。

「ご馳走様、とっても美味しかったです。ありがとうございます」
奢ってくれた義理とかそんなの関係なしに、心からの感動と感謝の意を込めて、間宮さんにお礼を言う。

「はい、お粗末様です。でも、今来てくださってちようど良かったです。あと30分遅いと、お店閉めてるところでしたから」

あれ？ 「間宮」ってそんな早くに閉まるの？

「はい、17時から艦娘用食堂の方に移動して、晩御飯の用意をしないといけませんから」

言われてみれば、確かに当たり前の話で、給糧艦としては、おやつ・デザート以上に、三食の食事に力を入れるのが本道だよね。

「もしかして「間宮」の営業時間って、すごく短いですか？」

「そうですね。特にイレギュラーなことがなければ、午前中は9時半から11時、午後は14時から16時半までで、基本的にお夕飯後には営業していませんね」

「伊良湖ちゃんがいると、それ以外の時間も任せられるんですけど……」と、間宮さんはちよつと残念そうだ。

なんでも日本国内に12カ所ある鎮守府（警備府や基地・泊地含む）には、間宮さんか伊良湖さんのどちらかが大本営から派遣されていて、両方がいるのは横須賀と舞鶴だけらしい。

ちなみに、朝昼晩の食事に関しては艦娘用食堂と隣接する厨房で作っており、司厨長格の間宮さん以外にも軍属扱いの調理師2名、さらに艦娘からの有志数名が手伝ってくれるんだとか。

そりゃそうか。この呉鎮守府に所属する艦娘だけでも100人は下らないって話だし、それを独りで用意するなんて、どんだけブラツク勤務なんだって話だし。

（手伝ってるのって鳳翔さんを筆頭に、瑞鳳とか龍鳳とかの良妻軽母組なんだろうーな）

一応「駄目提督製造機三号」枠の「浦風」としては、調理スキルを上げるためにも、もしかしてソレに参加しておいた方がいいんだろうか？

（「俺」は、独り暮らしの男子学生としては多少は自炊もやってた方だと思うけど、作れるのは雑な男飯レベルだし）

野菜炒めとかカレーとかの、「適当に切った具を炒めるor煮る」で作れる学校の家庭科レベルものオンリーで、手の込んだ料理は未体験だ。

そのレベルでもいいのか、と間宮さんに聞いてみたら、それで十分なので手が空いてる時に下拵えなど手伝って欲しいって言われちゃった。よっぽど人手不足なのかな。

「お給料なんかは出せませんが、その代わりに簡単なレシピとかは教えてさしあげられると思いますよ」とのことなので、鎮守府での暮らしに慣れたら手伝うことを約束して、私は「間宮」をあとにしたのだった。

間宮さんのところから自室に戻った私は、他にやれることもないの
で、仕方なく本棚代りにカラーボックスに並べた本を取り、ライ
ンナップを改めて確認してみた。

「ライトノベルは、氷室冴子、今野緒雪、前田珠子、響野夏菜に樹川
さとみ、若木未生、流星香……コバルト系がほとんどか」

ブックカバーの概要を見る限り、一部を除いて、厨二ちつくという
か異世界／現代ファンタジーっぽい設定の作品が多い気がする。

もしかしたら、艦娘になったのも「自らが戦闘能力ひにちじょうのちからを手に入れら
れるから」というのが理由だったりするのだろうか。

（とは言っても、実際の戦場は小説おはなしみたたくカッコイイものじゃない
気がするんだけどなあ）

などと考えてしまう私は、 magari なりにも二十歳を越えて厨二病そのてのあこがれ
を卒業してるからかもしれない。浦風の元となった戸浦美波嬢が今
の外見通り14〜16歳ぐらいだったのなら、まさに該当年齢だし、
仕方ないのかも。

続いてコミックの方にも目を向けてみる。

『『ここはグリーンウッド』『小山荘の嫌われ者』『エイリアン通り』
『前略・ミルクハウス』『めぞん一刻』『ラブひな』『藍より青し』……
こっちは半分くらいが白泉社みたい』

しかも、ラノベの時も思ったけど、私おれでもタイトルくらいは知って
る有名作が多いけど、その代わりラインナップが結構古い。

「あー。でも、この世界は1999年に深海事変が起きたから……」
1999年末以降は戦時体制になったんだろうし、漫画やラノベ、
あるいはアニメといったサブカル系娯楽は真っ先に煽りくらうだろ
うからなあ。

もつとも、今から10年ほど前の「大反攻」と呼ばれる国際的な大
作戦の結果、深海棲艦の勢力圏は大きく縮小して、各国ともようやく
戦時体制からは脱却できたらしい。

たぶん、その後しばらくして日本においてもサブカルコンテンツが

再び作られるようにはなつたんだろうけど、「三浦湊」が居た世界とはそれでも5年以上の断絶があるわけだ。未だに20世紀の作品の復刻版が中心なのかもしれない。

コミックスの中をパラパラ斜め読みしてみると、こちらは寮生活や下宿生活するものが殆どだった。

——たぶん、ミドルティーンの女の子にとっては、艦娘になって寮に入るという状況は、おそらく憧れと恐れが半々に同居する未知なる世界だったに違いない。

不意に、その少女の想いや願いの一切合切を自分が奪い取ってしまったことを自覚して、たとえようのない不安と悲嘆と嫌悪の念が胸の中に湧き上がってきた。

「うあ……がはつ……ぐううつつつ！」

床の上に崩れ落ち、畳に爪をたてながら、吐き気にも似た熱い塊りのような情念を必死に堪える。

「……………はあつ、はあつ、はあ、はあ……………」

何度も深呼吸を繰り返して、何とか落ち着くことができた。

「落ち着け、私。なんにも美波が消滅したと決まったわけじゃない」

なんとか身体を起こし、部屋の3分の1程度の面積を占める2段ベッドの下の方に背中を預けて寄り掛かった。

「物語とかだと、こういう他人に憑依するケースだと、いくつか想定されるパターンがあったよな」

おおまかに分けると「元の意識（魂？）が身体に残っている場合」と「元の意識がはじき出されてしまっている場合」だ。

前者はさらに「元の意識は身体の奥底で眠っているよ」と「目覚めているけど身体の主導権がないだけだよ」に大別される。前者だと俺個人のプライバシー的には助かる反面、もし元の意識が目覚めると、俺が代理していた期間の記憶がない、プチ浦島状態になってしまうというデメリットがあるんだよな。

逆に「美波の意識も起きてる」ケースだと引き継ぎする際の説明とかは楽だ。それと、コッチのケースなら何とか互いの意思疎通ができるようになる俺的にもさらに気が楽になる。

後者の、すでに元の（美波の）魂がこの身体に無い場合——これは様々なケースが考えられる。

最悪は、もうすでに（美波の）魂がこの世にない、冥界なり霊界なりに逝ってしまってる場合。このパターンだと、さすがにネクロマンサーよろしく死者の霊魂の召喚とかはできないだろう。死神とか見つけて交渉したら、ワンチャン？

はじき出されたまま、その辺ないしこの身体の周囲をぶかぶか漂っている場合。これは……どうだろう。

「——いや、ないな」

大淀さんによると艦娘は「ある種の霊的兵器」らしい。妖精さんが見えるのや、深海棲艦に攻撃が通じるのも、言うならば霊能者の霊視やお祓いと同様の原理なのとか。

それなら肉体から抜け出して周囲を漂っている本人の霊なんて、簡単に見つけられるだろう。たとえ私おれじゃなくても、艦娘の誰かが発見してるに違いない。

「そして残る可能性はひとつ」

単に三浦湊が戸浦美波うらかぜに憑依しただけじゃなくて、某アニメの如く「時空を超えてふたりの魂が入れ替わった」ってケースも考えられるわけだ。

「もしそうなら、多少なりとも気は楽なんだけどね」

三浦湊という男は、リッチでもイケメンでもないけど、一応二十歳になったばかりの大学生で三回生になるまで単位は落としてないし、身体も健康そのものだった。両親健在で家庭的な厄ネタも特にない。

性別とルックスが損なわれたのは申し訳ないとは思いますが、そもそも俺の責任じゃないし、「とりあえず戦争とか大きな危険のない平和な暮らし」とトレードだと思ってもらうしかないな。

いや、別に元に戻るのをあきらめたワケじゃないよ？ ただ、身体の奥押し込めでも、浮遊霊状態でも、本物の美波うらかぜさんに不自由な思いをさせるわけじゃない？ だったら、いつそ元の俺の身体で「活き活きキャンパスライフ（死語）」を自由に満喫してもらってる方が、まだマシだろうって話。

「——とは言え、あまりムチャしてその後始末を押し付けられても困るけど」

たとえば、ふたまたみつまたかけて全員はらませたとか、手を出した女がヤクザの愛人だとか、あるいは中身が女性だからBLに走って、帰ったら男の恋人ができてるとか。

湊のルックス的にはないと思うけど……美波嬢の良識に期待しよう、うん。

——コン、コン、コン！

意図的におバカなことを考えて滅入った気持ちを回復させてみたところで、部屋のドアがノックされた。

「うつらかぜっ！ いる？ いるよね？」

この元気な声は、白露かな。

「いますよ。何か御用ですか？」

ドアを開けて外に出ると、そこには白露の他にも初春や睦月、磯波、朝潮、雷といった同じ提督配下の駆逐艦娘が全員勢ぞろいしていた。

「なに、そろそろ夕飯じゃからお主もどうかと誘いに来たのじゃ」

「今日は浦風ちゃんが着任した記念でちよつとしたご馳走がでるにやしい！」

なるほどプチ歓迎会ってワケね。

「それでしたら、特に急ぎの用もありませんし、ご一緒させてもらいます」

あれ以上ひとりで考えてても息苦しくなるだけだろうし、ね。

* * *

艦娘用食堂は、ごくありふれた長机と椅子が設置された、おおよそ100人くらいが同時に座れる程度の広さと席数で、その一角がすでに井上提督配下の艦娘総勢13名（浦風含む）の席として確保されているみたいだった。

「えー、それでは、本日新たな加わった新たな仲間・浦風の今後の健闘を願って……乾杯！」

呑んべっっぽい足柄さんの音頭で乾杯（と言っても駆逐勢はジュースだけ）して、私の一歓迎会（というかお食事会？）が開始される。

一応「主賓」という理由からか、私の周りには色んな艦娘だちが入れ替わり立ち代りやって来て話しかけてくるんだけど——同格の駆逐艦娘はともかく、巡洋艦とかに席まで来られても、コレかえってパワハラで迷惑じゃね？

「だいじょうぶ、多摩は気にしないにや」

私が気にするんですけどオ!?

夕食後は、そのまま初春たち駆逐艦娘の仲間たちと談話室へ向かい、そこに置いてあるゲーム機（スーフ●ミと初代プ●ステだった）で遊んだり、テレビを観ながら雑談したりして過ごした。

「中味」は二十歳過ぎの成人男子の精神こころを持つ身としては、中学生くらいの女の子たちに混ざっていると「浮く」んじゃないかと心配してただけど、思ったより彼女たちの精神年齢が高く、それほど場違いな思いはせずに済んだのは助かったかも。

——よく考えてみれば、艦娘化した際に（見かけが）若返った子も多いだろうし、そうでなくとも常日頃から命の危険がある「戦場」に立つてるんだから、そりゃあ大人びもするよなあ。

むしろ、平和な世界で親のすねかじつてのんきに大学生してた「俺」の方が、よっぽど「大人になりきれないお子様」なのかもしれない。

その後、談話室を出たところで大淀さんに声をかけられ、「お風呂はどうしますか？」と気遣うような探るような視線で問われたんだけど、今日は遠慮しておくことにした。

「艦娘といえど女の子、身だしなみは清潔に！」というのはまことにごもつともなんだけど、さすがに今日はもういっぱいいっぱいだ。

健全な（元）男子として女体の神秘に興味がないと言ったら嘘になるが、それ以上に精神的疲労つかした今夜は、そろそろ寝てしまいたいというのが本音だった。

自室に戻り、トレーナータイプの方の寝間着に着替える。電灯を消し、二段ベッドの下段の方に身体を横たえ、布団に潜り込む。

目を閉じる寸前に思い出して、枕元に置いた目覚まし時計のアラームを6時5分前に合わせる。

（総員起こしが、旧海軍みたく5時じゃなくてよかった。5時起きはさすがにキツイ）

そんなどうでもいいようなコトを考えつつ、目を閉じる。

（これで……………目が覚めたら……………現実に、戻ってたら……………う

れしいん、だけど……………)

その希望はおそらくかなわないであろうことを予感しつつ、私の意識は眠りの世界に滑り落ちて行つた。

* * *

『わたしは、いわゆる母子家庭で育つた』

？

『前世紀と違って、深海事変が起きてからのこの国では、片親だけというのもそれほど珍しい話ではない。

わたしの場合、小学五年生の秋に父が出張先の海外からの帰路で深海棲艦の襲撃を受けて亡くなった』

この声は……………もしかして!?

『いや、本来なら襲撃を受けた大型船が沈んでも、父も救命ボートで避難できたはずなのだ。現に、その救命ボートに乗った乗客の大半が、現場に急行した艦娘の救助を受けて、無事日本に帰ってきている。

でも……………お父さんは救命ボートに乗れなかった。

船には本来、乗客分の救命ボートが備えられていたはずなのに、客船に密航していた外国人たちの一団が勝手にそのうちの一艘に乗り込み、自分達だけで先に逃げてしまったために、救命ボートのキャパシティが足りなくなってしまったのだ。

無事に帰れた人から聞いた話だけれど、お父さんを始め20数人の大人の男の人達は、自主的に子供と女性にボートを譲り、沈みゆく客船に残つたらしい』

“本物”の浦風……………戸浦美波さんの回想か！

『それを聞いた時、とても優しいお父さんらしいと思つたけど……………でも、そんな立派な行動などしなくていいから、戻ってきて欲しかったというのが正直な気持ちだ』

……………。

『海難事故で家族が亡くなった場合の補償制度が今の日本では発達しているおかげで、経済的に即座に困窮するということはなかったけれど、働きに出たお母さんは苦勞していたし、幼いながらもわたしもできるだけ迷惑をかけないよう、“いい子”であろうと努めた』

.....。

『そして、わたしは“犯罪者”はもちろん“ルールを守らない人”が大嫌いになった』

それは……当然だろうな。

『元からの性格もあつたのだろうけど、そういった経緯で、中学を卒業する頃には、気が付けばわたしは、「真面目で口うるさくおもしろみのない堅物女」として、周囲のクラスメイトたちから敬遠され、親しい友達もほとんどいない、何ともさびしい日々を送るようになっていた』

.....。

『高校に進学してからも、それは変わらず、このまま無味乾燥な毎日を繰り返すことになるのか——と思っていた矢先に、わたしに転機が訪れた。』

学校で、ささいない原因で同じ学年の男子と口論になり、突き飛ばされて転んで頭を打ったわたしは、念のために病院で精密検査を受けることになった。

結果、頭部に異常は無し。それはよかったのだが、もうひとつ異常というか“特殊な素質”が判明した。

わたしには艦娘になれる適性があるらしい』

——ピピピピッ、ピピピピッ！

「あー！」

アラームの音で目が覚める。デジタル時計の示す時刻は5:55。

つい先ほどまで見ていた“夢”の記憶は、意外なほどしっかり私の脳裏に残っている。

(たぶん、アレは普通の夢じゃないんだろうなあ)

じっくり思い返して考察したいところだが、生憎、「新米艦娘」という立場で、朝からのんびりしているわけにもいかない。

有志による朝の自主訓練には、もう間に合わない(5時かららしい)だろうけど、とりあえず私は掛け布団を跳ね上げ、ベッドから降りたのだった。

「う…………くつ…………ダメだ……………」

私はかつてないピンチに陥っていた。

「あ、あとちよつとなのに…………こなくそツ！」

艦娘・浦風の身体になってしまった以上、コレは避けられない障害だと、頭では理解していたつもりだが——想像以上に、コレは厄介だった。

——プチッ

「やったっ！ ようやく留まったッ！」

背中に回した震える指先で、なんとか留めることができたブラジャーのホックの感触に、私はホッと安堵の息をついたのだった。

* * *

6時の総員起こしの放送が入る数分前に目が覚めた私だったが、パジャマの上下を脱いだところでピタリと手が停まる。

「これ、このまま浦風の制服着るのは…………まずいですよね？」

なにせ、昨晩は色々自分で理由をつけて風呂に入らなかつたから、少々汗臭くもなっているだろうし、下着も替えてないんだよなあ。

女子の中にもいわゆる「汚ギャル」みたく清潔感と無縁の輩もいるのだろうが、自分が積極的にそうなりたいとは思わないし、「借り物」この浦風の身体（と立場）を、そのように貶めるのはいささか気が引ける。

そうになると、着替えるしかないわけだ。

この際、裸を見ってしまうのは仕方ない。ずっと風呂に入らないわけにはいかないし、入るにしても目をつぶったままというのも現実的じゃないしな。

（「下」の方は、トイレでちらっとだけ見ちまったし）

で、そういう羞恥心の問題はひとまずパスするとして、では実際に下着ブラ&パンツを着替えるとなると…………。

私は、意を決してカラーボックス内に畳んでしまっておいた下着類を取り出し、一番無難そうな上下セットかつあまり派手ではないデザ

インのモノを選ぶと、思い切りよく今着ているブラとショーツを脱ぎ捨てた。

そして、下の方は履くだけなんで問題なかったんだが、上の着け方がよくわからず、はからずしも冒頭のような悪戦苦闘をするハメになったってワケだ。

いつそ、ノーブラで済ませるという考えも浮かばないではなかったんだけど……。

(いや、イカンでしょ。暁型や朝潮型、あとはギリギリ睦月型くらいならともかく)

前にも言ったように陽炎型は(雪風とか天津風、時津風など)ごく一部を除いて中学生くらいの体格をしている。その中でも恵体組に入る浦風が「履いてない」ならぬ「着けてない」と、偏見かもしれないがどうにも「はしたない」と見られるような気がするのだ。

そういう感情面を抜きにしても、四苦八苦の末にこうやってブラジャーを着けてみたところ、重心というかオツパイの余計な動きが抑制されて、動きやすくなった気もするので、やはりそれなりに意味はあるんだろう。

ともあれ、どうにかこうにかショーツを履いてブラも着けたところで、ようやく艦娘としての制服を着ることができるわけだ。

総員起こしの寮内放送を聞き流しつつ、私は壁の取っ手に掛けたハンガーから制服を外した。

昨晚、寝る前に脱いだので、一応の構造は理解している。多分磯風や浜風のも同じだろうけど、浦風の上着は前開きになっていて、胸元の三角の布(胸当て?)は片方に縫い付けられ、もう片方の辺をスナツプで留める仕組みのようだ。

上着に袖を通し、前の2カ所のボタンと胸当てのスナップを留めてから、スカートとかは後回しにして、とりあえずダークグレイのプリーツスカートを履くことにした。

膝上15センチくらいありそうなミニスカなので、正直足がスーッとして心許ないが、体育のシヨールパンならこのくらい足は出ているはずと自分に言い聞かせて、平静を装う。

カラボの上に畳んでおいておいた黄色いスカーフを手に取り、入り口近くの壁に備えつけられた50センチ四方くらいの鏡を覗き込みながら、不慣れな手で襟元に結ぶ。

とりあえず一応見られる服装になったと思うので、洗面器にタオルその他を入れると意を決して部屋を出て、共用洗面所の方へと向かった。

「あー！ おっはよー！、浦風！」

「おはようございます、白露」

洗面所近くで、朝から元気な白露と出会って挨拶を交わす。

「昨日はよく眠れた？」

「ええ、身体はそうでもないのですが、気疲れしてたようでごつすと」

そんな雑談を交えつつ、バシバシと顔を洗う。

目覚ましも兼ね冷たい水で目の辺りをシャキッとさせてから、洗顔フォームを手にとってペタペタ顔に塗ってから、今度は蛇口をぬるま湯にして再度顔を洗った。

最後に軽く口を水ですすいだから、タオルで丁寧に顔の水分を拭きとる。

「おお、浦風も無事に起きられたようじゃな。結構けっこう」

殆ど無意識に一連の作業を終えたところで、微妙な違和感を感じたが、それをハッキリ自覚する前に、特徴的な「のじゃ」言葉をかけられ、振り向く。

無論、そこに立っていたのは初春だ。

「さすがにあの放送が聞こえたら目が覚めるでしょう。いえ、私は目覚まし時計のおかげでその前に起きてはいましたけど」

「ふむふむ。浦風は真面目じゃのう。そう思うのが普通じゃが、世の中には、あの大音量の中でも平気で惰眠を貪る輩もおるようじゃぞ」

ニヤリと笑ってみせる初春。傍らの白露も苦笑しているから、事実なのだろう。

（白露がここにいる以上、最有力候補は睦月かなあ。磯波、朝潮あた

りはちやんとしてそうだし。雷も、まあ、あんまりお寝坊さんってイメージはないかな)

昨日会った駆逐艦娘たちの顔を思い浮かべつつ、そんな予想を立てる。

とは言え、朝っぱらから洗面所を3人で占拠しているわけにもいかないの、私はふたりに会釈をして自室に戻った。

「(飯前に髪型の方も整えておこうかな)」

鏡の前に立ち、軽くブラッシングしてから私は、長めに伸ばした左右両サイドの髪を、いつものように御団子シニヨンにまとめ……ようとして、ふと我に返った。

(「いつものように」……だって? いや、今までいつペンもそんなコトしたはずないだろ!?)

「三浦湊」は、大多数の日本人男性と同様、襟にかかるか否かからの短めの髪型をしている。幼少期も含め、肩より長く髪を伸ばしたことなんて、一回もなかったはずだ。

それなのに、今も半ば無意識に手が動くのに任せていると、髪の毛を細い三つ編みにしてから耳の上でぐるりと巻き上げ、「ハレ●チクルーザー」の俗称の元となったフレンチクルーラーのような髪型に勝手に仕立てあげているのだ。

自分の身体が勝手に動き、記憶こころの方も一瞬とはいえ事実を誤認するという異常事態に、ブルツと背筋が冷えた。

叫びだしたくなる気持ちを意思の力でねじ伏せて、懸命に思考をめぐらせる。

(落ち着け! 少なくとも朝起きた時は、とくにおかしなトコロはなかったはずだ)

そうでなければ、ブラジャーひとつ着けるのに、あれだけ苦勞するはずがない。

だが、その後の浦風の制服を着る時はどうだった?

女装経験なんて皆無なはずなのに、羞恥も躊躇もほとんど感じることはなく、着用する手際も、初めて着る服と思えないほど手際がよかったのではなかったろうか。

洗面所でも、よく考えると、単に顔を洗うだけでなく洗顔フォームとか当たり前のように使ってたし……。

これが、艦娘という存在に馴染む——「浸食率が上がる」ということなのか。

それとも、この身体の奥底に「戸浦美波」の意識が眠っているせい

か。
あるいは、「彼女」の記憶の残滓なごりが、身体を無意識に美波らしく動かしているのか。

個人的にはできれば3番目であって欲しいところだけど……考え

ても、現状では判断がつかない。
ぐだぐだ考えていても暗くなるだけだ——と強引に思考を断ち切った私は、白い長手袋をはめ、水兵帽をかぶると、食堂へと向かったのだった。

食堂に着いたのはちようど六時半、マルロクサンマルかなり早い時間だと思うのだが、と大半の席が埋まっている状態だった。

一瞬どこに座るべき迷ったものの、多少なりとも会話してそれなりに面識のできた（ついでに言えば「仕事」上の同僚ともなる）初春たち駆逐艦娘のグループに合流することにした。

「すみません、ご一緒していいですか？」

「もつちろんオツケーだよおー、浦風ちゃん、こつちにどうぞ♪」

一応礼儀として聞いてみたところ、睦月がブンブン手を振りながら自分の隣りの空いてる席を指し示してくれる。

（にやしいにやしい言ってるお気楽娘かと思ってたけど、意外に面倒見いいよな、この子）

どちらかというゲームや二次創作から受ける悪戯っ子な印象より、アニメ版の優等生に近い気がする。

「うむ。ミーティングというワケでもないが、わらわ達駆逐艦は朝餉はともに摂って、簡単な擦り合わせをするのが慣例となっておる。強制ではないが、心得ておくがよいぞ」

そして、睦月の対面に座っている初春は、それ以上に駆逐艦娘のまとめ役っぽい。元々の性格に加えて、最先任であることも影響しているのかもしれない。

「ええ、わかりました。何か急ぎの用事などがない限り、参加させてもらいます」

実際、ここで伝達事項とかがわかるのはメリット以外のなにものでもないしね。

朝は皆が同じメニューのようで、すでに各椅子の前のテーブル上にはひとり分の朝食が並べてある。

ちなみにメニューは、ご飯と味噌汁は当然として、イワシらしきメザシを焼いたもの3尾、玉子焼き二切れと大根おろし、ドレッシングのかかったトマトのスライス丸1個分が各人の皿に盛られている。

それ以外にも、キャベツらしき野菜の漬物の盛られた井と梅干しの

入った壺が4人にひとつ置かれている。

「そうそう、ご飯とお味噌汁はお代わり自由よ。浦風もお代わりしたければ私がよそってあげるわ!」

炊飯ジャーがすぐ横に置いてあるテーブルの端に座っている雷が、そう教えてくれた。

でも、外見的には年下とは言え、この鎮守府では先輩なのに、そんなことさせていいのかなあ。

「いいのいいの、じゃんじゃん私に頼って♪」

どうやら、こちらは前知識通り、かなりの世話好きらしい。「○○提督製造機」の面目躍如ってトコか。

「では、僭越ながら今日は私が……いただきます!」

朝潮の音頭(?)で、私も含めた駆逐艦娘7人が掌を合わせ「いただきます」の声が唱和する。

「あ、美味しい……」

一口ご飯と味噌汁を口にただけで、下手な旅館や定食屋の朝定なんかよりはるかに美味なことを実感して、思わず素の言葉がこぼれる。

昨夜のプチ歓迎会で出されたハンバーグやフライドチキン、ビーフシチューなどの洋食系も三ツ星人気店もかくやという出来栄えだったが、アレは料理自体への嗜好も込みでの評価だ。

今朝のように何気ないシンプルな朝餉で、これだけ舌をうならせる出来映えということは、やはり「間宮は和食にて最強」といったところなんだろう。

この浦風の(外見的にはミドルティーン女子の)身体なので、それほど量は食べられないだろうと思ってたんだけど(TS物のお約束だしね)、ペロリと平らげて、拳句(ご飯をお代わりしてしまった)。

もつとも、私より小柄な雷や睦月も普通にお代わりしてたから、艦娘全体が普通の人間より健啖家なんだろう。戦艦の扶桑さんや空母の祥鳳さんも、あのおやかな見かけでしっかり三杯は食べてたし。

(艦娘である間は鎮守府の食堂で三食無料になるというシステムは、このことも踏まえてるんだろうなあ)

艦娘は（命の危険もあることから）そこそこ高給取りな仕事らしいけど、食費が通常の3倍かかるようでは「そこそこ」程度のお金では足りなくなるだろうし。

そんなとりとめもないことを考えながら、この後に待っているだろう「出撃」^{おしごと}に備えて、お茶碗の中身を口に運ぶ私なのでした、まる。

* * *

奉公人必携の「早飯早糞早算用」から転じて「早飯早糞早走り」が武士ひいては軍人にとっては必須の技能（？）と言われるが、広義の軍人の範疇に入るとは言え、さすがに「花も恥じらう妙齡の女の子」である艦娘に、食事とトイレを急かす慣習はないらしく、食後にはある程度、休憩^{しよくやすみ}の時間がとられているみたいだ。

——考えてみれば、艦娘って「そう簡単には作れない貴重な国防兵器」だもんね。日々命の危険に直面するからこそ、某勇者部の面々なんかと同様、日常では多少なりとも心安らかに暮らしてほしい……という上の意図もあるのかもしれない。

そんなことを考えつつ、せつかなのでその思惑に甘えるべく、私も初春たちといっしょに談話室に足を運び、しばし雑談で時間を潰すことにした。

「こちら、白露！ 食べてすぐ寝ると牛になるわよ！」

「あゝ、だいじよぶだいじよぶ、そんなの迷信だつて。ふわあゝ」

談話室の一角に設けられた3畳分ほどの畳スペースにゴロンと寝転がっている白露に、雷が苦言を呈している。

ああやつっていると、外見年齢の差もあって「しっかり者の妹に叱られるダメ姉」にしか見えないなあ。

「いや、あの……ああ見えて、白露ちゃん、戦場では頼りになりますから」

白露に生暖かい視線を向けている私の意図を察したのか、磯波がフォローを入れて来た。

確かに白露自体は、あの火力特化の狂犬ほいぬと生存性に富んだ忠犬時雨の姉だけあって、相応にバランスのとれた良性能艦のはず。現在練度1で、当分は艦隊のお荷物になるだろう私としては、いろいろ

助けてもらうことになるはずだから、間違っても悔るべきじゃないよね。

「ふむ、そんな浦風に提督からの伝言じゃ」

初春いわく、今すぐ実戦投入しても中破・大破する未来しか見えないので、今日から3日間は演習三昧。

4日目からは鎮守府近海海域で実戦経験（といっても遠征主体らしいが）を積み、6日目に小破以下の損害で南西諸島防衛線の最深部を突破できたら、晴れて「見習い卒業」として正式に駆逐艦ローテに組み込まれるのだそう。

「二週間、いえ実質6日で見習い卒業を目指せとは、なかなかスパルタですね」

「いえ、そうでもありません。まだ艦娘数が少ないこともあったのでしようか、朝潮が着任した際は、初日からいきなり鎮守府近海で実戦投入され、3日目から通常任務に加わりましたから」

生真面目な朝潮にそう応えられては、外見年齢的にも「中の人」的にも数歳年上の私^{おれ}としては、怖気づくわけにもいかない。

「そろそろ8時ね。みんな、お仕事開始よ！」

折よく雷が皆に号令をかけてくれたので、私も椅子から立ち上がる。

さて、どこに行くべきかと一瞬、戸惑っていたところ、睦月にポンと肩を叩かれた。

「今日は私たち3人が、浦風ちゃんにつきあつて演習に行くにやしい」

「あ……そう、なんですすね。なんだかごめんなさい」

「いいのいいの、誰だって新人の時はあるからねー」

「そうそう」

白露と雷も新人のお守りを押し付けられたというのに気にしてない様子だ。

（いい子たちだなあ〜）

これが曙や霞あたりだと（本心はともかく）外面的な態度^{アタリ}はキツかったろうから、そういう意味でもこの鎮守府に配属されたのはつく

づく幸運だったかも。

「およ？ そう言えば……そだ！ 初出撃の前に、浦風ちゃんは工
廠に行つて明石さんから基本艤装を受け取っておかないとだめだよ
ん」

基本艤装……？

何やら耳慣れぬ単語が出て来たけど、そのヘンは明石さんに聞けば
わかるだろう。

「それじゃあ、私、明石さんと会ってきます。またあとで、よろしく
！」

Another 2. 時ナラヌ雨ニフラレテ

— 1 —

それは、まさに「魔が差した」から、としか言いようがなかった。中学卒業と同時に適性（どうやって調べたのか不明だが）を認められて、海軍にスカウトされた彼は、北の要衝のひとつである大湊警備府に配属され、そこで「提督」と呼ばれる役職に就くことになる。

ただし、一般的な「艦隊の司令官」という意味ではない。いや、あの意味それで正しいのだが——彼が指揮するのは、女性の姿と心を持ちて深海棲艦と戦う艦娘達なのだ。

艦娘とは、非常に希少な適性を持つ者（その殆どが10〜18歳くらいの若い女性だ）が、ある種の「改造手術」を受けることによつて「霊的な兵器」である艦装とリンク可能になり、人類の天敵にして「実体化した怨念」ともいうべき深海棲艦と戦う力を得た存在だ。

いくつかの事情から、その艦娘を指揮する提督にもある種の資質、適性が存在し、それを持つ者は決して多くはない。

そのため、彼のように義務教育を終えたばかりの若僧と呼ばれても否定できない年代の少年でさえ、海軍では佐官に相当する階級を与えられ、複数の艦娘を指揮する立場に立たされるのである。

そして——深海棲艦と戦える力を得たからと言つて、艦娘の戦いは決して楽なものではない。

艦娘の身体は、現代の最先端科学と古代から連綿と受け継がれてきた陰陽術の粋を結集して作られた施設のサポートにより、たとえ瀕死の状態になつても、生きてさえいれば僅か半日足らずで回復できる。しかし、だとしても——いや、だからこそ、相次ぐ戦闘によつて心身を消耗し、心が折れてしまう艦娘もそれなりの数いるのだ。

今日の昼、彼が見送つた駆逐艦娘の「時雨」もそんな「戦えなくなった艦娘」のひとつりだった。

なまじ穏やかで思いやり深く忍耐強い性格だったせいか、彼女はストレスからくる異常を「壊れる」寸前まで隠しぬき——結果、取り返しのつかないほどの心の傷を背負うことになった。

「——僕もここまでかな」

艦装を展開するだけで身体が震え、足腰が立たなくなるほどのPTSDを（周囲から見れば）唐突に発症した彼女は、精密検査の結果、艦娘を退役し、一般人に戻るようになったのだ。

「提督……さよなら。顔を合わせると辛くなるから、みんなには、キミの口から伝えておいてくれるかな？」

「ああ、もちろん——そんなになるまで気が付かなくて、ごめん、時雨」

「あはっ、僕はもう『時雨』じゃないよ。ボクの名前はね……」

自分の本名を彼の耳元でささやき、憂い帯びた微笑を見せると、そのまま執務室を出て行く時雨『だった』娘。

そしてそれきり、彼は彼女と再び顔を合わせることにはなかった。

そこまでは、ありふれた……とはいかないまでも、艦娘たちが集う鎮守府では、ままたある話だ。

ただ、このケースに限れば、気の毒なことにこの提督は（口にこそ出さなかったが）密かに時雨のことを異性として意識——端的に言うところ『惚れて』おり、そしてその思いが叶う可能性は、ほぼ0に近くなったのだ。

いかに総勢20人以上の艦娘を指揮する提督とはいえ、素顔の彼はまだ16歳になったばかりの未熟な少年なのだ。

時雨とは彼がこの鎮守府に着任した時、最初に秘書艦として選んで以来のつきあいで、その彼女が戦線を離脱したことは、少なからぬショックを彼に与えていた。

だからだろうか。彼が、本来は廃棄処分にするべき時雨の艦装や制服をこっそり隠匿し、執務室に持ち帰ってしまったのは。

—2—

「時雨……しぐれえ〜」

時刻は、午後8時。時雨の後任の秘書艦を未だ決めておらず、そのために自分以外は誰もいない執務室。

その一角に設置された仮眠用ベッドのうえで、彼はきちんと折りた

たまれた時雨の制服（セーラー服？）を抱きしめて、その匂いに包まれながら、泣きそうな表情で呻いていた。

まあ、ここまでなら——少々フェチが入っているとは言え——同情できない話でもない。

駆逐艦娘の多くは10歳からせいぜい12、3歳くらいの容姿のものが多いのだが、時雨の属する「白露型」はそれに比べると大人びており、おおよそ15、6歳くらいの年頃に見える。

彼も提督であると同時にひとりの若き少年であり、（秘書艦として）もつとも身近にいた、愛らしくもけなげで優しい同年代の娘に対して、純粋な慕情に加えて性的な関心をまったく向けなかったとは言い難い。

密かな想いの対象が（身近から）失われたことで、彼がその想いを「こじらせて」しまうのも、ある意味、無理もない話だろう。

だが、それだけでは満足できなかったのか——提督は、いきなり海軍将校用の士官服を下着ごと脱ぎ捨てると……手元にある時雨の制服を身に着け始めたのだ！

これは完全にOUTだろう。

いや、世間的な良識や常識を脇に置くとしても、パツと見、ただの女学生の制服のように見えたとしても、艦娘達がまとうその衣装は特別な「処置」が施してあり、艦娘以外の者が纏うことは禁じられているのだ。

この鎮守府の責任者である提督として、その事は彼もよく知っているはずだが、この時の彼はいささか正気を失っていた。

あるいは、失われた自身の愛する時雨という艦娘の衣装を身に着けることで、彼女と同一化したのかもしれない。

黒に近い濃紺を基調に白いセーラーカラーと袖口の折り返しがついた半袖の上着を頭からかぶり、袖を通してから左脇のファスナーを下げる。

同じく左脇開きのプリーツスカートを履き、ホックとファスナーを閉める。

ほんの僅かにためらった後、制服とともに残されていた白い飾り気

のないシヨーツにも足を通して引き上げ、スカートの中でモソモソとナニの位置を調整する。

ベッドに腰かけて黒のスクールソックスめいた靴下と茶色い革のローファ履き、どこぞの水先案内人のごとく右手にだけ指無し手袋をはめ、最後に胸元に深紅のスカーフを結ぶと、彼は立ち上がった。

ためらいと緊張が半々にミックスされた心持ちで、秘書艦のために執務室の隅に設置された鏡の前まで歩み寄ると、意を決して覗き込む。

そこには——「時雨に似たナニカ」の姿が映し出されていた。

顔だちはやはり彼本来のものだし、髪も男にしてはやや長い方だが、後ろ髪をまとめて三つ編みにしていた時雨ほどではない。

しかし、雰囲気や気配とでもいうのだろうか、全体のたたずまいは不思議と時雨と酷似しており、想いの行く先を失った彼の心を大いに慰めてくれた。

さらに奇妙なことに、彼が着ている時雨の衣装は初めてそれを着た(当たり前だが)とは思えぬほど彼の身体に馴染んでいた。

確かに、この提督は同世代の少年たちと比べて背が高いほうではない。時雨との身長差はせいぜい3、4センチといったところだろうが、それでも男と女の間では、骨格その他に明確に違いがあるはずなのだが……。

あるいは、「特別製」である艦娘の衣装の方が、着用者の体のラインに沿うような構造しくみになっているのかもしれない。

もつとも、その時の彼の脳裏にはそんな冷静な考察など浮かばず、ひたすら鏡に映る自分の姿——を通して、在りし日の時雨のことに思いを馳せていた。

「ボクは白露型駆逐艦、「時雨」。これからよろしくね、提督♪」

その挙句、鏡の前でひとり芝居を始めてしまう。

「ボクに興味があるの？ いいよ、なんでも聞いてよ♪」

「この勝利、ボク力なんて些細なものさ。この雨と…そう、提督のおかげだよ♪」

かつて本物の時雨がこの執務室で口にした言葉を、寸分違わず(し

かし、いささか「提督」への情愛を込めて）再現する「時雨」だった
が……。

——ボタンツ！

「夕立ったら、結構頑張ったっぽい！ 提督さん、褒めて褒めて〜」
いきなり執務室のドアが開いたかと思うと、第二艦隊の旗艦として
遠征に行っていたはずの夕立——時雨と同じく白露型の駆逐艦娘で、
時雨のもっとも親しい友人かつ寮のルームメイトでもあった少女が
飛び込んできたのだ！

「！こ、これは、その……」

自己憐憫と自己陶醉(?)に浸っていた彼も、さすがに我に返って
しどろもどろになったのだが……。

「あゝ、時雨ってば、元気になったっぽい？ 良かった〜！」

夕立は、満面の笑顔になって彼——いや、「時雨」に飛びついてき
たのだ。

「へっ!？」

「いきなり倒れたって聞いてたから、心配してたのよ。大丈夫？
痛いところとかない？」

「あ、うん、特には……」

曖昧に頷きつつ、どうやら夕立は、自分のことを本物の時雨と勘違
いしているらしいと悟る「時雨」。

(親友でいつも寝起きしていた同居人の顔を見間違えるなんて……
うっかりとかドジっ子ってレベルじゃないよ、夕立！)

心の中で呆れつつも、ひとまずバレなかったことに安堵する。

「あ、そうだ！ 時雨、提督さん、どこにいるか知らない？ 夕立、
旗艦だから報告しないと」

そうだった。ちよつと(?)抜けてるところがあるとは言え、この
子もこの鎮守府では比較的古株に属する艦娘で、任務に対するモチ
ベーションと責任感は結構高いのだ。

「え、あ、いや、その……て、提督は、今ちよつと外部に出かけてる
んだ。遅くなるかもしれないって言ってたから、報告は秘書艦のボク
が聞いておくよ」

時雨の口調を思い出しつつ、それらしいことを言つて、このまま無難にやり過ぎそうとしたのだが……。

「第三艦隊戻ったわ。作戦終了みたいよ〜?」

「第四艦隊帰投、なのねー」

運が悪いことは重なるもので、他の遠征組の旗艦である龍田と伊19までもが帰投の報告のために執務室に入つて来た。

万事休すかと、覚悟を決める「時雨」。しかし……。

「あら〜、時雨ちゃん。もうお身体のほうはいいの?」

「思つたより元気そうなの」

このふたりも、「時雨」のことを本物と疑っていないようだ。

(夕立以上におポンチなイクはともかく、龍田はしっかり者だと思つてたのになあ……)

心の中で溜息をつきつつも、好都合なのでその誤解を利用する。

「う、うん。精神的な消耗からくる衰弱が主な原因なんだって。しばらく出撃を控えれば、すぐに元に戻るらしいよ」

「時雨」の言葉を聞いて喜ぶ3人の姿に、二重の意味で騙している「時雨」は後ろめたくなつたが、もう遅い。

とりあえず、「不在の提督に代わつて書類などの処理をする」という口実で、執務室に残ろうとしたのだが……。

「時雨は病み上がりなんだから、無理したらいけないっぽい!」

という夕立の意見には逆らえず、そのまま皆と少し遅めの夕食を摂ることになつてしまった。

3人と共に赴いた食堂でも、会う艦娘たちがことごとく時雨のことを気遣つてくれる。

秘書艦として顔が広いのは知っていたが、時雨がこの鎮守府の艦娘たちにここまでの交友を築いているとは「時雨」は目からウロコが落ちる思いだった。

と同時に、なおさら本物の時雨がいなくなったことを言い出しにくくなる——そう、ここに至るまで、「彼女」が本物の時雨ではないと見抜いた艦娘はひとりもないのだ。

「あ、時雨さん、昨日倒れたと聞いて心配していたんですよ。食欲の

方はどうですか？」

給糧艦娘として食堂を切り盛りしている間宮にも、完全に時雨として対応される。

「う、うん、もう平気だよ」

「そうですか……それじゃあ、いつもの”ご用意しますね♪”」

そうして渡された夕飯用のトレーには、市井の大衆食堂の定食の2倍近いポリユームの食事が並んでいる。

(こ、これをいつもの時雨は食べてたのか……食べきれるかなあ) 顔には出さないよう努めたものの、内心ではそんな眩きを漏らしている。

ところが、夕立や執務室から一緒だった龍田やイクたちと歓談しながら食事を摂っていると、不思議と満腹にならず、コメのひと粒も残さキレイに平らげてしまった。

「それじゃあ、時雨、部屋に戻ろ」

そうになると、龍田たちと別れたあと、同室の夕立がそう言いだすのは、至極当然な流れなわけで、”時雨”としてはどうやって断ろうかと必死に頭を回転させていたのだが……。

「あ、そういうえば、時雨、艀装を提督さんのトコに置いてきたっぽい？」

「！ そ、そうなんだよ。だから、取って来ないと……」

「ふーん。じゃあ、夕立もいっしょに行くっばい」

(ですよねー)

心の中で溜息をつきつつ、もうどうにでもなれとばかりに執務室へ向かう。

執務室の入り口の脇、”本物”の時雨が秘書業務の妨げにならぬよう外した艀装を置いていた場所に、「いつもの如く」時雨用の艀装は置かれていた。

それだけ見ると、まるで今も時雨が鎮守府に、この執務室にいるような錯覚を覚える。

「あつたあつた。さ、時雨、着けて着けて」

”彼女”の感慨など知らぬ夕立が、あつさりと艀装を持ちあげて、

“時雨”に装着させようとする。

「い、いや、それは……」

さすがにあの重い艀装一式を装備すれば、ただの（しかも同世代の平均よりやや小柄な）少年でしかない彼は、ロクに動けなくなるだろう。

昼間隠匿した艀装を運ぶ際も、こっそりカートに積み込んで何とか持ってこられたくらいなのだ。

体調不良を理由に断ろうと思いついたときには、“時雨”は偽装の中でも一番大きく、ガンキ●ノンなどと呼ぶ者もいる背部装甲&砲塔を、夕立の手で背負わされていた。

「ー」

ズシリと肩に食い込む重みを覚悟していた“時雨”の予想に反して、意外なほどその鋼鉄の艀装は軽かった。体感的には、小学生時代に背負っていたランドセルと大差ない。

（え!? な、なんで……）

思考をまとめる前に、両足の太腿にも魚雷発射管のベルトが巻かれる。こちらも大きさからして相当な重さのはずなのに、それほど負担に感じなかった。

「これで全部っぽい？　じゃあ、お部屋に戻る」

「う、うん……」

思いがけない事態に「なぜ？」と気を取られて上の空の“時雨”は、夕立に手を引かれるまま、執務室を出ると駆逐艦寮の方へと歩き出す。

寮の一室に着いた際は、無意識に艀装を外して床に置く。戦艦寮や空母寮と異なり、駆逐艦寮の部屋はあまり広くないので、駆逐艦娘たちは自室では艀装を外すのが暗黙の了解となっているからだ。

白い作務衣のような寝間着に着替えた夕立が、二段ベッドの上の寝台に上がって「おやすみ」と言ってくるのに、反射的に「お休み、よい夢を……」と返した後、ようやく“時雨”は我に返った。

「あ、ハハハ……」

無論、言うまでもなく駆逐艦寮の時雨と夕立の部屋だ。

本来であれば、夕立が眠つたのを見計らって部屋を出て、そのまま執務室に戻り、時雨の制服を脱ぐべきだったろう。

しかし、目の前に「本物」が昨日まで寝ていたベッドがあり、今ならそこにダイブしても誰にも責められず、そのまま眠りにつくことができる——という誘惑は、あまりに魅力的だった。

ほんの僅かな躊躇の後、「時雨」はローファーを脱いでからベッドに入り、薄い綿布団の上下の間に潜り込む。

想い焦がれていた少女の匂いに包まれながら、不思議とリラックスした気分になった「時雨」は、そのまま抗うことなく睡魔の手に身を委ねるのだった。

— 3 —

夢を見た。

その夢の中で、自分は一隻の軍艦だった。

数多の軍人達を載せ、さまざまな海の戦場を航行る。

そのほとんどが激戦であり、「同僚」の艦の多くが傷つき、沈んでいく。

そんな過酷な状況の中でも、「彼女」は10年間にもわたって生き残り、幸運艦と呼ばれるようになっていく。

けれど、それは裏を返せば、10年間仲間の死を見つめ続けたということ。

比叡、萩風、嵐、雲龍、西村艦隊での扶桑、山城、最上、満潮、山雲、朝雲、そして姉妹艦である江風や春雨、白露、五月雨の最期の場にも、「彼女」は居合わせているのだ。

最後の、そして最期となった任務の際、敵の雷撃を受けて沈む際に「彼女」の胸に浮かんだのは、悔しさと同時に、「これでやっとみんなのところを逝ける」という奇妙な安堵でもあったのだ。

だからこそ、艦娘という形でこの世に再臨した時、「彼女」は、今度こそ仲間のすべてを、自分の力の及ぶ限り守りたいという強い決意を抱いていた。

その願いが「素体」となった娘にいささか負担を強いていたとい

う面も、否定はできない。

時雨とはそういう艦であり、時雨の名を関する艦娘になるというのは、その想いを背負って戦うということなのだということが、本能的に理解できた。

『——君に、その覚悟があるかな?』

何処からか聞こえてくる「声」に対して、コクンと首を縦に振って肯定の意を示す。

『——ならば受け継いでほしい。僕の力と想いを……』

まばゆい光に包まれ、自分の存在が変貌していくのがわかるが、あえてそれに逆らわず、彼はそれを受け入れた。

—4—

翌朝午前6時、目を覚ました「時雨」は、「いつものように」まだ寝ている夕立を起こさないよう気をつけながら、「手慣れた仕草で」艀装をフル装備してから「恒例の朝練」へと出かけていった。

鎮守府の周囲を軽く3周ほどジョギングした後、龍田の姉妹艦である軽巡娘・天龍が中心になって主催している、駆逐艦向けの海上自主訓練に参加する。

「——行くよ!」

レースゲームのパイロンの如く一定間隔で浮かべられたブイの間を、高速で蛇行してすり抜けながら的を撃つていく。

自分が当たり前のように水の上に浮いていることについても、背中から下ろして両手に持った主砲を自在に扱えることにも、もはや「時雨」は驚かなかつた。

7時過ぎになって自主練が終わると、今度は寮の部屋にとって返し、まだベッドの中で惰眠をむさぼっている夕立を起こす。

夕立が寝間着から着替えるのと背中合わせに、自らも海水で濡れた制服の上下を脱ぎ、タンズから出した替えの制服へと着替える。

連れ立って食堂に行き、伊良湖から「いつもの朝メニュー」を受け取ると、夕立や周囲にいる「顔なじみの艦娘たち」と雑談しつつ、お行儀よく——けれども健啖な食欲を見せて平らげる。

「じゃあ、僕は秘書艦の仕事があるから。夕立は？」

「夕立は、今日はお休みっぽい。時雨、お昼はどうするの？」

「仕事の進み具合次第だね。僕のことは気にせず、食べてよ」

そんな会話を交わした後、提督の執務室へと向かい、笑顔でドアを開ける。時雨。

「おはようございます、提督♪」

けれど、誰もいない提督の執務机を見た瞬間、時雨は思い出す——自分が本当は何者なのかを。

「う、あ……な、なんで……どうして……」

頭を押さええてうずまる。時雨に落ち着いた声がかげられた。

「——苦しそうですね、時雨さん」

俯いていた姿勢から顔を上げると、そこには大淀と明石、ふたりの司令部付艦娘が立っていた。

「……しぐ、れ……ち、ちがう、ぼくは……」

「いいえ、アナタは時雨——白露型駆逐艦娘の次女の時雨さんです。ほら」

明石が差し出した手鏡に映る顔は、確かに長年見慣れた自分の顔……のはずだが、何か違った。

「……目が……碧い？」

南の海を思わせる鮮やかなコバルトブルーの瞳が、鏡の中から自分を見つめ返している。

「ほら、艦娘と言えども女の子」なんですから、身だしなみには気を使いませんと」

背後から歩み寄った大淀が、優しい手つきで「背中まで伸びた後ろ髪」を緩い三つ編みにして、先端付近を紅いリボンで結わえてくれる。

碧眼と三つ編み、その特徴を持った艦娘を、彼女はよく知っていた。

「——しぐれ」

その名前を口にした瞬間、朦朧としていた意識がたちまちクリアーになる。

「そう、僕の名前は時雨」

そうだ、自分は「白露型駆逐艦2番艦の艦娘・時雨」だ！

「ちゃんと『思い出し』しましたか、時雨さん？」

「うん、ありがとう、明石、大淀。どうやら、まだちよつと寝ぼけてたみたいだ。疲れがたまっているのかな」

「『ここ』のところ激戦が続きましたから無理もないですよ。特に時雨さんは、秘書艦との兼任ですし」

「艀装とかの修理なら私がばっちり直してあげるけど、時雨本人はそうもいかないんだから、気を付けてね」

「心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」

先ほどまでの苦悶が嘘のようにスッキリした顔つきで、時雨はふたりの艦娘と笑顔で会話する。

「あ、そういえば、提督は今日から半月間、海軍本部の方へ出張なさっているそうですよ」

「え……そう、なんだ……」

あからさまに落胆した表情になる時雨を、ニヤリと笑って明石がからかう。

「おやおや、愛しの提督さんと離れ離れになるのが、そんなに寂しのかな？」

「！ も、もう、からかわないですよ」

顔を真っ赤にして身をひるがえすと、秘書艦の定位置である執務机横のサブデスクにつく時雨。

「ほら、ふたりとも、提督が不在でも仕事はたくさんあるんだからね！」

「はいはい、仰せのままに秘書艦殿」

「あはは、初々しいですね」

—5—

「明石、これで良かったんでしょうか？」

「最善とは言えないだろうけど——でも、あのままじゃあ、ウチの鎮守府は有能な秘書艦にして第一艦隊の旗艦と前途ある提督の両方を失っていた公算が強いわ」

深夜、執務室の隣にこしらえられた明石の工作室兼備品購入店で、

部屋の主である明石とその同僚の大淀が密談している。

「深海棲艦の攻撃が激化している今、できればそれは避けたい……
というのが本部の意向よ」

「！……もしかして、退役した時雨さんの装備類を提督が簡単に手に
入れられたのも……」

「ええ、賭けだったけどね。提督がアレに手を出すか、出したうえで
ソレが適合するか——本部の分析では、彼が“そう”なる確率は決して
低くなかったらしいけど」

今のあの時雨は、“以前”の時雨の艦娘としての能力と記憶をその
まま引き継いでいるのだから、海軍本部の“賭け”は成功したと言え
るだろう。

指令系統に関しては、もうすぐこの鎮守府に新たな提督が送り込ま
れてくる予定となっている。

「それにしても、あの“時雨”さん、髪型や目の色はともかく、身体
そのものは元の提督のままなんですよね？ どうして、夕立さんを始
め、誰も気づかないんでしょう」

「ああ、それね。そもそも艦娘は同じ艦娘を、容姿じゃなくその身に
宿った“軍艦としての魂”で識別している割合が大きいよ。そし
て、“あの”時雨の装備は間違いなく“以前”のものと同じだから
ね」

「だから、事情を知っている私たちでも、意識しないと気が付かない
んですね」

「それに、今はまだ外見は元の男性のままだけど、この先、艦装との
適合が進めば……いえ、なんでもないわ」

「なるほど。聞かなかったことにします」

—6—

北の要衝のひとつである大湊警備府。そこに所属する雨宮提督旗
下の部隊は、その旗頭たる雨宮少佐が年若い——未だ16歳と“幼い”
”と言っても過言ではない年齢にも関わらず、堅実かつ確実な戦績を
上げる期待される注目株だ。

所属する艦娘の数は20数人とあまり多くはないが、新入りを除くといずれも軒並みレベルは高く、それでいて艦娘に無理をさせずに健全にして効率的な運用を心がける提督の手腕は、軍の上層部からの評価も高い。

もつとも……。

「提督、お茶が入ったから、少し休憩したらどうかかな？　もう、2時間も書類にかかりきりだよ」

「——ん、そんなになるのか。そうだね。そうさせてもらおう」

書類の束から顔を上げ、秘書艦が淹れたお茶の湯呑を手に取ってズツと無造作にすする提督の様子からは、「若きエリート」とか「大湊の青狼」と呼ばれるような威厳や迫力はまるで感じられないのだが。

提督御用達の白い海軍士官礼装を着用しているが、同年代の少年たちと比べてもいくぶん小柄で華奢な体躯もあってか、未だ「高校入学したての新一年生の制服姿」的な、とってつけた感が漂っている。

「うん、相変わらず時雨が淹れてくるお茶は美味しいな」

ニコツと微笑みかけられて、秘書艦を務める時雨の頬が僅かに紅潮する。

「——それ、以前、金剛にも言ってたよね？」

頬の熱さを隠すように口早に反論する時雨の姿に、苦笑する提督。

「うん、まあ、紅茶に関しては金剛に一日の長があるからね。でも、私の知る限り、いちばん美味しく日本茶を入れてくれるのは時雨だよ」

手の中の湯呑を机に置くと、提督はクルリと椅子を回した、トレイを手を傍らに控えていた時雨の方へと向き直る。

「え？　な、なにかな、提督？」

「いや、いつも遅くまでつきあわせてすまないと思ってね。夕飯もまだなんだろう？」

時刻は夜8時を回り、まもなくフタヒトマルマルの時報が聞こえてくるであろう頃合いだ。

「気にしなくていいよ。艦娘は、普通の人間に比べて睡眠や空腹な

どに関する生理的欲求がある程度セーブされているから」

時雨の言葉にほんの少しだけ悲しげな表情を浮かべる提督だったが、すぐにそれを隠し、わざとニヤリと意地の悪い笑みを唇に浮かべて立ち上がる。

「へえ、「生理的欲求がセーブ」ねえ……」

僅かに身をかがめて、時雨の耳元でささやく提督。

「——その割に、食欲・睡眠欲とならぶ三大欲求の残りひとつには、随分と貪欲みたいだけど？」

「……いぢわる」

顔を先ほどの比でないほどに真っ赤にしてプイツと顔をそむけ、身を翻す時雨の腕を、素早く掴む。

「——あと15分くらいで今日の作業は終わらせるから、^{ウチ}「家」で待っていてくれないかな？」

「！う、うん、わかったよ♪」

一生懸命に普段の落ち着いた表情を装おうしているものの、「主人が散歩させてくれるのを待ちきれないワンコ」のように期待感を隠せていない時雨が、軽快な足取りで執務室から出て行く。

それを優しい顔つきで見守りつつ、再び提督は書類処理の仕事に戻った。

—7—

大湊警備府に所属する士官以上の階級の軍人には、警備府の敷地内に家が与えられている。

「家」とは言っても、軽量鉄骨プレハブ建ての5軒並びで作られた長屋のように簡易な代物だが、それでも各戸の玄関は別で、バス・トイレ付きLDKの独立した構造になっており、下士官以下や艦娘たちが住む「寮」とは大違いだ。

「お帰りなさい、提督」

ようやく今日の分の仕事を終え、自宅へと戻ってきた提督^{かれ}を、時雨は優しい笑顔で玄関で出迎えた。

「……ただいま」

玄関に入った提督は、挨拶だけ返すと、あとは無言のまま時雨を抱きしめ、彼女の唇を奪う。

重ねられた唇を時雨がそつと開くと、提督の熱い舌が潜り込んで、彼女の舌を優しく舐め回す。

それだけで背筋がゾクゾクするほど感じてしまい、時雨も夢中になって彼の舌を吸い返そうとしたのだが、そのタイミングを捉えて、息が詰まるほど熱烈に抱きしめられる。

「あつ……んんつ……」

息苦しさに思わず彼の服をぎゅつと掴みながら、そのまま身をゆだねる。

くちゆくちゆという音が育がするほど激しく舌が絡まり合うなか、時雨はそれだけで頭がポーツとなるほど気持ちよくなってしまふ。

「しぐれ……」

「んっ……あつ……ていとく……」

キスの合間に囁きながら、提督の手が時雨の背中を優しく撫で始めた。

優しい手で撫でられると、触れられた所が全部痺れたように感じて、勝手に身体がビクンと反応してしまう。

そうこうしているうちに、衣服越しでは我慢できなくなったのか、時雨とキスを続けながら、提督の手がもどかしげに時雨の制服の中へと忍び込んできた。

「あつ……ん……」

すっかり熱くなっている時雨の肌を提督の手がそつと撫でる。

最初は背中を。そのうちにウエストやおへその辺りを、まるで壊れ物に触るような手つきで、触れていく。

そんな風に提督に体中を愛撫されていると、時雨もどんどん気持ちよくなってしまい、身体が自然と弓なりにのけぞってしまふ。

「………ベッドへ行くかうか？」

「………うん」

耳元の囁きに、こくりと頷くと、提督は時雨を両腕で抱きあげて、奥にある寝室へと連れて行く。

「ちょっと待ってね」

時折軽くついでむようなキスの雨を降らせながら、提督はベッドに横たえられた時雨のセーラー服を脱がしにかかる。

「はい、両手を上げて」

「う、うん……」

少し照れくさいながら時雨も協力して下着姿になると、提督は改めてというように時雨の全身を見つめた。

「時雨はどこも可愛いね。肌も白くて柔らかくて……ものすごくキレイだ」

「そんな、買い被り過ぎだよ」

もう何度も見られているのだが、そんなふうじつくり見られて感想を言われると、時雨としては、すごく恥ずかしい。

駆逐艦娘としてはそれなりに成熟した体つきだとは自分でも思うが、空母娘や戦艦娘のプロポーション抜群な面々に比べると流石に見劣りする。

それだけなら艦種の違いと納得できるだろうが、同じ白露型でも、長女にあたる白露にはまだしも、すぐ下の妹たる村雨や夕立にも胸の大きさに負けているのが、時雨の密かなコンプレックスでもあった。
(さすがに春雨や五月雨、涼風たちよりは大きいはずだけど……大きいよね?)

そのコンプレックス故か、無意識に身を縮めて身体を隠そうとすると、それを察した提督が覆いかぶさって時雨の動きを制止する。

「こーら、隠しちゃだめだろ」

「んんっ……だつてえ……」

提督に僕の貧相な身体を見られるの恥ずかしいから——小声でつぶやく時雨の頬に、提督は優しくキスをする。

「なに? 拗ねてるの?」

「ち、違うよ。客観的に見て僕は……んんっ!」

時雨の唇を自らのそれでふさぎながら、提督は時雨をを包み込むように抱きしめる。

「大丈夫。時雨はとても綺麗だし、こうやって抱いてるととても気

持ちいいから」

「……………うん」

その熱い身体の重みを感じると、ホツとすると同時にドキドキと動悸も激しくなる。時雨は提督の胸にしがみつくようにぎゅつと抱きついた。

「時雨……………」

提督は時雨を確かめるように身体を撫でながら、その華奢な首筋に頭を埋める。

「あぁっ……………跡つけちゃ、だめ、だよ……………ひうつ！」

「あぁ、見える所にはつけないよ」

その言葉通り、提督は時雨の普段は制服で隠されている場所——胸の谷間の間やわき腹、背中などに強く吸いついてキスマークを残している。まるで、「この娘は自分のものだ」とマーキングするかのよう

……

……………

……………

— 8 —

「時雨……………」

あまりに連続した快楽に翻弄され気を失ってしまった秘書艦パートナリの髪を優しくひと撫ですると、提督はベッドから降りた。

そのまま風呂場まで足を運び、軍服の上着も脱いで脱衣籠に入れると、裸になって浴室へと入る。

シャワーを浴びながら浴室の鏡に映る自分の姿を眺める。

そこに映っていたのは、少し骨太かつ筋肉質で、いささか貧乳ではあるものの、まぎれもなく女性の裸体だった。

それも当然だろう。なにせ、この提督——雨宮時緒中佐は、以前この鎮守府で艦娘、それも第一艦隊の旗艦として活躍していたのだから。

そう、言うまでもなくこの雨宮中佐こそが、かつて時雨と呼ばれて

いた存在だ。

艦娘としての任を解かれ、一介の少女に戻ったあとも、彼女は何とか自分がかつていた鎮守府、そしてその提督の助けになれないものかと手だてを捜していた。

駄目元で受けた検査に見事合格し、提督として必要な促成教育を受けた後、彼女は自らの志願通り大湊警備府に配属されて、そこで鎮守府（この場合は「提督が率いる部隊」を意味する）を持つことになった。

（これからは同僚として「あの人」を支えられる！）

秘書艦としていちばん身近にいられなくなったことは残念だったが、それでも彼の助けとなれることを喜んでいた雨宮少佐だったが、その喜びはかつていた鎮守府の現状を知ることであちまちかき消されてしまう。

「えっ、嘘でしょ……あの提督が艦娘——それも「時雨」に!？」

顔なじみの明石と大淀いわく、提督は自分の鎮守府の要ともいえる時雨を戦線離脱させてしまったことに責任を感じ、また戦力の低下を憂いた結果、かつての時雨が残した艦装を身にまとい、「時雨」として戦っていくことを受け入れたのだという。

無論、この説明はまるっきりの嘘というわけではないが、真実とは大きく隔たりがある。

しかし、艦娘を（不可抗力とは言え）辞めたことに大きな引け目を感じていた（そうでなければわざわざ提督になったりしないだろう）雨宮少佐は、この説明を信じ——そして「上」の思惑通りの選択をする。

「それならボクが……いえ、私が、この鎮守府に着任して、作戦の指揮を執ります！」

雨宮提督の着任は、公的には「長期出張からの帰任」という形で処理され、彼女は「彼」の経歴を引き継ぐことになった。

艦娘達も多少の混乱はありつつも、かつて同じ釜の飯を食った仲の彼女のことを受け入れたのだが、ただひとり時雨——元提督から艦娘になった少女だけは別だった。

と言つても、雨宮少佐が提督となることを拒絶したワケではない。時雨（新）は、雨宮を「以前からの自分の提督」だと認識し、接してきたのだ。

それは意に染まぬ変貌を強いられた「彼女」の「心の防衛機構」の発露だったのかもしれないし、それでいて本能的に雨宮こそがかつての自分の元を去った最愛の少女あることを無意識下で悟っていたのかもしれない。

いずれにせよ、この鎮守府には（演じる役割こそ入れ替わったものの）「やさしく頼もしい提督と落ち着いた有能な秘書艦」がとりしきる以前とほぼ変わらぬ光景が戻ってきたのだ。

「——コレの扱いにも、完全に慣れてしまったな」

微笑を浮かべながら、自らに下半身に視線を落とす雨宮提督。

そこには、本来は男性のみが持つはずの雄の象徴シンボルが存在していた。作り物などではないことは、先ほどのふたりの情事からも理解できるだろう。

明石から、「今の」時雨が、たとえ艦装との適合を解いて退役しても、身体は女性のままで男には戻らないことを教えられた時、雨宮は「ならば自分が彼女を娶るための男になろう」と決意したのだ。

明石に相談すると、極秘でそのための処理——手術ではなく「霊的な処理を施したナノマシンによる肉体改造」を紹介してくれた。

トンデモない技術のように思うかもしれないが、そもそも艦娘自体が、科学と陰陽術のハイブリッドと言うべき存在なのだ。

「人間の女性を同じ人間の男性に変えるくらいはお茶の子さいさいですよ」と笑う明石の言葉に、「そういうものか」と納得するしかない。実際、処置を受けてから2カ月あまり経つが、現在、雨宮中佐の陰核は成人男性の陰茎とほぼ変わらぬ大きさにまで成長し、ひと月ほど前からはその先端に排尿するための鈴口もできているのだから。

それと同時に陰唇部の亀裂がふさがり、当然月経も訪れなくなつた。

代わりに陰囊らしき肉袋も生じ、一週間ほど前に夢精の形で精通も経験した。

生物的には既に雨宮提督は「男性^{オス}」と言つても良いだろう——時雨となつた元提督がまぎれもなく「女性^{メス}」であるのと同様に。

今後は体格も緩やかに変化して、より男らしくなつていくだろうとのこと。現にこのふた月で身長も10センチ近く伸び、数センチながら時雨よりも背が高くなつていゝのだ。

かつて思い描いたのとは異なる形ではあるが、それでも最愛の人のすぐそばにいて、共に支えあいながら戦えるという今の立場に、雨宮提督はそれなりに満足していた。

「さて、ようやく本部の許可が下りたワケだが、どういうタイミングで渡すべきかな？」

風呂から出て、リビングで髪が乾くのを待ちながら、ケツコンカッコカリ用の指輪が入ったケースを掌の中で弄びつつ、コレを見た時の時雨の反応を想像して、ひとりほくそ笑む提督。

——その後まもなく、この鎮守府に於ける優秀な秘書艦にして駆逐艦娘のエースとして活躍する「少女」が、提督からケツコンカッコカリを申し込まれて、うれし涙を流すことになるのは語るまでもないだろう。

——おしまい——

Another 3. 任務娘・大淀の奇妙な愛情くいかにして彼は提督を辞め、ひとりの艦娘（おんな）としての悦びに身を委ねたかゝ

— 00 —

「あー、まあその、なんだ……大淀、コレ、受け取ってくれないか？」
目の前にいる青年から差し出された小さな箱——いや、正確にはその中身を目にして、彼女は躊躇いを見せる。

(どうしよう……どうしたらいいの……)

青年——「提督」が差し出す指輪は、提督・艦娘間特殊専属契約——俗に「ケツコンカッコカリ」と呼ばれる特殊な「契約関係」を結ぶための特別な艦装だ。

秘書艦などの場合、提督のプライベートな面にもいくらか関わることはあるが、本来、提督と艦娘はあくまで上司と部下の関係である。

とは言え、多くの提督は男性であり、対して艦娘はタイプこそ違えどそのほぼすべてが美女・美少女揃いだ。長く苦しい戦いを力を合わせて乗り切る男女間に、恋慕や愛情といった気持ちが生じるのも無理ない話である。

しかしながら、機密保持その他の関係上——少なくとも「艦娘」である間は——彼女たちは人権の一部は制限される。結婚およびそれに連なる妊娠・出産も制限される事項のひとつだ。

そこで登場したのが「ケツコンカッコカリ」というシステムだ。

これは、艦娘の召喚契約の一部を書き換え、契約主を鎮守府から提督個人へと変更するものであり……同時に対外的には「この子、オレの嫁さんね！」と宣言するための、事実上の結婚指輪なのである。

艦娘の練度が最高レベルまで到達した時にのみ許可され、かつ提督と艦娘の双方が合意しなければ結ぶことができない、非常に特別な「絆の証」とも呼べるものと言えよう。

実際、ケツコンカッコカリ後、既定の年限を勤めあげて退役した後、に改めて提督と正式な婚姻関係を結ぶ元艦娘も多い——というか、大

半がそうだ。

それを目の前の青年——高木醍醐中佐が、彼女——秘書艦である軽巡娘の大淀（正確には大淀・改だが）に差し出している。彼の気持ちに分からないほど、彼女は朴念仁でも愚鈍でもなかった。

実のところ彼女自身も、自らの提督に対して少なからぬ好意は抱いている。

身寄りと呼ぶべきものが既にある彼女にとっては、この鎮守府こそが家であり、仲間の艦娘たちが家族、そして高木提督は司令官じょう官であると同時に頼もしい兄のような存在であった。

仮に彼への好意を分析するなら、敏腕指揮官に対する敬意が3割、兄に対するような親愛の情が3割、そして——恋とも愛とも呼ぶべき慕情が残りの4割を占めるだろう。

そう、彼女も高木提督のことが「大好き」なことに間違いないのだ。恋愛的感情が4割程度に留まるのも、これまで彼女があえて自制していたからこそで、もし彼の申し出を受け入れてケツコンし、（実質的な）妻となったら、たちまち彼との新婚生活に溺れてしまう自信（？）がある。

それなのに、指輪を受け取ることを躊躇うのは……もしかして、冷静沈着な秘書艦にして第一艦隊旗艦として、自分（と提督）が愛欲に塗れてフヌケてしまうことを警戒しているのだろうか？

——そうではない。そういう危惧がまったくないわけではないが、それ以上に慎重にならざるを得ない「秘密」が彼女にはあるのだ。

すなわち……。

（本来は艦娘どころか女性ですらなかったはずの私が、提督とケツコンしてしまってもいいんでしょうか？）

—01—

中学入学直後に両親と姉を事故で亡くし、保険金や親戚の好意などのおかげで、どうにかこうにか中学を卒業した少年・淀川広海（よどがわ・ひろみ）は、そのまま自衛隊から防衛軍に名称を変更して久しい組織へと入隊を決めた。

淀川少年はかなり頭が良く、成績も優秀だったので、奨学金を受けて高校に通うという選択肢もあったのだが、他人の「お情け」で生きるスタイルに、潔癖な少年の心がいい加減我慢できなかつたのだ。

もつとも、「このご時世」とは言え中卒で雇ってくれる民間企業に、待遇・給与諸々の面で大きな期待はできない。

そこで、おやかたひのまる公務員の中で、もつともなれる可能性の高い——というか、犯罪歴がなく健康なら即なれる職業へと志願したのだ。

幸いにして地頭の良さに加えて、広海は運動能力も同世代の平均より幾分高かつたので、兵士としての暮らしにも馴染めると思つたのだが……。

入隊時に受けたチェツクのせい（もしくはおかげ）で、少年の目算は大きく狂うことになる。

彼には、有意識艦隊同調能力——平たく言うなら「艦娘の提督」になりうる資質があつたのだ。

10年近く前に、深海棲艦による大侵攻を跳ね返し、逆侵攻を仕掛けて奴らの「巢」のいくつかを壊滅させたことで、日本はそれまでと比べると格段に余裕ができた——が、完全に平和というにはまだ程遠い。

かつてのように資質があれば義務教育中のローティーンの少年すら徴発するようなブラックさはなくなつたものの、依然として「提督」になれる人材は貴重だ。

すでに軍へ志願していたこともあつて、簡単な意思確認を経ただけで、淀川二等兵はそのまま士官学校の促成コースに放り込まれ、半年間の詰め込み教育の結果、卒業とともに少尉に任官。

その直後、辞令を受け取り、対深海棲艦特別法令によつていきなり少佐の階級を与えられ、山陰地方の片隅にある小さな鎮守府へ配属されることになつた。

海軍上層部の思惑としては、そこにいる先任の老提督の監督のもとで簡単な任務からじつくり経験を積ませ、1、2年後ある程度提督として成長したら、もつと大きな鎮守府でホープとして活躍してもらつつもりでいたのだ。

ところが、彼の任官直後にいくつかの不運が重なった。

まず、海軍内部の手続き等の不備により、着任後しばらく彼に配下となる艦娘が与えられなかったのだ。いや、「建造」の許可が下りなかった、と言うべきか。

仕方なく、当面は先任老提督のもとで、彼の仕事ぶりを見学することが淀川少佐の仕事となる。時には書類仕事を手伝うこともあった。その過程で、大本営からの指令を鎮守府の提督に伝える役目を負った任務娘・大淀や、兵站関連を司るアイテム屋娘・明石とも、それなりに親しくなっていた。

第二の不運は、彼の着任から3週間後。ようやく形式が整い、いよいよ自分の艦娘を「建造」できる——という段になって、突如、老提督が亡くなってしまったのだ。

就寝中の心臓麻痺であり、おそらく苦しみはなかっただろうというのが唯一の救いだ。

派手な戦果こそなかったものの、堅実な艦隊運用を行い、最小限の被害で最大限の効果を上げていたベテラン提督の早すぎる（享年62歳）死に、鎮守府は大いに揺れた。

艦娘たちの半数以上が退役願を出し、残る艦娘の大半も別の鎮守府への異動を希望している。ちょうど大本営への連絡任務で鎮守府を離れていた大淀も、退役希望組のひとりだった。

正式な所属は大本営直属ながら、ここの大淀は老提督とは、まるで父と娘（それもファザコン気味）のように仲が良かった。

だからこそ、シヨックも大きかったのだろう。大淀は鎮守府に戻ることなく、郵送で彼女からの退役願が鎮守府に届いた。

その手紙を、亡き提督の秘書艦・五月雨（この子は数少ない残留希望組だった）ではなく、その事務の手伝いをしていた淀川少佐が受け取ったのは、果たして天の配剤か、はたまた悪魔の姦計か。

いまさらながら、淀川少佐——いや、まだ16歳になったばかりの少年・広海は、自分が提督という立場になることを怖れていた。

自分が戦って死ぬなら、まだよい。しかし、提督とは、自分は鎮守府に留まり、最前線で戦う部下の艦娘たちに「戦え」そして必要なら

「死ぬ」と命じなければならぬ職業なのだ。

おまけに、だいたいが数が減ったとは言え、老提督配下だった残りの艦娘も、このままなら自分が面倒を見ることになるのだろう。

未だ実戦のひとつも経験したことのない青二才の自分が、ベテラン提督の薫陶を受けて全員50レベル以上の練度を誇る歴戦の艦娘たちを指揮する？

できるわけがない。仮に実行しても、否応なくありし日の老提督の指揮ぶり比べられ、嘲笑われるハメになるに違いない。

そう考えると強度のストレスで広海は胃が痛くなりそうだった。

せめて自分独自の艦娘がいれば同じ新米としてシンパシーを感じることできるのだろうが、大本営からは建造許可を一時棚上げする旨の指示が下りていた。

そんな時、彼の手元に届いた大淀からの手紙。封筒には退役願のほかに小さな鍵も同封されており、彼にはそれが大淀の私室の鍵であることが推察できた。

明石と大淀の部屋は、そのやや特殊な立ち位置の関係で、他の艦娘と異なり、寮ではなく本部棟内にある。

魔がさしたとでも言うのだろうか。

反射的に彼は、封筒ごと大淀の手紙を士官制服の内側に隠し、なに食わぬ顔で、そのまま事務仕事の手伝いを進めるのだった。

— 02 —

そして——鎮守府の人員の大半が眠りに就いたであろう午前零時。就寝用の作業衣に似た白い寝間着を着た彼は、震える手で大淀の部屋の鍵を開け、中に忍び込んで素早く扉を閉めた。

大淀の部屋は、持ち主の几帳面な性格を表してか、綺麗に整理整頓され、年頃の娘らしい飾り気に乏しかったが、それでも机の上の一輪挿しや、お手製のクッションなどに女らしさの片鱗が見受けられた。

また、机の上のブックスタンドには、軍の法令集や戦術指南書などに混じって、『枕草子』などの古典や少し古めの少女小説などが並べられているあたり、彼女の文学少女趣味が反映されていると言えるだろ

う。

そんな大淀の部屋の雰囲気に頬を赤らめつつ、それでも彼は部屋を見回して、目当てのものが壁のフックにかけられているのを発見する。

それは、白地に青い襟が付いた上着と、同じく青いミニプリーツカートからなるセーラー服……を模した形状の大淀の制服だった。僅かに震える手で、その制服をハンガーごと手に取り、ひとつひとつハンガーから外して机の上に並べていく。

ほんの数秒のためらいの後、彼は部屋に備え付けのタンスを開け始め、一番下の段に目的のモノを見つけて、丁寧な手つきで「それ」を取り出した。

実は、この提督——淀川広海少年は、少々特殊な性癖を隠し持っていた。

ここまでの展開で察しがつくかもしれないが——そう、「女装」である。

キツカケは、彼がまだ12歳で家族3人を喪ったばかりの中学一年生の頃。

両親の死も、無論彼にとってつらく悲しい出来事であったが、それと同等以上に、姉の死が広海の心に影を落としていたのだ。

「お姉ちゃん……」

広海の姉は、優しく美しく聡明な少女であった。才色兼備を体現したような娘は両親の自慢だったし、弟である彼も3歳上の姉のことを誇りに思い、強く慕っていたのだ。

シスコンというそしりもあながち的外れではなかったが、そう言うてからかう彼の友人たちも、実際に姉を目にすると「そうなるのも無理はない」と納得し、彼を羨むくらいだったのだから。

両親と共にその姉が亡くなってしまい、ぽっかり穴が空いたような彼の心は、ふとした偶然から姉の中学時代の制服を目にして、衝動的にそれを身に着けることで僅かながら慰められることになる。

姉の服を着て鏡を覗いている間だけは、優しい姉が甦ったような錯覚に浸ることができたのだ。

少しでも姉の「再現度」を上げるため、彼は努力を欠かさなかった。

姉とよく似た黒髪を肩にかかるくらいにまで伸ばし、シャンプーやリンスで入念に手入れする。

スキンケアについても同様だし、不要な筋肉がつかないよう、けれど無様にたるんだり太ったりしないよう、適度なジョギングと美容体操で身体を引き締める。

年頃の少女が読むような雑誌の類いもこっそり購入して、メイクや着こなしの基本についても学んだ。

知性に欠けた「姉」というのも見たくはないので、自然と勉強にも力を入れるようになった。

つまり彼が文武両道の優等生になったキツカケは、姉になりきりたいという（いささか歪んだ）動機があったからなのだ。

もっとも、始めた当初こそ姉への純粋な慕情に基づくものだったが、2年あまりの時間が経つと、彼の女装はいつしか性的な欲望に由来する要素も入り混じるようになっていた。

世間一般に受け入れられにくい「趣味」であることは、彼自身も理解していたので、中学卒業と海軍入隊を機に、広海はソレを止めようと決意したのだが……。

配属されたこの鎮守府で、彼は通称・任務娘と呼ばれる大淀に出会ってしまった。

大淀は——彼の姉によく似ていた。

容貌そのものは瓜二つというわけではなかったが、親戚かと思うくらいには似ていたし、すらりとした体躯や優美な黒髪、何より生真面目だが淑やかで思いやり深い性格が姉を想起させられずにはいられなかった。

だからこそ、彼は大本営の「手違い」を強く非難することもせず、むしろ進んで大淀の事務仕事を手伝っていたのだ。

言い方は悪いが「姉の代償物」である大淀がいたからこそ、彼は安定していたのだとも言えるだろう。

そして——その安定機構バランスサーたる彼女がこの鎮守府を去った以上、彼が

己れの精神の安定を求めて、3年前と同じような行動に走るのも、ある意味、当然の帰結と言えるかもしれない。

着ていた白い寝間着をパンツごと脱ぎ捨て、畳んで部屋の隅に置くと、淀川提督は躊躇いを振り切つて、先ほどダンスから取り出したモノ——大淀の下着を身に着け始めた。

ボトムは薄いブルーのフリル付きショーツだ。比較的シンプルなデザインではあるが、サイドの部分が紐のように細くなっていて、履きこみは深いが実は意外に露出度が高い。

少年と大淀の身長は2センチ差(ちなみに少年のほうが低い)で、細身の体格も似たようなものだが、少年と言えども男なので、前に「余計なブツ」がある分、本来おさまりが悪い……はずなのだが。

ショーツに足を通し、腰まで引き上げた彼の鼠径部から股間にかけてのラインはすつきりしたものでモッコリした見苦しい膨らみは見受けられない。

——まさか、姉になりきる女装のために、去勢まで実行していたのだろうか!?

無論、そんなワケはない。ネットで調べた知識に基づいて、医療用テープによる男性器の隠蔽、いわゆる「タック」を行っているだけだ。

睾丸を体内に押し込んだうえで、陰茎を後ろに倒してテープで固定、さらに余った陰囊の皮を陰茎を隠すように寄せて貼り合わせる。言葉にすると簡単そうだが、慣れないうちはなかなか巧くできない技術だ。

とは言え、巧くできた時の実例は彼を見ての通りだった。

その次にはショーツと同じ色のフルカップブラジャーを手に取り、肩紐に腕を通す。後ろ手にホックを留める様子も慣れたものだ。

フルカップとは言え、大淀は軽巡娘としてもあまり胸の大きい方ではないのでそのサイズはたかが知れている。

それでも、少年の真っ平らな胸板の上では布地が余るはずなのだが、彼は四回折つたティッシュをパッド代わりに入れたうえで、脇の方のあまった肉を寄せて詰めることで、不自然ではない程度の膨らみ

を形成していた。

昔(というほどでもないが)取ったきねづかというヤツだろうか、無駄に高い女装技術である。

肩紐の位置や長さを調節して身体に馴染ませたところで、今度はコバルトグレーの長袖ブラウスに袖を通す。

身体の線に沿ったタイトなデザインのため、男女の骨格差で肩幅などがキツいかと思われたが、意外にもぴったりだった。

不思議に思いつつ深紅のネクタイを締めた後、ブラウスの上から前開きで半袖のセーラー服に似た白い上着を羽織って、胸元の飾り紐を結び、紺青色のプリーツスカートを履く。

(これ……傍から見ても危なっかしかつたけど、自分で履くとなおさら……)

いや、形状的にはスカートではなく「超ミニ丈の行燈袴」というべきなのかもしれない。そのため、左右の腰の部分の肌が大胆に露出しており、着用者の羞恥心を大いに刺激するのだ

僅かに顔を赤らめながらベッドに腰かけて、特徴的な形状の茶色いニーハイソックスに足を通し、さらにソールの厚い変わった形のロングブーツを履いてから立ってみる。

「ん……思ったより歩きやすいかも」

姉はこのような厚底ブーツの類いは持っていないのでちよつと心配だったが、下手なハイヒールよりはよほど楽に歩くことができた。

最後に首の後ろで馬の尻尾の如く髪を束ねていた紐を解き(実は解くと肩を覆うくらいの長さはある)、代わりに碧いカチューシャを着ければ、大淀の制服姿が完成だ。

「あつ、と。コレも忘れちゃだめだよね」

いや、もうひとつ大事なものがあつた。

予備のものなのか、なぜか机の上に残されていたアンダーリムの黒縁眼鏡を手に取り、折り畳まれたつるを開いてかける。

ほんの一瞬、目まいのような感覚とともに視界がブレたような気がしたものの、すぐに収まったことからして、それほど強い度が入って

いないようだ。

「……………」

無言のまま——しかし、強い期待を抱きながら、文字通り頭のとっぺんから爪先まで完全に大淀の格好になった少年は、部屋の一角の壁にかけられた鏡を覗き込んだ。

「！」

期待以上だった。

そこには、少なくともパツと見には「大淀」としか思えない「若い女性」が映っていたのだ。

至近距離から観察すれば、確かに数日前までこの部屋にいた大淀とは別人であることがわかるだろうが、「別の鎮守府から来た大淀だ」とでも言えば誰も疑うまい。

もし、このままの格好で鎮守府内を歩き回り、大淀としてふるまったら……………」

そんなことを妄想しただけで、彼——いや「彼女」の鼓動は早まり、言いしれぬ興奮の渦が体内の深奥部で渦巻くのを感じた。

堪えきれずにベッドに寝転がり、イケナイアソビに耽ろう……………」としたところで、「ドンドンドン！」とやや乱暴にドアがノックされる。

「は、はいっ！」

素早く置き上がり、思わず裏返った声で返事してしまう。

「しまった」と思うよりも早く、(迂闊にも鍵をかけていなかった)ドアが開かれ、ピンクブロンドの長い髪をリボンで結わえた女性——明石が入って来ていた。

「灯りがついてたからもしやと思ったけど、やっぱり帰ってたんだ」
幸い「彼女」を本物の大淀と見間違えているようなので、悪いとは思わがそれに便乗させてもらおうことにする。

「え、ええ、ついさっき」

小声かつできるだけ高いトーンの声で返事をする。

「守谷提督のことは……………」当然知ってるよね。その影響で、この鎮守府も随分と艦娘が減っちゃったけど、大淀が帰って来てくれてうれしいよ」

大淀の帰還を喜ぶ明石の笑顔が心に痛い。

本物の大淀からはすでに退役願が出されているのだ。しかも、同封された手紙には「部屋の私物などは適当に処分してください」とあったので、今後こちらに顔を出す気もないのだろう。

(糠喜びさせちゃっていいんだろうか……)

とは言え、ここで自分の「正体」を明かすことはさすがにためらわれた。

そんな「大淀」の葛藤を知ってか知らずか、明石は彼女の手を取る。「お葬式には参列できなかつたけど……今ね、この鎮守府に残った艦娘有志で「守谷提督をしのぶ飲み会」をやってるんだ。大淀も来なよ」

確かに本物の大淀は、正式な老提督配下ではなかった(形式上は大本営からこの鎮守府への派遣という形になっている)にも関わらず、彼のことを非常に強く信頼し尊敬していた。

明石の言うような催しがあれば、必ず参加するだろう。

「——わかりました。行きます」

明石に手を引かれて着いたのは、戦艦・空母寮の一角に拵えられた休憩室だった。8畳ほどの広さの畳敷きの部屋に長机とちゃぶ台が置かれ、その周囲に数人の艦娘がたむろしている。

「おー、おふたりさんも来たんやな」

ライトブラウンの髪をツインテールに束ねた関西弁の小柄な女性が龍驤。一見、ミドルティーンの小娘にも見えるが、実は鳳翔に次ぐ軽空母陣の古株だ。

「——お先にいただいてるわ」

酒の注がれたコップを片手に目礼する、龍驤と対照的に大柄でスタイルのよい、サイドテールの女性は加賀。かの誇り高き「一航戦」の主力のひとりで、一見クールに見えて、実は激情家という噂を聞いたことがある。

「はあ……せっかく航空戦艦になってレベルも80近くまで上がったのに、提督が亡くなるなんて……不幸だわ」

半ば自棄ぎみに杯をあおっている黒髪オカッパの女性は、山城だろ

う。愚痴を漏らしているのが、泣き上戸なのか素なのか判別しづらいが……。

「人の天寿ばかりは致し方あるまい。まして、守谷提督はあのお歳だ」

いつもはきびきびと凛々しい立ち居振る舞いを見せるシヨートカットの女性——重巡娘の那智も、さすがにしんみりしているようだ。

「今の時代で62歳で死ぬのは早い気もしますが……苦しまずに逝かれたようなのが救いでしょようか」

おそらくお手製であろうツマミを机に並べているのは「全ての空母の母」こと鳳翔。一線は退いていたものの、レベルは60を超えており、新米航空母艦たちを指導する立場にある。

「残留を希望したのは、この5人だけ？」

「ほかに駆逐艦の朝潮と暁、五月雨も居残り希望組だけど……さすがにお酒の席に誘うのは自重したわ」

賢明な判断だ。

——というか、工作艦の明石はともかく、どう見ても女子高生くらいの年代の軽巡娘に分類される大淀が酒を飲んでもいいものなのだろうか。

「ふっ……何を今更。結構イケるクチだと聞いているぞ」

「この場は無礼講です」

那智と加賀のそんな言葉とともにコップに並々と注がれた日本酒が渡される。

（ええい、ままよー！）

酒を飲むのは初めてだったが、覚悟を決めて口にする「大淀」。

生まれて初めて味わう酒は、かなり上質なものであったこともあつてか、意外なほど飲みやすく、たちまち「彼女」の味覚を魅了した。

「——いい、お酒ですね」

「~~メ~~張鶴の「純」です……守谷提督も、このお酒好きだったんですよ」

鳳翔の言葉に、その場に集った皆がしんみりした——のは、ほんの

一瞬で、すぐに元の賑やかさが戻ってくる。

あるいは、意図的に湿っぽい空気になることを避けようとしているのかもしれない……というのは少々うがち過ぎだろうか。

そんな場の雰囲気の流れ、またお酒の飲みやすさにも騙され(?)て、ついつい杯を重ねてしまう「大淀」。

初心者がそんな飲み方をしたら酔いつぶれるのが道理なわけだ……。

「あら、珍しい。もうグロッキーなんですか？」

「まあ、大淀は大本営と此処との往復で疲れてたんやろ。しゃあないわ」

山城と龍驤のそんな言葉を耳にしたのを最後に、「彼女」の意識は眠りの中へと滑り落ちていくのだった。

— 03 —

翌朝、軽い頭痛とともに目を覚ました「彼女」は、軽くぼやけた視界の中で、そこが自分の部屋ではないことに気付き——そして、昨日の顛末を思い出して慌てて飛び起きる。

「彼女」が寝ていたのは(ある意味、当然とも言えるが)大淀の私室のベッドだ。昨晚、酔いつぶれたあと、誰かが運んでくれたのだろう。

掛け布団をめくると、さすがに寝間着に着替えさせる手間まではかかなかったようで、ブーツを脱ぎ、眼鏡を外しただけの制服姿だった。

ベッドから降りてブーツを履き、無意識に卓上に置かれた眼鏡を取ってかけてから、「大淀」は改めて鏡を覗き込み、身だしなみをチェックする。

制服のまま寝ていたのに、なぜか殆ど皺になっていないのは、謎素材で作られている艦娘用制服だからかもしれない。

顔色は……あまりよろしくはないが、キチンと洗顔してから軽くメイクを施せば、それなりに見られる様になるだろう。

ごく自然にそう判断しかけて、ふと我に返る。

——何を考えているのだ。自分は(本当は)大淀ではない。配下に

ひとりの艦娘もいない半人前とは言え、一応提督ではないか。

しかしながら、鏡を見ていると、あまりに似合っているせいか、自分が大淀の格好をしているのが至極当然のような心持ちがしてくるのだ。

とは言え、いつまでもこんな茶番を続けられるわけもない。昨夜は誰にも「正体」を気取られなかったが、昼の明るい光の下ではいつバレてもおかしくはないのだから。

無理やり自分にそう言い聞かせて、制服を脱ごうとした「大淀」だったが、残念ながら1分ばかり行動に移るのが遅かった。

——コンコンコンツ

「大淀、起きてる？」

昨夜よりは幾分穏やかなノックとともに聞こえた明石の声に「あつ、はい、起きてます」と反射的に返事してしまったのだ。

——ガチャツッ!

「いやあ、昨日は随分疲れてたみたいだけど、大丈夫？」

当然のように入ってくる明石。提督として知る限りでも、このふたりは仲が良さそうだったので、そのあたり、あまり遠慮がないのだろう。

「え、ええ、まあ」

多少頭が重い気もしたが、ひどい頭痛や吐き気に悩まされているというわけでもなかったので、「彼女」は曖昧に頷いた。

幸い、朝の光の中でも、明石は「彼女」が大淀であることを疑っていないようだ。

「そっか。あ、でも、外出してたし、それなりに飲んでたから、汗かいてるわよね。せつかくだから、お風呂に入りましょ」

「!、い、いえ、わたしは……」

結構ですと言う前に、右手を引かれて部屋から連れ出され、風呂場に連行されてしまう。

この鎮守府には、入渠（修理）用のモノとは別に、24時間入れる大人数用の浴槽が用意されている。

これは、出撃、遠征、演習などで海に出た艦娘たちが帰ってきたと

き、たとえ傷ついていなくてもすぐに温かい風呂に入れるように……
という亡き守谷提督の配慮で作られたものだ。

艦娘なら、任務時以外はいつでも利用してよいことになっており、これは名目上は提督の指揮下のないアイテム屋娘・明石と任務娘・大淀も例外ではない。

——現実逃避気味にそんなことを考えながら、今「彼女」は明石と並んで乳白色のお湯に浸かっていたりする。

一応、タオルできわどい場所は隠しているとは言え、全裸になった（残ったのは眼鏡とカチューシャくらいだ）のに、「彼女」の正体に気付かないというのは、（本物の）大淀の親友として如何なものなのだろう。

そんな想いを抱きつつ、チラリと明石の方に視線をやると、お湯から上半分がのぞいているその豊かな膨らみが目に入ってきた。

ソレを見た瞬間、「彼女」の胸に沸き上がってきた感情は、男としての欲望でも童貞らしい羞恥でもなく……怒りにも似た羨望だった。

反射的に自分の、「何人かの駆逐艦娘にも確実に負けているであろう」胸のラインに視線を落とし、知らず知らず溜息が出てしまう。

「あはは……ま、まあ、大淀はそのスレンダーさが魅力なんだし、そんな落胆しなくてもいいと思うけど」

「どうやら「彼女」の行動&心の動きは明石に覚られていたらしい。

「——それは、持てる者だからこそ言える持たざる者への憐憫ですね」

視線で艦娘が殺せたらと言わんばかりに怨念のこもった「彼女」の目つきに、「いや、でも、山城さんとか加賀さんとかに比べたら、わたしなんて全然よ？」と慌てて明石は言い訳する。

そんな友人らしいじゃれ合い(?)を経て、ほんの少し明石との親交を深めた後、「彼女」は風呂から上がり、この風呂付きの妖精さんから簡易洗浄乾燥の終わった制服と下着を受け取る。

「いつもありがとうございます」

キチンと妖精さんにお礼を言ってから、バスタオルで丁寧に体を拭き、下着を着け、アップにしていた髪を下ろしてブラシで整え、セー

ラー服に似た大淀の制服を着用する。

その一連の行動には、まったく躊躇いや遅滞がなく、ごく自然なものだった。

そのまま、同様に着替えを終えた明石と連れ立って艦娘用食堂に足を運び、朝食を摂る。

入浴して汗を流したおかげか軽い二日酔いは吹き飛んでいたの、いつもの朝定食B（大豆製品を中心にしたメニューが多く美容に良いのだ）を、美味しくいただくことができた。

「あー、おはようございます、大淀さん。お戻りだったんですね。あとで事務処理の件で相談にのっていただきたい件があるのですけれど、お願いできますか？」

「おはようございます、五月雨さん。ええ、私でお役に立てるなら喜んで」

「大淀さん、おはようございます。駆逐艦娘寮の備品関連の手続きで、お願いしたいことがあるのですが……」

「おはようございます、朝潮さん。その件でしたら、明石に頼んだ方が早い——ですよ？」

「はいはい、了解したわ。朝潮ちゃん、後で詳しく聞かせて」

食後のお茶の合間に、同じく朝食を摂りに来た「顔なじみの駆逐艦娘」たちとの会話もソツなくこなした後、トレイを返し、共同洗面所で歯を磨いてから、「彼女」はいったん部屋に帰った。

「今日必要になりそうなのは……コレとコレ、それからコレですね」

「愛用のバインダー」に必要書類を挟み、それを片手に提督の執務室と隣り合った明石と共用の仕事部屋へと向かう。

「大淀さくん」

「明石さーん！」

いざ勤務時間が始まると、朝、食堂で出会った五月雨や朝潮ばかりでなく、退役や転属を控えた者も含めた他の艦娘たちも断続的にふたりのもとを訪れ相談を持ち掛けてくるので、出撃する艦隊がいなくても関わらず、結構忙しい。

14時過ぎに明石と交代でなんとか昼食を摂り、再び仕事。

午後9時半を回った頃によろやく今日の分の仕事が終わったので、機械弄りに夢中の明石を引つ張って、かろうじて開いていた（閉店は午後10時だ）鳳翔が営む居酒屋兼小料理屋へと滑り込む。

「すみません、鳳翔さん、こんな時間に……」

「いえいえ、守谷提督の分までおふたりには事務関連の負担をかってしまっているのしょうから。根を詰め過ぎないよう、気をつけてくださいね」

鳳翔の心づくし——鱈の西京焼きと茄子の味噌田楽、しめじとほうれんそうのおひたしに、山菜の炊き込みご飯という献立を、有り難くいただく。

美味しい夕食で少しだけ気力と体力を回復させ、そのまま鎮守府の一角にある私室まで戻り、さて寝る前に少し本でも読もうか——と、考えたところで、よろやく「彼女」は我に返った。

「……何やってるんだろ」

素に戻った口調と声でつぶやく。

元々は秘密の遊びというかちよつとした息抜きのつもりだったのだ。

この部屋の中で大淀の服を着て大淀になったつもりで演技して、それでこの鎮守府に来て以来、少しずつ溜まっていたストレスを発散して、それでおしまい……にするはずだった。

しかし——この24時間で「彼女」は知ってしまったのだ。

部屋に籠り、鏡に映った自分を見つめるだけのナルシシステイックな小さな楽しみに留まらず、広い外に出て、出会う人たちすべてに「任務娘・大淀」と認められ、慕われ、頼りにされるといふ喜びを。

それは、他者から認められたいという他者承認欲求と、自分が理想とする姿になりたいという自己承認欲求の両方を一度に満たす、禁断の行為であった。

淀川広海少佐は、この鎮守府において、ことさら嫌われたり見下されていたわけではないが、それと同時に、誰かに必要とされたり尊敬されていたりしたわけでもない。

特に居てもいなくてもよい存在。強いて言うなら、いれば任務娘や

秘書艦たちの書類仕事が少しだけはかどる……くらいがメリットだろうか。

しかし、「大淀」は違う。大本営との連絡役として、任務関連の書類仕事をてきぱき処理する事務官として、さらに艦娘たちの様々な悩みや相談に応える「頼りになるお姉さん」として、鎮守府になくてはならない存在だ。

信じ難い偶然の結果、今日一日、「彼女」はその「任務娘の大淀」として大過なく過ごすことができた。

仕事面で特にわからなかったことやミスはなかったはずだし、明石を始めとする「友人・知人」との付き合いもそつなくこなせたと思う。（もしかして自分は、このまま大淀として生きていくことができるのでは？）

そんな益体もない妄想すら浮かんでくる。

——そう、バカげた話のはずだ。なのに、なぜかその想いを振り払えない。

「……とりあえず、考えるのは明日にしましょう。疲れた頭でこれ以上考えてもムダだわ」

自分に言い聞かせるようにそうつぶやくと、「彼女」は大淀の制服を脱いでハンガーにかけ、そのままタンスから取り出した寝間着に着替えると、当たり前前のようにこの部屋のベッドに身を横たえて、眠りにつくのだった。

—04—

「大淀」が鎮守府に「戻って」から3日が過ぎた——そう、結局「彼女」は、そのまま「任務娘・大淀」としてこの鎮守府で過ごしているのである。

いかに、淀川少佐が3週間ほど守谷提督や任務娘の事務仕事をする程度手伝っていたとは言え、たったそれだけの経験で、本来非常に多岐にわたる大淀の仕事全てに習熟できるはずがないのだが……。

不思議なことに「彼女」はその大淀としての責務を大過なく果たしていた——まるで本物の大淀が乗り移ったかのように。

何か未経験の業務に直面した際も、なんとなく「こうしたらいいのではないか」と感じたことを実行すると、大概それで問題なく進めることができるのだ。

そう言えば……と、朝、洗面所で鏡を覗きこみながら、ふと気付く。肩を覆う程度の長さだったはずの黒髪が、僅か3日で腰まで伸びているのはまだしも（いや、それも十分あり得ない話だが）、眼鏡のレンズ越しに見える瞳の色が、いつの間にか黒茶から深い藍色に変わっているのだ。

実はそれ以外にも、髪を除く全身の体毛が薄くなり、絆創膏で押さえ込まれた陰茎は小さく、逆に乳首はひと回り大きく敏感になっているのだが、本人は未だ気づいていなかった。

それはともかく、髪の毛と瞳の色の件だけでも、自身に異変が起きていることは想像できたが、「彼女」はそれを厭う気にはなれなかった。むしろそれで本物の大淀に少しでも近づけるなら、と歓迎する気配さえあった。

とは言え、淀川広海としての人生を完全に捨て去るふんぎりはまだついていないらしく、周囲の艦娘および大本営には「淀川提督からは一週間の休暇申請が提出されています」と伝えてお茶を濁している。自分でこっそり書いて出した休暇申請を、「大淀」としてきばき処理して大本営に送っているのだから、何と言うマツチポンプ！

もっとも、休暇をとっているはずの本人が任務娘としてそれなりに忙しく働いているので、サボリというのはまた違う気もするが。

しかしながら、艦娘たちはともかく、大本営的にはいかに小さかろうと鎮守府に有事に指揮する提督がひとりもないという状態はいささかマズいわけで……。

その日の午後、大本営からの辞令を携えて、急ぎよ若い（と言っても20歳は超えているだろう）男性提督が、この小さな鎮守府に赴任したのだった。

「高木醜醐少佐です。士官学校を卒業したての若輩者の身ではありますが、本日付けで、この鎮守府に提督として配属されることになりました！」

形式上大本営から派遣されている、ある意味先任下士官に近い立場の大淀と明石の仕事部屋を訪れ、まず最初の着任の挨拶をする高木提督。

促成栽培のなんちゃって士官な淀川と異なり、正規の士官教育を受けているだけあって、敬礼の仕方が非常にサマになっていた。

180センチを僅かに超える程度の長身で、マッチョと言うほどではないが軍人らしいがっしりした体格をしている。

もつとも、熱血体育会系といった暑苦しさはなく、どちらかと言うと爽やかな覇気のある若武者といった雰囲気だ。青年士官としてはある意味理想的なタイプと言えるだろう。

そんな彼に対して「彼女」が抱いた第一印象は「格好いい」、「頼りになりそう」という、なかなか好意的なものだった。

ただし、前者については（少なくともこの時点では）「カッコいい！抱いて!!」的な性的魅力云々とは無関係だ。

強いて言うなら、特撮変身番組を見た少年がその主人公に憧れる気持ち——というのが近いだろうか。

そして後者については、実際に仕事を始めてみたところで——さすがに書類仕事面では未だ拙い部分が多々あったものの——「艦娘を指揮して深海棲艦と戦う提督」としてはなかなか優秀であることが推察できた。

念のため、同僚の明石や臨時で秘書艦を務めている五月雨、ベテラン中のベテランである鳳翔などにもそれとなく聞いてみたところ、返って来た答えは似たようなものだった。

（この人になら、この鎮守府を任せられそう）

僅かに残った心配之種も、彼の出現によって解消されたことで、ついに「彼女」は本来の身分を手放すことを決意する。

「高木提督、休暇中の淀川少佐から手紙が届きました」

大本営に直接送りつけてもよかったのだが、「彼女」は、あえて新任提督に（密かに自室でしたためた）「淀川広海少佐からの退役願いが同封された封筒を手渡す。」

——その後、軍務歴わずか1カ月足らず、しかも艦娘を指揮しての

戦歴0という異例の提督である淀川広海少佐の退役願は、「なぜか」さしたるトラブルもなく大本営に受理されることになる。

そんな経緯にも関わらず意外な額の退職金が支払われたのは、半年間の士官学校在学期間も「軍務」に計算されたのに加えて、着任当初に諸々のトラブルがあつたことへの口止め料が含まれているのかもしれない。

「彼女」はそのお金に淀川広海の貯金の大半を足した額を、本物の大淀の口座に「艦娘の退職金」という名目で振り込んだ。

大淀からの退職願を大本営に提出せず、その軍籍が生きている以上、当然のことながら軍から退職金の類いが出るわけがない。それを彼女が不審に思うかもしれないからだ。

そうして自分なりのやり方で「本物」に対する懸念を解消した後——「彼女」は胸を張って、この鎮守府の「任務娘・大淀」として生きていく決意を改めて固めたのだった。

—05—

「彼女」が「大淀」として暮らし始めてから、3カ月あまりが過ぎた頃、ひとつの転機が訪れた。

とある北方海域の作戦で、この鎮守府の主力艦隊が首尾よく北方棲姫と呼ばれる強力な深海棲艦の首領格を撃破した際、珍しい基本艦装を入手したのだ。

——ちなみに、深海棲艦を撃破した際、何故かこうして基本艦装と呼ばれる代物が入手できることが多い。各鎮守府での「建造」も生身の艦娘そのものを作るのではなく、この基本艦装を製作するのだ。その基本艦装を、大本営の秘密工廠で、適合する「候補者」に移植（厳密には異なるが、こう表現する方がわかりやすい）することで新たな艦娘が生まれ、艦装を入手した鎮守府に派遣される——という仕組みだ。

しかし、この時、入手された艦装は、「普通の人」を「艦娘」に変えるためのものではなかった。

「これは……もしかして私の!?!」

「だね。間違いない、軽巡洋艦大淀」のものだよ」

明石が工作艦娘として太鼓判を押すが、そう言われるまでもなく、
「彼女」は、ひと目見た時からそれが自分のものだど理解していた。

そして、これを装備すれば、単なる事務艦ではなく、武艦——軽巡娘として戦うことができるようになるということも。

戸惑い続けるように、高木提督の方へと視線を向ける。

しかし、そこには、大多数の艦娘たちの前で見せる自信と威厳に満ちた司令官も、また、書類の書き方がわからず頭をかきながらバツの悪そうな顔で大淀に助力を乞いにくる青年将校”としての姿もなかった。

嬉しいような、寂しいような、そして何かを堪えるような複雑な表情をする高木を見て、
「彼女」はハツと胸をつかれる。

——後から思い返せば、この時、初めて「彼女」は高木醍醐のことを、単なる上司や優秀な軍人ではなく、ひとりの好ましい個人として認識したのかもしれない。

けれど、「彼女」が見ていることに気付いた提督は、フツと表情を緩めて苦笑した。

「大淀さん——いや、大淀。この艦装を着ければ貴艦あなたの身柄は、大本营直属からこの鎮守府の俺の配下へと所属が変わることになる。

当然、戦力としてもアテにさせてもらうから、演習や遠征、さらには出撃といった実戦任務に組み込まれることになるが……どうする？」

提督は最終的な判断を委ねてくれたが、「彼女」はすでに心を決めていた。

「提督、特に差し支えなければ、私、その艦装を受領して軽巡・大淀として戦いに出たいと思います」

海に出て深海棲艦と戦うことに、全く恐れを抱かないと言えばそれは嘘になる。

しかし、任務娘としてこの鎮守府で多くの艦娘たちと接し、彼女達が出撃するのをただ見送ることしかできなかったことに対して、自分にも戦う力があればと夢想したことは一度や二度ではない。

“彼女”がこの鎮守府に赴任して以来、幸いにして轟沈した艦娘はいないが、親しくなった艦娘たちが戦闘で傷つき、中破や大破状態で帰還することは日常茶飯事だった。

3カ月前に着任して以来、高木少佐は新人提督としては非常に優秀な戦果を挙げていた(でなければ北方棲姫の撃破など叶うまい)し、それに伴って配下の艦娘を増やし、かつ効率的な育成と運用に励んでいた。

しかしながら、勝負運はともかく建造運がいいのか悪いのか、彼が“建造”を試みると、妖精さんたちの手で出来上がる基本艦装は戦艦娘用か駆逐艦娘用の両極端なことが多い。

空母に関して何隻か正規空母を引き当ててはいるのでまだ良いとして(ただし軽空母は0だ)、その分、軽・重巡洋艦の不足が深刻だ。故・守谷提督時代から引き継いだ那智以外に、重巡娘は妙高と最上のみ。軽巡娘も長らく多摩、鬼怒のふたりで、つい先日、夕張が加わったばかりだ。

これに対して戦艦娘は、守谷時代から居残った山城に加えて、比叡、霧島、伊勢、日向、陸奥の6人。

空母娘は、半ば引退状態の鳳翔を除くと、元からいた龍驤、加賀に加えて、赤城、蒼龍、飛龍の一・二航戦が揃い踏み。

駆逐艦娘は、五月雨を筆頭にした残留3人のほかに、すでに10人が就役済み。なにげに睦月・吹雪・綾波といったネームシップが多いのが特徴だろうか。

このような(ある意味)イビツな艦種構成のため、軽巡洋艦としての大淀の参戦は、確かに大きな助けになるだろう。

唯一の懸念は、“本物”の大淀ではない“彼女”がその艦装を装着することができるかだったが、奇妙なことに、なぜか彼女には「できる」という確信があった。

それを実証すべく、提督と明石、さらに最近明石の助手のようなことに自主的に手を出している夕張が見守るなか、“彼女”は次々に艦装を身に着けていく。

背中には大きめの水上機格納庫が付いた艦装を背負い、右肩には帝

国海軍最長の空気式カタパルトを装着する。

左手には著名な15・5cm三連装砲を主砲として構え、腰には副砲として8cm高角砲を付ける。

いかに艦娘用にリサイジングされているとは言え、「普通の人間」ならば持ち上げるだけでひと苦労なはずの鋼鉄の艦装。しかしそれを複数身にまといつつも、「彼女」はそれほど負担を感じていなかった。

それどころか、ひとつひとつ身に着ける度に、自分に欠けていたものが満たされるような深い充足感を感じてさえいたのだ。

艦娘という存在に関しては諸説あるが、「霊的な兵器である艦装と適合する素質を持ち、(手術などで)その素質を開花させた一種の人造魔法(魔砲?)使い」というのが、現在の第三世代型艦娘に関するもっとも有力な見解だ。

そしてその説に則って言うなら、大半が「人造」であるのに対して、「天然物」の艦娘というのもごく稀に存在するらしい。

元からその資格があつたのか、それともこの3カ月の大淀としての暮らしのなかで少しずつ開花していったのかはわからないが、どうやら「彼女」は、その貴重な「天然物」であつたようだ。

すべての艦装の装着を終え、自分と艦装が一体化——いや、自分が艦娘として完全に「覚醒」したことを理屈ではなく感覚で理解した「彼女」は、自然と姿勢を正し、提督に向かって敬礼する。

「提督、軽巡大淀、戦列に加わりました。

艦娘としては新米の身ではありますが、これでも「かつて」は連合艦隊旗艦も務めた経験もあります。

成長したあかつきには、艦隊指揮、運営はどうぞお任せください」無意識にそんな言葉を口にする。これも艦娘にはよくあることで、大戦時に活躍した軍艦の船魂としての記憶が、それを受け継ぐ艦娘の中で自らの「過去」として認識されるのだ。

「了解した。貴艦の着任を歓迎し、勇戦に期待する——でも、無理はしないでくれ。幸い戦局は安定しているから、少しずつ経験を積んでくれればいい」

高木提督は、そんな彼らしい言葉で、「彼女」の挨拶に返えてくれた。

この瞬間から、「彼女」は本当の意味で彼の配下の艦娘・大淀になったのだった。

— 06 —

さて、第一のターニングポイントは、間違いなく大淀としての艦装を身に着けたときだったが、実はこの時点では、少なくとも生物学的な観点では、「彼女」は未だに「彼」であった。

確かに167センチと（日本人女性としては）長身ながら、体格そのものはいささか華奢で、肩のラインも撫で肩気味。肌は色白く滑らかで、髭や脛毛も見当たらず、大和撫子らしい真つすぐな黒髪もキチンと手入れされている。

任務娘として提督に様々な連絡事項を告げるその声も優しいメゾソプラノ（今では意識せずとも女声が出るようになっていた）。口調も、きびきびしてはいるが淑やかで女らしいものだ。

美女美少女揃いの艦娘たちの中では容貌そのものはやや地味な方だが、それでも例えば普通の高校生として過ごしていれば、クラスで席が隣になった男子生徒に「ラッキー！」と思わせるくらいの愛らしさは十分備えている。

だが、この時点では、まだ「彼女」の股間には（普段タックした状態なので意識していないが）一応「男の徴」が付いており、反対に子を宿す器官その他は「未実装」ではあった。胸もペタンコなままだ。

しかし——軽巡娘として何度かの演習、そして遠征任務を経た後、いよいよ大淀は初の実戦に赴くことになる。

駆逐艦娘の初実戦なら鎮守府正面海域の近海警備か南西諸島沖の警備が定番だが、軽巡であり、ある程度訓練を重ねて練度が上がっていたこともあって、大淀は「南1号作戦」へと連れて行かれることになった。

しかも、実戦経験を稼がせるつもりか第一艦隊旗艦としての出撃だ。

もつとも、僚艦はベテランの重巡・那智と軽巡として先輩格の多摩、その他の駆逐艦も練度の高い五月雨、朝潮、暁……という構成なので、実質、彼女のパワーレベリングみたいなものだ。

それでも、いきなりバシー島沖や東部オリョール海に送り込まない分、堅実な高木提督らしい采配と言えた。

実際、三度の交戦を経ても、大淀以外の艦娘は被弾0、その大淀さえ、最後の敵機動部隊からの爆撃をかわしきれずにいくつか被弾し、小破した程度だった。

問題はその後だ。

日常生活での負傷と異なり、深海棲艦との交戦でつけられた傷はある種の「呪詛」が込められており、自然回復するということがない。

このため、どんなに軽いかすり傷のようなケガに見えても、治すためには入渠施設の利用——いわゆる「ドック入り」が必要となるのだ。

経済的合理性を重視する提督だと、小破以下の傷の回復は資材の無駄遣いだとそのままにして出撃させることもあるのだが、高木提督はどちらかと言うと「HPが1でも減っていたら戦闘後にホイミをかける」タイプだ。

鎮守府のお財布にとっては正直あまり優しいとは言えないのだが、しかしだからこそ艦娘たちの信頼を得ているという面もあるので、一概に悪いとも言えない。

そして、「なぜか」「彼女」のことを気にかけている（高木提督が、小破とは言え、いくらか損傷を受けた大淀を、そのまま通常任務に戻らせるわけもなく……）。

「ふう……いいお湯♪」

当然、「彼女」も帰還報告の直後、そのままドック入りを命じられることになるのだった。

「でも、かすり傷程度で、こんな昼間からお風呂に入るなんて、なんだか他の方に申し訳ない気がしますね」

白い入浴剤……ではなく艦娘修復溶液の入ったお湯に浸かりながら、ひとり言を漏らす大淀。

「——気にすることはないわ。万全の体調で次の戦いに臨むのも、艦娘としての責務よ」

誰もいないと思っていたところで、思いがけず声をかけられる。

「その声は——加賀さんですか!？」

慌てて声のした方へと大淀が振り向くと、湯煙の中でふたつ隣の「浴槽」からザバリと上がる加賀の姿が見えた。

「お先に上がらせてもらっわね」

「あつ、はい」

バスタオルを巻かれてはいたものの、加賀の（とくに胸と尻のあたりの）女性らしい豊満な身体の曲線に、一瞬見とれる大淀。

その視線には性的なものが全くなく、感嘆と羨望が大半を占め、そこに僅かな劣等感が含まれているというあたり、完全に女性目線なのだが——まあ、今更だろう。

「いいなあ、加賀さん。私も、あんな風だったら……」

お湯の中で目を閉じ、ゆったりと身体を伸ばしてくつろぎながら、そんなことをつぶやく大淀。

なぜか、右手を頭に左手を腰に当てた「悩殺ポーズ」で浜辺に白いビキニ水着を着て立つ自分の姿が思い浮かぶ。

妄想そんぞうの中の大淀は、さすがに空母娘や戦艦娘たちには及ばないものの、それなりに豊かなバストと、引き締まったウエスト、そしてまろやかなヒップを備えた、極めて魅力的なプロポジションをしていた。
(もし、これくらい女らしい体つきなら……)

何だと言うのだろうか。

それが何かを、あえて自分の中で追及することはせず、大淀はいつしか入渠浴槽の中でたゆたいながら、うつらうつらと浅い眠りに落ちていた。

居眠りしていたのはほんの数分のことだろう。

——ビーーーーッ!

入渠時間終了を知らせるブザーが浴槽の上に設置されたスピーカーから聞こえてきて、大淀はハッと目を覚ました。

「あら、寝てしまってたみたいですね」

浴槽のお湯から上がると、体中に活力が満ち、手足に負ったはずの傷が残らず消えていることがわかった、わかったのだが……実は、それ以外にも大淀の身体に大きな変化が生じていた。

「え、うそ?！」

彼女の視線の先には、タイル壁に取り付けられた幅1メートル、高さ2メートル弱の鏡がある。

いや、より正確には、彼女が見つめているのは鏡ではなくそこに映った全裸の自分の姿であり……。

そこには、先ほど他愛ない妄想で思い描いた姿——よりは多少劣るが、まぎれもなく乳房と呼ぶにふさわしい胸のふくらみを持つ全裸の少女が、驚いたような表情でこちらを見返していたのだ。

あわてて視線を自分の胸元に落とすと、確かに「山」と「丘陵」の中間ぐらいの隆起がある。掌を当てると、キチンと触った感触とともに触られた感覚もあるので、偽乳^{ニセモノ}などではなさそうだ。

「… そうだ、下は……」

下肢の付け根部分に關しても気になったが、さすがにこんな場所を確認するのは色々な意味でマズい。

大淀は、タオルで身体を拭くのもそこそこに、あらかじめ用意しておいたバスローブを着て、自分の部屋に急いで戻った。

明石などが無遠慮に入ってきて来ないようキッチンと鍵をかけてから、ベッドの上上がり、バスローブの紐を解くと、俗にいうM字開脚の姿勢で股間をしげしげと覗き込む。

「……ない……そして、ある」

言うまでもなく、無くなったのは「竿」と「球」で、できたのが「谷」と「孔」だ。

正確な医学知識がないので断言はできないが、乳房の件も含めて、少なくとも大淀の肉体は、外見的には完全に女性のものに変化しているようだった。

それを知った時の大淀に心に浮かんだ想いは、1割の混乱^{おどろき}と2割の喪失感^{さびしさ}、そして残る7割近くは歓喜^{うれしさ}だった。

この鎮守府で、任務娘・大淀として居場所を得、さらに軽巡娘・大

淀として戦う力も得た彼女だったが、最後の最後の一線、とでも言うのだろうか。

周囲にひた隠しにしてはいたが、自分の本当の性別が男であるという点で、どうしても微かな罪悪感と疎外感を感じずにはいられなかったのだ。

けれど、その最後の障害ひっかかりが消えたことで、ようやく心の底から自分をこの鎮守府に集う艦娘たちの仲間だと認めることが、彼女にもできた。

その喜びの前では、男でなくなったことに対する感慨など、ささいなものだった。

「あ、これまでのAカップのだとキツイ。新しいの買いに行かなくちゃ♪」

決して、「もうブラジャーに詰め物しなくていい……どころか、より大きいサイズのブラが必要になった」ことが嬉しいからではない。

——はずだ、たぶん、メイビー。

—07—

さて、以上のような色々と複雑な経緯を経て、文字通り〃身も心も〃完全に艦娘・大淀となった彼女だが、それ以後はとり立てて大きな変化はない。

せいぜいが、親友である明石に「なんだかあなた、最近綺麗になっただわね」と褒められたり……。

手の空いた艦娘が持ち回りで務めていたはずの秘書艦Ⅱ第一艦隊旗艦に、〃なぜか〃指名されることが多くなり、最近ではほとんど専任になっていたり……。

おかげで元々の任務娘としての職務と合わせて、目が回るほど忙しくなった反面、高木提督と過ごす時間も大幅に増え、彼との距離が少しずつ縮まったり……。

その合間にキチンと出撃もこなし、着々と成果と練度を上げ、ついには「大淀・改」への改造を迎えたり……。

改造を経て、制服のデザインや艤装の一部が変化したのに加えて、

また少し胸が大きくなり、軽巡娘の「平均値」をようやく上回る大きさに達することができたり……。

でも、そのことよりも、提督に「改の制服、可愛いな。大淀によく似合っているよ」と言われたことのほうがうれしかったり……。

もともと簡単なものくらいなら作れたが、最近は暇を見つけては鳳翔に家庭料理のレシピやコツを教わったり……。

先日、「たまたま」休日が重なった際、提督に誘われて一緒に街へ出かけ、映画を見てお茶をしたり……。

その際、外食しようとした提督を自室に招待して、揚げ出し豆腐と南瓜の煮つけ、イワシの梅煮という覚えたての手料理を夕食に振る舞ったり……。

——まあ、そのくらいだ。

「そのくらいって……大淀、あなた、わかってて言ってるでしょう？」

明石が溜息をつき、傍らの夕張も「うんうん」と首を縦に振っている。

「えっと、その……はい」

さすがにここまであからさまだと（かつての少年時代も含め）恋愛経験ゼロの大淀でさえ、理解できる。

「やっぱり高木提督って、私に気があるんでしょうか？」

「もちろん。それにあなたもね」

鮮やかな明石の切り返しに、うぐつと言葉に詰まる大淀。

「大淀さん、提督のそばにいる時は、あからさまに空気が違うもんで呼ぶ夕張さえ、呆れたような目で彼女を見ている。」

まあ、居酒屋（鳳翔経営のそれではなく珍しく鎮守府外の店だ）で半ば惚気のような愚痴のような相談を聞かされたとあっては、それも無理はない。

「真面目な朝潮ちゃんがよく忠犬にたとえられるけど、大淀も相当な犬気質よね」

「ああ、わかります。澄ました顔で主人の横にお座りしているけど、

こっそりしつぽをブンブン振ってる秋田犬って感じですよね！」

明石も夕張も、ふたりで言いたい放題だ。

「で、でも、私は第一艦隊旗艦です。任務より私情を優先させるようなことは……」

そんなことを言ってしまうあたり、その「私情」の内容は大淀も自覚しているようなものだろう。

「『任務は遂行する』、『恋心おもいも守る』、両方やらなくっちゃあならないってのが艦娘のつらいところですよ〜」

どや顔で、どこかで聞いたような台詞を言い放つ夕張を冷たい目で見ながら、しかしその言葉自体には一理あると認めて、大淀に向き直る明石。

「で、大淀あなたはその覚悟できてるの？」

「——ちよ、ちよっと考えてみます」

ふたりにハツパをかけられた大淀は、いつになく自信なさげにそう答えるのだった。

その後も、高木提督と大淀の仲が、見ている周囲がじれったく思うほどのノロノロ運転で進むのと対照的に、軽巡大淀としての彼女の練度は順調に上がり……。

気が付けば、この鎮守府の誰よりも早く練度が最高レベルにまで達していた。

そして最高練度に達した任務からの帰還直後の、鎮守府の艦娘有志が開いてくれた「大淀さんレベル99おめでとう！」パーティーでの一幕が、冒頭の風景だ。

司令官としてはともかくプライベートではかなり奥手な高木提督だが、(何人かの艦娘にたきつけられたこともあり)思い切って攻勢に出たらしい。

小さな箱の中で輝く指輪は、誕生石や貴石のひとつもついでにない簡素な代物だが、その銀色の輝きは(提督と公認の仲になれるということもあいまって)大淀の視線を魅了して止まない。

(うれしい……でも私なんか受け取っちゃってもいいのでしょうか)

それだけに、色々引け目のようなものを感じずにはいらなかったのだが……。

緊張しつつも精いっぱい笑顔で指輪を差し出す高木提督の表情が曇りかけたのを見ると、そんな葛藤もフツ飛び、気が付けば引つ込められかけた指輪を素早く手に取っていた。

「提督、ありがたく受け取らせていただきます！」

「そ、そうか。ありがとう」

ホッとした表情になり一気に脱力する提督と、ワーツと盛り上がる周囲の艦娘たちのテンションの差が対照的だ。

囃子立てる艦娘たちの勢いに押され、高木提督は大淀の左手をとり、その薬指に銀色の指輪をはめる。

たったそれだけのことで、大淀は、自分が心の奥底の深い部分で目の前の男性と結びつき、もはや離れられない間柄となったことを、本能的に理解した。

後悔はない。むしろそれはこの上なく歓迎すべきことだ。

「いえ、こちらこそありがとうございます。こんな私を選んでいただけ、うれしいです」

周囲の目があるせいとか極力冷静な態度を保とうしつつも、ほんのり頬が赤くなるのを隠しきれない大淀を、他の艦娘たちは（多少のやつかみも込めつつ）大いに祝福するのだった。

— Epilogue —

大淀と高木提督がケツコンカツコカリを執り行ってから、7年余りの月日が流れた。

あの時、まだ21歳の若造だった高木提督も、今では28歳。的確な戦果を挙げ続けた結果、階級も大佐にまで昇進し、少将になるのも目前と噂されている。

彼の戦果に加えて、日本海沖に深海棲艦の「巣」らしきポイントが見つかったこともあって、小さかった鎮守府も拡大され、現在では正式に三隈泊地と名付けられて複数の提督が駐留する規模となった。

ちなみに、泊地の総司令は高木大佐が兼任している。

そして、大淀はと言えば……。

「すみません、あなた。たまのお休みなのに買い物につきあつていただいて」

「なんの、これくらい男の甲斐性さ。それに、君とこんな風に商店街を歩く機会はなかなかないからな」

日曜日の午後、珍しくまともに休みがとれた高木とともに、付近の商店街までのんびり買い出しに来ていた。

——いや、その言い方は不十分だろう。なぜなら、彼女も今は「高木」姓なのだから。

そう、今からちょうど半年ほど前の六月頭に、大淀は退役願を出し、艦娘から「普通の女の子」に戻ったのだ。軍籍を抜けた翌日には、高木との婚姻届けを提出し、晴れて正式な夫婦となっている。

艦娘である間は老化や成長が本来の10分の1以下に抑制されるため、戸籍上25歳にも関わらず、大淀の外見は未だ初々しい女子高生のような若さを保っていた。

このため、28歳の歳相応に老けて（というのは酷だが）いる高木醍醐と並ぶと、三十路男が真面目な女子高生をたぶらかして幼な妻にしたかのように見えるのは……まあ、致し方ないことだろう。

実は、大淀としては、艦娘から民間人に戻るに際してふたつばかり懸念があった。

ひとつは、艦娘でなくなった自分の身体が男に戻るのではないかということ。もつとも、明石に（理由は話さず）精密検査してもらった結果、「遺伝子レベルで完全に正常な女性」だったため、その可能性は低いとも思っていた。

そして実際、艦娘を辞めて1カ月が過ぎる頃、彼女は無事に月経（彼女にとっては初潮だ！）を迎えることとなったのだ。

艦娘は、前述の通り戦闘のために身体的生理機能の一部を制限されているため、月のものは訪れないのだが、艦娘を辞めるための処置を施せば、当然それらの機能も復活する。

それ以後も定期的に月経が訪れるようになったので、身体的には間

違いなく女性になりきっているのだろう。

もうひとつは「本物」の大淀だった女性のことだ。

艦娘が軍籍にある間は民間人としての本来の戸籍は一時凍結される。そして、退役した際に改めて、戸籍が復活するわけだが、そうなる「元・大淀だった女性」が同時にふたり存在することになってしまう。

——いや、そもそもそれ以前に、「本物」だった女性は、これまでの数年間、どうやって暮らしていたのだろうか？

ご存じの通り、淀川少佐（当時）が彼女の退役願いを握りつぶしたため、当然ながらその民間人としての戸籍は復活していなかったはずだ。

現在の日本では、戸籍謄本などが必要になる場面はそれほど多くないと言えないが……はたして足掛け8年間も、まったく戸籍と関わることなく暮らせるものだろうか？

疑問に思う点は多々あったが、現状を見る限り、元・大淀は無事に「浅井喜久子^{あさいきくこ}」としての民間人戸籍を「取り戻し」、その翌日には醍醐の妻として「高木喜久子」になった——というのが公的な事実だ。

「そう言えば、一昨日から少し体調を崩していたみたいだけど、もう大丈夫なのかい？」

醍醐と並んで歩きながら、しばし物思いにふけて彼女だが、彼にそんな言葉をかけられたので我に返る。

「ええ、念のため、昨日の午後、病院に行ってきましたけど、まったく問題はないそうです」

そう、問題はない——が、報告すべき事柄は確かにあった。
(さて、どんな風に切り出しましょうか)

下腹部にそつと手を当てながら、彼女は「そのこと」を夫に告げた時、どんな顔をするのか、密かに楽しみにしているのだった。

——おしまい——

Another 4. 三姉妹の絆

――

(本当にオレにできるのか……いや、ここまで来たらやるしかない！)

一瞬の躊躇いを振り切って、彼はマホガニー製の武骨なドアをノックしながら、名前を名乗る。

――コンコンッ

「特務士官候補生の長井良介です！」

「入りなさい」

中から聞こえてきたのは、意外なことに若い女性の声だった。

「失礼します！」

ドアを開けて部屋の中に入ると、真正面の執務机の向こうに海軍士官用の白い二種軍装を着たアッシュユプロンド灰金髪の女性が座っていた。

声の通り若い女性……いや、むしろ少女と言っても違和感のない外見だ。

さすがに16歳の彼よりは年上のようだが、パツと見は17、8歳ぐらいなので、普通なら高校に在学していてもおかしくない年頃だろう。

とは言え、ここが「鎮守府」であり、この部屋が「提督執務室」である以上、どこかの女子高生がふらりと迷い込んだなどということはありえない。

(中卒でそのまま提督になる人も稀にいるって本当だったんだ)

おそらく目の前の人物もそのひとりに違いない。

年若く見えても、それなりの軍歴はあるのだろうから、侮ってよい相手ではないはずだ。

どちらかというのうきんと体育会系の彼だが、「人生の一大事」においてヘマをしないように慎重にふるまうくらいの世知は一応身に付けている。

この場合、その慎重さが、彼を救った。

「……ふうん。私の姿を見ても、気を抜いたり見下したりしないあ

たり、最低限の常識はわきまえているようね」

ドアから一步入った場所で、ピシツと気を付けの姿勢で待機している彼を見て、美少女提督は目を細めた。

「楽にしていいいわ。それから、話しくいから机の前まで来なさい」
「はいっー!」

楽にせよと言われて、この場で本当にリラックスできるものでもないが、まあ、そこは言い回しというヤツだろう。

「まずは、自己紹介から。この鎮守府で提督をしている山本和希大佐よ。これから2週間、君を指導しつつ適性を見極める試験官の役目を命じられたわ」

「?」 「山本」、ですか? オレ…いえ、自分の試験官は風嶋提督だと聞いていたんですが」

「ああ、それ、私の旧姓。そっちの方が通りがいいから、未だ大本營^{ほんぷ}でもちよくちよく間違えるのよね」

「!」 そのお歳で結婚されてるんですか!?!」
思わず驚きの声をあげてしまう。

確かに日本の民法上は女性は16歳から結婚できるが、実際に18歳以下で結婚している人は決して多くないはずだ。

「お生憎さま。結婚じゃなくて養子縁組で苗字が変わっただけよ。ところで…」 「そのお歳」 って、私のことをいったい何歳だと思ってるの?」

ニヤリとチエシヤ猫のような笑みを浮かべる山本大佐の視線に、彼は硬直する。

(ヤベエ、地雷踏んだ…)

基本朴念仁気味な良介だが、母、母の妹(つまり叔母)、妹ふたりという女系家族の中で暮らしている(父はほぼ単身赴任状態)ため、このテの話題が厄介なことは重々承知していた。

「え、えーと…すみません、自分よりひとつたつ上くらいかと」
しばし悩んだ末、正直な感想を吐露することにする。

「……………」

山本大佐の沈黙が怖い。

「——ま、いいでしょう。戸籍上の年齢は27歳よ。3年前まで艦娘をやっていたぶん、成長が遅れているのは確かだし」

ふっ、と山本大佐の眼光が和らいだので、どうやら事なきを得たようだ。

(セエ~~~~フ！)

良介は、こっさり胸を撫で下ろす。

その後の山本大佐とのやりとりは極めて常識的なもので、彼も「これならオレもやっていけるんじゃないか」と希望を抱き始めたのだが……。

「こんなところね。それと——あらかじめ言っておきますが、私は君のような若年で提督になることは原則的に反対です。これは艦娘と提督、両方やってきた経験に基づく判断よ。」

なので、試験官としての基準は容赦なく厳しくいくつもりなので、覚悟しておきなさい……以上です。下がっていいわ」

最後にドカンと爆弾を落とされた気分だが、彼の方もここまできて諦めるわけにはいかない。

「——わかりしました。お手柔らかにお願いします」

—2—

長井良介が、せっかく入った高校を中退してまで提督を目指したのは、決して「艦娘とキャツキャウフしたい」などの不純な動機からではなく、確固たる理由がある。

そもそも、彼自身はどちらかというところ「提督」という職業を否定的な目で見ていたほうだ。これは、彼の両親が両方海軍関係者であったことに由来するのかもしれない。

彼の父も歴戦の提督であり、ある意味サラブレッドの家系なのだが、彼自身は、普段は家におらず、たまに帰って来ても母以外の若い娘をとつかえひつかえ連れて来て侍らせている(ように見える)父を軽蔑していたのだ。

成長するにつれて、その「若い娘」たちが父の配下の艦娘であり、日夜きびしい戦いをくり広げている彼女たちを少しでも労うために

自宅に招待していること、そして母もそれに納得済みだということも、頭では理解はした。

——だからと言って、父に対する「冴えない風采の口だけ達者な優男」という印象自体が覆るわけではなかったし、週末に帰ってくる時以外は、ほぼ鎮守府に詰めっぱなしの父に親しみを抱けるはずもない。

前述の通り自分以外の家族4人が女性ということもあって、彼は自然と「オレがこの家を守らなくちゃ」という使命感を抱くようになっていたのだ。

そのままであれば、彼も海軍関連に関わることもなく、普通に高校、大学と進学し、会社員なり公務員なりに就職していただろう。

実際、近隣でも比較的レベルの高い高校に（スポーツ推薦ではあったが）進学することができたのだから。

そんな彼の人生設計が軌道修正を迫られる事態が発生したのは、年の瀬も迫った高校一年生の十月のことだった。

「はあ!? 艦娘になる? 正気か、美鈴?」

「ええ、そのつもりよ、兄さん。それにあたしだけじゃないわ」

「! まさか……千鳥?」

「え、えへへ……わたしも、お姉ちゃんと一緒に艦娘になろうかなあつて」

中学3年の彼の妹ふたり（双子なので同学年なのだ）が、よりにもよって卒業後に艦娘になるなどと言いだしたのだ。

「おいおい、確かに艦娘は一部のマスコミとかドラマとかで持ち上げられてるから華やかなイメージがあるけど、実態はそんな楽なものじゃないんだぞ。」

そもそも、軍に所属して最前線で戦うれっきとした軍人なんだからな。その辺のことはお袋や御穂さんにも聞いているだろう?」

そう、良介たち3人の母、そしてその妹である叔母は、かつて父の指揮下で戦った艦娘だったのだ。その現役時代の話は断片的にだが聞かされている。

今よりもっと艦娘も提督も少なく、絶望的な戦いを強いられた時

代。その当時の逸話だけに、なかなかヘビイなものが多く、それもまた良介が海軍関連を忌避する遠因になっていたのだろう。

「もちろん、知ってるわよ。これでも、父さんが連れて来る艦娘の人たちに、色々話は聞いてるんだから」

「兄さんはあの人達を避けてたから知らないだろうけど——と、美鈴に指摘されて、うぐつと言葉に詰まる。

前述のような理由で、幼少時は「母の敵(?)」と目の仇にしていたし、ある程度道理をわきまえる年齢になってからは、「きれいなお姉さん」たちに親しく話しかけるには、彼は自称硬派過ぎたのだ。

「18歳未満の姉妹で同時に艦娘に志願するとね、一緒に配属してもらえる特典があるんだって」

当然、千鳥の言うシステムも初耳だ。

その後も、いろいろ難癖(まさにそうとしか言いようがなかった)をつけようとはしたものの、理路整然とした美鈴の反撃と、天然気味な千鳥の受け流しにことごとくすかさずされてしまい、妹たちを翻意させることはできなかつたのだ。

(ぐぬぬ、こうなったら、あんま気は進まないけど……)

さすがに元艦娘だった母に「妹たちを艦娘になんてさせたくない」と主張する勇気はなかつたので、数日後に帰宅した父に対して直談判する。

「親父い、美鈴と千鳥が艦娘を志望してる話って聞いたか?」

女性陣4人が父のために協力して夕飯を作っている時を見計らつて、居間でくつろいでいる父に話しかける。

「ん? ああ、知ってるよ。良介は反対なのかい?」

今日は珍しく艦娘を同伴していないので、父である健太郎も完全に家でのリラックスモードに入っているようだ。

ポロシャツにチノパンというラフな格好の上にどてらを羽織つて、こたつでテレビを見ており、とても海軍のえらいさんだとは思えない。

「正直に言っと、そうだ。だって、危険じゃないか。言うなら、戦争の最前線で戦う兵士みたいなモンだろ!」

「そうだね。そのたとえを否定することは僕にはできないかな。ただし、僕が提督である以上、それを理由に「娘に艦娘になんてなるな」とも言えないね」

それもまた当然の話ではある。父は艦娘を指揮して、深海棲艦と戦い、この国の平和を護る立場にあるのだから。他人様の子ならよくて自分の子はダメなどという理屈は通らないだろう。

感情論を別にすれば、その程度の道理がわからないほど、良介も子供ではなかった。

「——わかってる。なら、せめて、美鈴たちを親父の鎮守府に配属するとか手を回すことはできないのか?」

「可能不可能を言うなら、そのくらいの権限は僕にもあるよ。でも……それを使用する気はないな」

「どうしてや?」

声を荒げる良介に、健太郎は寂しげに笑った。

「だって、手元に実の娘がいたら、大なり小なりひいきしない自信が僕にはないからね」

「……っ!」

まさに、その「ひいき」による保護を望んでいた良介は、言葉を失う。

数十人の艦娘の文字通り「命」を預かる立場にある提督が、プライベートならともかく、任務にあたって私情を優先していいはずがない。

社会的には正しい理論だろうし、万が一マスコミなどに「エコひいき提督」などとスツパ抜かれたら、それこそ大問題になるのは確かだろう。

それでも、良介としては、見も知らぬどこかの提督おとしに大事な妹たちの命運を委ねるといふのは我慢ならなかった。

「——なあ、親父、オレに提督としての適性ってあると思うか?」
そうきたか、という目で、健太郎は良介の目を見返した。

「僕と弓泉の息子だから「なれる素質」はあると思う。でも、率直に言えば、今の君が「なる」ことはススメられないかな。他人の命を

預かるというのは、想像以上に重い仕事だよ、いろいろな意味で」

「かもしれない。でも、決めたんだ」

「……そうか」

それ以上はあえて反論せず、健太郎は、志願する者が提督になるための方法を教えてくれた。

良介は、それに従い、最寄りの海軍支部に赴いて「適性試験」を受けた結果、父の言う通り「提督になり得る素質」を認められることになる。

早速高校に退学届けを出し、士官学校の超促成コースを選んで3週間、座学の類いを叩きこまれた後、最後の「試験」（あるいは試験？）として山本大佐のいる鎮守府で「特別指導訓練」を受けることになった——というワケだ。

— 3 —

「よく考えたら、提督が男じゃなくて女だって可能性もあったんだよな……」

実技指導の教官から命じられた本日のウォーミングアップである「鎮守府裏の訓練スペースを30周駆け足」を実行しつつ、今更ながらそのことに良介が思い至ったのは、この鎮守府に来て一週間が経過してからのことだった。

確かに提督には男性が多い（全体の7／8割）が、山本のように女性の提督だってそれなりにいるのだ。

（もしかしてオレがしたコトつて、単なる……いやいや、男だろうと女だろうと、大事な妹達をそうそう簡単に預けるわけにはいくもんか！）

ちよつとしたアイデンティクライシスに陥りかけたものの、なんとか自分を鼓舞する良介。

「ふう、これで30周終了つと」

ランニングを終わらせ、ゆっくり歩きながら息を整える。

「お疲れ様です、長井さん。よろしければこちらをどうぞ」

タイミングよく、スポーツドリンクとタオルが差し出される。

「あつ……鹿島先生。す、すみません、ありがとうございます」
そう、良介の実技関連の指導を担当しているのは、練習巡洋艦だった「前世」を持つ艦娘・鹿島だった。

パツと見は、背の半ばまである銀髪をツインテールの髪型にまとめ、白い士官用礼服を着たハイティーンくらいの可憐な美少女にしか見えないが、その指導は丁寧で的確かつツボを押さえたもので、非常にわかりやすい。

元陸上部だった良介は、「こんなコーチがいてくれたらウチの部もあつさりインターハイ出場できるんじゃないか」と思ったくらいだ。

息が落ち着いたところで、今日の課題は「アサルトライフルによる200メートル距離での射撃」、それも静止標的ばかりでなく動標的も含めて80%を上回ることだ。

本来の有効射程は300メートルほどなので、かなり甘い訓練だともいえるが、それでもついひと月程前まで実銃に触れたことすらなかった少年に対する課題としては、相当に厳しいと言つてよいだろう。

もつとも、筋がいいのか良介はその課題をさしたる苦も無くこなしているのだが。

「長井さんは、実技の面では本当に優秀ですね」

伏射と膝射でそれぞれ100発を撃ち終え、汗を拭いている良介に向かつて、アルカイクな微笑を浮かべつつ鹿島が話しかける。

「そ、そうですね。まあ、体動かすことはオレの数少ない取り柄なんです」

ちよつと照れつつも、満更ではなさそうな長井少年だったが、鹿島の言葉には続きがあった。

「その調子で座学の方も頑張っていただけのが望ましいのですが……」

「えつと、はい、善処します」

そう。ありがちな話ではあるが、良介は身体能力の優秀さに比べると頭の方はいささか残念なデキであった。

まるっきりの馬鹿というわけではないし、通っていた高校でも頑張

ればなんとか平均点程度はとれるのだが、そもそも教科書や参考書の類いを読むが苦痛で、宿題もよく忘れ、友人に見せてもらったことも一度や二度ではない。

良介への訓練兼適正試験は、午前中は2コマ、昼休みを挟んで午後3コマの大学の講義のようなプログラムが組まれている。

初日から3日目までは、午前が座学、午後が実技指導の時間だったが、4日目からは午前が実技、午後が座学になり、さらに7日目の今日からは、午前最初の1コマのみが実技で、残りすべてで座学を叩き込まれることになっている。

単なる兵士ではなく、指揮官を促成栽培するための振り分けなのだから、この時間配分はむしろ当然だろう。

「長井くん、そろそろ戦術学の時間ですよ」

訓練スペースまで彼を呼びに現れたのは、アッシュブロンドを首の後ろで束ね、鹿島同様に白い士官用礼服を着た女性——座学の教官であり、鹿島の姉に当たる艦娘・香取だ。

銀縁眼鏡と落ち着いたたずまいのせいか、鹿島よりいくぶん年かさな印象があるものの、礼儀正しく優しげな美人であり、教え子の良介に対しても決して声を荒げることはない……のだが、その一方で授業内容そのものはスパルタで、文武の「文」に関してはイマイちな良介は、大いに苦勞していた。

「うっ、香取先生……もう、そんな時間ですか」

「ええ、2時限開始まであと7分と30秒ですから、そろそろ着替えたほうがよろしいでしょうね」

「了解しました」

市場にドナドナされる仔牛のような表情で立ち上がり、トボトボと更衣室に向かう良介。

ありがちな鬼教官ならここで「何をやっとる、駆け足！」と怒鳴るのかもしれないが、香取も鹿島もまだ正式には軍人でない16歳の少年にそれを命じるほど狭量ではない。

「姉さん、長井さんの成績はやっぱり……」

「ええ、あまり……いえ、非常に芳しくありませんね」

ふたりとも、長井少年が努力していることは認めていたし、本人の希望通りできれば提督になつて欲しいと思うが、その一方で、適性のない者が多くの艦娘の命と周辺地域の平和を預かる提督になることが、誰にとつても喜ばしくない結果をもたらすことも、十二分に理解していた。

「見極め期間は明後日まで。それまでに少しでも適性を示してほしいところですが……」

香取が言葉を濁したのは、それが非常に困難だとわかっているからだろう。

—4—

そして12月22日——クリスマスイブを明後日に控えた「特別指導訓練」最終日の午後、良介は山本大佐の執務室に呼び出された。

「それでは長井士官候補生。まずは、君に対する特別指導訓練は、本日1300（ヒトサンマルマル）をもつて無事終了したわ。おめでとう」

「はいッ、ありがとうございます！」

大佐の劳いの言葉に、ピンと背筋を伸ばした姿勢で良介は礼を述べたが、ここまではあくまで前振りだ。本題は別にあることは両者ともわかっていた。

「さて、君が一番気にしているであろう「提督資質評価」についてだけど……訓練にあつた香取、鹿島両教官からの報告をもとに、私が判断させてもらったわ。結果はD——予備役相当ね」

（艦娘の）提督となり得る「素質」というのは先天的ないわば体質のようなものだが、10年前ならいざ知らず、現在の日本海軍においては、この「素質」だけで提督への適性が判断されることはない。艦娘の指揮に必要な軍事知識や戦略・戦術の立案実行能力、さらには性格・性向といったメンタル部分までも考慮して、A～Eまでの5段階で評価されるのだ。

「それは……自分は提督になれないということでしょうか？」

Aが「提督となるために生まれてきたような人材。今すぐ鎮守府に送っても即戦力になる」のに対して、Dは「提督としての適性は低い
が、皆無ではない。念の為予備役として登録しておくことを薦める」というレベル。

Eが「提督としては極めて不向き。採用すべきではない」と完全な不合格判定で、それに比べればマシと言えるかもしれないが、実際に提督になって活躍する人材のほとんどがAかBの判定を受けていることを考えると、Dは補欠（C）のさらに補欠、事実上の戦力外通知と言っても良かった。

「歯に衣を着せずい言えば、そうなるわね」

山本大佐は、余分な慰めは言わないタッチらしかった。

「そんな……何とかありませんか!？」

必死に食い下がる良介だが、それに対する返答は無情だった。

「何とか、と言われてもね。ちよっと合格点に足りないくらいならともかく、正直、体力面以外の、知識や座学関連の君の成績はひどいものよ。」

たとえば『大本営から指示された緊急作戦の遂行に必要なと思われる戦力が15%ほど足りない。貴方はどう対処するか?』という質問に対して、『気合と根性で補う』とか答えちゃうような旧帝国陸軍的脳筋思考の人間は、絶対に艦娘の司令官にしたくないわ」

一部例外を除いて、「提督」は自ら戦場に出ることはない。だからこそ、その分、実際に戦場に出て戦う艦娘の余計な負担を極力減らすべく、日頃から入念に作戦を立案しなければならぬのだと大佐は語る。

ぐうの音も出ないほどの正論だった。

「でも、オレは……」

拳を握りしめ俯く良介に対して、軽く溜息をついた大佐は、少しだけ語調をやわらげる。

「その年で高校を中退してまで提督になろうとするからには、なにがしかの事情があることはわかるわ。」

そうね——提督ではなく、一兵卒としてなら能力的には十分な水

準にあるけど、それではダメなの？」

一瞬、「妹たちを指揮する提督でなくとも、同じ軍人としてそばにいるのでも良いのではないか？」と思いかけた良介だったが、続く大佐の言葉がその僅かな希望を打ち砕く。

「ただし、君はまだ16歳だから、法律上は少年兵という扱いになるので、前線の基地などにはまず配属されないわね。当然、艦娘たちが所属する『鎮守府』は最前線扱いよ」

現在では殆どないけど、かつては鎮守府に深海棲艦が直接攻撃を仕掛けてきたなんてこともザラだったんだから……と、山本大佐は付け加える。

「——それじゃ、意味がないんです！」

苦悩に顔を歪めながら、吐き捨てるようにその言葉を漏らす良介の様子に、大佐は「ふむ」と右拳を口元に当てて考え込む。

「やはり訳ありのようね——話してみなさい」

先程までとは一転して優しい語調の彼女の言葉に促され、良介は「艦娘になる予定の妹達を兄として護るべく、自分は提督になりたいのだ」という自らの目標を語った。

(なんとまあ……過保護でシスコンなお兄ちゃんなこと)

半ば呆れはしたものの、艦娘時代しまかぜにそのテの妹愛系バカは見慣れている大佐は、良介の想いを笑うことはなかった。

「念の為聞きたいのだけれど、君の妹さんたちの適性艦種は知っている？」

「——確か、上の妹が重巡か軽巡、下の妹が軽巡か水上機母艦だって言っていました」

「そう。実は私の鎮守府ところでは巡洋艦娘が不足気味だから、手を回してそのふたりを引き受けてあげるとは可能よ。それで納得する気はない？」

山本大佐の言葉に、良介はしばし考え込む。

どこの馬の骨ともわからぬ提督の下に配属されるとの違い、山本とは面識もあるし、何度か顔を合わせてそれなりに信頼できる相手だということも理解している。

艦娘経験もある女性ということ、不埒な男性提督のようにセクハラしたり、艦娘に理不尽にキツく当たったりするようなコトもないだろう（“先輩”としてハードな訓練などを課す可能性は無きにしもあらずだが）。

そういう意味では、ベストではなくともベターな選択だ。それは良介もわかっていた。

だが……。

「理屈ではともかく感情的には納得してないって顔ね」

如実に良介の心理を言い当てると、山本は溜息をついて、一枚の書類を差し出した。

「三種機密情報」と赤字で記された書類を読み進めるにつれ、良介の表情が懊悩から驚愕へと塗り替えられていく。

「制度上の問題として、いくら私のコネを使つたとしても“少年兵”を自分の鎮守府に配属することはできないわ。でも、“艦娘”なら難しくくない——私の言っている意味、わかるわよね？」

—5—

海軍施設からいったん自宅に戻った長井少年の様子は、いつも通りのように見えて、どこか不思議な落ち着き（あるいは諦念）のようなものが感じられた——と、後に彼の両親は語っている。

少年は、「提督になれそうにないこと」しかし「年明けから海軍に所属することはできそうだということ」の2点を家族に告げた。

妹達は残念半分、安堵半分といった反応だ。

提督という職業が、そのステータスの高さとは反比例して非常に（精神的に）過酷なものだということを、両親や顔見知りの艦娘たちからの情報で知っていたからだろう。

軍人になること自体も決して安全ではないが、現在の日本における海軍に所属する兵隊は（少なくとも艦娘よりは）比較的“安全”な仕事だと言える。

“海”軍でありながらその大半は陸上で勤務し、僅かな例外——軍用艦艇の乗組員も、艦娘による手厚い護衛を受けて航海することにな

るからだ。

「そつかく、お兄ちゃんがわたしたちの提督になれなかったのは残念だけど、仕方ないねー」

「——そうだな、千鳥。でも、代りにオレの特別指導訓練を担当してくれた提督の山本和希大佐に、艦娘になったお前たちを引き取ってくれるよう、お願いして引き受けてもらえたから」

「兄さん、山本和希って……ちよつとした有名人よ！」

良介から出た意外な名前に悲鳴とも歓喜ともつかない声をあげる美鈴。

「へ？ そう、なのか？」

「そうよ！ 「佐世保の黒鷹」の名前くらいは兄さんも知ってるでしょ」

「そりゃ、教科書にも載ってるレベルの現代の英雄の名前だから、さすがにな」

実際、訓練で向かう先が佐世保で、出会った相手が山本と名乗った時は「もしや」と思ったものだ。もつとも、相手が大佐（かの黒鷹は中将だ）でしかも女性だったので「なんだ、単なる同姓の別人か」とガツカリしたのだが……。

「その黒鷹の義妹にしてもつとも信頼する4人の艦娘のひとり、「ファースト（最初にして最速）の島風」として10年前の『大戦』で大活躍したのが、その人のはずよ!!」

理的に見えて、実は意外にミーハー気質な妹の美鈴は興奮している。

「あの大佐、そんな有名人だったのか……」

それなら女子高生めいた外見年齢に見合わぬ、あの落ち着きと貫禄も納得がいく——さらに言えば、いとも簡単に「手を回して」しまえるあの伝手コネにも。

「そんなスゴい提督の元に行けるなんて、よかったね、お姉ちゃん」

「うう、確かに光栄だけど、ぷ、プレッシャーが……」

のんきな末妹の千鳥と異なり、美鈴は今から色々考えてしまつて大変なようだ。

やがて、落ち着いた妹達が自室に寝に戻った頃、良介は母と（珍しく今日は家にいた）父を呼び止め、山本大佐から預かった書類を見せた。

「——わざわざコレを僕らに見せたということは、良介は『覚悟』を決めているんだね」

それなりに提督歴の長い父は、どうやら丙種機密情報のことも知っていたようだ。

「良ちゃんは、本当にそれで後悔しない？」

母も息子の決意を薄々感じ取ってはいたのか、（ある意味）奇想天外ともいえるその『機密』に取り乱したりはしなかった。

「——『絶対しない』って断言できない。でも、ここでその選択をしなかった方が、きつと後悔は大きいと思うから」

良介が現在の正直な心情を吐露したことで、両親も渋々ソレを認め、書類に保護者としての承諾のサインをしてくれた。

「ひとつだけ約束してほしい。美鈴や千鳥のためだけでなく、君自身、そして鎮守府の仲間のために戦い、生き——幸せになることを」いつも柔和な父の見たこともない程に真剣な表情に、一瞬気押されたものの、すぐに良介もお腹に力を込めて大きく頷いてみせた。

「わかった。約束する。オレ、立派な——になる、そして美鈴たちだけじゃなく、仲間と自分の幸福も護りきってみせるよ」

—6—

「……って、威勢のいいタンカを切ってはみたものの……」

『彼女』は、鎮守府内に与えられた私室でこっそり溜息をついた。「やっぱり、ちよつと早まったかなあ」

少々厨二病的な熱に浮かされて暴走気味に人生に於ける重要な決断を下してしまったことは、あながち否定できないかもしれない。さて、大方の人は既に予想がついているだろうが……。

長井良介が山本和希大佐から提示された、提督でも兵卒でもない『第三の選択肢』とは——すなわち「艦娘になること」だ。

世間一般には、艦娘とは「適性のある若い女性が艤装と適合するた

めの手術を受けることでなるもの」と解されているし、おおよそそれで間違いではないのだが、実はいくつかの例外がある。

ひとつは年齢。確かに13〜19歳くらいのいわゆるティーンエイジャーがなるケースが圧倒的に多いが、それよりも低い、あるいは高い年代でも、適性を持つ女性は少なからず存在する。

軍の極秘記録では、(とある事情で)僅か9歳で艦娘——「まるゆ」になった例もあれば、30代後半で「足柄」になれたケースも存在するのだ。

ただし、元の年齢が何歳であったとしても、艦娘になった際に、その^{ファーストボーン}の壱号艦と非常に近い(というか、ほぼそっくりな)外見に容姿が変化する。

しかも、艦娘でいる間はほとんど歳をとらない(加齢が本来の10分の1以下に抑えられる)という特徴もあるため、その意味でも女性にとっては(命の危険を視野に入れても)魅力的な仕事に映るようだ。

そしてもうひとつの例外だが——実は、男性の中にも艦娘適性を持つ人間がごく稀に存在するのだ。

提督の父と元艦娘の母を持つ良介は、その数少ない例外に相当した。

そのことを知らされ、妹達を指揮し庇護する立場の提督ではなくとも、同僚として身近で一緒に戦えるならば……と、良介は艦娘になることを決心したのだ。

で、本人の同意と保護者からの許可書を得て、1月5日に再び佐世保鎮守府を訪れた良介は、早速、艦娘化するための「艤装適合処置」を受けることになった。

なったのだが……。

世間一般では前述のとおり艦娘になるには「改造手術」を受けるものという認識があり、良介もてつきりサイボーグ00某か昭和ラウンドー的なソレのイメージを抱いていたのだが、その実態は実に呆気ないものだった。

「はい、ちよーつとチクツとするけど我慢してね♪」

看護師風の白衣を着たピンクブロンドの女性——工作艦娘・明石

に、ちよつと大きめの注射を一本打たれ、首の後ろのうなじの辺りにピアスのような金属片(?)を埋め込まれる(こちらもさして痛みはなかった)、それだけだ。

睡眠薬でも混じっていたのか、注射されて2、3分後に急に眠くなり、そのままおおよそ3時間ばかり寝てしまったが、医務室のベッドで目が覚めた時には、既に良介の「艦娘化」は完了していた。

「目が覚めた? 自分が「何」だかわかる?」

ベッドの傍らにいた山本大佐にそう聞かれて一瞬戸惑ったものの、「彼女」の意識下にはその答えがハッキリ刻み込まれていた。

「はい。5500トン級軽巡洋艦・長良型の1番艦……長良です」

決して眠りに落ちるまでの記憶が無くなったわけでも、元の「長井良介としての自我」が失われたわけでもないのだが、それと同時に、今の自分が軽巡タイプの艦娘であるという自覚も如実にあるのだ。

こればかりは適合処置で艦娘になった者にしかわからない感覚だろう。

ちなみに、適合処置を受けずに艦娘になる者も少数だが存在する。最初期の軍艦の船魂が直接実体化した「オリジナルシックス」は別としても、初期の水●体を素体とした「第一世代」、志願者の女性を仮死状態にしたのち艦娘化した「第二世代」を経て、現在のような適格者に霊的ナノマシンを注入して艦娘化する「第三世代」型の技術が確立されたわけだが、それらの過程をスツ飛ばして、最初から艤装を纏うことができる、いわば天然型艦娘と言えるべき人材も、ごくごく稀に存在することが確認されている。

ともあれ、ベッドから起き上がり、山本「提督」からいくつかの質問をされた後、良介——いや、「長良」は、事務艦の大淀によって巡洋艦娘寮内に一室に案内された。

「ここが、今日から貴方の私室になります。本来は3人部屋ですが、残りふたりは3月末に着任する予定ですので、それまではひとりでもらって構いません」

「わかりました」

後から着任するふたりが誰なのか大淀は明言はしなかったが、「長

良」にもおおよそ見当はつく。

「まだ少し『今の身体』に慣れないかもしれないかもしれませんが、しばらく休んで落ち着いたら……そうですね。1600（ヒトロクマルマル）には、そこに置いてある制服に着替えたうえで提督の執務室に出頭してください」

そう言い残して、大淀は部屋を出て行った。

——ボタン！

音を立てて部屋の扉が閉まるとともに、それまでシャツと背筋を伸ばしていた「長良」は、ハフウと溜息をつきながら目の前のベッドに腰を下ろした。

「ふええく、緊張したあ」

チラと部屋の壁（ちょうど出入口の上の位置）に掛けられた時計を見れば、午後2時を少し回ったあたり。どうやら1時間半以上休めるようだ。

その事を確認して、ようやく少し肩の力が抜けたのか表情からも幾分堅さがとれている。

そのまま後ろに倒れて一端はベッドに横になったものの、すぐにムクリと起き上がる「長良」。

（う……なんか胸の辺りに違和感があるかも）

もつと正確に言えば、胸だけでなく歩幅や視点の高さ、歩く際の重心の感覚なども含めて、違和感だらけなのだが。

無論、艦娘化した以上、今の自分は（多分）女の子なのだろうし、男と女では体の様々な構造も異なるということとは知識としては「長良」も理解はしていたが、頭でそう考えるのと実際に体感するのでは大違いだった。

——と、ここで冒頭の「早まったかな」発言の場面に繋がるわけだ。
しばし（精神的な意味で）悶々としていた「長良」（良介）だったが……。

「……そう言えば、今の『オレ』ってどんな姿してるんだろ」

ムクムクと好奇心が湧いて来た「彼女」は、ベッドから立ち上がるのと、部屋の隅に置かれた簡素な姿見の前に移動した。

鏡には、作務衣にも似た半袖膝丈の白い和風の寝間着の上下を着せられた15、6歳くらいの少女の姿が映っている。

周囲の家具との対比からして身長は160センチを僅かに上回る程度だろうか。

全体的にはその年代の女の子らしいほっそりとしなやかな体型だが、寝間着の袖口や裾からのぞく腕やふくらはぎなどはアスリートの如く引き締まって適度な筋肉もあるようで、なかなか運動能力は高そうだ。

癖のない綺麗な黒髪が肩に掛かるくらいに伸びており、くりつとしたつぶらな瞳が目立つ顔立ちは、美人というより可愛い、可愛いというより元気といった印象が強い。良介だった頃の面影も僅かに目元口元などに感じ取れるが、ほぼ別人と言ってよいだろう。

肌の色は深窓の令嬢の如く真っ白……というわけではなく、健康的に日焼けはしているが、それでも陸上部に所属して真黒だった良介に比べれば、エスプレッソコーヒーとミルクたっぷりのカフェオレくらいの差がある。

「男子高校生」だった頃の目線で判断するなら、「学校一、学年一は無理だけど、クラスの中では2、3番目くらいに可愛い女子」と言ってもよいのではないだろうか。

「♪〜」
何となく弾んだ気分になって、鏡の中でさまざまポーズを取ってみる「長良」。

色々動き回っているうちに、寝間着の上着を結んだ腰紐が緩み、胸元がチラリとのぞく。

「あっー」
そこには、大きいとは言えないものの外見年齢相応(?)くらいに膨らみがあることが見てとれた。

「どうやらコレが胸に感じた違和感の正体のようだ。」

「これ、見ちゃってもいいのかな……いいよね、だって自分の身体だもん」

(二元)男としての好奇心に負けて寝間着の上下を脱ぎ捨てると、その

下には、薄桃色のハーフトップのようなスポーツブラと同色のシンプルなショーツを着用していた。

「ちゃんとオツパイあるんだ。それに下も『無い』し……って、当たり前か。長良は女の子だもんね♪」

不思議なことに現在の自分の半裸姿を見たことで、やや男寄りになつていた意識が艦娘らしく女の子側に揺り戻される。

なんとなく気恥ずかしくなつて、「長良」は無意識に胸元を両手で隠しつつ、キョロキョロと部屋の中を見回した。

「確か制服が置いてあるって……あ、あつた」

窓と窓のちょうど間の壁際に設置されたチェストボードの上に、畳んだ制服らしきものが置いてあつた。

歩み寄つて手に取つた「長良」は上着らしきものから広げてみる。

「もしかして、セーラー服？」

確かに白い本体に海老茶色のセーラーカラーとダークブラウンのスカートという組み合わせは、中高生が着ている女子制服っぽいのが、袖丈がフレンチスリーブというのは学校の制服ではまず見受けられないだろう。代りに二の腕から手首までは白いアームカバーを着けるようだ。

ボトムはプリーツタイプの赤いキュロットスカート。トータルカラー的に巫女さんの緋袴を意識しているのかもしれない——ただし、膝上20センチくらいありそうなミニ丈だが。

ほとんど露出した状態となる脚には、腕と同じく白いオーバーニーソックスが用意されている。足元は茶革のショートブーツで、幸いにしてヒールは高くないようだった。

「あれ、これは……」

上着をかぶり、アームカバーとニーソを着用し、いざ緋袴風キュロットを履こうとした段になつて、「長良」はキュロットの下に用意されていた『ソレ』の存在に気付いた。

形状はショートガードルに似ているが、布地はむしろジャージに近くやや厚めで、履き込み丈はへその少し下くらい。臍脂色の地で両サイドに白い縦線が入った、臀部全体を包み込むような形状のソレの名

は……。

「ぶ、ブルマー!?!」

そう、かつては体操服や女子バレーのユニフォームとして一世を風靡したが、現在では学校教育の場から消えて久しい女性用衣類「ブルマー」だった!

「なんでこんなマニアックなモノが?」

ただし、現在でも一部のチアリーダーディング選手などはオーバーパンツとして着用しているし、陸上競技でも、ほぼ同様の形状のレーシングブルマーを愛用している女子選手はいる。

長良用に用意されたコレもあるいは後者に近いのかもしれない。

「うう……なんとなくエッチだろう」

元陸上部だった良介は、無論後者の存在は知っている(それどころか大会などで女子選手が履いてるのを見て目の保養だと内心喜んでいた)が、他ならぬ自分が身に着けるとなると話は別だ。

恐る恐る赤いブルマーを手取る「長良」。

今、「彼女」の中では「これ履くの、なんか恥ずかしいよお」という想いと「なんでか知らないけどスゴく履いてみたい」という相反するふたつの気持ち葛藤していた。

「で、でも……わざわざ用意されてるからには、コレも履かないといけないんだよね」

誰にともなく言い訳をするようにそんなことを呟きながら、思い切ってブルマーに足を通す!

滑らかな化繊製のその布地が、ふくらはぎを、太腿を撫で、さらに引き上げられて、シヨーツ越しに下腹部をピタリと覆う。

「——あふう……」

健康的なスポーツ少女風の見かけに寄らぬ艶っぽい吐息を「長良」は漏らした。

今の「彼女」の内を満たしているのは、快感というよりは「充足感」——あたかもパズルの最後のピースがはまった時の如く、あるべきモノがあるべき場所に収まったような心地よさを心身共に感じているのだ。

数秒間目を閉じてその感覚に酔いしれていた「長良」だが、すぐに目を開けて我を取り戻す。

「おっと、ちゃんとキユロツトとかも履いておかないとね」

ブルマーの上にミニ緋袴を履き、革靴も履いたあとにトントンと爪先を床に軽くうちつけて足にフィットさせる。

姿見の前に歩み寄り、「慣れた手つきで」白い髪留め用ゴムで後ろ髪をやや左よりの後頭部のあたりでまとめてくる。

先程までは、どこか照れや躊躇いが感じられたのだが、今の彼女はそれら一連の着替え作業を「ごく自然なもの」として行っていた。

「あとは——コレかな」

チェストボードの上に残された白いハチマキを手にとると、おでこを隠すように巻いてキリリと後ろで締める。

最後に鏡の前で服装をチェックし、くるんと一回転して何か見落としやおかしな部分がないか確かめる。

「うん、大丈夫」

「いつも通り」の長良わたしだよね——と心の中で満足げに頷くと、新米軽巡娘の長良（に身も心も成りきった元少年）は、少し早めに「自らの提督」の元を訪れるべく、部屋を出るのだった。

—エピローグ—

スポーツバッグを手にした、15、6歳くらいに見えるふたりの少女が、駅から佐世保鎮守府までの道のりを並んで歩いていた。

「五十鈴お姉ちゃん、わたしたち、大丈夫かなあ」

ショートカットの方の娘が、姉らしきツインテールの娘に話しかける。

「大丈夫だって。まったく名取は心配症なんだから……」

元々やや気弱な面はあったものの、艦娘になって以来、この子はその傾向が微妙に助長されたような気がするわ——と、名取いもつとの弱気に溜息をつく五十鈴あねだったが、鎮守府のゲートが見えてきたためピンと背筋を伸ばす。

「ほら、そろそろ鎮守府よ。名取もしゃんとして」

「ふえっ！ わ、わかったよ〜」

名取が（彼女なりに）気合の入った表情になったのを確認してから、ゲート前に歩み寄る五十鈴。

ゲートの前には出迎え役らしき艦娘が立って、彼女達の方を見つめていた。

やがて、両者は1メートルほどの距離を経て対峙する。

「えっと……」

どう声をかけるべきか一瞬迷った五十鈴だったが、相手の方——白と赤のセーラー服のような制服を着た艦娘が、ニコツと笑って話しかけてくれた。

「本日着任予定の艦娘、五十鈴と名取ですね？ 私はふたりの案内役を山本提督からおおせつかつた長良型軽巡・一番艦の長良です（本当は自分で志願したんだけどね♪）」

ピシツと敬礼する長良の姿に、慌ててふたりも敬礼を返す。

「あつ、はい、五十鈴です」

「わ、わたしは、ち……じゃなくて名取です」

あたふたしているふたりの様子に「初々しいなあ」と眼尻を下げつつ、「それれでは此方へ」とふたりを提督執務室へと長良は案内する。

「あの……長良さんは、艦娘になって長いんですか？」

執務室までは結構な距離があり、手持ち無沙汰なので、五十鈴はそんな風に話をふつてみた。

「んー、そうでもないよ。まだ着任して3カ月経ってないし。それと——今日から同じ鎮守府で戦う仲間なんだし、無理して敬語使わなくてもいいよ？」

と、そこまで言ってから、「ふむ」とちよつと長良は考え込む。

「でも、ふたりは同じ長良型の姉妹艦、それも『妹』にあたるわけだから、私のことは『姉』と思つて、頼つてくれると嬉しいかな」

「え？ それは……」

ニコニコと微笑む長良から向けられる開けっ広げな好意に戸惑う五十鈴だったが、名取の方は良くも悪くも素直だった。

「ホントですか?! じゃ、じゃあ、長良お姉ちゃんって呼ばせてもら

いますね」

「うん、いいよー♪」

早くも打ち解けた様子のふたりに、なぜか既視感デジャブを感じる五十鈴。
(あれっ……なんだか、こう、見慣れた風景のような気が……)

そのモヤモヤの正体に気付く前に提督室に着き、ふたりは山本提督に着任の挨拶をした後、再び長良によって今度は寮の部屋へと案内される。

「ここがふたりの私室だよ。ちなみに、3人部屋でもうひとりの同居人がいる……って、そのひとりは私なんだけどさ」

えへへつと頭をかく長良は、同性の目から見ても明るく可愛らしくて好感が持てた。

(いい人が同室の先輩でよかったね、五十鈴お姉ちゃん)

(ええ、そうね)

そんな囁きを交わす双子の姉妹を、長良は優しい目で見つめている。

その見守るような慈しむような視線は、五十鈴達には身に覚えのあるものだった。

(あれ……なんで、兄さんと同じような目を……)

(さつき言ってた通り、長良型の「長女」だからじゃないかな?)

艦娘にとつて、艦型による姉妹関係というものは肉親のそれにほぼ準じるものだ——とは訓練期間に聞かされていたが、これもその一種なのだろうか。

根が単純な名取ちどりと違い、割合考え込む方の五十鈴みすずは首を捻っている。

「早速で悪いけど、荷物を置いたら、まずはそのチェストボックスに置いてある制服に着替えてもらえる? このあとすぐ、鎮守府内の施設を案内をしたいから」

ふたりにそう告げると、
「なぜか」部屋を出ようとする長良。

「あ、それと……」

ドアを開ける直前で、クルリと振り返る。

「佐世保鎮守府へようこそ。」「長良」個人としてもふたりを歓迎す

「るよ、美鈴、千鳥」

——パターン！

「え……なんであたしたちの人間としての名前を知って……」

「あれえくもしかして……良介お兄ちゃん？」

「!？」

ふたりが着替えどころでないパニック状態になったことは言うまでもないだろう。

——おしまい——

この世界では、艦娘関連でゲームには登場しなかった（より正確には言及されなかった）重要アイテムとして「基本艦装」と呼ばれる代物がある。

これは（ややおおげさな表現になるけど）艦娘を艦娘たらしめているものと言っても過言じゃないだろう。

どういうものかわかりやすく説明すると……そうだなあ、お手元にPC等があるなら『艦隊これくしょん』を立ち上げて、「凶鑑表示」のボタンから艦娘凶鑑を参照してほしい。

艦これプレイヤーの誰もが持っているはず（轟沈させたり解体してたりしたら別だけど）の初期艦の駆逐艦娘の誰かを選んで、画像をクリックすれば全身イラストが表示されるはずだ。

駆逐艦であればほぼ例外なく（大きさに差はあれど）背中にデツカイ金属の塊りを背負っているだろう？ それが主機関——いわゆるメインエンジンで、基本艦装の中でも最重要な部品だ。

それに次いで重要なのが「駆動機」と呼ばれる部品で、こちらは通常、艦娘の履いている「靴」を指す。駆逐艦娘だと一部を除いて形状的に普通の靴とあんまり大差ないけど、これが戦艦や空母になるとゴツイ金属製で物々しい形状をしてたりする。

簡単に言えば、艦娘は主機関から発生する謎のエネルギーを駆動機から放出することで、アメンボのごとく水上に立ち、なおかつ航行することができる……ってワケ。根本的にこのふたつが無ければ、艦娘が艦娘として戦場に立つことすらできない——ということは理解できらるだろう。

無論、それ以外にも主砲や魚雷発射管などの武装や、ソナーや電探などの補助機器、あるいは空母の飛行甲板なども、深海棲艦と戦うために必要なことは言うまでもない。

それらを装備・搭載するためのスペースやスロットの部分も、基本艦装に含まれている。

つまり、「艦娘になる」というのは、この基本艦装と「共鳴・同調」

し、「主機関を自分の霊力で動かせるようになること」とほぼ同義なんだ。

……と、まあ、そんな話を、昨日大淀さんたちから聞かされてはいただけだ（今思い出したともいう）。

実際に艦娘が基本艦装&各種兵装を装備する際はどうするのか……と、内心ちよつと期待してたんだ。

（やっぱり、アニメみたく出撃ドックの所定の位置に立ったら射出されて、飛んでくる艦装と「ガキーン！」と合体するのかな？

それとも某魔法少女の防護服バリアジャケットみたたく、何も無いところから魔力ならぬ霊力で形成する？

いやいや、もしかして「ダ○ターン、カムヒア！」的なノリで召喚するのかも）

いい歳（中の人的には二十歳だ）して厨二病か——と笑われそうだけど、やっぱりそういう「武装」とか「変身」って響きは男の子の味だよね？

——もつとも、現実是非情だった。

「はい、確認完了。これが浦風さんの基本艦装ですよ」

「あつ、はい」

工廠で普通に明石さんから手渡されて、そのまま背負う&靴を履き替えるだけでした！

（い、いや、まだだ。これはまだ「初回」。私が艦装を持ってなかったからで、次回からはアニメor魔法少女的な変身シーンがくる可能性もワンチャン……）

「艦装の扱いは鎮守府によって違うんだけど、呉鎮ウヂの場合は、戦闘時以外はこの工廠で一括管理することになってるから、演習とか出動とかの度に、毎回取りに来てくださいね」

……ワンチャン、ありません。知ってたけどさ！

「——はい」

気を取り直して、基本艦装に続いて、今日の演習（というか教習？）で使用するための兵装として、浦風の初期装備の「12.7cm連装砲」を両手に持つ。

初期装備としてはもうひとつ「九四式爆雷投射機」もあるんだけど、「新人がいきなり爆雷投射機持っても、宝の持ち腐れにやしい」という睦月のアドバイスに従って、代りに「61cm三連装魚雷」（正式にはその発射管）を太腿にくくりつけた。

駆逐艦、とくに日本のその場合、主砲や対空砲より魚雷がメインだからね。

主機関を始め、こんな鉄の塊りばかり全身に装備して、この華奢な女の子の身体でまともにも動けるものか少なからず不安だったんだけど、さすがは艦娘と云うべきか。

それなりの重さは確かに感じるけど、肩の重みは体感的には小学生時代のランドセル程度で、さほど動きに支障はなさそう。主砲や魚雷も同様に、^{おれ}「湊」が持ってた金属製のモデルガンよりむしろ軽く感じるくらいだった。

「それ、主機関が動いて、浦風の身体に霊力が供給されてるからよ」私が不思議そうな顔をしている理由を察したのか、雷が苦笑しながら、そう教えてくれる。

「主機関が駆動中の艦娘の腕力は馬力換算されるべき存在ですからね。さすがに軍艦時代のカタログスペックそのままじゃないけど、いちばん非力な駆逐艦でも2〜3馬力、戦艦なら軽く5馬力くらいは継続的に出せますし」

明石さんが補足してくれる。

（そうか、「十万馬力」の某ロボほどじゃないのか〜）

ちよつと残念なような気もするけど、本当にそんな馬鹿力が出たら、うっかり物を壊さないか大変そうなので、むしろ良かったんだろう。

そして、いよいよ演習用のドックで初出撃ならぬ初「進水」するところになった。

「！へえ、こんな感じなんです」

紛れもない水の上に自分が立っているというのは、ひどく奇妙な気分だったけど、同時にそれを「当たり前前だ」と認識している自分も心の中にいる。たぶん、これが艦娘としての感覚というヤツなんだろう。

足から伝わる感触としては水上スキーに近い……のかなあ。やったことがないんで想像だけど。自分の記憶であえて近いのを挙げるとしたら、子供の頃、近所の山で遊んだミニスキーの感覚が多少は似てるかもしれない。

アニメでは「水上スケート」なんて揶揄されてて、主人公の吹雪も最初移動するだけで四苦八苦してたけど、そこまで難しいという気はしないかな。

「浦風、ちよつとすごいね！ あたしなんか、初めて進水した時は恐々でまともに動けなかつたよ？」

白露が感心したような目でこちらを見てるし、睦月も「うんうん」と頷いている。

「そうなの？ 私はそんなに苦労した記憶がないんだけど」
雷は首を傾げているので、こういうのは個人差があるものなのかもしれない。

「ま、最初のステップ1が省略できたのは結果オーライだよな。それじゃあ、ステップ2、主砲を胸元に構えた姿勢での高速蛇行の訓練に入るよ！」

今回の訓練のリーダー格の白露の指示に従って、私は艦娘として戦うための第一歩を踏み出したのだった……。

「あゝ、ダメダメ！ ターンの時も極力スピードは落とさないようにしなくちゃね」

「浦風ちゃん、手が下がってるよ、ちゃんと胸元で構えないと」

「軌跡のブレが大きいわ。もつとコンパクトに動かなきゃ」

——教導役の駆逐艦娘3人は結構スパルタで、お昼時まで目いっぱいしごかれました！

午前中いっぱい航行訓練に費やしたおかげで、4人——いや、4艦”並んでの単縦陣での前進原速までは何とか一応こなせるようにはなった。

「うーん、艦娘初心者としてのSTEP2は一応合格かな」

リーダー・白露からのお墨付きが出たところで、いったん訓練はお開きとなり、4人で昼食を摂ることになった。

空腹と精神的疲労でかなりキビしい状態だったので、ここで休憩できるのは、正直助かるな。

艦娘食堂に入ると、朝とは違ってテーブルの上には何もなく、代りに入り口付近に金属製の大きなトレイが多数積み上げられていた。

十数人の艦娘たちが、そのトレイを持って、食堂奥のカウンターの前に並んでいる。

見れば「あたし、ラーメン!」「僕は今日は焼き魚定食をもらおうよ」などとカウンターの向こうの間宮さんと調理師さん(?)に順番に注文してるみたいだ。

「あ、昼はメニューが選べるんですね」

「うん。朝は原則7時から8時って食事時間が決まってるけど、作戦行動次第で、お昼を食べられる時間はバラバラだからね」

睦月の言葉に、なるほどと納得して、列の最後尾に加わる。

軍隊(の人間)にとって食べることは数少ない楽しみのひとつだ、とかそっち系の小説か漫画で読んだ記憶があるし、艦娘も(外見が年端もいかない若い女の子だとは言え)軍人には違いない。

ハードな任務や訓練の合間に、せめて好きなモンくらい食べられないとストレスがマツハ……ってことも考慮されてるんだろう。

(アニメやら二次創作系作品やらで、一部の艦娘が度を越した大飯喰らいなのも、ストレス発散のためである可能性が微レ存?)

などとくだらないコトを考えているうちに、浦風しづんの順番が回ってきた。

カウンターに貼られた手描きのメニューに書かれていた品名は—

- ・味噌ラーメン（※ライス不要なら言ってください）
- ・チキンカツカレー
- ・ハンバーグ定食
- ・しょうが焼き定食
- ・焼き魚定食（※今日は鯖です）

——の5品で、雷によれば複数同時注文もアリらしい（ただし、万
一残すと「お残しは許しまへんでー」と怒られるので要注意だとか）。
訓練で腹ペコとは言え、そこまで空腹を持って余しているわけでもな
いので、とりあえず今日は一番無難そうなしょうが焼き定食を、ごは
ん大盛でもらうことにした。

注文して10秒とたたずに目の前のトレイに、ご飯、味噌汁、煮物
の小鉢、そして肉と付け合わせの野菜類が盛られた大皿が並べられ
る。

学食とかなら引き換えに代金を払うんだろうけど、有り難いことに
艦娘の食事代は（少なくともここ呉鎮では）無料だ。

トレイを持ちあげ、4人並んで座れる席を探そう……としたところ
で、長テーブルの一角に白露が座ってこちらに手を振っている。

「ごっちごっち！ 席は確保しといたよー」

どうやら睦月がトレイに載せたラーメンとカレーのどちらかは白
露の分らしい。

改めて2・2に分かれてテーブルの対面に座り、「いただきます」と
手を合わせてから、目の前に定食に箸をつけた。

（うん、普通に美味しい）

生姜焼きは、出て来た時間からしてたぶん作り置きのものなんだろ
うけど、ほどよく温かく、また味の方も少なくとも町の定食屋だっ
たら常連になることを決意するレベルの出来栄えだ。

「流石間宮さん、さすまみ！」と言いたいところだが、よそつてくれ
たのは調理師のオバさんなので、作ったのは別の人かもしれない。

「ランチのメニューはあの5品だけなんですか？」

「ううん、日替わりで5品か6品よ。麺類とカレーは必ず入ってて、

焼き魚定食も魚の種類を変えてレギュラー。残る2、3品は日によってまちまちね」

雷がしたり顔で教えてくれた。

ワイワイ雑談をしながら全員のお皿とお椀が空になったところで、カウンタ横に置かれたサーバーから4人分のお茶を入れ、食休みがてら午前中の状況確認デフリーフィングを行うことになった。

「まだまだ未熟なのは自分でもわかってますけど、私の今の状況って、どんなレベルなんでしょうかね?」

思い切って聞いてみた。

「うーん、そうだなあ……聞いたとえが思い浮かばないけど、強いて言うなら「スキーでブルークファールンが普通にできるようになった」くらい?」

むむむと腕組みしながら、白露がそんな評価を漏らす。

「あ、まだボーゲンですらないんですね」

「そっちはまだまだ要練習かな。全然できてないわけじゃないけど」

「旋回半径が大きすぎるにやしい」

「上半身が安定しないのも砲撃時には致命的よ」

睦月と雷にも問題点を指摘され、軽く凹む。

「それ、ぜんぜんダメってことじゃないですか!」

「アハハ……ま、まあ、焦らずにいこうよ。浦風の物覚え自体は悪くない、早いほうだと思うし」

駄目な艦娘ケースだと、丸一日かけて前進微速できるのがやっと、という事もあるらしい。

それに比べたらむしろ順調な方だと3人が口を揃えて言ってくれた——お世辞かもしれないけど。

(まあ、適合率シンクロが低いから嫌な予感シンクロはしてたけどさあ)

慣れない他人の身体で、かつ「水に浮いて行動する」なんて前代未聞の状況で最低限動けるだけ、なんぼかマシなんだと思う。

* * *

続いて午後からは砲撃の訓練となった。

元々(男の頃は)サバゲーが趣味だったから、銃を撃つなら任せろー(バリバリ)……そう思っていた時期が私にもありました、ええ。

『艦これ』プレイヤーの方々は、ゲームを立ち上げて、浦風の立ち絵をよく見ていたみたい。

はーい、青髪ボインのセーラー服美少女が、両手に銃(?)らしきものを持って、にっこり笑って立ってますねー。

美少女の胸……ではなく両手に注目してみましょう。

右手に持つてるのは12.7cm連装砲(を基にした艦娘用武装)なんでしようけど、銃身はともかく、その根元の弾丸・薬莖その他諸々が収められていると思しき部位、重心バランス悪過ぎでしょ! しかも照星とか命中を補助する構造も、何もついてないし。

左手に持つてるのは九四式爆雷投射機……ではどう見てもありませんね。副砲かなー? 子供のおもちゃか三流SFアニメに出てきそうな形状の銃。

——こんなモンをブツパして、何百メートルも離れた敵に当てると言うのか?

「無理ほ」と言いたいののは山々なんだけど、実際、艦娘はソレで深海棲艦と戦って成果を上げてるんだから、この場合、私おれの方が合わせるしかないんだよね。はあく。

「浦風、当たらなくて落ち込むのはわかるけど、こういうのは練習あるのみよ! 大丈夫、雷が見守っててあげるから」

うん、ありがとうロリおかん。その心遣いはうれしいけど、落ち込んでるのは微妙に違う理由だから。

まあ、そうは言っても、実戦に出て「(自分の砲撃が敵に)当たらなければ戦果せんこうはない」なんてボヤクハメになるのはイヤだから、練習しますけどね!

(これ、手持ち型とか腕装着型の砲はまだいいけど、戦艦とか重巡洋艦の背中の主機関に備え付けられてる砲って、どうやって狙ってるんだろうなあ)

頭の片隅で艦娘の神秘(?)に想いを馳せつつ、その後、何度か休憩をはさみつつ、日が暮れる直前まで私は静止標的相手の砲撃訓練に

精を出すことになったのでした、まる。

日が暮れる少し前、午後5時前まで砲撃訓練に励んだ後、本日の私（&付き添いの計4人）のお仕事は終了となった。

「つ、疲れた……」

「中腰に近い一定の姿勢で水上スキーしながら両手で抱えた主砲（模擬弾だけど）を合計100発以上もブツ放す」というのは、やる前に想像してたのより数段ハードな作業だった。

「もしかしてコレ、明日の朝になった腕が上がりなくなってるんじゃないあ……」

これまでの人生経験上、このテの肉体疲労が行き着く先を想像して、今からちよつと憂鬱になる。

「はいはい、心配無用だよ。このあと、みんなが入渠するからね！」

私が懸念していることがわかったのか、白露が苦笑しながらポンポンと肩を叩いてきた。

「入、渠……？ いえ、訓練ですから負傷もとい損傷は特にないんですけど」

「白露が言ってる入渠っていうのは、この場合、お風呂のことよ」
雷が訳知り顔で解説してくれる。

「シャワーでもいいけど、折角なんだからみんなでお風呂に入るにゃしい！」

睦月がこちらの右腕をカッチリホールドするような形で抱きついてきている。

（いや、そりゃ、いつかは入らないといけないとは思ってたけどさあ……こ、心の準備が）

心の中でヘタレな言い訳を呟くものの、無論「浦風」としてはソレを口に出すわけにもいかない。

え？ 「何あわててんの、ご褒美だろう」って？

そんなワケあるかいッ！

重巡クラス以上の十八歳おと以上なな相手はお子様だ。

一番年長つぽい外見の白露でもせいぜい16歳くらい。睦月は13、4歳、雷に至っては十歳児くらいにしか見えない。

うらかぜ なかのひと
私の中味はこれでも二十歳のれっきとした成人男性。二次元ならまだしも三次元げんじつでは、男の娘もロリータもノーセンキューだ。

(そもそも今の浦風しぶんの裸体を見ることにさえ、未だいくらか躊躇いがあるのに、他の女の子と裸のつきあいをするなんて、自分の正体を相手側に暴露できないぶん、むしろ罪悪感でストレスが溜まるかも) そうは思ったものの、巧い断り文句も考えつかず、結局そのままなし崩しに入渠施設(と言う名のお風呂場)へと連れて来られてしまった。

* * *

艦娘用浴場おふろは、何とか普通——いや、予想した以上にレトロな造りだった。

「……昭和末期の銭湯?」

「当たり前! この鎮守府に着任した初代提督の趣味で、わざわざこういう意匠ていけいにしたんだって」

思わず呟いた言葉を睦月が肯定してくれた。

木製の壁に、昭和感あふれる広告の数々が貼られているのに加え、チープな扇風機が設置され、首振り運転で脱衣場の空気を掻き回している。

床は籐むしろのカーペットで、壁際に体重計やドライヤー(これもレトロなデザインだ)なども設置されている。

脱衣かごを置くスペースも木製の棚で、とくに鍵などが設けられていないのは、軍規を信用してのことかな?

番台そのものはないけど、代りに入り口付近にあねさん被りに割烹着姿の妖精さん(可愛い♪)がいて、脱いだ服一式の洗濯&乾燥を請け負ってくれるみたい。

「洗濯って……さすがに1時間以上入浴するつもりはありませんよ?」

中破以上で本来の「入渠」したなら、確かにそれくらいはかかるだろうけど……。

「問題ないわ。ここの洗濯妖精さんは優秀だから」

雷によると、両方合わせて30分もかからないらしい。それなのに普通に洗濯機＋乾燥機使った時と違って、衣類に傷みもなく、染みや汚れもすっかり落ちているらしい。妖精さんの謎技術パネエな！

これまたレトロなガラス扉をガラガラッと開けて中に入ると、私達が一番風呂だったらしく、先客は特にいなかった。

(扶桑さんや祥鳳さん、足柄さんたちと鉢合わせしなくて良かった) いや、元・男としては、いてくれたら目の保養になっただろうとは思うけど、同時に絶対挙動不審になっただろうし。

多摩や那珂ちゃんあたりは白露と大差ない。衣笠は……微妙？

改二改装後だと結構大人びてるからヤバいけど、此処の衣笠さんは、まだ未改装みたいだからそれほど「女」を意識しなくて済むかも。

そんなことを考えながら、ゆったりと広い浴槽に浸かって身体を伸ばす。

「むう……さすがは陽炎型。いい身体してるなあ」

胸元を覗き込まれながら白露にそんなことを言われて、思わず胸を両腕で隠して後ずさり、視線を左右に向けて助けを求めてしまう。

「白露ちゃん、さすがにソレはおじさん臭いにゃしい」

「そうね。暁じゃないけど「淑女」の台詞じゃないわよ」

呆れたような視線と口調で他のふたりが援護してくれた。

「ちよ、違うってば！ ただ、あたしは浦風って胸が駆逐艦にしては大きいなあって思っただけだよッ！」

「胸の件では姉妹の中で一番になるのはあきらめてるし」と、珍しく凹んだ表情を見せる白露に、私も睦月も雷もかける言葉がない。

「(三番艦の村雨が魔乳級だからなあ)そ、それを言うなら、私も妹の磯風とか浜風とかの方が胸が大きいらしいですから」

何とか慰めらしきものを捻り出すと、他のふたりも追従してくれた。

「睦月型も、妹の如月ちゃんの方が胸大きくて雰囲気も大人っぽいにゃしい」

「貴方たちはまだいいわよ。暁型なんて、退役するまでツルペタロ

りっ子のままなことが確定してるんだからね！」

艦娘になったのは自分の意思だけど、さすがにこんな風に若返るとは思ってたわよ——と、なにやら雷はご不満のようだ。

（見かけ通りの年齢じゃないと思ってたけど、やっぱりかー）

これからは「雷さん」って呼んだ方がいいのかね。

ともあれ、そんな風に4人でワイワイ騒いでいたおかげか、気が付いたら私も「女同士のお風呂での裸の付き合い」にすっかり気後れがなくなっていたのは、怪我の功名と言うべきかもしれない。

そのあとはごく普通に髪や身体を洗い、再度お湯に浸かってほっこりした気分になってから風呂から上がった。

浴槽のお湯には、ごくわずかな量だけど入渠用の高速修復材を薄めたものが混ざっているから、肉体疲労も短時間で抜けるんだとか。

バスタオルを身体に巻いた状態で脱衣場に出ると、洗濯妖精さんが綺麗に畳まれた服一式を渡してくれる。

広げてみれば、確かに洗いたての微かな洗剤の匂いがして、訓練で着いた埃や汚れもキチンと落ちていた。

「うわあ、ホントに綺麗になってる……ありがとうね」

お礼を言うと妖精さんはドヤ顔になってフンスと胸を張ってる（可愛い♪）。

「着替えたら一応解散だけど、念のため談話室に行って反省会しとこうか？」

あら、白露サン、意外と真面目な発言……ってフザケてる場合じゃないな。私の訓練につきあってもらってるわけだし。

「では、ぜひ。お時間を使わせるようで申し訳ありませんけど」

「気にしなくてもいいのよ。新人育成だつて立派なお任務だしね」

「まあ、その上で早く一人前になって、戦場で背中を預けられるくらいになってくれると、睦月たちもうれしいかなあ」

そんなことを言ってくれるこの三人はホントいい子だなあ。

「頑張つて一刻も早く一人前の艦娘になろう」と決意した私だったけど——思えば、この時からかもしれない。

浦風が三浦湊としての過去をあまり思い出さなくなったのは。

談話室での反省会のあと、なし崩し的に白露たち3人と雑談↓そのまま4人でゲーム(スマブラ)大会のコンボをキメ、それに夢中になっているうちに、いつの間にか夕食の時間になっていた。

ある意味、軍人らしくない、そしてある意味、ティーンエイジャー外見年齢相応の“日常”に流され、同時に馴染んでいるのが自分でもわかる。

「艦娘も軍人……というか軍隊組織なんだから、もつとストイックなどところかもと思ってました」

昨日同様、初春や磯波たちも加えた駆逐艦グループと一緒に晩ごはんを食べながら、ふと、そんな言葉を漏らしてしまう。

——深海棲艦と艦娘の血潮に塗れた艤装。

ここはブルネイ。情無用、命不知の艦娘たちが集う鎮守府。

前大戦以来の亡霊が住み着くこの世の地獄。

腕つききと謳われた第一艦隊も、ここでは明日の曙光を拝める保障はない。

次回、「大破」。

赤城が食べる朝採りのゴーヤは苦い。

なんとなく『ボト〇ズ』風のポエムが脳裏に浮かんだものの、さすがにソレはないよね、と思い直す。

(実際、公式四コマやアニメの様子を見た限りでは、そこまで切迫している感はないし)

もつとも、ノベライズの方だと『一航戦、出ます!』とか『鶴翼の絆』なんかは、結構深海棲艦に押し込まれてたから、悲壮感マシマシだったけど。

(大淀さんたちから聞いた“この世界”の史実的には、“大反攻”の前は、きつとそんな感じだったんだろうな)

「ふむ。呉鎮は割と綱紀に緩い方じゃな。四大鎮守府の中で、一番キツチリしておるのが横浜で、その次が佐世保、呉が3番目で、舞鶴が一番フリーダムらしいのう」

そう教えてくれた初春の情報も、この鎮守府の別の提督配下の青葉

からのまた聞きのような。

「四大以外の小さな泊地や警備府なんかは、ピンからキリまでいろいろにやしい」

ムツキネットワーク（某ミサカネ〇トワークみたいな電腦情報網……じゃなくて単なる各地の睦月型艦娘による噂のやりとりらしい）経由で睦月も、色々な話は聞いているのだとか。

「中には軍規違反ギリギリの状態まで艦娘を酷使する、限りなく黒^{ブラック}に近いグレイ鎮守府もあるのだとか。嘆かわしいことです」

正義感の強い朝潮ちゃんが憤慨している。

とは言え、国内ならともかく国外の最前線泊地などでは、艦娘^{ひとで}が足りなくて、結果的に不本意ながらハードワークになっている可能性もなくはないだろう。

浦風^{うち}としては、最初にそんな“むせる”環境に放り込まれなかったことを喜ぶべきなんだろうな。

夕飯のあとは、「親睦を深める」と称してこの七人でゲーム大会の続き（今度はマリカーで勝ち抜け戦）したり、そこへ那珂ちゃんが乱入してきたり、「お部屋拜見」と私の部屋に来た白露&初春が、あまりに私物が少ないことに軽くヒイたり……と、賑やかに夜のひと時を過ごすことができた。

「それじゃあ、浦風、おやすみー」

「うむ。良い夢を見るのじゃぞ」

初春の言いぐさにちよつと苦笑する。

「あはは、見る夢が選べるといいんですけどね——おやすみなさい」
自室に戻るふたりを見送った後、さすがに初訓練で心身共に疲れたこともあって、まだ10時過ぎだったが、私は歯を磨いてからベッドに入ったのだった。

* * *

『艦娘になれる——とは言っても、相性というものがあって、希望する艦種・艦型になれるとは限らない』

!?

『あまり身体的発育がよろしくないうえに、顔の方も地味なわたしは、

密かに期待していたのだ』

この声は……また、アレか。

『戦艦とまでは言わない。重巡洋艦、なんなら軽巡洋艦でもいい。愛らしくも美しく、女らしい肢体と容貌かんげせ。そんな艦娘すがたになれることを』

“本物”の浦風とうらみなみの記憶、だな。

『だけど——わたしの適性があつたのは駆逐艦だった』

！

『いくつかの候補のうち、最終的に残ったのは2艦型』

………

『ひとつは、今現在のわたしよりは幾らかはマシだけど、それでもどこか垢抜けない地味な印象の強い、吹雪型の10番艦・浦波。』

もうひとつは、それとは対照的な、スタイルがよくてお洒落な、わたしの理想ともいえる美少女の姿をした陽炎型11番艦の浦風』

………

『当然、わたしは浦風を選んだ。軍の担当係官には、浦波の適合率が70%を越えているのに対し、浦風は30%ちよつとだったから、できれば考え直すように言われたけど、わたしは頑として譲らなかった』

それは——どうなんだろう。

いや、どうせ容姿が変わるなら、少しでも美人な、あるいは理想に近い方を選びたいというのは、理解できなくもないけど……。

『艦娘になるための“手術”は呆気ないほど短時間で済んだ。医務室のベッドで目を覚まし、部屋にあつた鏡で“浦風しぶん”の顔を見た時の歓喜と感動を、わたしは一生忘れないだろう』

わかるようなわからないような……。

『それなのに……ああ、どうして』

？

『どうして……わたしは………』

——ピ。ピ。ピッ、ピ。ピ。ピッ！

「い、い、ここで時間切れかあ」

目が覚めて早々に、ベッドの中で溜息をつく。

「もうちよつとで、戸浦美波の記憶の核心に触れられた気がするの
に」

無論、ソレがわかったからって、私が今の状態から元に戻れると決
まったわけじゃない。むしろ、知ったって何の助けにならない可能性
も少なからずある。

でも、私は、この「入れ替わり」の元凶が、記憶にあると予感、い
や確信していた。

「て言うても、この時間から二度寝するわけにもいかんか。しゃあ
ない。ちいーと早いけど、顔、洗てこよ」

寝間着から手早く「普段の制服」に着替えた私は、「いつものように」
洗面器に朝の身支度セット一式を入れて、共同洗面所へと急ぐ。

——自分が、ごく自然に広島弁でひとり言を漏らしたことにも気づ
かずに。

私が、この『艦これ』の世界（と言ってよいかは微妙に疑問だけど）に出現して3日目、艦娘としての訓練を開始して2日目の午前は、昨日に引き続いて海上での基礎訓練……ではなく、初の座学の時間になった。

「浦風よ、こちらじゃ」

朝ごはんのあと、初春に手を引かれて座学の「教室」とやらに向かう。ちなみに、今日は初春たちのグループが（訓練に）つきあってくれるらしい。

入口の上に「講義室」の名札が掲げられたその部屋は、5メートル四方くらいの広さで、小中学校でおなじみの生徒用机&椅子？（正式名称は知らない）が20個ばかり並べられて、一方の壁には黒板が設置されていた。

「うわあ、懐かしいなあ」

成人男子の視点で見れば、いかにも子供用で窮屈そうな机と椅子だが、駆逐艦娘としてミドルティーンの女の子程度の体格になっている現状だと、それほど違和感はない。

「その言い方からすると、浦風さんは本来はだいぶ年長の方なんですわね」

「ちよ、ちよつと、朝潮ちゃん、艦娘になる前のことを詮索するのは、その、マナー違反だと思うんですけど」

私の言葉尻を捉えた朝潮に磯波が苦言をていしてくれた。

「あ……そうですね。失言でした。すみません」

素直に朝潮が頭を下げてきたので、慌てて止める。

「気にせんでええ。私は……うん、確かに中学はだいぶ前に卒業したよ」

三浦湊は大学生だが、「夢の記憶」で見た限りでは戸浦美波は高校生みたいだったので、あえて曖昧な言い回しで逃げる。

ちなみに、この世界でも中学では義務教育の範疇だ。ただし、13歳以上の女性の場合、病院その他で「検査」を受けた際、艦娘になれ

る資質があると判明することがある。

その場合、本人にもその事実が告知され、そのうえで本人が希望する場合、在学中であっても、15歳になった時点で艦娘となり、軍務に就くことは可能だったりする。

それを実行する者はさほど多くはないが、それでも経済的あるいは家庭環境的な理由から早期に艦娘になることを選ぶ者も、決してゼロではないのだ。

「ふむ、ま、わらわのように成人式を迎えておるのに、艦娘化すると駆逐艦になるケースもあるゆえ、気にする必要はないじゃろうて」

広げた扇で口元を隠しながら、初春がそんな風に嘯いたので、この話はお開きとなった。

雑談が一段落したところで辺りを見回すと、席に着いているのはウチの提督配下の駆逐艦娘ばかりでなく、他の提督配下だと思われる見慣れない艦娘も混じっていた。

どうやら座学に関しては、この基地内の艦娘が合同で受講するらしい。

と、ちょうど授業開始の時間になったらしく、本日の「教官」である重巡娘の妙高さんが講義室に入って来た。

「おはようございます、皆さん」

井上提督のもとに妙高型はいなかったはずだから、この人も他の提督の部下なんだろう。

(まあ、適役っちゃ、適役か)

黒髪をショートカットにした美人さんで、既に改二に改装済みらしく、濃紫のスーツ風上着とタイトスカートの組み合わせが、これでもかというくらい「有能な女教師感」を醸し出している。

これが羽黒さんだと「ちよつと頼りない新米教師」、足柄さんだと「婚活に精を出すOL」つぼく見えるのが不思議だよなー。

(その伝で言えば那智さんは……うん、正しく、女性士官っぽいかも！)

そんなとりとめもない連想をしつつも、真面目な顔つきで「先生」の話に耳を傾けている(ふりをする)私。

ちなみに本日のテーマは「陣形とその効果」とやらで、艦これプレイヤーにはおなじみの陣形——単縦陣、複縦陣、輪形陣、単横陣について説明してくれている。

……ん？

「はい、先生！」

疑問を感じた瞬間、反射的に手を挙げてしまっていた。

「あら、確か貴方は、井上提督の配下に新たに加わった浦風さん、でしたね。何でしょうか？」

幸いにして妙高さんは、唐突な私の挙手にも怒ることもなく、話を聞いてくれた。

「えっと、陣形には、もうひとつ梯形陣とかいうのもあったと思うんですけど」

「よく勉強していますね。確かに梯形陣そもあります。見栄えがよいので、かつては観艦式などで用いられた陣形ですね。ですが……」
ちよつと歯切れが悪い妙高先生。

「実戦における陣形としては少々使いづらいため、あまり使用されることはありません。一応、〴〵様々な局面にそれなりに対応できるオールラウンダー」と言えなくもないのですが」

ああ、うん。その面では複縦陣の方が上手うわてだし、完全にアレの劣化版だもんね。

「了解しました。ありがとうございます」

「いえいえ。疑問を感じたらすぐに質問するという熱心な姿勢は好ましいですよ。他の皆さんも、同様にわからないことがあったら聞いてくださいね」

にこやかに私の受講態度を褒めると、妙高さんは再び講義を再開する。

(そーかー、この世界線でも梯形陣は〴〵いらん子〴〵なんだなー)

昔から艦これプレイヤーにとつての大きな疑問なぞのひとつが、この世界でなら解けるかと思っただけけど、そうは問屋が卸さなかつたらしい。

その後、1時間ごとに15分の休憩をはさみつつ、お昼時までの3

時間の講義を受けて、すっかり学生気分に戻った私は、お昼ご飯を食べるべく初春たち3人と食堂に向かったのだった。

Anoother5-1. 魅惑の黒に誘われて（起承）

〔起〕

月村青雲（つきむら・せいうん）少佐は有意識艦指揮官——すなわち「艦娘の提督」である。

つい先日二十歳になったばかりの彼は、士官学校を卒業してすぐにこの鎮守府に着任したまだまだ新米の提督だが、周囲の評判は悪くない。

上官である鎮守府の総司令官や前任提督からは「堅実かつクレバーな戦略を好む、地味だが有能な新人」、部下である艦娘たちからは「戦闘時は落ち着いた指揮官、ふだんは気のいい兄貴分」と目されている。

ごく一部に、「体格がヒョロくて軍人にしては頼りない」という厳しい意見もあるが、身長そのものはこの年代の男性の平均（170センチ）を僅かに上回っているし、少なくとも士官学校では格闘や銃撃、操舵などの実技について甲乙丙の甲評価は得ていたのだから、海軍士官としての資質は十分に満たしていると言えるだろう。

——とは言え、いつもニコニコ笑っているような穏やかな表情から、あまり「いかつい」とか「威風堂々」というイメージがないのも、また確かではあったが。

実際、客観的に見ても、普段は温厚実徳で、上には礼儀正しく、下には気さく。戦闘時の指揮は攻守にバランスがとれた器用万能型で、冷静に戦局を見極めつつ、決して艦娘を轟沈させない慎重派。休日の趣味は釣りで、鎮守府の食堂を預かる給糧艦娘・間宮に釣果を時折差し入れしている……という絵に描いたような好青年だ。

もつとも、完璧超人だとか聖人君子だと言うワケでは決してなく、月村提督とて未だ年若い男。実はあまり他人に吹聴したくないひとつの性癖をこっそり隠し持っていたりするのだ。

さて、話は変わるが通常の艦船を指揮する提督と、有意識艦指揮官の間には、その能力適性以外にもひとつ大きな違いがある。

「艦娘の提督」は、部下（の艦娘）に対する——言葉は悪いが——依怙贖が認められているのだ。いや、むしろ「お気に入り」を作ることが密かに推奨されていると言ってもよい。

と言うのも、十把一絡げに公平・公正に扱われていた艦娘よりも、提督と親交を深めた（意味深）艦娘の方が、その戦力を飛躍的に伸ばすことができるからだ。

これは提督と艦娘の関係が、単なる上司と部下ではなく、RPG風に言うところの召喚者サモナーとその使い魔の関係に近いことに由来すると言われている。

そして月村提督にも、当然、配下の中に「お気に入り」の艦娘がいるわけだが……。

彼の贖は以下通りだ。

- ・ 航空戦艦 伊勢、日向
- ・ 重巡洋艦 古鷹改二
- ・ 駆逐艦 秋月、タシケント
- ・ 海防艦 佐渡

——おわかりいただけただけであろうか？

そう、この男、爽やかな貌して実は「重度の黒インナーフェチ」だったりするのだ！

まあ、ロリコンだとかNTR趣味だとかに比べれば、あくまで「個人の趣味」の範囲であり、道徳的に非難されるほどのコトでもないのだが、それでもやはり若い男、そして提督として、配下の艦娘おんなのこにはあまり知られたくないのも事実だった。

……その割に、秘書艦には大天使フルタカエルこと重巡娘の古鷹改二を指名しているあたり、性癖というのは抑えきれないものなのかもしれない（本人に言えば「いや、性格と能力で選んだんだよ！」と反論するだろうが）。

幸いにして、いちばん接する機会の多い古鷹がソチラ方面にウブな子なので、彼のシユミは未だバレていないが、駆逐艦娘としても小柄な部類に入るタシケントや、駆逐艦以上に幼い海防艦の佐渡に妙に熱っぽい視線を向けていたことを、他の艦娘に見咎められたことはあ

る。

その時は「苦労の末、入手したレア艦だから、感慨深くて」と言い訳して、なんとかロリコン疑惑は免れた。

しかし……嗚呼、やはり人は己れの業からは逃げられないのだろうか。

その日、月村提督の執務室に3個の小包が誤配(?)されてしまったのだ。

「承」

「提督！ 提督宛にお荷物が届いてましたよ」

優しくて気配り上手な我が鎮守府自慢の秘書艦・古鷹が、そう言っ
て執務室に入って来たのは、20:00を少し回ったあたり。そろそ
ろ僕も、今日の執務を終了しようかと思っていた頃合いだった。

見ればLサイズピザの箱を4つばかり重ねたような大きさのジュ
ラルミン製の箱を3個まとめて運んで来てくれたようだ。

「ご苦労様。重くなかったかい？」

「いえいえ、私、これでも重巡ですから。それに箱自体、それほど重
いものが入ってるわけじゃ、ないみたいですよ」

渡された箱のひとつに貼られた伝票を見たところ、大本営直属の研
究所から送られてきたものらしい。何か試作品の新装備かな？

「ありがとう。あとで中身は確認するから、とりあえず、そのサイド
テーブルにでも積んで置いておいてくれ。それと今日はもうそろそ
ろ上がっていいよ」

「あれ、まだお仕事残ってるようなら、お手伝いしますけど……」

「なに、この2枚に一通り目を通してサインするだけだからね。1
0分もしないうちに終わるさ」

片目をつぶって下手なウイंकをすると、古鷹も納得したようで
ニツコリ笑って「では、お先に失礼させていただきます！」と敬礼し
て部屋を出ていった。

「うーん、そろそろお腹が空いてきたし、さっさと残りを済ませよ
う」

Ano t h e r 5 | 2 a . 魅惑の黒に誘われて (転
[雲])

月村提督は、簡単に開かないよう堅く結ばれた革紐を苦勞しながらも解き、ゆつくりと金属製の箱の蓋を開いた。

50センチ四方ほどの箱の中に入っていたのは……。

「服……艦娘用の制服、か？」

一番上には、白地に赤と青の装飾が施されたノースリーブのワンピースらしき制服が、丁寧に折り畳まれて入っていた。傍らに赤い布、いやネクタイもきれいに丸めて置かれている。

「これは叢雲、いや叢雲改二か！」

思わずテンションが上がる提督。

というのも、黒インナーフェチである提督にとって、叢雲および叢雲改二は彼の鎮守府にいない数少ない黒インナー艦娘のひとりだからだ。

期待と好奇の想いを抑えつつ、叢雲改二用ワンピースとネクタイをまとめて箱から取り出し、サイドテーブルに置く。

その下に隠されていたのは……。

「!!」

予想通り、そこには黒い色彩に彩られたふたつの衣類インナーが入っていた。

僅かに下が透けて見えるほど薄い、化繊素材とおぼしきツルツルの布で作られたハイネックの半袖ハーフトップ。

ワンピースのあまりに短いスカート丈をカバーするために、叢雲改二が履いているデニール数多めの黒いパンティストッキング、いわゆる「黒スト」。

「！…これは……ッ」

問題の黒ストを食い入るような視線で観察していた提督は、ある事に気付き、恐る恐るソレを手に取り間近から凝視する。

「まさか、コレ、ショーツがセットになっているのか!?!」

そう。パンストのヒップ部分はものによつてはそこだけ布地が厚くなつているケースもあるのだが、叢雲改二用黒ストのそこには内側に黒いハイレグ気味なショーツが一体化して縫い込まれていたのだ。その刺激的な黒下着^{ブラ}を手にしたことで、提督の中に抑えきれない欲望が湧いてくる。

(こ、コレを……このインナーを実際に艦娘が着ているトコロが見たい！　そして願わくば着ているソレに触れたいッ!!)

叢雲や叢雲改二本人はいないとは言え、彼女と比較的体型の似通つた艦娘、たとえば姉妹艦である吹雪型の駆逐艦娘なら、この鎮守府にも何人が存在する。

しかし、さすがに(ケツコンカツコカリすらしてない)駆逐艦娘を呼んで、コレ(黒インナー)を着てくれと頼むというのは無理がある。下手したら「憲兵さんこつちです」案件だし、そうでなくとも積み重ねてきた月村提督の信頼は即座に地に落ちるだろう。

いささか興奮に我を忘れがちな月村少佐にも、それくらいはわかるし、そこまで暴走することはできそうにない。

葛藤の末、提督が選んだ方策は——「せつかくだから自分で着てみる」という別方向で変態的な代物だった。

幸いにして、目の前にある叢雲改二用インナーは、トップもボトムも伸縮性があるので、男としてはいささか細身のこの提督なら多少無理すれば着ることはできるだろう。

キョロキョロと挙動不審気味に執務室内を見回し、ドアの鍵を内側からしつかりかけた提督は、いつも着ている白い海軍士官制服をそそくさと脱ぎ捨てた。さらに「最後の砦」であるタンクトップとボクサーブリーフと靴&靴下も脱いで全裸となる。

僅かに震える手で、まずは黒いハーフトップを手に取り……思い切つて袖を通す！

(ああ……コレ、着るとこんな感じなんだ……)

掌で軽く触れた時とは大きく異なる、その滑らかでかつ密着感の強い感触にうっとりする提督。彼は知らないが、その感触は新体操の選手などが着用するレオタードに近いものだった。

細身とは言えまがりなりにも成人男子の肩幅で、13、4歳くらいの体格である叢雲改二用のインナーが着れるか、提督本人も懸念していたのだが、伸縮性豊かな布地のせいかな問題なく着れている。

いや、「問題なく」は言い過ぎで、実際多少窮屈に締め付けられている感覚はあるのだが、その締め付け感が逆に「自分は今、叢雲改二用のアンダーウェアを身に着けているのだ」という倒錯した興奮を提督にもたらしていた。

当然のことながら、提督の股間の「単装砲」も仰角最大近くまで持ち上がっており、しかも今の彼は下半身丸出しなので、その状態が一目瞭然だ。

ソレに気付くと、さすがに恥ずかしかったのか、提督はそそくさと箱の中の黒ストを手にとった。

「せ、せつかくだし、コッチも履いてみようかな」

誰にともなく言い訳するかのようになんか、来客用のソファに腰掛け、ストッキングに片方ずつ足を通す。

ナイロン繊維で編まれたストッキングが爪先から自らの足をゆくりと覆っていく未知なる感覚に、ハーフトップの時と同等かそれ以上の興奮を感じる提督。

元々あまり脛毛の濃い方でもないが、100デニール程度のかかなり濃い目の黒の布地が、足首、ふくらはぎ、膝、太腿と覆っていくにつれて、それまでであった男つぼさが消え失せ、艶めかしい「女の脚」に変わっていくのを恍惚とした心持ちで見つめる。

そうこうしているうちに、鼠蹊部近くの大腿に設けられた太線——ランガード部分よりさらに上の、パンティ部分まで着用する段になって、さすがに一瞬ためらったものの、毒を食らわば皿までと覚悟を決めたのか、一気に引き上げてパンスト内部に縫い付けられたショーツで下腹部を覆い隠す。

不思議なことに、あれほどいきり立っていたはずの「単装砲」は絶妙な黒ストの締め付けに全く抵抗せず、ショーツの中でそのまま下腹部にベタリと押し付けられた形になっている。

無論、成人男子の「ソレ」は（特に勃起時は）それなりの体積があ

るので、普通はパンストを履いたくらいでは隠せず、くつきりその形が浮き上がるはずなのだが、先ほど以上に昂っているはずの提督の其処は、なぜか急速にその充血を失い、黒ストの色と締め付けもあつてか、目を凝らせばかろうじてわかる程度の膨らみを留めているに過ぎなかった。

——その不自然さに月村提督が気付き、そこで手を止め、ふたつの黒インナーを脱いでいれば、その後の「悲劇」は免れたのかもしれない。

肩から二の腕の半ば、そして体幹部は喉元からおへその上辺りまでを黒いハーフトップに覆われ、下半身はへそのすぐ下から爪先まですべてを黒いストッキングとショーツによってシェイプアップされた姿となった提督は、恍惚としてその黒インナーに包まれた自らの身体に掌を滑らせた。

化学合成繊維特有のなめらかでツルツルとしてその手触りと、衣服だけでなく生身の「肉」がまとうことによつて得られる弾力が、彼を魅了する。

元々あまり体格の良い方ではなかったが、上から身体を見下ろす限りでは、着ている布地の体型補整効果が強いせいか、ずいぶんと中性的、あるいは未成熟な女性のソレに近づいているようにも見える。

その所感を、自らの黒インナーに対するフェティッシュな嗜好が生み出す錯覚だろうと提督は思っているようだが……実はこの段階ですでに「変化」は少しずつ始まっていたのだ。

どうせなら執務室の隅の壁に備え付けられた鏡に、今の自らの倒錯的な姿を映そう……として、ふと彼の脳裏にひとつの「天啓」が浮かぶ。

(ここまではしたなら、せつかくだし、叢雲改二の残りの衣装も全部身に着けた方がいいのではないか?)

ソレは、黒インナーフェチとは言え、女装趣味やG I D的な傾向を特に持っていないなかったはずの提督^{かれ}に生じるはずのない思考。

明らかに不自然なはずのその思いつきに、しかし疑問を抱くこともなく、月村提督は、箱から出して脇に置いておいた白い衣装を再度手

にする。

背中から包むように胴部を回し、前布で止めるタイプの丈の短いワンピースの形状は、あるいは「チューブトップドレス」と呼ぶ方が正確かもしれない。

上はノースリーブかつオフショルダーで、スカート部も膝上30センチ近い超ミニなのだが、下に着ている2種類の黒インナーのおかげで、肌の露出自体はさほど多くない。

しかしながら、白と黒の色彩的コントラストや、両腿の前とバスト（より正確には乳首？）部のスリットがアクセントとなつて、何とも言えない艶めかしさを醸し出している。

「おっと、ちゃんとネクタイも締めないとね」

さらに黒いインナーに覆われた細い首からぶら下がる深紅の紐も、一種独特の「エロさ」にひと役買っていた。

続いて箱のいちばん下に入っていたものも取り出す。

指の部分が黒く染められた白手袋。ソール部がオレンジ色に彩られたローファー風の黒い靴。女子中学生相当の叢雲改二のために作られたそれらは、普通に考えれば成人男子の体格を有する提督の手足に合うはずがないのだが……。

どちらも呆気ないほどすんなりと着用でき、特に窮屈さを感じさせることもなくフィットしている。

はたして、その事実が何を指し示しているのかは、間もなく「彼」も思い知ることになる。

ともあれ、艷装を除く叢雲改二用の衣装一式を残らず身に着けた提督は、高鳴る鼓動を抑えつつ、いよいよ鏡の前へと歩み寄った。

伏し目がちな視線の先に最初に映ったのは、ブラックとオレンジのトゥトンカラーのローファーを履いた足元。

そこから徐々に視線を上げていくと、黒いストッキングに覆われた脚部が目に入る。「年若い娘らしく」全体にほっそりと形よく整いつつも、黒スト補正もあつてかむっちりとした太腿などからは艶めかしさも漂っている。

その太腿のランガードの設けられた辺りの少し上でミニスカート

の裾が揺れる様も、健康的なお色気にひと役買っていると言えるだろう。

そのまま視線を上げると、そこには「思春期を迎えたばかり少女にふさわしい」細くくびれたウエストがあり、さらに「未だ成長途上でありながら十分に女らしさも意識させる」控えめに膨らんだバストがあるのも見てとれる。

——着替え始めてから、熱に浮かされた、あるいは酔ったようにぼんやりしていた提督の意識も、さすがにこの期に及ぶと、視界に映るその「姿」に違和感を覚えるようになっていたのだが……それでも視線の移動は止まらない。

ぴっちりした黒いインナーに包まれた華奢な肩。インナーはハイネック構造となっており、「女の子らしい細い」首を喉元まで覆っている。

そしてその首の上にあるのは——琥珀色の瞳を持つやや吊り目がちなアーモンド型の目、ツンと小生意気に尖った形の良い鼻、薄紅色の唇……などのパーツが配された極上の美少女と呼んで差し支えない容貌だ。

襟の辺りで切り揃えていたはずの髪も、気が付けばボリュームたっぷりに腰まで伸び、さらにその色も典型的な日本人らしい黒から僅かにラベンダーがかかった銀色へと変じつつある。

そう、ひとことと言えば、鏡に写っているのはまぎれもなく「吹雪型の艦娘・叢雲改二」にほかならなかった。

半ば無意識に右手を上げて鏡像が左手を上げるのを目視したり、視線を鏡から自らの胸部に転じてソコが確かに膨らんでいることを確認したり、さらに諦めきれずに「上」と「下」に手を伸ばした挙句、「ある」ことと「ない」ことを両掌で実感したりして、今の自分の現状が夢や錯覚ではないことを思い知らされた提督——いや、「叢雲」は、ついに意識を手放したのだった。

Ano t h e r 5 | 2 b . 魅惑の黒に誘われて (転
[月])

ジュラルミン製の箱の蓋を開けた月村提督は、中に入っているモノを見て、目を見張った。

「う、これは、もしや……」

そこにあるのは、白を基調に袖と襟の部分が黒い半袖のセーラー服。それだけなら女子中高生の制服としてありふれているが、ダークグレイのレザーコルセットと一緒にしていると、これは間違いない秋月型艦娘用の衣装だろう。

^{トップス}上着のすぐ下に黒いプリーツスカートが入っていたので、現在実装されている中での候補艦はふたり。秋月型2番艦・照月、そして……。

「！ やっぱり初月か！」

上着とスカートを取り去ると、その下に漆黒のインナースーツが畳んで入れてあったのを見て、提督は歓喜の声を上げた。ちなみに初月はこの鎮守府にいない艦娘のひとりだ。

秋月型の艦娘は、前述の通り白い半袖セーラー服に黒か白のプリーツスカートを履き、ウエストにレザーコルセットを巻く点は共通しているのだが……。

現在、実装されている4人の中でも、4番艦の初月は少々独特の嗜好をしている。

セーラー服とスカートの下に黒いインナーを着ている……という点では、長姉の秋月も同じなのだが、秋月のそれがハイネックの半袖シャツのような形状なのに対して、初月は首から下をくまなく覆う全身タイツのようなものを着込んでいるのだ。

その材質も、秋月のインナーが伊吹・日向姉妹のものに近いストレッチ素材なのに対し、初月のソレは、レザーに近い見かけと触感を持ちつつ、同時にラバーのような高い伸縮性を有した謎の布(?)でできている。

艦娘たちが着ている黒インナーの中でもレア中のレア物であり、月

村提督のような黒インナーフェチにとっては垂涎の代物だ。

そのある意味「憧れの逸品」を目にし、さらに実際に手で触れたことで、彼の中に強烈な衝動が湧き起こる。

(着てみたい……この黒光りするインナースーツを、自分もまもつてみたい……)

もし少しでも提督に冷静さが残っていれば、自らの内に突然現れた強い欲望に疑念を抱いたかもしれない……が、すでに彼の心はあまりに熱い情念パトスに満たされ、理性的な判断ができる状態ではなかった。

むしりとするようにして海軍士官服、そして下着の類まですべて脱ぎ捨てた青年は、箱から出した漆黒の全身スーツを広げて、その構造を確認する。

スーツは、体幹部はもちろんのこと、手は五本の指先まで、足は靴下のように一体化したつま先まですべて一体成型されており、頭部を除く文字通り全身を覆う形となっている。

前面には、ハイネックの首元からヘソの少し上あたりまで切れ込みがあり、切れ目の下端に小さなフアスナーがついている。どうやらここから体を滑り込ませ、最後にフアスナーを上げる仕組みになっているようだ。

切れ目の内側に手を入れてみると、滑らかなら温かみのある何かの革らしき趣きの外側とは異なり、ツルツルしたエナメルのような感触がある。

着込む段階では少々たいへんそうだが、実際に着て、そしてフアスナーを閉めたときの肌のフィット感は、どれほどのものか……そう思うと、提督は胸の鼓動がドキドキと早鐘のように鳴るのを抑えきれない。

まずは、来客用のソファに腰を下ろし、切れ目から右足を突っ込む。幸いにして予想したような窮屈さや引っかかりはほとんど感じられず、驚くほど順調に足先がスーツの中へと飲み込まれていった。

「ふう……」

意図せずお風呂に入った時のような満足げな溜息が漏れる。

そう、それこそ温泉に浸かっているのと同等に気持ちよかったの

だ。

脚部に差し入れた右足の肌にも、まるで吸い付くようにタイツが密着してくる。そのツルリとした触感は予想に反して冷たくはなく、むしろほのかな温かさをもって右脚の肌を包み込んできた。

そして、僅かな締め付けを感じたかと思つた数秒後には、その締め付けられるような感触は失せ、まるで何も着ていないような自然な感覚だけが残される——そう、あたかもタイツと足が融合したかのよう

に。

その感触の虜となつた提督は、たまらず左足の方もタイツに突っ込み、「ふわあ……」と再び歓喜の吐息を漏らしたかと思うと、さらにスツとタイツをたくし上げていく。

両脚とも太腿の半ばまで覆われたところで、ソファから立ち上がり、タイツを腰まで引き上げる。

「う、これは……！」

思わず驚きの声をあげる月村提督。

左足をタイツに入れた時点で、彼自身の「単装砲」は最大仰角までいきり立っていたはずなのだ。

それなのに、タイツをヘソの辺り——ちょうど切れ目の下限の位置までずり上げ、下半身を完全に覆つたところで改めて、股間に目をやれば、どのような仕組みなのか下腹部に押し付けられた「単装砲」のふくらみが、ほとんど見えなくなっている。

懸命に目を凝らせば、「あ、ここ、なんか膨らんでる……かな？」と
かろうじてわからなくもないというレベルだ。しかもタイツにはし
わひとつ寄らず、ピッタリと肌に密着している。

「前」ばかりでなく後ろ——臀部の方も随分と形よくシエイプ
アップされ、俗な意味での「桃尻」と呼ぶにふさわしいプリプリした
ヒップへと変わっていた。

（それほど締め付けが強いつて感じしないのに……凄い体型補整効
果だなあ）

冷静に考えればかなり非常識な状態なのだが、憧れの黒タイツに眩
惑されている提督は、そんなのんきな感想しか浮かんでいない。

そして、そんな風に危機感皆無の状態だからか、そのまま上半身をタイツに包むことにも、なんら拒否感を抱かなかつた。むしろ、喜々として腕の部分を持ち上げると、おもむろに右手から袖を通していく。

多少なりとも身体を捻った姿勢になるため、ほんの少しだけ手間取ったものの、手を滑り込ませる行為自体にはまったく困難はない。むしろ、誘い込まれるようにスムーズに右手の指先が手袋部分に入り込み、そのままそこでタイツと肌が密着する。

手を握ったり開いたりして確かめるが、このタイツは動きをまったく阻害しないばかりか、指先の感覚すらほとんど素手状態と変わりないように思う。

他の大半の駆逐艦娘と異なり、秋月型の艦娘は戦闘時に武装を手持ちしないので、指先でトリガーを引くために微妙な感覚が要求されるわけではないので、提督としては少し意外だった。

残る左手も袖に通し、右手同様に手袋部に馴染ませたのち、腹部からファスナーを引き上げる。

本来少女が着るべきモノを細身とは言え成人男性がまとっているのだから、さすがにキツイのではないかと懸念していたのだが、まるでそんなことはなく、滑らかに動いたファスナーが喉元まである切れ目を完全に閉じていく。

そうして頭部以外の全身を黒いタイツ状のインナースーツに包まれた「彼」の姿は、普段以上に中性的で、パツと見にはペチャパイ気味の痩せぎすの女性と見紛うばかりだ。

半ば無意識に部屋の隅に移動し、壁にある大きめの鏡に己が姿をさらした提督は、そこに映る姿に7割の満足と3割の不満を同時に抱いた。

前者はともかく後者については理由はわかっている。

「彼」の視線が、箱から出してサイドテーブルに置かれたセーラー服やスカートに向かう。

(そうだ……アレも残らず身に着けなくちゃ)

頭の片隅で「何かがおかしい」という警鐘も鳴ってはいるのだが、そ

の感覚に従う前に、「彼」の身体はサイドテーブルに歩み寄り、秋月型艦娘に共通する白と黒のセーラー服を手にとってしまっていた。

——そこから先のことは、あまりはつきりとは覚えていない。

セーラー服をかぶり、黒いミニプリーツスカートを履き、さらにウエストにボタン留めのコルセットを装着したこと。

底の部分が赤く、それ以外はコルセットと同様の素材でできたロングブーツに、なぜがぴったり足が納まったこと。

ブーツと一緒に入っていた黒地に金文字で「第61駆逐隊」と記されたカチューシャを前頭部にはめたこと。

そのすべてが熱に浮かされたような状態でひどく曖昧な記憶しか残っていない。ただ、その光景をうっすらとでも覚えているということは、おそらく鏡の前で着替えたのだろう。

「彼」の意識が再びはつきりしたのは、艤装を除くそれら初月としての衣装をすべて着終わった直後に、それまでとは一転して、全身を覆う黒いインナースーツから強い締め付け感が伝わって来たからだった。

いや、「締め付け感」などという生易しいものではない。

つま先を、踵を、くるぶしを、ふくらはぎを、膝を、太股を……。

尻肉を、股間を、鼠蹊部を、腰を、脇腹を、腹筋を……。

肩を、二の腕を、掌を、鎖骨を、胸筋を、首筋を……。

「ソレ」は予め用意された少女の形をした鑄型に、「彼」の肉体を無理やり押し込んで整形しようという確固たる「力と意志」だった。

抗うこともできずに床の上にくず折れた提督は、呼吸をすることすら忘れてその痛みと拘束感に耐え続ける。

もつとも、実際にソレが提督を苛んだのは、ほんの数十秒……長くとも1分にも満たぬ僅かな時間だった。

唐突にその苦痛から解放された「彼」はよろよろと立ち上がり、目の前の鏡に映る己れの姿形が、先ほどまでとは一変していることに気付く。

そこには、それなりに女装が似合っているとは言え、あくまで中性的な背の高い青年の姿はなく……。

獣耳のような形に跳ねたダークブラウンのセミロングの髪をなびかせ、巨乳と言えないまでも外見年齢相応の大きさの乳房があることが制服越しにもわかる、身長160センチくらいの可愛い少女が、驚いたような表情で鏡の中から此方を見つめていたのだ。

そして、黒インナーを手にして以来ずっと頭の中にかかっていたモヤのようなものが、ようやく晴れた今の提督は、その「初月にしか見えない少女」こそが今の自分の身体すがたなのだとして理解していた。

執務室に声にならない絶叫が響いたが……幸いにして(?)その卓越した防音性能に阻まれ、外部に漏れることはなかった。

Another 5—2c. 魅惑の黒に誘われて（転
「村」）

唐突だが『強殖装甲ガイバー』というSFバトル漫画をご存じだろうか。アニメ化や映画化もされている人気タイトルだが、その第一話で主人公は謎の金属製ユニットを拾い、うっかりスイッチを押してしまい、そこから飛び出してきた触手に絡みつかれた挙げ句、くだんのヒーロー「ガイバー」に変身するハメになる。

なぜ、こんな話をしたかと言えば……「村」の箱を開けた月村提督が、まさにそれに近い状況に遭っているからだ。

順を追って話そう。

自分宛に届いた3つの銀色の箱のうち、とりあえず提督は村印の箱から開けて中身を確認しようとしたのだ。

箱の中には、濃紺を基調に赤と白で彩られたノースリーブのセーラー服らしき上着が入っており、これが何型艦娘用のモノだったかとおつきに思い浮かばなかった提督は、首をひねりつつひとまずソレを箱から取り出して脇に置く。

そのすぐ下に入っているスカートは、上着と同色の紺のプリーツスカートと、何の変哲もないものだったのだが……。

さらにその下から現れた代物が、月村提督の煩惱を揺さぶった。

「あ……」

そう、それは黒い滑らかな化繊素材で作られたインナースーツ——俗にいう「黒インナー」だった。

「むー」

思わずその黒インナーに手を伸ばした提督だったが……。

その指先が布地に触れた瞬間、あろうことかインナースーツがあたかも生物のように動き出し、提督に「襲いかかった」のだ！

軟体動物の触手……というかむしろ粘性生物の如き動きで黒い布は、伸ばされた指先をつたい、提督の腕へとまとわりつく。

「な、なんだ、コレはッ!？」

反射的に手を引き、ソレを振り払おうとした提督だったが……。

黒布の反応の方が早く、袖口から提督の服の中へと侵入していく。

「うわ!!」

何とか引き剥がそうと提督が左手を右袖口に持つていくよりも速く、黒インナーの本体(?)部分も、そのまま服の下へズルリと入りこむ。

次の瞬間、どのようなカラクリか、提督が着ている(軍服なのでそれなりに丈夫なはずの)海軍士官服が、内側から千切れ、弾け飛んだ。その下に着ていたはずの下着類もともに千切れとんだらしく、気が付けば彼は全裸状態……ではなく、問題の黒インナーが全身にまともりついている。

アメーバのように蠕動しながら提督の身体の表面をはい回っていた黒い布(?)は、しかし徐々に動きが緩やかになり、ほどなく元のインナースーツの体裁を取り戻した。

——ただし、月村提督がソレを着用している形で。

布切れが自分から動いたことは脇に置くとしても、そのインナーは随分と奇妙な形状をしていた。

一番近い表現は「黒いハイネットクのワンピース水着」だろうか。実際、静止した今の布の質感などは競泳用の水着などに近い。

ただし、右腕の部分は長袖かつ指先まで手袋状に覆われており、また、右脚についてもタイトのごとく足先まで布が続いている。それでいて、左手と左足は通常の水着同様に肌が剥き出しになった、アシメトリ左右非対称構造なのだ。

奇妙ではあるが、布が自らまわりついて来るといふ非常識なアクシデントを無視すれば、見た目そのものは非常にセクシーではある。せめて、コレを着ているのが(男の)自分でなければなあ……と多少なりとも平静を取り戻した提督が、僅かにスケベ心を復活させたところで、彼の身体が勝手に動き出した。

「な……ちよ、コレ、どうなってるんだ?!」

驚きの声をあげる提督だが、その間も身体は、彼の意思に従わずに動き続ける。間違いなくこの黒インナーの仕業なのだろう。

先ほど脇によけたセーラー服をかぶり、胸元に赤いスカーフを結んでから、白いケープを羽織る。

ミニスカートに上から足を入れて腰まで引き上げ、左横のホックとジッパーを留める。

剥き出しの左脚に箱から出した黒のオーバーニーソックスを履いたうえで、両足には茶色の革のローファを、両手には手首までの白手袋を着用。

最後に赤い縁取りのある黒いベレー帽をかぶったところで、ようやく身体が自由を取り戻した。

「もしかしてこれって……」

ひとつの予想を立て、強制女装状態の提督は自らの姿を鏡に映す。

「やっぱり。この衣装、たぶん先月発表されたばかりの村雨改二のものだな」

年明けの公報で三番艦・村雨の改二実装が伝えられ、村雨改二が黒インナー組だということ自体は月村少佐も知ってはいたのだが、この鎮守府には白露型駆逐艦娘がひとりもないこともあって、先程はとっさに思いつかなかつたらしい。

「提督間でもいろいろ話題になってはいたけど……確かに、エロ可愛い格好だなあ」

先ほど同様、自分みたいな男の女装じゃなく、ぜひとも村雨本人が着ているトコロが見たかった……と、残念に思う提督。

——その思いがキーとなったのだろうか。

再び提督の身体が硬直して動けなくなっただかと思うと、さらなる変化がその身に襲いかかったのだ！

ベレー帽の載った頭部に生えた髪の色が、黒から明るい茶色へと変じていく。同時に、ぞわぞわと震えながら髪の毛自体が長くなり、腰近くまで伸びたところで、黒いリボンが巻き付き勝手にツーサイドアップに結わえられる。

一応170センチはあった身長が10数センチ縮み、元よりそれほど広くもなかった肩幅も、さらに華奢になる。

ペタンコだった（男だから当然だが）胸がゆつくりと盛り上がって

いき、同様にヒップも女らしい丸みを帯びていく。

驚きと恐れに見開かれた両目のうち、左目はほとんど変わっていないが右の瞳は血のような鮮やかな紅色に染まっていく。

よく見れば顔つきも、僅かに元の面影は残しつつも全体にこじんまりとした可愛らしいパーツに変貌しているようだ。

股間にある“男の徴”だけは最後まで存在を主張していたが、他の部分の変化が終わった時点でついに力尽き、陰茎は小指の先ほどの陰核へと変わり、そのすぐ下に胎内へと続く溝と肉壁が生じていく。

鏡に映る己が変化を否応なく見せられることおよそ数分。

そしてその変化が一段落した数分後に、そこに立っていたのは月村提督とは似ても似つかない白露型駆逐艦娘の村雨（改二）にほかならなかった。

Another 5—3. 魅惑の黒に誘われて（結）

そして翌日の朝。

いつも通り始業時間の8：00の1分前に執務室に入って来た古鷹と鉢合わせした僕は、数分間の問答と説明の末、なんとか自分が元・月村青雲少佐であることを、彼女に信じてもらえた。

「まさかそんなコトが……済みません、提督！ 昨日、私が部屋を出ずに一緒にいれば、こんなコトには」

古鷹が泣きそうな顔で繰り返して謝ってくるが、彼女には別に落ち度はない。

確かに、執務室に古鷹や他の艦娘がいたなら、あの箱を開けて中身を目にしたからといって、その場で着てみようとはしなかっただろうが、中身を知った以上、僕の性癖からしてなんだかんだと理屈をつけて箱を自室に持ち帰り、結局はそれ（着衣）を実行していた公算は高い。

つまりは、「艦娘の衣装コスチュームを艦娘以外が身に着けるべからず」という規則を破った自分の自業自得なのだ。

現状を隠し通せるとは思えないので、仕方なく基地の総司令に連絡したところ、とり急ぎ例の研究所へと搬送され、精密検査を受けることになった。

それと合わせて緘口令がしかれ、僕自身と総司令以外で僕が艦娘になっっていることを唯一知る古鷹にも口止めが為された。

「当面『月村少佐』キは、急な呼び出しを受けて大本营に出張している——ということにしておこう」

「了解しました。古鷹も、他の娘たちに聞かれたら、そう言うておいてくれ。あと、申し訳ないけど遠征などの対応も任せる」

「は、はい、承知しました。出来る範囲で頑張ります！」
で。

人間ドックの健康診断の軽く数倍は手間暇のかかった検査の結果、わかったことと言えば、僕の身体は見かけ通り完全に艦娘となっていること、そして艦娘としての各種能力——艤装の装備や展開・使用、水

上機動、入渠による完全回復機能などを備えているということだった。

また、精神面では、基本的に「月村青雲」としてのパフォーマンスと記憶の大半を留めているが、ごく一部は艦娘としてのメンタリテイによる浸食が見られること。また、今後その浸食度合が進むことが予想されることも教えられた。

「とは言え、浸食のスピードはゆっくりしたものじゃし、いくつかの前例から見て、最終的には半々程度の状態で均衡がとれる可能性が高いがの」

研究所の所長——初老の技術士官・平賀准将は、慰めとも開き直りの推奨ともとれる、そんな言葉を投げかけてきた。

「あのう、元に戻ることは……」

「ふむ。艦娘を辞める」こと自体は可能じゃが——今、仮に退役しても、お主の身体は女性のままじゃぞ」

「ええっ!?!」

「身体が完全に変化する前なら、対抗手段を講じてその変化を止めることも不可能ではないんじゃないが、此処に来た時点ですでお主の身体は完全に艦娘化しておったからのう」

「そ、そんなあ」

あの時、目先の欲望に惑わされなければ……と、いくら悔やんでも後の祭りだ。

そんなこんなで、総合的に見て少なくとも「艦娘としては」心身共にほとんど問題ない状態にある——と診断を下された僕は、4日ぶりに自らの所属する鎮守府へと帰ってくることとなった。

それらの検査結果を総司令に報告したうえで、処分が下されるのを待つ……つもりだったんだけど、総司令は随分と僕に同情的だった。

「確かに軍規違反ではあるが、その報いはすでに充分受けているようだからな。一応、形式上、3カ月の減俸処分受けてもらうが、それ以外、降格や罷免などの処分は特に予定していない」

「は？ それはつまり、僕……もとい小官はこのまま提督としての任務に就いていてよい、ということなのでしょうが?」

「その通りだ。最近、艦娘あがりの女性提督や、提督兼任の艦娘も、珍しいがないわけではないからな。問題はなかるう？」
いえ、個人的には艦娘おんなになったのが大問題です——とはさすがに口に出せず、僕は不承不承、首を縦に振るしかなかった。

A n o t h e r 5—4. エピローグ

■エピローグ【叢雲】

「——そんなワケで、ボクは今、提督兼艦娘として日々の軍務に精を出しているわけなんだよね」

「?」 どうしたの、叢雲? いきなりひとり言を呟いて……」

第二艦隊の僚艦である伊勢が、不思議そうに聞いてくる。

「あ、いや、別に何でもないから、気にしないで!」

いくら道中の安全は「ほぼ」保証されている遠征任務とは言え、まだ「艦娘としては」新米の身で、「艦隊演習」前に物思いにふけていたなんて言えるはずもない。

そう、最近のボクは、可能な限り艦娘として遠征任務に参加するようになっている。

これは、せっかく艦娘になったんだから、最前線でも指揮が取れれば作戦の幅が広がるのではと考えたからと、そのためには自分自身をいざという時の予備戦力として計上できるくらいには鍛えておきたいと思ったから……だと、部下なかもの艦娘たちには説明してある。

(もつとも、ソレだけじゃないんだけど)

あの時、平賀准将が言っていたとおり、ごくごくゆつくりではあるけど月村青雲ポクは叢雲わたしの精神的な「浸食」を受けているようで、時々、艦娘として本能か、無性に海に出たくなるんだ。

また、配下の艦娘達には、(細かい事情はスすっ飛ばして)提督ポクが「事故」で叢雲改二になったことは教えてあるんだけど、同時に、艦娘として任務に就いている時は、提督じゃなく一介の艦娘・叢雲として接するようにも伝えておいた。

吹雪や朝潮といった真面目な艦娘コたちは、それをボクなりの艦娘としての覚悟の表明だと受け取ったみたいで感動してたけど……。

(実はソレも違うのよね)

さつきも言ったとおり、叢雲としての精神的要素メンタリティが日に日に増してきているせいとか、24時間ずっと提督ポクとして振る舞い、また周囲からもそう扱われることが、少なからずストレスになっているみたいなの

よ。

だからこそ、こうやって艦娘として海に出ている時くらいは、自分
のことを叢雲として扱ってほしい……ってのが本音だったりするわ。

まあ、そのぶん秘書艦である古鷹には、書類仕事とかを任せること
になって、迷惑かけちゃってるんだけど。

（今度、間宮さんトコ連れて行って、何かおごってあげようかしら）
そう言えば、睦月型の子たちが夏向けの新作メニューが並んでたと
か言ってたから、私も食べてみたいし……って、いかんいかん。

（艦装着けた状態で気を抜くと、つい叢雲としての思考&言動に
引つ張られちゃうんだよね）

気を付けていれば防げるし、実際、鎮守府で提督してる時は意識し
て月村少佐としての口調や振る舞いを心がけてはいるんだけど。

「注目！ 10時の方向に演習相手、距離は3000だ」

旗艦である日向からの報告で、それまでどこかのんびりした空気の
漂っていた第二艦隊全員が臨戦態勢に入った。

もちろん私も例外じゃなくて、背部ユニットから延びる左右のマ
ジックアームの先端に備えつけられた12.7cm連装高角砲の
ロックを外し、いつでも撃てる状態に切り替え、敵が射程内に入るの
を油断なく待ち構える。

「ふふっ。いよいよ戦場ね。改装された叢雲の力、存分に発揮して
みせるわ！」

■エピローグ【初月】

「——そんな経緯で、僕は今、日々の軍務に精を出している」

「？ 何か言った、初月？」

第三艦隊の僚艦にしてルームメイトでもある秋月が、不思議そうに
聞いてくる。

「あ、いや、別に何でもないから、気にしないでくれ、姉さん」

そう、ルームメイト。

今の僕は、表向き「秋月型の艦娘・初月」としてこの鎮守府で暮ら
しているんだ。

ついでに言う、僕が本来は「月村青雲提督」であることは、古鷹を除く艦娘たちには公表していない。

いや、時期を見て、まずは各艦隊の旗艦にはそれとなく教えて、そこから個々の艦娘たちにも伝えてもらうつもりだったんだけど……。

あまりに無邪気に「妹」の着任を喜び、なにくれと世話を焼いてくれる（第三艦隊の旗艦でもある）秋月の様子に気押されて、実は2カ月経った今も、真実を口にできてないんだ。

幸いにして、秘書艦の古鷹が「病氣療養中の提督の代理」として各業務を処理してくれてると、基地総司令からのフォローもあるおかげで、現在のところ鎮守府運営には大きな支障はきたしていないのが救いだ。

——実をいうと、最近、特に問題がないなら、このまま艦娘・初月として暮らしていくのも悪くないんじゃないかと思つてたりもする。

例の平賀准将が言っていた通り、徐々に初月としての意識が僕の中で割合を増しているということも関係しているのかもしれないが……元々、初月はボーイッシュな言動をする艦娘らしく、あまり自分が変わったという自覚はない。

それに——正直、指揮官として後方で指揮するより、最前線に出て戦う方が月村青雲ほくの性に合っている、というのもまぎれもない本音だったりする。

（とは言え、いつまでも古鷹に提督業務を任せっぱなしにするわけにもいかないだろうな）

色々理由をつけて部屋を抜け出しては、執務室に足を運び、提督としての任務を処理してるけど、さすがにそろそろ限界だろう。

（とりあえず、姉さん以外の第二と第四の旗艦に僕のことを明かして、あとは古鷹も交えたその4人で相談してみるしかないか）

二段ベッドの下段で横になり、上段で「おやすみなさい」と挨拶する「姉」にこちらもお休みと返しながら、これからの厄介事こごとを考え、僕は密かに溜息をつくのだった。

■エピソード【村雨】

「村雨姉さん、三時の方向から敵爆撃機、襲来です」

「はいはい、春雨、報告ありがとね！ 第一艦隊、スタンバイオーケー？ じゃあ……やっちゃうからね！」

敵の先制を防げたこともあつて、特に苦労することもなく、わたしたちは無事に敵を撃破して、鎮守府に帰投することができた。

「それじゃあ、今回の任務はこれにて終了。みんな、お疲れさま！」

村雨は、提督代理に報告があるから執務室に行くわ。春雨は先に部屋に帰つてて」

「はい、村雨姉さん」

あの日——研究所から戻つて、総司令と面談した日の翌日から、ウチの鎮守府のシステムは大きく変わった……ってどうか、変えざるを得なかったのよね。

というのも、月村青雲の心の中の村雨の割合の増加が思ったより急速に進んで、総司令と話した次の日には、すでに半々くらいになつちやつてたの。しかも、そこで止まるようにも思えなかつたし……（実際、ほぼ安定している今の状態だと、青雲と村雨の割合つて3:7くらいだと思うのよ）。

この状態でこれまで通り「月村提督」として振る舞うのは難しいと考えた村雨は、秘書艦だった古鷹も交えて総司令と相談して……結果、思い切つて「古鷹が提督代理、村雨がその補佐をする秘書艦」という体制で、当面乗り切ることになったの。

あ、村雨が元は提督だつてことも、その時ちゃんとみんなに公開はしたからね？

もちろん、ソレでちよつとした混乱はいろいろ発生しちゃったけど……結果的には、丸く収まつたし、みんなに隠し事はしなくてよかつたなつて思うの。

まあ、春雨みたく、あの事件の後にうちの鎮守府に来た子は、そもそも村雨の素性を知らないんだけどね。

古鷹さんに貧乏クジを引かせるみたいな形になつちやつたのは、ちよつぱり申し訳なかつたけど、「いいんですよ。提督……もとい村

雨さんも色々大変でしょうから、私に任せてください」って言ってくれたの。つくづくイイ人よね。

コンコンと執務室のドアをノックすると、「はい、どうぞー」と声が聞こえる。

——ガチャッ

「はいはい、艦隊帰投です。いい感じに勝てましたよー！」

Another 5 | after. 雨でなくとも相愛傘で

「あの悲劇」からおおよそ半年あまりが過ぎ、月村提督のもとにあった鎮守府には、(提督が艦娘になったこと以外に)現在大きくふたつの変化があった。

ひとつは、(元)月村少佐に代わって提督代理を務めていた古鷹(改二)が退役したこと。

提督代理になって2カ月ほどは、懸命にその任を果たしていたのだが……。

元は秘書艦だったとは言え、提督(代理)としてその責務を果たすのは、やはり色々無理があったのだろう。

それに加えて、(密かに慕っていた)月村が艦娘・村雨となったのみならず、日に日に男らしさや月村らしさを喪っていくのを間近で見ていたことで、心理的に限界を迎えてしまったのだ。

ふたつめが、提督不在となった鎮守府には、基地総司令のツテで間もなく別の提督が着任してきたことだ。

新たな提督の名前は「太刀川陽介(たちかわ・ようすけ)」。前任者同様、階級は少佐で、実は月村の士官学校での同期だった人物だ。もつとも、それほど親しかったわけでもない、「普通の知人」といった関係だったが……。

とは言え、一応は知り合いではあったという気安さと、ある意味、月村の尻ぬぐいを押し付けることになったという負い目から、秘書艦である村雨は、親身になって新提督・太刀川少佐を世話するよう努めた。

そのおかげでもあってか、太刀川提督は比較的早くこの鎮守府に馴染み、また前任者から引き継いだ艦娘たちとも、それなりに良好な関係を築くことができたのだ。

そして、太刀川の着任から数えて3カ月半ほどが過ぎた現在の彼らの様子を見てみると……。

* * *

「——そろそろ時間か」

吸いかけのタバコを唇から引き剥がして、携帯用灰皿で火を消す。鎮守府での仕事中にはできるだけ吸わないようにしてるんだが、こういうプライベートで手持無沙汰な時くらいは一服してもバチは当たらない。

——カラコロカラコロ

耳慣れない「足音」と共に小走りで待ち人が現れる。

「ごめんなさーい、提督、待った？」

本来なら男らしく甲斐性を見せて「いいや、全然」とでも言うのが筋だろうが、俺の目は待ち合わせに現れた少女の艶姿に釘付けになっていた。

薄桃色の地に赤で小花模様を散らした浴衣は、いつもはミドルティーンくらいに見える少女を、普段より幾分大人っぽく見せている。

あるいは平素はツインテールにしている長い髪を、今日はライトパールのリボンで結び上げ、ポニーテールにまとめうなじを見せているのも、大人びた印象に一役買っているのかもしれない。

右手には「参」と書かれた団扇、左手には紅い巾着袋。

足元は、素足に黒く塗られた相右近の下駄。鼻緒が白と赤の二色で、下駄の側面が紺色に塗られているのが、彼女のいつもの衣装を連想させる。足の爪にはしっかりとオレンジのペディキュアが施されているあたり、お洒落でフェミニンな彼女の心遣いが感じられる。

「さほど待つてはいないさ。それより……見違えたな、村雨」

そう、俺の待ち人は村雨(改二)。部下の艦娘であり、着任以来ずっと秘書艦を任せている右腕であり——そして、つい先日告白し、晴れて恋人同士となった、俺の大事な大事な女の子だ。

なにぶん俺達ふたりとも「軍人」で、それほど休みなんかもない状況なのだが、幸いにして今は「深海棲艦」との戦いが小康状態なので、近くの神社で縁日があると聞き、なんとか夕方からデートする時間を捻出した……というワケだ。

「んふふっ♪ ホント？ 村雨、可愛い？」

上機嫌でくるんと一回転して浴衣姿を見せつける村雨。

藤色の帯を左右非対称な『方花文庫結び』にしているあたりも、とても彼女らしいと言えるだろう。

「ああ、いつも可愛いが今日は特に可愛く見える」

「やあん、提督つてば真面目な顔してそんなこと言うんだから、でも、そういうトコロが好・き・よ♪」

満面の笑顔で村雨は、するりと俺に腕を絡めてくる。

想いを伝えあつたのはおおよそひと月前で、デートらしいデートはまだ2、3回しかしていないため、少々戸惑いと羞恥もあるが、『彼女』が積極的なのに腰が引けていては日本男児がすたる。

俺は極力「何も気にしてない」といった風を装いつつ、下駄を履いている彼女のペースに合わせて村雨をエスコートする。

「うふふっ（提督、ほっぺたがちよつと赤くなってるわよ）」

「？ どうかしたか、村雨？」

「んーん、なんでもなーい♪」

* * *

——周囲の人間が砂糖吐きそうなレベルの甘々バカップルぷりを発揮しているふたりだが、皆さんは思い出していただきたい。

この村雨城……もとい村雨嬢（改二改造済み）が、元は提督かつ現提督・太刀川少佐と同期の男性士官だったことを！

なぜ、元彼・現彼女これほどまでに艦娘ガールズライフに適應しているかについては、いくつか原因はある。

大前提として、月村少佐には男性ながら艦娘になるための素質があつたワケだが、一口に「艦娘になれる素質」といっても、『なれる』艦娘の種類は、人によってある程度限られるのだ。

戦艦、空母などの艦種で言えば、通常は1種類、多くとも2種類。○○型といった艦型についても1〜3種類程度が普通で、さらに言えば同型艦であっても個々人で相性は存在する。

月村少佐について言うなら、例の3つの『箱』のうち、一番相性が良かったのは「(初)月」で、次が「(叢)雲」。残る「(村)雨」はそ

れほど相性は良くなかった。

何？ 「相性が悪いのに、一番適合しているのは納得がいかない」？

いや、それはむしろ逆だ。

相性があまり良くないからこそ、月村少佐が艦娘・村雨となるためには、自我を殺し、その分「村雨」としての記憶を多く受け入れざるを得なかったのだ。

現在の「彼女」の精神状態を例の研究所の所長に見せれば、おそらく月村：村雨の比率を1：9ぐらいと分析するだろう。要するに「おおよそ村雨」である。

念のため断っておくと、あの「事件」当初は、これほど「村雨率」は高くなかったのだ。せいぜい3・5：6・5から3：7程度、つまり3分の1くらいは、月村青雲としてのパーソナリティもすっかり残っていた。

だが——ここで、彼(?)が提督を辞めて艦娘業に専念したのは悪手だった。

艦娘・村雨(しかも改二)として、水上戦闘や艦隊行動、さらには旗艦としての統率、挙句に秘書艦としての提督の補助まで行っている、日々、村雨としての「経験」が増えるばかりだ。

加えて、(元)部下の艦娘全員に「自分が本当は月村提督である」ことを公開したにも関わらず、彼女達が「元提督」を「村雨」としてしか扱わなかったのも誤算と言えば誤算だろう。

もつとも、艦娘は同じ艦娘を、本能的に艦装(制服含む)の気配で識別・感知している傾向があるので、当然と言えば当然かもしれない。そんな風に日々「村雨ナイズ」されている「彼女」を、ふたつの事件が襲う。「古鷹の退役」と「新提督の着任」だ。

前者で「月村としての理解者」を失い、少なからず気落ちしている心の隙間にスルリと入りこんだのが、新提督の太刀川だ。

——いや、言い方が悪かった。別段、彼は質の悪い女誑しのように、村雨をたぶらかさそうとしたわけではない。ごく当たり前に模範的上官として接しただけだ。

ただ、当時(そして今も)村雨は秘書艦をしており、太刀川と接す

る時間が他の艦娘達より圧倒的に多かつた。さらに言えば、村雨という艦娘^艦自体が、「提督に親しみをもって接する世話好きな少女」という傾向を持っており、また、その駆逐艦らしからぬ恵まれたプロポーションと愛らしい顔立ちもあいまって、(男所帯な)士官学校を出て間もない新米提督のハートを撃ち抜いてしまったのは、ある意味自然の流れだった。

そして魚心あれば水心。やや寡黙だが好青年そのものといった提督から日々好意的な視線を向けられて、この「村雨」が徐々に女心に目覚めたのも無理からぬことと言えよう。

今からひと月程前の7月半ばに提督の方から想いを打ち明け、既に十分「提督LOVE」化していた村雨は、喜んでソレを受け入れた。——で、その結果が、今、人目もはばからずに「リング飴の食べさせっこ」などという破廉恥な真似をしているバカップルになるわけだ。

「綺麗……」

祭りの終焉時、物陰で血涙を流している^{ひとりもの}独身者達の気も知らず、提督に寄りそい、その肩に頭をもたれさせて、うつとりと夜空の花火を見つめる村雨。

「(君の方が綺麗だよ……てのはさすがにキザ過ぎるか) うん、そうだな」

とか言いつつ、この伊達男^{ていとく}、半ば無意識に村雨の肩を優しく抱き寄せているあたりが凄い。これがイケメンムーブというやつなのだろう。

「——ねえ、提督、さつきタコ焼き買いに行った時、ついでに隣の夜店で何買ってたのかしら?」

「この暗さの中で気付いてたのか。さすが艦娘、侮れないな」

ポリポリと頭を書きながら、提督はポケットの中のソレを村雨に差し出す。

「…これって……」

「まあ、安物だけど、条件が整い次第渡す予定の指輪の手付、みたいなもんだと思ってくれ。さしづめ「コンヤクカツコカリ」ってとこ

ろかね」

村雨の左手をとり、その薬指に先程夜店で購入した小粒な柘榴石のはまった指輪を着けさせる。

「うっふふふ♪ ありがとう、提督。大事にするわね」

心底嬉しそうに微笑む村雨を見て、提督はできるだけ早く“本物”の方も渡してやろうと決意する。

「とは言え、アレを渡すには、村雨さんおまえの練度を限界まで上げにやならんのだが……」

「はいはい、村雨改二、がんばっちゃうわよ♪」

—おしまい—

昼食後、午後からは再び演習場に出て、砲撃のおさらい、そして新たに雷撃——魚雷による戦闘のイロハについて、初春たちに教わることになった。

「いまだッ——そこ！」

水中に僅かに白い航跡を描きつつ、3発連続して放たれた魚雷が、動標的（といつても海中に敷設されたワイヤーに連動した単純な動きしかできない代物だけど）に見事に命中する。

「ふむ、これまで放った18発中、15発が命中、1発が至近で外れは2発だけか。」

浦風よ。まだまだ素人の域は出ぬレベルではあるが、雷撃についてなかなかセンスがあるようじゃの」

ここまで練習を続けていたところで、意外と高評価を初春からもらうことができた。

「ホントですね。恥ずかしながら、朝潮は雷撃戦の練習を始めたばかりの頃は、動標的にほとんど当たった記憶がありませんでした」

朝潮が同調し、磯波もコクコクと頷いている。

「あはは、ありがとうの。まあ、多少なりとも見どころがあるんなら幸いじゃけえ」

ニツと笑ってお礼を言っておく。

とは言え、私が天性の魚雷ハンター……この言い方だと魚雷〃を〃狩るみたいだしやめよう。某雷巡姉妹みたく雷撃ファイターとしての高い素質を持っているというわけじゃないと思う。

いや、平均的な駆逐艦娘の素養たしなみとして、最低限の雷撃数値は備わってはいるんだらうけどさ。

この浦風とうらみなみの身体に秘められた資質という線も否定はできないけど、たぶんもつと単純に〃慣れ〃の問題なんだろう。

元の三浦湊おれは、けっこうな艦これファンで、PCブラウザ版はもちろん、V i t a版に加えてアーケード版にも一時手を出したりしていた。

特にアーケード版は、他の2機種と違って戦闘にアクション要素があり(というかアクションゲームそのもので)、敵味方がリアルタイムで動くなかで自分で狙いをつけて攻撃しないとイケなかった。

そして、『艦これアーケード』は他のゲーム以上に、いわゆる偏差射撃や予測射撃と言われるテクニクを駆使しないと、まともに戦うことができないんだよ、これが。

これは、てつとり早く言えば、「軍艦同士の戦闘では、互いの距離が遠いので、砲撃ボタンを押してから実際に砲弾が敵に届くまでに相応のタイムラグがあり、敵の現在位置に狙いをつけても当たらない(故に敵の動く先を予測して狙う)」という現実的な理論を、ゲーム内にも適用したものだ。

宙を飛び音速を越える砲弾ですら「そう」なのだから、いわんや水中を進む魚雷をや(反語)。

プレイを始めた頃は苦労したもんだけど、おもに駆逐艦・島風や軽巡・神通を愛用していた身としては、嫌でも雷撃のコツを覚えざるを得なかった。

もつとも、その時の考え方(さすがにタイミングその他はゲームとは違うけど)なんか、今こうして駆逐艦娘になった自分の役に立っているんだから、世の中何が幸いするかわからんものだよなあ。

* * *

辺りの風景が茜色に染まり始める頃合い——17時ごろに、ひとまず今日の訓練は終了となった。

昨日と同じく、入渠施設おふろに入ったのち、談話室で簡単なブリーフィングと雑談。その後、そのまま遠征から返って来た白露たちと合流して、今日もまた駆逐艦娘7人で晩ごはんを摂ることになった。

なお、ここの艦娘食堂における夕食メニューは、主菜メインディッシュについては全員同じ(ちなみに今夜は白菜入りクリームシチュー)だけど、それ以外のサラダだとか小鉢だとかの副食サイドメニューは、複数用意された中から好きなものを取っていい仕組みになっている。

「それにしても、浦風ちゃん、ずいぶんとここの雰囲気くわいきになじんだにゃしい」

デザートの間宮さん謹製のプリン（さすがにコレはひとり1個と決まっている）を、美味しそうに味わいながら、睦月がそんなことを言うてきた。

「そうかろう？　自分ではまだまだ不慣れで、周囲に面倒かけると思うんじゃないか？」

訓練もそうだし、日常に関する細々したことでも、まだ勝手がわからないことも多い。

まあ、この鎮守府……というか、この「世界」に来てから足掛け3日で、まだ100時間も経過してないんだから当然っちゃあ、当然なんだが。

とは言え、確かに自分でも、その短時間にしてはみんなと（少なくとも駆逐艦娘とは）打ち解けて上手くやれてると思う。

朝早くに起きて、日中は身体を動かし、たまに座学。そして、食事時には仲間とワイワイ雑談しながらご飯を食べる。

「向こう」にいた頃の不健康でボツチ気味な味気ない生活とは雲泥の差だ。

今の環境を楽しく思っていないと言ったら、嘘になるだろう。

「あ、あの……少なくとも練度に関しては、気にされる必要はないと思います。新人としては随分と覚えがよい方だと思いますし」

磯波はやさしいなあ。

「訓練の成果もそうだけど、私は浦風が丁寧語じゃなくて普通にしゃべってくれるようになったのがうれしいわね！」

……………はっ！

雷に言われて気が付いたが、確かにいつの間にか「です・ます」口調じゃなくなってるな。

いや、別に礼節とかにこだわっていたわけじゃなくて、会ったばかりの相手に馴れ馴れしく話すのはいかがかと思っただけだから、自然にタメ口になれたのなら、むしろ歓迎すべきコトなんだろうけど……。なんだろう。何か引っかかる気がする。

「それにしても、浦風って素の口調だと『方言』^{なまり}が混じるんだね。それ、どこの言葉？　関西、じゃないないよね」

「ああ、こりや、呉^{このあたり}周辺のモンじや。関西弁とは、ちいと違うんじやよ」

白露の疑問に半ば無意識にそう答えながら、自分の中の違和感の正体によく気付いた。

(そうだ……いつから、私は、意識せんと広島弁をしやべつとった?)

心の中の独白でさえ、一人称が「おれ」でも「わたし」でもなく「うち」になっていることを自覚し愕然とする。

——今の俺は、本当に“俺^{じぶん}”のままなのか？

得体のしれない不安を押し殺しつつ、努めて平静を装って、何とか無事に夕食を食べ終えることができた。

(クリームシチューは割と好物なのに、正直味がわからなかったよ、トホホ)

まあ、心の中でこんな愚痴がこぼせるくらいには、我ながらまだ多少なりとも心の余裕があるってことなんだろう……たぶん。

他の駆逐艦娘たちと別れて、自室に戻る前にこっそり工廠へと立ち寄って明石さんに「このこと」を相談してみることにした。

提督や大淀さんでもいいんだろうけど、艦娘の身体のメンテは、やっぱり工作艦の明石さんが専門家だろうし、あのふたりに比べると腹芸とか不得手そうだから、誤魔化さずに本当のことを教えてもらえろと思っただ。

幸か不幸か明石さんはまだ工廠にいてくれた——ただし、大淀さんも一緒だったけどね。

ほんの一瞬ためらったけど、彼女の顔を見たからって引き返すのはあまりに失礼だし、そもそもそこまで隔意があるわけでもないの、そのままふたりに相談することにした。

* * *

「自分の言動が変わってきている気がする、ですか」

浦風の悩みを聞いた大淀は、クイツと眼鏡を上げ、興味深そうな目で「彼女」を見つめている。

「うーん、正直、艦娘にとってはソレ、ある意味当たり前の話だからねえ」

対照的に明石の方は、あまり興味が無い……というか、気乗りしない様子だった。

「え……ど、どうということなんですか!？」

聞き捨てならないことを耳にした浦風が、慌てて明石に食い下がる。

「あー、そうか。貴方は少々特殊な状況持ちけいれきでしたね。正規の艦娘

志願者には一通り説明されるんだけど、以前お話しした「適合率」というのは常に一定というワケではないんですよ」

「えーと、それは本来の意味の方、ですか？ それとも……」

「無論、後付けで命名された方です」

恐々問い掛ける浦風に、アツサリ彼女が懸念していた答えを返す明石。

「適合率——ここではあえて「浸食率」と言いましうか。浸食率は、艦娘が艦娘として戦っていくにつれて、いえ、艦娘として鎮守府で日常を過ごしていくだけでも、徐々に一定の値まで上昇していくのが普通です。先日、お教えしませんでしたか？」

ブンブンツと首を横に振る浦風。大淀の告げた「一般則」は、彼女にとつては初耳だった。

「ま、「浸食率」って物騒な字面だけど、別の言い方をすれば現在の身体に対応する最適化であって、極論すればただの「慣れ」でもあるからね。水上航行や艦装の扱い、戦闘中とのつさの反射行動なんかが身に着くつてことは、浸食率の上昇とニアリーイコールではあるんですよ」

折角だから、測り直してみます？ と問う明石の提案に、浦風は「も二も無く頷いた。

「えーと、現在の適合率は……40.5ね。これなら実戦でもほぼ問題なく稼働できると思いますよ」

「た、たった3日で10以上増えてるんですけど!?!」

計測器を読み取り、何でもないことのように言う明石に、浦風は驚愕と不安を半々に滲ませた表情で叫ぶ。

「落ち着いてください、浦風さん。これはお伝えしたかと思えますが、艦娘の大半は適合率50を平均値・中央値として、実戦経験を積んだ人材は50台後半くらいになるのが普通です」

「そうそう。だから、50以下の艦娘の場合、鎮守府で暮らしていくうちに比較的早いペースで50に近づくと、逆に50を超えた途端、大半の人は、その「伸び」も鈍化するんですよ」

大淀と明石に代わる代わる説き伏せられて、ある程度、浦風も落ち

着きを取り戻したが……。

「余分な斟酌や気遣いは結構ですので、正直に教えてください。平均が50前後だとしても、高い場合はどれくらいまでいくんですか」
覚悟を決めた目で浦風に問われ、大淀と明石は顔を見合わせた。

「希少な例も含めるなら千差万別ですが……そうですね。高い場合は、浸食率90くらいまでいった例も、いくつかあります」

「逆に40ちよつとで安定したケースも少なからずあるから、その辺りは体質と運と言うほかないんですけどね」

(90って……それ、9割方ほぼ別人じゃないか！)

今の値(40強くらい)に留まる可能性もあると言うのは朗報だが、浦風はあまり樂觀視する気にはなれなかった。

「——わかりました。ですが、3日後にもう一度、再測定をお願いしてもよろしいでしょうか？」

明石からOKの返事を得たうえで、浦風は自室へと戻って行った。

……

……

……

「ねえ、良かったの？ あのことを教えなくて……」

浦風が退室した後、明石は溜息をつきながら、大淀に微妙に責めるような視線を向ける。

「はて、どのことでしょうか」

「わかってて言っているでしょう？ 確かに、浸食率40〜50で留まる艦娘もそれなりの数いるけど、数少ない男性から艦娘化した例のほぼすべてが、70以上に高くなっていることを」

「素」の状態で基となる人物と変化先の艦娘の間でギャップが大きい場合、その差を埋めようと艦娘(正しくはFB艦娘)としての要素が増殖して「隙間」を埋めようとするため、初期適合率しんしよくりつが低い艦娘ほど、のちに高適合化するのではないか——というのが、現在、海軍の研究所で出されている見解だ。

それが正しいとすれば、男性から艦娘という女性になった段階で大きなギャップが生じる元男性の艦娘が、皆高適合率になることも説明

できなくもない。

「——それが正しいとしても、あの人の場合は、いささか特殊なケースですから。例外となる可能性もなきにしもあらずでしょう？」

それに、初実戦前に不安を煽るようなことを告げるのは好ましくない、と大淀は主張し、明石もそれには頷かざるを得なかった。

* * *

その日も、私は、いつもの夢——「本物の戸浦美波の過去の記憶」の続きを見ることになった。だが……。

『横須賀鎮守府で艦娘・浦風になった後、初めて艦装を着けての基礎練習の際、わたしは気づいてしまった』

? なんだろう。

『意気揚々と訓練に臨んだにも関わらず、水上に沈まず立つのがやつとで、歩くどころか這うようなスピードでしか前に進めないこと』

えっ……。

『ぐらぐらと姿勢も安定せず、そんな状態で主砲を撃っても、ロクに当たるはずもないこと』

いや、それは……最初だから、仕方ないだろ？

『それ以上に、演習だと、練習用の模擬弾だと、わかっている、戦場』に出ると怖くて足がすくむこと』

……。

『なんのことはない。無理して艦娘になっても、単なる外側^{ガワ}だけで、わたしには艦娘として一番大事なもの——『覚悟』が圧倒的に足りていなかったのだ』

!!

『呉鎮守府への赴任が正式に決まったが、正直、自分が艦娘としてやっていける自信^{ヒジヨン}がまったく持てない』

! まさか……。

『JRの呉駅を降りて、鎮守府へは15分くらいで着くはずなのに、遅々として足が進まない。』

いつそどこかへ逃げ出してしまいたいが、艦娘という機密情報の塊りとなった自分が失踪することは難しいし、仮にできても母を始め残

された人にも色々迷惑をかけることになるだろう』
そうか、それで……。

——ピピピピッ、ピピピピッ……ピッ！

「細かいリクツはともかく、俺このからだが浦風になった「理由」は、なんとなくわかった気がするな」

某精神交換アニメのネタじゃないけど、たぶん「本物の美波」が「今の状態から逃げ出したい」と強く願ったことが、原因のひとつではあるんだろう。

もつとも、どうして三浦おれ湊がその対象に選ばれたのかは全く謎だけだ。

(そもそも、わざわざ次元の壁を越えんでも、この世界の誰かさんだつて別にええじやろが)

そんな風に不満や疑問は多々あるが、それでも「事の経緯」の一端と「たぶん美波は湊に〴〵なってる」〴〵だろうことが分かって、ほんの少しだけスッキリした気分になった。

「おっと、朝からゆっくりしとるわけにやあいけんの」

真相はどうあれ、今の自分は陽炎型駆逐艦娘の浦風、それも新人だ。

駆逐艦娘みなと一緒に摂る予定の朝食に遅れるのはよくないだろう。

私はベッドから降り、「いつも通り」制服に着替えると、朝の洗顔セットを持って共用洗面所へと急ぐのだった。

三度目の「夢」を観た日から数日。

私は、この鎮守府での暮らしにも徐々に慣れ、(軍属のはしくれでこういう言い方をするのもどうかと思うけど)日々是平穩な毎日を送っていた。

座学の授業の方はとりたてて問題なく、身体を動かしての訓練も、「飛び抜けて優秀」とまではいかないが、「覚えが良い」・「平均よりは上」と言ってもらえる程度には好成果をあげている、らしい。

4日目から始まった、比較的近場への遠征任務(文字面が変だが)への参加でも、特に大きなミスはしていないと思う。

いや、あくまで同僚なかまの初春や白露たちの話なんで、提督や水雷戦のリーダーになる巡洋艦娘たちからの評価は、わからんけど。

「いえ、実際、練度ひと桁の駆逐艦としては、中の上から上の下と言つてよい仕上がりだと思いますよ」

「大淀さんが、そう保証してくれるんは、ちいと心強いおう」
 なにせ、元艦となった「大淀」は連合艦隊旗艦の経験を持っているから、それなりに戦術眼・作戦勘もあると思われるし、それを抜きにしても、数多くの艦娘との面識もあるようだしね。

「基本艤装ならびに主砲、副砲、魚雷発射管の状態も良好です。『適合率』は43.8。こちらも問題ありませんね」

3日経ったので、前回約束した通り明石さんが再度適合率(浸食率)を測ってくれた。

あの時言われた通り、増えてはいるものの、その伸びは確かに鈍化している。

(このまま50くらいで落ち着いてくれるとええんじやがのう)
 そもそもこの(浦風の)身体自体、本来は他人様よそさまのモノなのだから、それで真つ当に艦娘できていることは、僥倖と言えるのだろう。

艦娘の平均的な適合率であるらしい50前後で伸びが止まるなら、むしろ御の字だろう。

「では、浦風さんの『卒業試験』のため、『南西諸島沖海域』に臨

時第二艦隊出撃します」

旗艦を務める祥鳳さんの号令に従い、私たちも出撃する。

「臨時」とつくだけあって、今回は祥鳳・多摩・白露・初春（敬称略）そして浦風、という変則的な構成で隊を組み、戦場に向かうことになる。

理由は、祥鳳さんが言う通り私のためだ。

もつとも、これは私だけ特別扱いというわけではなく、井上提督配下に新米艦娘が配属されると、必ずこうやって、「熟練テスト」を行うことになってるらしい。

ある意味、非効率なやり方ではあるが、こうやって万全の体勢下で「激戦の空気」を新米に体験させることで、次からはその空気に飲まれることなく動けるようになるらしいので、そのあたりは提督の裁量の範疇だろう。

あえて懸念を言えば、「本格的な実戦」はこれが初めてということだろう。

遠征の行き帰りで、遠目に深海棲艦を見かけたり、威嚇のための砲撃くらいは行つたが、そうした際、相手はすぐに敵わぬと見て逃げて行つたため、「どちらかが沈むまで戦う」という「死線」はまだくぐっていないのだ。

だが……。

「おどりゃあ、砲雷撃戦、開始じゃー！」

4隻からなる敵偵察艦隊、5隻からなる敵前衛任務部隊との交戦を経て、最後に敵機動部隊との交戦に臨んだ時には、すでに私も臆することなく敵艦隊への戦意を保つことができていた。

最初の祥鳳さんの開幕爆撃で駆逐口級3隻は撃沈しているので、残った中で一番格下の軽巡へ級へと向かう。

「……………ッ！」

軽巡へ級は、道中で遭遇した軽巡ホ級以上に人間的な造形——ほぼ人型の上半身が魚型の下半身と融合した、まさに「異形の人魚」とも呼ぶべき姿をしているが、それでも動揺することなく戦うことができた。

そもそも、周囲を固めている僚艦のみんなは、練度40オーバーの祥鳳さん（無論、改造で艦載機数大幅増強済だ）を始め、いちばん低い白露でも20を超えて「改」になっている。

この程度の敵がまともに戦って勝てるわけがなく、実際すでに空母ヲ級も重巡り級も中破状態だ。

その2隻を祥鳳さんと多摩さんが牽制しつつ、他の駆逐艦の子たちが、私とへ級の戦いを見守っている。

警えるならこれは、肉食獣の親が子供に初めて狩りをさせるような、私のための（確率は低いとはいえど死の危険性のある）修練の場なのだろう。

提督からの命令があったとは言え、嫌な顔ひとつせず、わざわざつきあってくれたみんなに報いるためにも、ここでできるだけ多くの実戦経験^{じこ}を学んでおこうと改めて決意する。

幸い夕雲型に次ぐバランスのとれた能力の高さを誇る陽炎型駆逐艦だけあってか、未だ練度がひと桁な私も、軽巡へ級とは互角に近い戦いができている。

無論、そうは言ってもまがりなりにも軽巡の火力と耐久力は侮れない……のだが、最初のひと当てで白露の主砲を受けており、中破状態だから全力を發揮できていないのだ。

敵攻撃をかわしながら、脳裏に「艦これアーケード」の戦闘シーンを思い出し、思考をフル回転させる。

（今の状態はどっちもT字有利・不利はない。複縦陣がやや崩れた形での同航戦じゃから、攻撃力は互いに微増状態。

この距離で私がへ級の攻撃受けたら一発大破もありうるが、したら周囲のみんながかたしてくれるじやろうし、あとのことは心配無用。

なら逆に、私は自分ができる限りかわしつつ、攻撃当てることだけに専念するべきじゃね）

覚悟をキメて、へ級の方に弧を描くような軌跡で接近しつつ、右手の12.7cm連装砲を胸の前で構える。

向こうはてつきりこちらが安全策をとると思ってたのか、一瞬虚を

突かれたような素振りを見せたが、すぐに立ち直り、同様に右手と一体化した主砲を向けて来た。

砲口の中に青白い鬼火のような光が急速に充満していくのがわかる。

アレが満ちた瞬間、こちらに発射してくるはずだ。

(くはあく、ぶちきようてえく)

湧き上がる恐怖心を懸命に堪えつつ、敵が発射するタイミングを見逃さないよう集中する。

(！)

へ級の肩に力が入ったのを目撃した瞬間、思い切り右足を蹴りつけるようにして、横っ飛びに跳んで、敵の砲撃を躲す。

左掌を水面につけるような体勢になりつつも、それでも右手の主砲をへ級に向け、私は連続してトリガーを引いた。

* * *

「しよっぱなから動きがイレギュラー過ぎるとか、全弾斉射したのに半分しか当たってないとか、いろいろ言いたいことはあるけど、とりあえず課題は合格にや」

「つしゃあー！」

戦闘終了後、今回の臨時第二艦隊のサブリーダーと試験艦を兼ねていた多摩の言葉に、思わずガッツポーズをとる浦風。

「おめでとう、浦風さん。でも、あまりムチャはしないでくださいね」

今回の旗艦を務めた祥鳳がねぎらいと心配の言葉をかける。

かなり無茶した自覚はあるので、浦風は「すみません」と頭を下げるしかない。

「そうだよー。まあ、気持ちはわからないでもないけどさ」

「確かにのう。上手くいったから良かったものの、いささか冒険が過ぎると言わざるを得ぬわ」

僚艦である白露と初春の評価もやや辛めだ。

「今回の浦風の課題は、^{タスク}「戦闘終了まで小破以下の損傷で生き残ることじゃぞ?」。極論を言えば、戦闘開始と同時に回避に専念しておつて

も、少なくとも今回に限っては誰も文句は言わなかったはずじゃ」

初春の言葉に「エッ!？」という表情になった浦風が、他の3人の顔を見回すと、3人とも「うんうん」と頷いている。

「そんなあ……私の、あの一世一代の決断はいつたい……」

「そうですね。艦娘ですから、国や民間人を護るためなら、自ら危険に飛び込む決断が必要になることもあります。

ですが、その必要もないのに『捨て身』になるのは決して褒められた真似ではありません。むしろ、沈めばそれだけ海軍の戦力が減るのですから、遠回りな利敵行為と言っても過言ではないのですよ」

説明とも説教ともとれる祥鳳の理路整然とした言葉は、下手に罵られたり叱責されたりする以上に、浦風の心に堪えた。

「でも、ある程度損傷していたとは言え、ほぼ単独でへ級を大破させたのは、新米としては破格の好戦果だと言えなくもないにや」

多摩のフォローはうれしいが、浦風としては「やっちまった」的な落胆が強かった。

「まあ、何はともあれ、帰ろ。お腹も減ったし、提督も首を長くしてわたしちの帰りを待ってるだろうしさ」

空気を換えるべく、白露がわざと明るくおどけてくれたおかげで、全員気を取り直し、帰路に着く。

(帰ったら、これまでに以上に訓練に力入れんと、いかんのう)

自省とともに心の中でそう誓う浦風だったが——その脳裏からは、自分の本来の素性や浸食率に関する懸念などが(一時的にせよ)一切消えているのは、果たして良かったのだろうか。

実質的な初実戦——南西諸島防衛線の最深部を突破してから、おおよそふた月ほどの時間が過ぎた。

言うまでも無くと言うか予想通りと言うべきか、浦風が「三浦湊」に戻るための方法は、(あの「夢」を除いて)手がかりさえカケラも見つかっていない。

もつとも、正直に言つてこの件に関しては、もはや半ば諦め気味でもある——良い意味でも悪い意味でも。

悪い意味については「そもそも艦娘なんてやってる限り、こんな超常現象的な事柄の真相を追及するには、絶望的に時間と手段が不足している」というのが大きい。

艦娘が第三世代を迎え、関連法案が次々に整備されたおかげで、現在の艦娘は、ほぼ日本国民に近い権利義務を有しているが、同時に現役の艦娘には幾許かの「縛り」があることも事実だ。

その縛りのひとつが「移動の自由の制限」、艦娘は任務時を除いて所属する基地から、2時間以内に帰れる距離までしか離れることを許されていない。これは休暇中も有効だ。

このテのトンデモ問題の情報ならやはり東京が一番多いのだろうが、呉から一般人が利用な範囲で行けるのは、せいぜい名古屋、いや駅からの徒歩時間も含めれば京都くらいまでだろう。

京都も「京大がある学術都市」と言えないこともないのだろうけど、こういう眉唾事象に手を貸してくれるかは疑問だし……。いや、いつそオカルト方面に振り切れれば、まだ可能性はあるのかもしれない。

加えて、情報を得るための伝手の面でも、せいぜい軍の下士官に準じる待遇でしかない駆逐艦娘というのは、なかなかハードルが高い。むしろ完全に民間のジャーナリストとかの方が、まだ自由に動けるだけ楽かもしれない。

そして「良い意味で」というのは——諦念というより馴致、もしくは(ゲームが違うけど)某軽巡メイド嬢の台詞を引用して「平凡なる

日常を称えましょう」と言う感じ？

ブツチャけると、「今の立場や毎日も悪くない、むしろ結構楽しい」と思い始めたんだ。

それなり以上の危険はあるものの、自分の努力と力量によってその危険は大幅に減らせ、さらに社会的にも個人的にも「やり甲斐」のある仕事。

給料は「並みよりは良い」程度だけれど、職場環境も職場の仲間の人間関係ものきわめて良好。つい最近、待望の後輩兼同居人^{ルームメイト}もできた。

雇用主は日本政府^{おやかたひのまる}で倒産の心配はしなくていいし、退職後の恩給もバツチリ用意されている。

加えて今の自分は、客観的に見ても相当ハイレベルな美少女で、しかも艦娘やつてる限りは老化とも無縁だ（まあ、艦娘できるのはせいぜい10年くらいらしいけど）。

別に性別違和や変身願望持ちではなかったけれど、「来世で生まれ変わるんなら美少女に」という意見に頷ける程度のスケベ心はあったし。

もつとも、こちらはアテが外れたというべきか、一週間もしないうちに（自分が「女」であり、女性が「同性」であるという環境^{こと}に）慣れてしまい、性的な興奮^{ドキドキ}はしなくなっただけ。

危惧していた適合率（という名の浸食率）の問題も、50を超えた途端に横ばい状態になり、たまに測るとコンマ1、2伸びてる程度に留まってるし。

こんだけ好条件が揃った転生（転移？）先なんて、今どき「な●う」小説でも、なかなか用意してくれないんじゃないかな。いや、俺Tu ee / ハーレム系ならもつと突き抜けてるのはあるんだろうけど、現実に関心がある環境に放り込まれるとなったら、むしろ自分は遠慮したいしね。

* * *

「浦風先輩って、ほんと毎日が楽しそうですね」
休日である日曜日の昼前。

食堂へと足を運び、以前からの約束通り間宮に指導を受けつつ昼メニューの下拵えに協力している浦風に向かつて、井上提督配下の最新新人である浜風が、軽く溜息をつきながら、そんなことを言う。「んー、そうかろう？ 私かて別にいつもわろうとるわけじゃないし、はぶてるときもあるよ？」

里芋の皮を剥きながら小首を傾げる浦風。

休日ということで半袖ダンガリーシャツにデニムのショートパンツという比較的ラフな格好だが、きよとんとした表情や柔らかな広島弁もあいまって、とても愛らしい。中味が（少なくとも2カ月半ほど前までは）20歳を超えた男だなんて、誰も想像がつかないだろう。

「それはそうなんですしょうけど。でも、熱血とか全力全開って言うのはちよつと違うかもしれないませんが、いつも『真面目に目の前のことに向かい合って』、そこに喜びや楽しみを見出そうとしてるような気がします」

そう浜風に言われて、ほんの一瞬だけ浦風の手が止まる。

「……ほうか。そう見えるんやったら、何よりじゃ」

平和や平穏が薄氷の如き脆いものであり、だからこそ、尊いその日、常を心から謳歌すること。

此世界で浦風として生きていく覚悟を決めた『彼女』にとつて、それは自らに戒めたひとつの規範であり、それが傍目にも守られているのは、喜ばしいことだった。

「難しいかのう？ そのうち、浜風もわかるよーになるわ」

ただし、それは自分の心象で理解すべきものだ。なので、妹分には、曖昧にそう言つて微笑むだけに留める。

「むう………なんか大人な発言です。もしかして、浦風先輩、ホントはかなり年上？」

標準的な浜風は比較的落ち着いた、それこそ外見年齢より大人びた雰囲気の子が多いらしいが、この浜風は随分表情豊かだ。あるいは中学出たてくらいの年頃なのかもしれない。

「ははは、艦娘の元の年齢を追及するんはヤボじゃな。今の私はセーラー服が似合うピチピチギヤルじゃけえ」

「そ、その言い方が、ますます年増おほやさんっぽいんですけどー!?」
無論、ワザとだ。

そんなことは承知の上で言葉の上でのじゃれ合いを（陽炎型の）姉妹間で交わしながらも、浦風は里芋の皮むき、（なりゆきでついてきた）浜風もサヤエンドウの筋取りを終わらせていた。

「浦風さん、浜風さん、ありがとうございます。じゃあ、今日は小鉢にする。『里芋とサヤエンドウと鶏の煮物』の作り方をお教えしましょう」

ふたりの作業成果の入ったボウルを受け取った間宮が、ニコニコしながら、そう提案してくれる。

レシピ（それ）が目当ての浦風はメモを取りながら真剣に間宮の手元を見つめ、浜風も雰囲気流されたのかまじめに覚えようとしていた。

——そして数年後。間宮から習った家庭料理の数々を振る舞ったことが、とある男性への会心クリティカルヒットの一撃となって、よもやその男性から求婚されることになるうとは、この時の浦風は知る由もなかった」

「……いや、それはないから」

浜風の勝手なナレーションに、思わず素でツツコミを入れてしまう浦風だった。

私が浦風としてこの呉鎮守府に着任してから、おおよそ半年近い時間が流れた。

着任したのが4月の末で、今は10月の頭。残暑も和らぎ、だいぶ過ごしやすい時季になっている。

その間、(基地としての)呉鎮守府全体で見れば大きな変化はなかったが、私が所属する井上提督配下の鎮守府としては、第三艦隊が組織されたことが一番大きな特記事項だろう。

これは、7番目の浦風に続き、浜風、陽炎、夕雲とさらに3人の駆逐艦娘が増え、加えて、軽巡娘・由良と軽空母娘・龍驤が着任したことで、6×3＝18で、3艦隊フル構成できるようになったからだ。

——そして、その第三艦隊の旗艦には、なぜか今、私が割り当てられているのだ。Why?

「いや、おかしいじゃろ!? 普通は水雷戦隊の旗艦は軽巡が務めるんが筋じゃろーが?」

提督にはそう言って抗議したんだが、新たに加わった由良は、まだ着任したばかりで不慣れだからと隊長役を辞退したらしい。

練度の高い他のふたり、多摩と那珂は前線勤務となる第一、第二艦隊から外せないのだとか。

「ほいなら、磯波は? あの子の方が私より先任じゃけん」

磯波本人いわく「人を引っ張るのには向いてない」とのことで断られた。

あー、うん。確かに気弱で、元艦的にも2度も衝突歴がある隠れどじっこだし、そう言われるとそうか。

「な、なら、我らが長姉・陽炎姉さんはどうじゃ?」

ちなみに、この陽炎に関しては、実は予備役からの復帰という形(予想通り、その正体はコンビニの陽子さんだった)になる。

なんでも、着任後しばらくして軽いPTSDを発症したので、養生を兼ねて軍属として鎮守府内設置のセブイレで店員として働いていた——というのが真相らしい。

「うーん、私も結構ブランクがあるからねえ。それに今の練度は浦風の方が高いでしょ」

クツ、それを言われると……。

私は同じ駆逐艦娘で、磯波を除く先任5人（当然練度も高い）に目をやったが、全員明後日の方向に視線を逸らしやがった。

最後の頼みとばかりに、夕雲型ネームシップたるダメ提督製造機2号の方を見たものの、きよとんとした顔で微笑み返されては、言葉は継げない。

それ以前に、この夕雲はまだ練度10ちよつとだし、これで旗艦を任せるのは私が提督でも不安大だろう。

「……私がやるしかないんか」

「うん、まあ、そういうことだから」

肩を落とす私の背中をポンポンと気楽に叩く提督の笑顔がニクい。とりあえず、第三艦隊の正式な発足は、私が改造処置を受けて「浦風改」になってからと決まった。

ちなみに、私の練度は既に35に達しているから、本人の希望と提督の承認があればいつでも改造は可能。なので、善は急げとばかりに明日、改造を受けることになっている。

「はあ……急転直下過ぎるんじや」

「そうですね？　でも、浦風先輩なら、きつと上手くやれると思いますよ」

浜風の無垢な信頼の目が眩しい。

そりゃ、正直に言えば、旗艦として一部隊を任されるということに、誇らしい気持ちがないわけじゃないけどさあ。

緊張と興奮、そして僅かな不安を感じたまま、眠りについた私は――久しぶりに、あの“夢を見た”。

* * *

それは、浦風（となった湊）が以前に3度ばかり見た「元浦風（戸浦美波）」の過去の記憶ではなく、現在（より正確には“入れ替わって以降）の「三浦湊（おそらく中身は美波）」の姿だった。

本来の三浦湊が主だった時とは見違えるように綺麗に整理整頓さ

れた部屋で寝起きし、真面目に大学の講義を受講し、熱心に就職活動の下準備にも励む。

サークルやゼミの先輩からも積極的に話を聞き、卒業後は地方公務員になることを第一目標として頑張っているようだ。

と言つて、学業ガリベン一直線というわけではなく、友人との付き合いや（湊は実質幽霊部員だった）サークル活動にも、相応に精を出している。

「はあく、目指す道もなりたい職業もハッキリわからなかった。俺とはエラい違いだなあ」

『あの子は、この世界で生きていくために懸命に考えて、自分なりの答えを出したからのう』

「！この声は、美波さん、じゃない……よな？」

『うむ、その通り。我は……ま、ありていに言えば、神と呼ばれる存在じゃ。もつとも、耶蘇教の信徒なんぞが崇める唯一神ほどの絶対的な権能ちからを持つてゐるわけではない。八百万の石柱、吹けば飛ぶような零細神じゃがな』

そんなバカな！とは言い切れなかった。

なにせ「彼」自身、艦娘と深海棲艦が実在する艦これ世界に実際、飛ばされたワケだから。

「それで、そのかけまくもかしこき八百万の神の御一方が、俺と彼女の入れ替わりを引き起こしたという理解でようござんすか？」

『皮肉を申すな。その問い掛けに対する回答は「是」じゃが、お主にとつては決して不本意な出来事ではなかったであろう』

「……ノーコメントで」

それ自体が答えになつてゐることは、「彼」も認めざるを得なかった。

「それにしたつて、結果オーライだったから良かったようなものの、いくら戸浦美波あが「どこか逃げ出したい」つて願望を持つてたからつて、なにも異世界(?)の三浦湊おれと入れ換えなくても良かったんじゃないですかねえ」

『?? 何か勘違いしておるようじゃが、お主等ふたりが入れ替わつたのは、あの子の願いによるものではないぞ』

「へ？ それはいつたい……あ、もしかして、単なる「暇を持て余した神々の遊び」的な？」

『たわけ！ 確かに我は零細神じゃが、そこまで暇でも物好きでもないわ！』

よいか、よく聞け。此度の換魂こたびの儀は、お主の「願い」に沿った結果よ』

「……………は？」

その後、神様（自称）が語った話によれば、あの日——一週間ぶりに夜に『艦これ』を起動した日の昼間、三浦湊はフラリと通りがかつた神社で、縁起担ぎにお詣りしていたのだと言う。

「そう言われると、そんな事があったような気がしなくも……」

もつとも、曖昧な記憶をたどっても、彼が詣でたのは、神社と言うにはかなり小さい、祠ほこらに毛が生えた程度の代物だった気がしたのだが。

『零細神じゃと言っておるじゃろーが。それでも、お主の入れてくれた賽銭五百四十五に応じて、わざわざ願いを叶えてやったと言うのに』

「信心より現金に対応かよ……ってか、俺、浦風になりたいなんてお願いをした記憶はないぞ」

流石に、それだけは「彼」も断言できた。

『じゃが、ゲームの世界に憧れておつたのは事実じゃろう？ それに、まだ見ぬ艦娘と会いたいという願望もあったし、そのことを我に願ったじゃろうが』

「うぐつ、そりゃ、会いたいつつーか、ドロップなり建造なりで入手したいとは思ってたし、神頼みのひとつくらいはしたかもしれんけどさあ」

零細神様いわく、その「願い」を叶えるのにちょうど良い願いの持ち主の心の声が次元の彼方から聞こえたので、ちよつと気合を入れて2世界間での「換魂の儀」——いわゆる魂の入れ替えを実施したのだという。

「彼」としては「フザケンな！」と言いたい気持ちがないわけではなかったが……。

『真面目な話、どうする？ 願い主であるお主が願い事を取り消すなら、この換魂の儀を“なかつたこと”にするのは、“今”なら可能じゃ』

艦これ世界で言う艦娘への改造処置は、艦娘の魂こころと身体をより深く強く結びつける行為にほかならない（だからこそ“性能”が上がるのだ）。そのため、それを受ける前の今夜しか、元に戻る機会チャンスは無いのだから。

『改、さらに改二となる処置を受ければ、世界の壁越しには我の如き零細神の権能では、魂をその身体から引き剥がすことは不可能になるじやろう』

それはすなわち、現在のふたりの立場が永久的に固定されることを意味していた。

「……俺さ、美波さんの記憶を覗いたから、知ってるんだ」

彼女が、どれくらい艦娘になったことを悔い、平和な——少なくとも深海棲艦の脅威のない世界に生まれたかったと願っていたかを。

「そんなあの子から、せつかく手に入れた希望を取り上げるのはしのびないよなあ」

確かにそれは嘘ではない——が、一番の理由でもない。

『他人を理由に重大な決断を下すと、いつか後悔する日が来るやもしれぬぞ』

神様は容赦なく“彼”の隠された本心を突いてくる。

「ぐっ……そう、だな。うん、今のナシ」

“彼”、いや彼女は覚悟をキメた。

「俺、いや私は、艦娘・浦風として生きる方が性に合うとる。じゃからこそ、私は“あの世界”で生きる、生きたいんじゃない」

『ならばよし。かくあれかし』

……

……

……

目が覚めると浦風は、見慣れた自室のベッド（ちなみに二段ベッドの下側だ）に布団もかぶらずに横たわっていた。

時間は午前5時を数分ばかり回ったところ。朝練に行く気がないなら、まだ起きるには少し早い時間だったが、なんとなく「そんな気になった彼女は、マイ洗面器に愛用のシャンプーとリンスを入れ、バスタオルに下着と制服をくるんで、そのまま通常入渠施設へと向かった。」

寝間着を脱いで、風呂場へと入り、きちんとかかり湯をしてから湯船に浸かる。

「はふうく、気持ちええねえ」

朝寝する代りに朝湯、しかも一番風呂の愉しみを満喫しながら、なんとはなしに自らの身体に目をやる。

駆逐艦娘としては発育の良い16歳前後の肢体と、同じ陽炎型の中でも比較的大きめの乳房が視界に入った。

(まあ、胸の大きさでは浜風や萩風にはちいと負けとるけど、私かて捨てたモンやないじゃろ♪)

この身体になって半年ほどが経つ。ある意味、見慣れた代物だが、彼女の目には、どこか新鮮な印象をもつて映っていた。

昨日までは、どこか借り物に対する遠慮のようなものがあつたが、今朝目覚めた時から、そんな罪悪感めいた感傷が完全に雲散霧消していることが、おそらく原因だろう。

「私は——陽炎型1番艦・浦風じゃ」

その言葉にも、自分に言い聞かせるような響きはなく、単に事実を事実として確認しているだけだという風な不思議な「軽さ」があつた。

「さ、そろそろ上がって、明石さんところ行って、改造してもらおうかのう！」

昨日までの、どこか「仕方なく」第三艦隊旗艦を引き受けたという態度が一変し、改造に積極的になってきているのは、あるいは昨夜「夢」で見た「もうひとりの自分」の姿に触発されたせいか。

いずれにせよ、この時を境に、浦風は井上提督配下でも有数の水雷屋として知られるようになるのだが……。

その活躍については、また別の機会へと譲ろう。

— 終わり —

―エピソード―

「――ま、私が此之世界で浦風になって以降の経緯は、そんな感じじゃ」

「ひえく、そりやまた、浦風センパイもタイヘンなメにあつたんスねえ」

艦娘出撃待機所に隣接する波止場で、手すりにもたれかかった青髪の少女が語った、希少な艦娘としてもさらに数奇な運命に、金髪の少女が同情とも感嘆ともとれる言葉を漏らす。

「大変っちゃ大変じゃが……ま、私としては後悔はしとらんよ。むしろ、幸運やったと思うけん」

・ 数歳若返った

・ (性別が変わったとはいえ) 美形になれた

・ (命の危険があるとは言え) 遣り甲斐のあるホワイトな職場

・ 人間関係も良好円滑

……と、そう考えれば、確かに(決して箇条書きマジツクの強弁ではなく)この浦風は恵まれていると言えるのかもしれない。

何より、「そうなった」ことは予想外の事態でも、「そうある、あり続ける」ことを選んだのは浦風自身なのだから、「後悔なんて、あるわけない」のだろう。

「――あんたはどうなんよ? 私と似たよおな事件におうて「自分不幸だー!」とか思うとる?」

「うーん、そー言われると……別に悲観してないっスね!」

金髪碧眼の少女が、その人形めいて整った美貌に似つかわしくない、やんちゃな悪戯小僧のような笑みを浮かべる。

無意識なのか、自らの(おそらく推定Fカップはありそうな)乳房を、ムニムニと持ちあげるように揉んでいる。

「こおら、やめとき、はしたない。さすがに人前でそれは、淑女云々以前に、常識人として見て痴女じゃけん」

苦笑とも呆れともつかない口調で「後輩」に注意する浦風。

Dカップ(かつ元男)の彼女だからこれくらいで済んでいるが、龍

驥や雷などの「ない」艦娘だったら、嫉妬も混じって大変な権幕だったかもしれない。

「うおっと、すみません。気を付けてはいるんすが、時々、ついヤっちゃうんすよねー」

能天気なこの子も痴女扱いはさすがに嫌だったのか、素直に手を離す。

「あ、せっかくなんで聞きたいんすけど、浦風センパイ、恋愛とかエッチ方面は、どっち寄りなんすか？」

「また、言いづらいことを聞くんじゃねえ」

不躰なその質問を苦笑を深めるだけで流せるあたり、この浦風は大了した人格者だろう。

「それで、わざわざ「どっち寄り」って言い方するくらいじゃから、あんたも自分の嗜好が変化しとる自覚はあるんじやろ？」

「あー、そっすね。たしかに、以前のオレむかしっちだったら、女子中高生だらけの環境りょうに放り込まれたら、興奮し過ぎてヤベエ状態だったと思うんすが、思い返すとそーゆーことは無かったっすね」

もともとヘタレっすから、チカンやノゾキをする根性はなかったと思うっすけど——と、コメントに困る自己評価を漏らす少女。

「私も似たようなモンじゃ。女になった戸惑いとか照れは、最初は多少はあったけど、1年経った今は「女の身体れ」が当たり前になつとるし、同じ理由で、周囲の艦娘をそういう（性的な）目では見れんよ」かとやって男が恋愛対象かと問われると「うーん」と悩む——というのが、浦風の正直な気持ちではあった。

「ま、将来的には、どおなるかわからんよ。私ら同様、元男性の艦娘つちゅーのは実は何人かおるみたいじゃけど、その大半が男性提督とケツコンしとるらしいし」

ケツコンカツコカリから本物の「結婚」にまで進んだ艦娘も、少なからずいるようなので、彼女たちも「そう」ならないと断言はできない。

それを想像しても「キモい」とか「まっぴら御免」とか思わず、「ま、退役後なら、そういう人生もありじやろ」と思えてしまうあたり、

元・三浦湊”たるこの浦風も、随分と女としての価値観と感性に染まったと言えるのかもしれない。

それには、この世界で艦娘・浦風として生きていくことを誓い、改造処置を受けたあの日以降、ある『変化』が起きたことも関係しているのだろう。

それまでは、浦風が艦娘になる以前の『戸浦美波』の記憶については、ごくまれに夢で映画を観るがごとく断片的に垣間見る程度だったのに、あれ以来、日常生活の中でも、『美波』としての記憶が意識すればある程度思い出せるようになったのだ。

浦風は、これをあのお節介な神様からの最後の贈り物だと解している。

この世界に於いて、艦娘は長くても10年前後で艦装を纏う力を失い、退役して一般人に戻る日が来る。

そうなった時——つまり艦娘・浦風から戸籍名・戸浦美波に『戻った』時、美波としての過去の記憶が無いと多大な苦勞をすることが目に見えている。

早くに父を亡くしたとは言え、美波の母は健在だし、(美波の記憶によれば)祖父母や親戚、あるいは学校時代の知人もいるのだ。

また、『三浦湊になった元・美波』の方は、すでに『湊としての過去の記憶』が与えられていたようだったし、それを一方的だと不公平に感じないよう配慮されたという可能性もあった。

とは言え、周囲に恒常的に接する男性が提督か鎮守府勤務の軍人くらいしかおらず、提督以外の大半がずっと年長(若くても30歳以上だ)という環境で、「男と恋愛関係になる」というのは難しいかもしれない。

ちなみに井上提督には、ひと月ほど前に恋人ステディとなる女性ができている。

相手は、例によって艦娘だが、外見的最年長の扶桑や良妻度の高そうな祥鳳ではなく、重巡洋艦娘の足柄だったというのが、ほかの艦娘たちからすると、ちよつと意外な感があった。

もつとも、二次創作やら某アニメでは婚活棲鬼扱いされがちな足柄

だが、井上提督配下の足柄は、女子力が（衣食住の「住」を除いて）高く、決め手が「休日」に提督の部屋にお邪魔して作った肉じゃが」であった辺り、お約束と言えればお約束なのかもしれない。

「そこはカツカレーじゃないんすか!？」

「カレーは男性も割と普通に作るからポイント低めね。（胃袋を）狙うなら外食であまり食べる機会のない家庭料理が◎よ♪」なんじやと」

——などと、「如何にして足柄が提督のハートをげっちゆしたか」について、興味津々で話し合っている時点で、このふたりも十分、ガールズサイドにメンタルが片足突っ込んでいけると言えるだろう。

と、その時、「う〜〜〜」というサイレンの音が辺りに鳴り渡り、次いで大淀によるアナウンス放送が聞こえてきた。

「お、4回目の演習が終わったようじゃの」

「また、舞鎮^{ウチ}の負けっすか。ちよっと凹むっすね」

今さらだが、呉鎮^コに、他の鎮守府所属の金髪少女が来ているのは、合同演習のためで、浦風は1回目、金髪の軽空母娘は2回目の演習で出撃して、相応に力を示している。

お互いの提督経由で自分たちのレアな事情（現実世界(?)）から来た元男性）を知り、色々話してみたかったため、わざわざの待機室から抜け出して、あまり人の来ない場所で雑談していたのだ。

「演習はあと1回あるはずじゃが、そろそろ戻った方がええな。浜風あたりがうるさそうじゃけん」

「そっすね。オレっちもあんまりサボっていると、ぼのセンパイに怒られそうっす」

苦笑いのようなものを浮かべつつ、波止場から他の艦娘^{艦娘}たちが観戦しているであろう待機所の方に向かうふたり。

「ま、お互い、ほかの艦娘^{艦娘}には言えそうない変わった事情持ちじゃけえ、何かあったら相談くらいはのるよ?」

「マジっすか、感謝感激あめあらっす」

「それを言うなら雨霞^{アメカ}じゃ!」

n t a u r " S t o r y)
S T o b e c o n t i n u e d
S A N S H I T A | C e

Ano t h e r 6. 歯止めなく如月になっていく私
(オレ)

【鎮守府へヴン】

——カリコリカリカリ……

今どき珍しくペンと紙を用いて、手書きで書類を作成する音が室内に響く。

その部屋——呉鎮守府内にある提督執務室のひとつでは、一組の男女がデスクの前に座って、書類仕事をしていた。

ひとりは、この呉鎮に所属する5人の提督のうちのひとりである松田慎司少佐。

士官学校の短期コースを卒業してすぐに此処に着任し、まだ提督歴半年に満たない新人司令官だ。

戦果は可もなく不可もなく……と言うとグータラ駄目提督のように思うかもしれないが、少なくとも配下の艦娘を轟沈させたことはないし、無理せず少しずつ着実に手を広げている点は、上司や先輩提督からもそれなりに評価されている。

そしてもうひとり、彼の秘書艦を務めているのは……。

「司令官……好きよ☆ なぐんちやって♪」

その台詞だけで、艦これ／艦娘に詳しい人なら誰だかわかるだろう。

そう、駆逐艦娘の「如月」だ。

睦月型駆逐艦2番艦・如月。1番艦の睦月と並んで睦月型のお姉さんのポジションにあり、また11、2歳くらいの外見の多い睦月型の中では少し年長の、おおよそ13、4歳くらいに見える小豆色の髪をした美少女だ。

「2番艦はスケベボディ」の俗説通り睦月型としては胸も大きく(といってもB以上C未満程度だが)、すらりと均整のとれた肢体は年齢に見合わぬ健康的なお色気を放っている。

いわゆる「提督LOVE」勢のひとりで、駆逐艦の中では朝潮型4

番艦の荒潮と並んで、提督に対するストレートな好意や誘惑を口にすることも多い。もつとも半分は提督をからかっただけの発言のようだが……。

「ありがとう。俺もだよ」

普段なら聞こえなかつたふりで流すか、顔を赤らめて口ごもるだろう松田提督が、いつもとは異なる反応を示した。

「ふえっ!? あ、あの、それって……」

思いがけない提督の発言に、軽いパニックになる「如月」。

「如月……」

いつの間にか椅子から立ち上がった提督が、「如月」に覆いかぶさるような姿勢で顔を覗き込んでいた。

軽く曲げた右手の人差指で「如月」の華奢な下顎おしがいを持ち上げ、上向きにさせる。

(あ……コレ知ってる。顎クイってヤツだ)

恋愛物のマンガやアニメでよく見られる動作で、この続きは「如月」にも容易に想像できた。

(ああ……ダメ……なのにい)

心の中では否定的な言葉を漏らしつつも、「如月」の身体は雰囲気飲まれて受け入れ態勢になっており、提督の貌がアップになるのに合わせて自然に目を閉じてさえいる。

ふたりの唇が重なるうとした、その瞬間。

——ボタン！

「提督ー、作戦完了のお知らせなのですー」

近海掃討の任務に出ていた第一水雷戦隊旗艦(代理)の睦月が、執務室のドアを押し開いて、元気いっぱいに入ってきた。

瞬時にして跳び離れる提督と「如月」だったが……。

「およ? ははくん……提督う、如月ちゃんとイケナイこととしてましたねえ?」

一転、睦月が「ニコニコ」ではなく「ニヤニヤ」といった感じの笑顔で、提督に問い掛ける。

「——黙秘権を行使する」

ぶつきらぼうに提督が言い捨てるが、僅かに赤らめたその顔と、こちらは茹蟠のように真っ赤になった「如月」の様子を見れば答えは一目瞭然だ。

「いひひっ！ まあ、睦月は気遣いのできるオトナのオンナだからこれくらいで勘弁してあげるにやしい」

「いったん銚を収める睦月。
「でも、金剛さんとかに知られたら、『HEY、提督うー！ ラブラブするのもイイけどサー、時間と場所をわきまえなヨー！』って怒られるんじゃないかにやー」

「うゝっ……」

確かに、部隊を統括する提督とその秘書艦が勤務時間中にとるべき行動でなかったことは確かだ。

「わ、わかった。以後、自重する」

「まあ、如月ちゃんは可愛いからねー、提督の気持ちはわかるにやしい」

のんきな提督と「姉」の会話を聞きながら、うつむいた「如月」は密かに自己嫌悪に陥っていた。

（ま、また雰囲気の流れされて如月っぽい行動をとってしまった……オレ、本当は如月じゃないのに……）

それでは、このどこから見ても艦娘・如月にしか見えない少女は、いったい「誰」だと言うのか？

真相を説明するには少々込み入った事情があった。

【今日から（て）のつく公務員】

白に限りなく近いグレーの、リノリウムのような質感の材質で四方と床を覆われた、窓のない5メートル四方の部屋（？）で、彼——松田慎司は「それ」と対峙していた。

「えーと、つまり……「これから貴方には異世界転生してもらいます」ってこと？」

『はい、結論から言えば、そうなりますね』

まばゆい光に包まれ、かろうじて人型とくらいにしか判別できない

その存在が、中性的な印象の“声”で彼に告げる。

思い切り事態を要約すると、他の世界の神様の不手際で、この世界——地球にありえないモンスターが出現。その結果、電車が転倒事故を起こし、200名以上が重軽傷を負い、さらに運の悪い十数人が命を失ったのだ。

地球を管轄管理する神々にとっても寝耳に水な話で、その他世界の神に嚴重に抗議、感謝料（というか神力という名のエネルギー）を分捕った後、予定外の死を迎えた面々に、補償を行おうとしているというわけだ。

この一件での死者たちをそのまま蘇生することも考えられたのだが、すでに病院に收容されたうえで死亡が確認されており、また遺体の損壊も激しいため、それを誤魔化すのは多大な困難が予想された。そこで、神々側としては分捕った多量の神力を用いて、彼・彼女らの魂を異世界転生させることにしたのだ。

ある程度の制限はあるものの、どんな世界に転生するかは選択可能、さらに転生に際して本人の希望に沿った特技ないしアイテムも付ける——という、かなりの好条件だ。

中には「異世界転生」に馴染みのない初老の男性や小学生の子もいて、転生担当神も説明に苦慮したが、幸いにしてインドア派大学生の松田は、そのあたりのお約束は理解していた。

彼は「フィクションの世界への転生も可能か」を確認したうえで、日頃からプレイしているゲーム『艦隊これくしょん』への転生を希望したのだ。

『ああ、アレですか……（パラパラパラ）。いくつか候補はありますが、どれにしますか？』

「は？」

『いえ、一口に『艦これ』系世界と言いましても、深海棲艦に蹂躪され、人類は風前の灯という世界もあれば、無事深海棲艦を撃退して、艦娘たちの戦いも過去のものという平和な世界もあるんですよ』

艦娘という存在にしても、「素質のある人間が艦装を装備しているだけ」というものから、「ありし日の軍艦に宿っていた船魂（？）が顕

現・実体化した存在」という人外要素バリバリなものまで、世界によって色々なのだと言う。

『どうしますか？ 深海棲艦相手にも無双できるようなチート武力を望まれるなら、人類劣勢の方が歓迎されると思いますが……』

「いや、普通の提督でいいから。コミックとかアンソロで描かれたような、適度に戦いつつ、日常ではそれなりにほのぼのした感じの世界の」

痛いのか怖いのは嫌だしなー、と微妙にヘタレたことを考える松田。

『艦娘のスタンスは？ 人間寄り？ 英霊寄り？』

『その中間……よりは多少人間寄りな感じで』

次々に松田に質問して、条件を絞り込んでいく担当神。

そうした問答の結果、とある『艦これ』系世界が選ばれ、そこに（転生だが現在と同じ姿で）送り込まれることになったのだが……。

『これなら消費神力規定値にまだ余裕がありますね。どうしますか？ 何かチート的な特典はつけますか？ ニコポとか撫でポもありますよ？』

「艦これで提督やるのにそんなの持ってたら、修羅場不可避じゃないすか！ やだー！」

『賢明ですね。そうですね、それでは……初期艦を選ばせてあげましょう』

ゲームの『艦これ』では、初期艦として選べるのは吹雪・叢雲・漣・電・五月雨の5人の駆逐艦のひとりで、家庭用移植版ならさらに睦月・大潮・時雨・川内・神通・那珂も候補に挙がる。

実際の艦これ的世界では、上記の縛りはないものの、それでもレア度の低い駆逐艦が配されるのが通例だった。

『事前登録特典の大井とか“有明の女王”、あるいは名誉初期艦のゴトランドなどでもOKですよ♪』

「……ちよつと心惹かれるものはあるけど、その3人じゃなくて、如月でもいいか？」

『可能ですが……いいんですか？ 如月なら後からでも比較的簡単

に入手できると思うのですが』

「いーの。俺的には最初にケツコンカツコカリした嫁艦なんだし、その如月と1から鎮守府を運営して大きくしていくってのも男の浪漫だろ?」

『なるほど。浪漫なら仕方ありませんね』

男の浪漫に理解がある神様、というのもなかなか希少かもしれない。

ともあれ、そんな経緯で松田青年は、とある世界の「呉鎮守府に着任したばかりの新米提督」という立場に転生することになったのだが……。

『む、そう言えば、あの世界の艦娘は元は人間なんでしたね。初期艦につける如月の分の魂をどうしましようか』

お約束な魔法陣の上で転生シークエンスに入った松田を見つめつつ、しばし思案する担当神。

『——閃いた! どうせ秘書艦になるんですから、提督のことを一番よくわかってくれるよう、彼の魂のコピーを使っちゃいましょう♪』

この「小さな親切、大きなお世話」の見本のような神の「心遣い」が、転生した「ふたり」に大きな騒動を巻き起こすのだった。

【お姫様LⅤ】

目が覚めた時、「誰よりも見慣れた顔」が自分の目の前にあったら、人はどう感じるだろうか?

安心? 倦怠? それとも「当たり前過ぎて特に何も」?

他の人間はどうか知らないが、オレに関しては「わけがわからなくてパニック!」の一択だった。

「キヤア!?! な、なんで、私(オレ)が目の前にお(いるんだ)!!?」

思わず悲鳴のような声を上げたつもりが、本当に声自体も含め「可愛らしい女の子の悲鳴」そのものだったことも、また混乱の度合いに拍車をかける。

仰向けの姿勢から、とつさに上体を起こし、反射的に後ろにズリズリと後ずさっていた。

「お、気が付いたか……って、まあ、そうなるよな」

横になったオレの顔を覗き込んでいた男性やろうが、某航空戦艦娘みたいなことを言いながら、うんうんと頷いている。

コミックやイラストで見慣れた海軍第二種軍装——要するに白い士官制服を着て、軍帽までかぶっているが、その人物自体は、オレもよく知ってる……というか、「オレが一番よく知ってる」。

「……わ、私（オレ）？」

そう、目の前の提督らしき格好の男は、紛れもなくオレ——松田慎司そのものだった。

どう考えても尋常ではない、それこそオレ同様パニックになって然るべき事態なのに、相手がそれなりに落ち着いているってことは……。

（も、もしかして「転○生」とか「君○名は」みたく、中身が入れ替わってて、相手もそれに気づいてるとか？）

先に意識を取り戻していたらしい相手も、その結論に達していたとしたら、確かに今のオレの反応は予想の範囲内だろう。

もつとも、そんなオレの「予想」自体は大外れだったと直後に判明するわけだけど。

「か、鏡……鏡はないかしら（ないか）？」

「ああ、それなら、その壁にかかっているぞ」

提督姿のオレ（？）に言われて、あわてて横たわっていたソファから起き上がり、50センチ四方くらいの鏡を覗き込む。

そこに映った「自分」の姿は……。

黒に近いが僅かに紫がかかった真っ直ぐな髪を腰まで伸ばし、こぼれんばかりに大きな瞳と小作りな顔立ち、そして色白な肌が目を惹く美少女だった。

加えて、白を基調に袖口と襟が緑色の半袖セーラー服と同じく緑のフリースカート、そして特徴的な薄紅色の髪飾り……とくれば、答えはもう決まったようなものだ。

「私（オレ）……如月になってるう!？」

* * *

プチパニック状態に陥った「如月」をなだめすかし、ようやく落ち着いたところで、松田慎司「少佐」は、目覚めてすぐに例の「神様」から届いた「追加情報」の内容を「彼女」に告げる。

ある意味、それは非常に残酷な事実だった。

彼の目の前にいる駆逐艦娘・如月にしか見えない少女の「中身」は、複製された松田自身だと言うのだ。

実際、その後に行われたいくつかの問答の結果、少なくとも「彼女」が、松田慎司としての記憶や人格を持っているらしいことは、お互い理解していた。

もつとも、理解することと納得することの間には、大きな違いがあるが……。

「うう、いったい、どうしてこんなコトに……」

「この世界の艦娘は「人間」がなるものらしいからな。初期艦をつけるなら、どうしてもその「基」^{ベース}となる女の子が必要なんだとさ」

「——そう言えば、元の自分としての記憶も微かにあるわあ（あるな）」

如水歌月^{じしずい・かづき}。京都出身で中学を卒業したてのピチピチの15歳。艦娘になる前はやせっぽちで平凡な容姿の子だったので、極上の美少女になれてとっても嬉しい……などという偽造記憶が「如月」の頭の片隅に存在していた。

その気になれば、もつと詳しい情報も「思い出せ」^{アイデンティティ}ような気はしたが、慌てて意識を逸らす「如月」。そのままだと、「自分」が揺らぎそうで怖かったのだ。

「ま、こうなった以上は腹をくくろうぜ。俺だって、愛する嫁艦・如月の中身が「自分自身」だつてことに戸惑いがないわけじゃないが、多分「やり直しを要求する!」とか騒いだつて無駄だろうし」

対照的にポジティブな提督^{じぶん}が、うらめやましい。

「はあ……うん、わかったわ（わかったよ）。コレは「ゲームでもなく遊びでもない」、現実なんだものね（もんな）」

大きなため息をついて、「如月」も気持ちを切り替えることにした。「ところで、今の如月（オレ）たちの状況って、どうなってるのかしらあ（どうなってるの）？」

「ああ、俺は今日、この呉鎮守に着任したばかりの新米提督で、お前さんは大本営から俺と一緒に派遣された新人艦娘ってことみたいだぞ」

新米・新人コンビであれば、しばらくは多少トンチンカンなやりとりをしても大目に見られるだろう。そういう意味では有り難い。設定”だった。

「それと貴方（おまえ）、私（オレ）の言葉遣いが勝手に如月っぽいものになっちゃう理由は知ってる？」

先程から、「彼女^{かれ}」自身はいつも通りにしゃべっているつもりなのに、口から出る言葉が自然に変わっているのだ。

「ああ、ソレか。神様からの伝言^{メッセージ}によれば、その身体^{ボディ}には、KTS——キサラギトレースシステムとかいう仕掛けがあるらしいぞ」

「何、その頭の悪そうな略称!?!」

「なんでも、お前さんが変な言動をして周囲から浮いたり不審に思われたりしないよう、意識して抵抗しなければ自動的に話し方や仕草を如月らしくしてくれる代物^{モノ}らしい」

その伝言いわく『男の子っぽい話し方やアクションをするTSっ娘ってのも萌えますが、艦娘・如月として暮らしていくのにソレだと色々不都合でしょうし』という考えで付加されたものなのだろうか。

細やかな心遣いと見るか、小さな親切大きなお世話と見るか、微妙なところだ。

実際、如月とさえ、「神戸生まれのおしやまな艦娘」荒潮や「夕雲型のダダ甘おねえちゃん」夕雲と並んで、口調と仕草が外見年齢以上に色っぽい（エロいとも言う）駆逐艦として有名だ。

そんな如月が、ガニ股で闊歩し、大口を開けて「ガハハ、グッドだ！」とでも笑ったりした日には、脳の回線がショートしたのか、あるいは悪霊にでも取り憑かれたのかと、周囲から疑われること間違いないだろう（そして後者はあながち誤りでもなかったりする）。

そう言つて論ず提督まっだの言葉に、渋々頷いた「如月」は、(少なくとも人目がある場所では)無理にKTSに逆らわず、皆がイメージする如月らしく振る舞うことを了承する。

「如月」だつて、周囲にヒかれたり、頭《おつむ》の状態を疑われたりするの、できれば避けたいのだ。

(ま、ひとりになった時に、遠慮なく「地」を出していけば、そんなにストレスが貯まることもないだろ)

——と、この時の「如月」は思っていたのだ。

しかしながら、後になって冷静に考えると、色々で見落としていた以下のようなことに気付くことになる。

その1)「如月」は松田提督の秘書艦である。すなわち、出撃時以外、提督の勤務時間は、たいてい同じ部屋にいて仕事をしている。ひとりじゃない

相手が事情を知る提督だからいいじゃないかと言われるかもしれないが、当の提督ほんじんから「頼むから俺の嫁艦のイメージを壊さないでくれ」と土下座して頼まれ、コピーだけあつて「如月」もその気持ち痛み程わかるので了承。

その2) 艦娘として出撃時。当然ひとりじゃない

しかも第一艦隊旗艦なので随伴艦の皆の状態や動向に気を配る必要があるため、普段以上に気が抜けない(愚痴や独り言もNG)。

その3) 非番時に寮の自室にいる時

この時ばかりはひとりになれるかと思いきや……。

* * *

その後は自分達の個人的事情はいったん棚上げし、オレたちは「提督と秘書艦」として執務室で書類をチェックしたり、今後の鎮守府運営について真面目に話し合ったりしたんだが……。

さすが元・同一人物と言うべきか、非常にスムーズに話が進んだ。何せ、現時点では持てる知識量も経験もほとんど差が無いし、好みや基本方針も一致してるんだからな。

その点だけ見れば、例の神様が秘書艦・如月の「中身」として松田慎司のコピーを配したことは、確かに一理はあるんだろう——コピーペ

されたオレとしてはたまったモンじゃないが。

「さてと。それじゃ、執務室でやつとくべき事柄はおおよそ片付いたし……工廠に行つて『建造』しようか」

「そうね（だな）、賛成よ（だよ）」

提督——いや、これからは如月らしく「司令官」と呼ぶべきか。司令官の提案に従つて、オレたちは連れ立つて明石さんの待つ工廠へと向かつた。

（うわく、ホントに髪の毛がピンクだあ）

出迎えた明石の髪を見て、「ピンクは淫乱」とかいうフレーズが一瞬脳裏をよぎつたが、さすがに失礼なので頭から追い出して、その説明に集中する。

と言つても、建造に必要な作業の大半は、明石さんと妖精さんが担当し、提督は投入する各資材の量を決めるだけ。秘書艦の同席に至つては必須でもないらしい。

ただし、（ゲームの『艦これ』と異なり）同席した秘書艦と同じ艦種の基本艧装が比較的できやすい……とは言われているのだとか。

「明確な科学的根拠はないんですが、統計学的には無視できないくらい確率の片寄りはあるみたいですね」

と苦笑する明石さん。

「資材量も絞るから大丈夫だとは思うが、今の段階で戦艦や空母、あるいは重巡とかの基本艧装ができて困るしな」

司令官の言い分もつともだし、私（オレ）としても否やはない。（せつかく初期艦、つまり最先任の艦娘になれたのに、そのすぐあとに戦艦や空母のお姉さん達が来たら、さすがに先輩面ができないじゃない！）

——あとにして思えば、「自分が初期艦であることを誇りに思う」とか「戦艦や空母に無意識に敬意を払う」といった、駆逐艦娘らしいメンタリテイにこの時すでに侵食され始めていたんだけど、当時はそれに気づかなかつた。いや、「当たり前のこと」としてソレを流してたのよねえ。

ともあれ、この時はそのまま『初めての建造』にとりかかり、見事

に睦月型駆逐艦娘用の基本艤装が完成した。

その場で大本営に連絡してその基本艤装を送り、候補者が適合手術を受け睦月型艦娘となって呉鎮^{こちん}へと着任するのを待つことになる。

幸い睦月型なら適合者は多いし、それほど時間はかからない——という明石さんの説明通り、翌々日にはふたり目の艦娘として1番艦の睦月ちゃんが着任してきた。

元艦これプレイヤー（の精神的コピー）としても睦月は駆逐艦の中では結構好きな方だったし、この（如月の）身体も「姉」との再会に大きな喜びを感じているようで、ふたりで手を取り合い「きゃっきゃ」とはしゃいでしまったのも、無理もないことだろう。

「これからは、ずっと一緒だよ、如月ちゃん♪」

「ええ、そうね、睦月ちゃん♪」

麗しきかな姉妹愛。しかし、ここにひとつ落とし穴があったんだ。実は駆逐艦娘って、どこの鎮守府でも原則的に2人か3人部屋なんだよ。睦月ちゃんは当然、艦娘寮でルームメイトとして私^{オレ}と同居することになったから、それ以降は部屋でもひとりになれる機会は激減することになったんだ。トホホ……。

いや、睦月ちゃんと同室なこと自体には、まったく不満はないんだけどね♪

【呉鎮守府艦娘寮】

カーテンの隙間から射し込む朝の陽光が、優しくその部屋——呉鎮守府駆逐艦娘寮の一室を照らす。

直接光が当たったわけでもないが、瞼を閉じていても明るくなったことを何となく感じ取ったのか、その部屋の住人のひとり、二段ベッドの下の方で目を覚ましたようだ。

艶やかな濃紫色の髪が目を引く14、5歳くらいの少女は、「あふう」と可愛らしいアクビを漏らしつつ、両目を交互にしばたたかせ、やがてゆっくりとベッドの上で半身を起こした。

「ふわあ〜あ……そろそろ6時ね。起きないと」

多少の眠気を引きずりつつも、「うーんっ」と伸びをしてから、少女

はベッドから降りる。

肩のあたりが軽く膨らんだ半袖パフスリーブのトップと、七分丈で裾がりボンで絞られたボトムというガーリツシユなパジャマ姿は、二段ベッドの上の方で未だ寝ている。『姉』とお揃いのものだ。ただし、姉のがレモンイエローなのに対して、彼女の方はチェリーピンクと色違いではあるが。

誰の視線もないので特に恥じらうこともなく寝間着の上下を脱ぎ捨て、ライトパープルのショーツ一枚という姿になると、昨夜のうちに机の上に用意しておいた下と揃いのブラジャーを手に取る。

「うんしょ……つと」

『特に手間取ることもなく』ブラジャーを装着し、その外見年齢としごろにしてはやや大きめな乳房を保護すると、今度はいつもの制服に着替える。

白を基調に襟と袖口が緑色のセーラー服と、同じく緑色のプリーツスカート。胸元に紅いスカーフを結び、脚には黒のサイハイソックス……とくれば、誰だか明白だろう。

そう、この物語の主役とも言うべき駆逐艦娘「如月」だ。

松田提督オリジナルと共にこの呉鎮ヒロインに着任して、すでに半年あまりの時が過ぎ（つまり冒頭部よりさらに時間が経過し）、現在は姉の睦月ともども『改二』化改装も受けていた。

練度（いわゆるレベル）は80をかなり前に突破し、そろそろ90の大台に手が届きそうなところ。二番手の睦月が70ちょっと、三番手の金剛と高雄が70ジャストなので、松田提督配下では最熟練艦娘と言つてよいだろう。

「睦月ちゃん、朝よ」

「うう……わかった。起きるにやしい……」

二段ベッドの上で眠る姉に一声かけてから部屋を出て、すぐ右手にある共同洗面所へと向かう。

3月末の今の季節なら、さほど汗もかいていないので、洗顔フォームなどは使わず、ぬるま湯で顔を洗うだけに留める。

部屋へ戻ると、隅に置かれた小型化粧台ミニドレッサーの前に座り、鏡を見ながら

ヘアブラシで自慢の髪を梳き整える。その手つきもすっかり慣れたものだ。

いつも通り、腰まであるロングヘアを自然な形で流し、トレードマークとも言える花びら状の髪飾りを左側頭部に着ける。

軽くアイラインを引き、薄いピンクのリップを塗れば、朝の身支度は完成だ。

「うん、こんな感じかしら♪ 睦月ちゃん、どう?」

「問題ないと思うよー。いつも通りの可愛い如月ちゃんにやしい」
パジャマから制服に着替えながら「妹」の問いに答えた睦月だったが、何か思いついたのか、ニヤツと「ちよつと悪い笑顔」になる。
「と・こ・ろ・でえ、そんな可愛い如月ちゃんと、提督の仲はアレから進展してるのかにやー?」

「ふえっ!」

姉からの不意打ちに焦る「如月」。

「ななな、なんでそんなコト聞くによかしら?」

慌て過ぎて囁んでる。そんな様子も可愛いと思いつつ、追い打ちをかける睦月。

「だつてさー、ひと月前は執務室で「ちゅー」してたしさー、姉として妹がどこまで「大人の階段」上ったのか気になるにやしい♪」

悪戯っぽく「んん?」と睦月に覗き込まれて、視線を逸らす「如月」。

「そ、そ、それは……」

「それは?」

「い、いくら睦月ちゃん相手でも秘密なの! 私、先に食堂行ってるから!!」

部屋を飛び出していった「妹」を見て、「からかい過ぎたかにや」とちよつとだけ睦月は反省する——そう、ちよつとだけ。

(仕方ないよねー、提督がらみでからかった時の如月ちゃんの反応がかわいすぎるんだもん)

それはつまり、また隙を見て弄り倒す気は満々ということだった。

一方、部屋を飛び出した「如月」は、そのままなりゆきで艦娘用食

堂へと早足で向かっていった。

艦娘用の食事施設の内容は鎮守府によってまちまちだが、ここ呉鎮守府では100人以上が座れる学生食堂のような広いスペースが用意されており、朝食は全員に同じメニューが供される。

そのため、すべての座席前の金属トレイには、すでにご飯と味噌汁、主菜となる焼き鮭の切り身に加えて、納豆&玉子が置いてある。そのほかにも、いくつかの副菜（今朝は葉野菜の漬物と海苔の佃煮だ）が盛られた丼も、4人にひとつの割合でテーブルに配られていた。

ご飯のおかわりは自由だがセルフサービスで、長テーブルの端に大型炊飯ジャー置かれていた。艦娘は食事に対する燃費があまりよくないため、駆逐艦娘でも朝からお茶碗2杯くらいは食べるのが普通で、戦艦や正規空母なら丼飯3杯くらい食べるのも珍しくない。

「うー、ボク、あんまり佃煮海苔って好きじゃないんだよねー」

「好き嫌いしちやダメよ、皐月ちゃん。それに海藻類は身体、とくに髪にいいんだから」

睦月型の次姉らしく、妹にあたる皐月を注意する「如月」。

「(如月ねえは髪のことになるとうるさいからなあ) はあい。でも、珍しいね、如月ねえが睦月ねえと別個に朝ご飯食べてるのって」

「そう、かしら?」

確かに、昼や夜はともかく朝食は睦月と並んで摂ることが多かったかもしれない。

「まさかと思うけど、ケンカでもしたの?」

「いいえ、そんなたいしたコトじゃないの。たまたま都合がつかなかっただけよ」

まさか睦月からからかわれたのが恥ずかしくて飛び出てきたとは妹には言えず、「如月」は適当に誤魔化した。

* * *

そんな風に、皐月や顔見知りの駆逐艦娘と雑談しながら朝食を食べ終えた私は、歯磨きと手洗いを済ませ、軽く身支度を整えてから、通い慣れた仕事場——提督の執務室へと向かった。

「失礼します」コン、コン!

無論部屋に入る前に、ちゃんとノックすることも忘れない。

「入り給え」

入室を許可する声を確認してから扉を開ける。

「マルハチマルマル、睦月型2番艦・如月、これより秘書艦任務に入ります。司令官、本日もよろしくお願いしますね」

僅かに小首を傾げてニツコリ微笑むと、松田提督しらいかんも気安い感じで「うん、今日もよろしく頼むよ」と笑いかけてくれた。

——キーン♪

その笑顔を見ただけで、胸の奥の鼓動が跳ねるのがわかるが、あえて表情には出さず（と言っても最初から微笑は向けているのだけれど）、ペコリと頭を下げてから、司令官の机の横にしつらえられた小さな机——「秘書艦席」に着く。

複雑な自分の気持ちはいったん棚に上げて、ここからは真面目にお仕事に励もう。

書類を整理・分類し、司令官の決裁が必要なものは隣りの席へ回し、機械的に処理できる重要度の低いものについては私が自分で処理する。

その合間に、1時間に2、3言程度の割合で司令官とポツポツ雑談を交わしつつ、お茶を淹れたり、書類等を届けるお使いに出たり、電話で関係者にアポを取ったりする……というのが、主な秘書艦の仕事内容だ。

お昼は、少し遅めの13時ごろに司令官と連れ立って艦娘食堂に足を運び、私は和風ハンバーグ定食、司令官は味噌カツ定食を頼んだ。

「如月のハンバーグも美味うまそうだな」

「味噌カツひと切れと交換なら、ひと口差し上げてもいいわよ」

「ふむ。じゃあ、お願いしてもいいか？」

「それじゃあ……はい、あーん♪」

お箸の先で3センチ角くらいに切ったハンバーグを摘み、司令官の顔の前に差し出してみる。

「ちよ、如月……ああ、もう！」パクッ！

司令官は（たぶん恥ずかしさから）一瞬抗議しかけたけど、下手に

騒いで注目を集める方がマズいと判断したらしく、すぐさま箸先の肉片にパクリと食らいついて証拠隠滅をはかったみたい。

でも、まだ甘いわよ♪

「じゃあ、司令官もお願いね♪ あーん」

親鳥が運ぶ餌を待つ小鳥のヒナみたく、口を開けて司令官のリアクションを待つ。

司令官はちよつとためらっていたものの、「毒を食らわば皿まで」スピリッツを發揮したのか、ちゃんとトンカツを食べさせてくれた。

「うふっ、美味し♪」

その後は何事もなく昼食を食べ終えて、執務室に戻る。

「如月、その……公衆の面前でああいうことはだな」

「あら司令官、ごめんなさい。でも……美少女と「あくん」できて、うれしくなかった？」

「——の、ノーコメントで」

うふふふ♪ 視線をそむけてるけど、ホントはうれしいのはバレバレよ♪

そうよねえ、なんだかんだ言つて松田慎司（あなた／オレ）って、こういう「ラブコメっぽいこと」が大好きなもの♪

「さ、さあ、昼休みは終了だ。午後からも真面目に仕事に励むぞー！」

その後は特にいつもと変わりなく——いや、「如月」が提督に悪戯かけるのも平常運転と言えはいえるのだが——午後七時の終業時間となる。

ちなみに、11時間ブツ続けで仕事しているわけではなく、昼休みのほかに午後四時ヒトロクマルマルごろからお茶の時間と称して半時間ほど休憩も入れているので、実働時間は9時間半くらいだろうか。

現在の日本の社会状況を鑑みれば、ぎりぎりホワイトと言える範囲内だろう。

遠征に出かけていた第三艦隊の帰還報告を受けたのち、緊急の要件がないことを確認してから執務室を閉め、提督と「如月」は昼と同様に食堂で一緒に夕食を摂っていた。

いや、食事だけでなくそのあとも、何だかんだで提督の自室に「如月」が押しかけて、並んでテレビを観たりゲームで対戦したりして、1、2時間は共にいることが多いのだが。

——ちなみに、『男女間の肉体的コミュニケーション行為』については、「まだ」B止まりであることを明言しておこう。

「それじゃあ、私、寮に帰るわね」

午後9時を回った頃、ちょうど観ていた映画も終わったので、提督の膝の上（正確には床で胡坐を組んだ提督のその両足の間）に座っていたのだ）から、「如月」が名残り惜し気に立ち上がる。

「そうだな。消灯前に風呂に入ったり色々やることもあるだろうし、如月はもう帰った方がいい」

すぐ目の前で揺れる髪からほのかに香る「如月」^{おんなのこ}の体臭に、「いい匂いだ」と注意を惹かれつつも、それでも提督らしい良識^{たてまえ}をもって、賛同する松田少佐。

本音を言えば帰したくはないのだが、このまま泊めたりすれば間違いない。「行きつくところまでイツてしまおう」^{じしん}だろう確信があるので、内心では涙を飲んで自制しているのだ。

互いに微妙な（しかし決して不快ではない）空気を醸し出すふたり。
「じゃあ、また明日、ね。おやすみなさい、司令官」

「如月」は未練を断ち切るように、背伸びして提督の頬に軽くチュツと口づけると、自分の行為に恥ずかしくなったのか、そのまま足早に部屋から出て行った。

（な、何やってるんだ私はあー！）

睦月がいるであろう艦娘寮の自室に戻る前に、女子トイレの一室にこもりながら、「如月」は便座に腰掛けて頭を抱えていた。

——お忘れかもしれないが、この「如月」の『中の人』は元男性、しかも松田提督自身の魂のコピーなのだ。

もともと、今朝目覚めて以来、ご覧の通り「如月」本人も、その事実^{こと}はついさつきまで完全に失念し、ごく普通（？）に「司令官に好意を抱く駆逐艦娘・如月」として行動し、松田提督の言動に一喜一憂していたのだが。

「彼女」が「彼」としての自覚を持って行動することは、今や一日のうちに1時間もないだろう。

(いったいどうしてこんなコトに……)

これで何度目になるか分からない自問自答を繰り返す「如月」。

本人が明確に気付いたのは、練度が20まで上がって最初に改装を受けた時だったろうか。

1カ月以上「如月」として朝から晩まで暮らしてきた結果、KTSの助けもあって、「如月」として振る舞うことがごく自然になっていた。それは確かだ。

それでも、少なくともあの改装処置を受けるまでは、自分が「松田慎司(のコピー)で元は男だ」という自覚は確かにあったはずなのだ。

しかし、「如月改」になって以降、その(特に男という)自覚が急速に薄れていった。内心の「心の声」ですら、一人称を「オレ」ではなく「私」ということの方が多くなっている。

実はこれは不思議でもなんでもない。艦娘が改装処置を受けるということは、単に艤装や能力が変わるだけではない。むしろ「人としての魂を軍艦の船魂により同調させる」という色合いの方が濃いのだ。

そして(少なくともこの世界に於いては)艦船は女性として擬人化される性質を持ち、そしてそんな船魂との同調(融合あるいは侵食と言いつてもよい)が進むということは、元の「素体」が男性である場合、艦娘化の度合も大いに上がるということは自明の理だろう。

閑話休題。

「改」ですらそんな有様だったから、「改二」になればその「症状」がさらに進むであろうことは十分に予測できたはずだ。

それなのに、「彼女」は改二になることをためらわなかった。むしろ喜々として提督に改二改装を乞い願ったと言つてもよい。

どうしてそんなことをしたのかと言えば、ひとつには「悔しかった」からだ。

如月は駆逐艦であり、その中でもかなり旧式な部類に属する。練度こそ松田提督配下でトップクラスとは言え、戦艦や空母などの大型艦

は元より、秋月型や夕雲型などの最新鋭駆逐艦と比べても、素の能力ステータスは劣る。

初期艦という言わば「最先任の艦娘」である以上、「後輩」たちとのその差異を少しでも埋めるために、改二改装を望んだ——それは紛れもない事実であろう。

しかし、それだけでもなかったはずだ。

「如月」は改めて自分の心の内を振り返り、唐突に気付く。

「そうか……私、司令官のお役に立ちたかったんだわ」

いや、それすらも欺瞞だ。

「彼女」は——本当は恐かったのだ。

自分が役立たずのロートル艦娘として軽んじ疎んじられ、秘書艦からも外されて、彼と接する機会が激減することが。彼を誰かほかの艦娘に奪われることが。

そのことを自覚し、自ら認めた瞬間、「如月」は——「堕ちた」。

「ふふっ、どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのかしら」

駆逐艦娘・如月の身体を持ち、如月のように振る舞い、如月として話し、如月らしく（元は同一存在であったはずの）男性ていとくに甘える。

「私、とつくに身も心も如月になっていたんだわ」

それは、ある種、幾多の宗教に於ける「回心」にも似たコペルニクスの転回だった。

悪く言えば過去の自分の否定になるのだろうが、彼女自身にとっては、むしろ「どこか噛み合わずにグラグラしていた歯車がキツチリはまった」かのような爽快スッキリ感を覚えていた。

そして、そんな「恋する女」としての視点から先刻の提督の部屋で自分の行動を振り返ると、如月は看過できないひとつの記憶に辿り着いた。

（そう言えば、司令官の膝に座っている時……）

もそもぞとお尻を動かした際、後ろから堅いものが当たっているように感じた覚えが微かにあった。

（アレって……そういうコト、よねえ？）

元男として彼の身にナニがあったのかは当然理解できる。

(もしかして、あのまま部屋にいたら、行き着くところまでイツちやっ
た?)

それに気付くと同時に、自分の股間も湿り気を帯びてくるのを感じ
た。

幸いにしてトイレの中なので、スカートをめくりショーツをズラす
と、淡い小豆色の翳りに隠されたソコは、確かに滲んだ蜜でしつとり
と濡れていた。

(もしかして既成事実を作っちゃった方がよかつたかしら。でもで
も、どうせなら初体験は、聖夜に海辺のお洒落なホテルでとかの方が
嬉しいし……)

かつての自分が見れば呆れるような乙女的思考スイーツに完全に陥ってい
る。

その一方で、彼女の右手がスカートの下でこそごそ蠢いていたこと
は、知らないフリをしてあげるのが紳士の嗜み・武士の情けというも
のだろう。

やがて十数分後。

何事もなかったようなスッキリした顔をして自室に戻って来た
如月いもうとを、睦月あねが怪訝げな表情で出迎える。

「なんかうれしそうだけど、何かいいコトあったの、如月ちゃん?」

「うーうん、何でもないので。ただ……」

言葉を切って「ニコリ」ではなく「ニヤリ」とちよつと人の悪そう
な笑顔を見せる如月。それを観ていると、彼女が睦月の妹だとよくわ
かる。

「ちよつと明日から司令官に積極的に攻勢をかけようって決心して
ただけ」

「! おお、ついに如月ちゃんの本気のお色気攻撃が火を吹くのか
にや? 睦月も応援するにやしい!」

睦月も長姉としていい加減、如月いもうとと提督の部下以上恋人未満な関係
にヤキモキしていたので、賛同の歓声を上げる。

「クスツ……そうね、当然、そちらの方面からの攻略も考えてるわ」
チロリと唇を舌で舐めて笑う如月の様子が、いつも以上に妖艶に感

じられたのは、睦月の気のせいだろうか。

(二)、コレは、冗談抜きで、ふたりが一線を越えるかも!?)

確かに20歳の提督の相手と考えるとミドルティーン相当の如月はやや幼いが、提督と艦娘の関係に限れば、それほど珍しいわけではない。

中には、暁型や朝潮型、あるいは海防艦の子に手を出す提督すらいる(そして大抵は問題にならない)のだから、その程度はむしろ常識の範囲内と言えるだろう。

「へっ、くしゃーん! ……あれ? そろそろ春だし、寒いつてほどじゃないはずだが。風邪かな?」

ちようど、その時、松田提督が背筋に原因不明の悪寒を感じていたのは、その後の呉鎮で巻き起こる「騒動」を予感していたからかもしれない。

そして、結論から言えば——如月vs松田提督の「恋の駆け引き」は、1週間ともたずに前者の圧勝となった。

まあ、無理もない。

性自認や自我認識が艦娘ベースになったとは言え、この如月は男性だった頃の記憶自体を失ったわけではない。

言い換えれば、松田慎司という男性の、女性に関する好みのすべて——ルックスやファッション、性格は元より、萌えを感じる仕草や言動など、それこそあらゆる「ツボ」を知り尽くしているのだ。

さらに言えば、もともと如月自体が、松田が『艦これ』で嫁艦に選ぶほど好みに沿った女の子なのだ。

そんな好みの子が、彼の嗜好&志向を踏まえたうえで、本気で「落とし」にかかって来たら——それも、ハニトラとか利害づくとかではなく、彼自身が好きで、彼にも好きになって欲しくて、種々の誘惑を投げかけてきて、それに引つかからないのはむしろ男じゃないだろう……と、松田は自分に言い訳していた。

如月の決意からおおよそ1ヵ月後に、松田提督は彼女にケツコンカッコカリの指輪を渡し、私生活プライベートに於いても彼女が通い妻になることを受け入れる。

如月は足掛け5年にわたって松田の秘書艦を務めあげた後、円満退役。その翌日に籍を入れ、如水歌月改め松田歌月として彼の妻となった。

正式に夫婦となって以降も（他の大多数の提督&艦娘カップルと同じく）ふたりの仲は非常に睦まじく、元如月の惚気を度々聞かされるハメになった睦月はしばしば砂糖を吐きたい気分になられたという。

A n o t h e r E X . やればできるこ

人類の業というか執念深さというか、そういった諸々の代物を甘く見てはいけない。

隣に座って鼻歌なんぞ歌いながら編み物している「コイツ」の姿を見ている時、ふとそんなフレーズが脳裏に湧き上がってきた。

「……う？ なに？」

「ああ、いや何でもない。続けてくれ」

「そう？」

簡潔な、いつそそっけないと言えそうなほどに短い言葉の応酬だが、別段俺とコイツは仲が悪いわけじゃない。むしろ、実家にいる家族を除けば、今一番親しいのはコイツだと言っても差し支えないだろう。

(とは言え、まさかコイツとこんな関係になるとはなあ……)

俺は、士官学校を出てから久しぶりにコイツと再会した1年ほど前のことを思い出していた。

* * *

当初は圧倒的に人間側が不利だった深海棲艦 vs 人類の戦いも、艦娘と呼ばれる存在が生まれ、あるいは生み出され、活躍するようになると徐々に人類側が有利になっていった。

しかしながら、生きるか死ぬかのカツカツの状態ならともかく、余裕が出来るくると、いらんことを考えるのもまた人の性^{さが}というヤツなのだろう。

「人間を艦娘化する技法^{メソッド}が確立できたんだから、艦娘に深海棲艦の力を取り込む技術もワンチャンあるんじゃないかね？」

……などと考えた技術者^{バカ}共がいたのだ。

人類側の勝率が上がって、姫級、鬼級の撃破さえ(ある程度の味方の犠牲を容認すれば)可能になったからこそ、生まれた発想だろう。

ともに海の上を駆け、その体躯の大きさに見合わぬ強力な武装を駆使して戦う艦娘と深海棲艦だったが、個々の戦闘力を比較した場合、一部の雑魚を除けば、やはり深海棲艦側に軍配^カが上がる。

深海棲艦の上位個体を鹵獲し、あるいは生体組織の一部を手に入れた人間側の科学者たちが、そんなことを考えるのも、ある意味無理ないと言えば無理ない話なのだ。

もつとも、この「艦娘に深海棲艦の能力や強さを付加する」という試みは、結果的に失敗に終わった。

深海棲艦と艦娘は、言うならば吸血鬼と乙女の関係にたえられるだろうか。

深海棲艦の体組織やその派生物を艦娘の身体に入れるというのは、乙女が吸血鬼に噛まれて血を吸われるようなもので、一定量を越えた瞬間、噛まれた方も吸血鬼（≡深海棲艦）と化してしまうのだ。

そこで次善の策として考えられたのが、「人間を人間らしい心を保ったまま直接深海棲艦に変える」という研究だった。

しかし、こちらもありはかばかしい結果は得られず、いくつかの実験とそれにもなう試験的な成功例と失敗例を生んだ後、結局この研究チームは解散されることとなった。

で……だ。

士官学校での同期のコイツは、俺と同様に「提督」の素質持ちだったが、それ以外に艦娘としての適性も高かったらしい。

女性だけでなく男性であっても、適性値が高ければ艦娘になれることは（一般公開はされていないが海軍内では）周知の事実であり、研究班はそれを踏まえて、コイツに人造深海棲艦実験への協力を要請したのだ。

一応、佐官の将校である俺達提督なら、協力要請を跳ねのけることもできたはずなんだが、生真面目なコイツは断らず、その身を「人類防衛のための科学の発展」に捧げることを決意する。

測定の結果、軽巡娘になる資質が高かったコイツには、軽巡棲鬼の因子が植え付けられ、約1カ月の経過観察が為されたのち、実験は失敗（一部のみ成功）と判断された。

てっとり早く言うなら「軽巡棲鬼っぽいモノにはなったが、著しく不完全」だったのだ。

外見自体は、なるほど軽巡棲鬼とよく似てはいる。だが、本物の軽

巡棲鬼と比べて肌は人間らしい健康的な色を保ち、また下半身にもしっかり足がある。さらに自力で深海棲艦系艦装を生み出すこともできない。

艦娘の那珂や阿賀野用の基本艦装であれば一応装備することはできるのだが、「本職」のふたりと比べると運用はぎこちなく、総合的な戦闘能力は「未改装の旧式軽巡娘」程度で、軽巡棲鬼には遠く及ばなかったらしい。

劣化深海棲艦を作るくらいなら、素直に艦娘を作って運用する方が（安全面でも経験蓄積面でも）お得だ——と判断され、めでたく(?)コイツはお役御免となったわけだ。

とは言え、まがりなりにも深海棲艦の要素を持つ実験体を普通の軍や一般社会に戻すわけにもいかない。

いずれかの鎮守府で経過観察も兼ねて引き取ることになり、その際、白羽の矢を立てられたのが、コイツの同期のオレだった。

基本的に人間から艦娘への変化は不可逆だ。

いや、基本艦装とのリンクを断ち切り「解体」することで、限りなく人間に近づけることは可能だし、普通はそれで問題ないのだが、男性から艦娘になった者にとっては大きな問題が残る。

すなわち——「解体」したからといって、艦娘化時に変化した容姿（性別含む）が元に戻るわけじゃないのだ！

元が体重100キロオーバーのメタボなデ●だろうが、バーコード頭の中年男だろうが、艦娘化すれば10代から20代初めの美女・美少女になり、艦娘である限り、その容姿は変わらない（正確には老化速度が常人の10分の1以下になる）。

「解体」すれば流石に歳をとるようになるが、それでも女性化した身体は男には戻らない——女のままだ。

まして、コイツの場合、深海棲艦化の実験サンプルということもあり、実は「解体」すらされていない（正確には「できなかった」らしい）。

「——そういうワケで、今後、そちらにお世話になります」

士官学校の同期の中ではそれなりに仲が良かったはずのコイツが、

他人行儀な口を利くのも、これだけの運命の激流に流された以上、そりや無理はないか。

「お、おう。ま、まあ、それほど肩肘張らず、のんびりやっていこうや」

俺としても、学校時代に教官の目を盗んで一緒に色々バカやった友人が、見目麗しい(それこそアイドルデビューしても通用しそうな)15、6歳の女の子の姿になったとなると、いささか戸惑う。

「あんまり実戦には出さなつて上から言われてるからなあ……うーん、とりあえず俺の秘書艦と、この基地やみんなに慣れてきたら演習での教導を頼もうかね」

* * *

アイツ——「軽巡棲鬼」からとつて「ケイキ」と呼ばれることになった「彼女」が、この鎮守府に来てひと月余が過ぎた。

ケイキは、秘書艦としては極めて有能だった。

書類関連の事務能力は折り紙付き、実戦を指揮する提督の補佐役としても心配りがいきわたっている。

仮に俺が緊急の要件で数日間鎮守府を留守にしても、即座に代役が務まるだろう。

(考えてみれば、アイツも元は提督候補だったんだから、当たり前だよなあ)

逆に言うと、本来は俺と同じ立ち位置で艦娘たちを指揮するはずだったなのに、今は俺なんかの副官的な立場にいるんだ。

口には出さないがそれなりに思うところがあつても不思議じゃないだろう。

だが、アイツは少なくとも俺たちの前で、そんな素振りを見せたことはない。

むしろ最近では、再会当初の堅く思いつめたような表情や態度も幾分緩み、俺の前でも学校時代(むかし)ほどではないが、冗談めいたものも稀に口にするようになっていた。

ウチの艦娘たちとの仲も、最初こそややぎこちなかったものの、駆逐艦を始めとする年少組がすぐに懐き、それに伴い、年かきの艦娘た

ちとも徐々に打ち解けるようになった。

いい傾向だ、とは思う。だが、だからこそ少々やる瀬ない気もする。

「——というわけで、頑張っているケイキちゃんに、特別休暇が支給されることになりました」

わー、ぱちぱち……と自分で拍手する俺を、アイツは溜息をつきながらジロリと睨んでくる。

「いえ、いきなり〴〵というわけで」と言われましても

こういう時、素直にノツて来ないでマジレスする辺り、士官学校時代と変わってないな。

「ま、てつとり早く言えば、強制的に明日明後日の土日は休んでもらうってこった。お前さん、鎮守府（こつち）に来てから、一日も休暇をとってないだろ。」

ウチはどこぞのブラ鎮とは違う、週休2日・有給完備・残業極小の明るいホワイトな職場環境がウリなんだ。

その提督（トップ）の傍らにいる秘書艦が過労やストレスで倒れたりしたら、シヤレにならないだろ？」

そんな風におどけて見せたが、はて、アイツの表情はあまり嬉しうではない。

「休み……と言われても。することはありませんし、むしろ何をして時間を潰せばいいのか……」

——は？

いや、待て。確かに士官候補生時代も、勉強と鍛錬が趣味みたいな堅物で、俺や他の友人たちが引つ張り出さなければ、延々と自習してるか訓練室で自主トレしてるようなヤツだったな。

やむを得ん。ここはひと肌脱いでやるか。

「よーし、じゃあ、仕方ないな。それなら、明日は俺とデートしようぜ！」

* * *

「——ヤっちゃまったあ〜〜！」

真っピンクの色彩に彩られた見知らぬベッドルームで目が覚めた時の第一声は、我ながら存外芸がなかった。

温かみと重みを感じる右腕の方におそるおそる視線を向けると、そこには阿賀野と那珂を足して2で割ったような美少女の寝顔ががが……。

ちなみに、上掛け布団からのぞく肩を見る限り、少なくとも上半身は裸っぽい。そして、己の足にからみつく滑らかな太股の感触から推測すると、下半身も……。

「どうしてこうなった……」

俺は、昨日のデートの記憶を必死で脳裏に手繰り寄せた。

……

……

……

「呉鎮守府の腕白小僧」の異名をとる柳沢中佐が、自らの保護観察下にあるケイキ——元・軽子坂少佐であった人造深海棲艦の少女と共に外出した当初は、彼の思惑通りに事は進んでいたんだ。

「その方がデートっぽいから」という理由で、最寄りのJRの駅前で待ち合わせ、先に着いていた柳沢の前にケイキが（いつになくモジモジした表情で）姿を見せる。

「あ、あの、提督、お待たせしてしまいましたか？」

「いんや、俺も今来たところ……って、見違えたな！」

ケイキは鎮守府で着ているシンプルな黒一色のワンピース姿（軽巡棲鬼の衣装を簡略化したもの）とは真逆の、カラフルで女の子らしい格好をしていたのだ。

白に近い薄水色のハイネックワンピースの上に、レースとフリルで随所を飾られた深紅の長袖ボレロを羽織り、足には純白のタイツと黒のアンクルストラップパンプス。

髪型こそ普段と同じく中華風シニョンだが、勤務中と違い、お団子をピンクの細いリボンで束ねているのがお洒落だ。

いつもより肌の露出が大幅に減っているにも関わらず、逆に（矛盾した表現だが）女らしく清楚な色気が感じられて、少佐はガラにもなくドキッとした。

「お、おかしいですか？」

「全然！ むしろすつごく可愛いぞ」

彼らしくもない素直な賛辞が口からこぼれたのは、それだけドギマギしていたせいかもしれない。

「！ そ、そうですか。（よかった♪）」

（おお、薄桃色に頬を染め、俯き気味に恥じらう様子もまた良し——つて、こんなところで思春期のチューガクサーカスポーみたいなやりとりしてる場合じゃねえつてばよ！）

「（コホン）そ、それじゃあ、い、行こうか？」

周囲の生暖かい視線を意識した軽子坂提督の声が、若干どもり気味だったことは、見逃してあげるのが武士の情けだろう。

……

……

……

「と、とりあえず映画の時間が迫っているから、行こうぜ」

初デートに於いて「映画」は最強の選択肢。異論は認める。

というのも、「隣り合わせに座って時間を共有」しつつ、「何か話さなくても間がもつ」というデート初心者にとっての難問をふたつをいっぺんに解決してくれるからだ。

「——だよな。あそこで主人公のあの反応はないよなあ」

「そうですよね。さすがに、ヒロインが可哀想かと」

さらに映画館を出た後、喫茶店なんかで先ほど観た映画の感想なんかを話し合えば、とりあえずの話題に困ることなく、ごく自然に話し合えるし（無論、観る映画はある程度選ばないといけないが）。

——え？ 「童ティ督の癖に、よくそんなコトしてたな」？

どどど童貞とちゃうわ！ いやマジで……まあ、恋人とかではなく、そのテのお店のおねーさんが相手なんですけどね！

ちなみに、今回のデートプランをアドバイザーしてくれたのは、「柳沢提督秘書艦ズ」の面々——元筆頭秘書の大井&その補佐ヨメの北上、秘書代理心得見習の阿武隈の3人。

「元」の字がつくのは、ケイキがウチに来て以来、秘書艦業務の大半はコイツが取り仕切っているからだ。

金剛とか榛名とかのグイグイくる系艦娘たちに秘書艦任せると私の境目がヤバそうなんで、今までは大井達に任せてたんだが、コイツが来てからは自分でその垣根を崩しちまったなあ。

(まあ、それを言ったら今更か……)

元々コイツは、昔——士官学校時代からの友人だし、特別意識はしなくとも時々、「単なる上司と部下」ではないフランクな話し方をしちまっていた気がする。

もつとも、コイツの方は堅物気質もあいまってか、あまりそういう“壁”を崩さないような丁寧な言葉遣いを心がけてたみたいだな。

そんなことを頭の片隅で考えつつ、テーブルの向かい側に座るコイツの顔を眺めていたら——なぜか突然ソワソワしたような落ち着かない表情を浮かべてケイキが視線を逸らした。

「あ、あの……提督、そんなに見つめられると落ち着かないのですが」

「(コイツ、結構まつ毛長いな。黒髪にも“天使の輪”ができてるし……) おっと、スマン。ちよつとぼうつとしてた」

「? 何か気になることでも?」

「いや、その空色の瞳も綺麗だなって……」

「!」

——待て、今俺は上の空で何を言った?

「……」

気まずい(というか甘酸っぱい)沈黙が、ふたりの間に落ちる。

ふ、イキがつてみても、所詮は素人童貞のデート未経験者。我は呉鎮守府の提督でも一番の小物よ! (↑自虐)

「(な、何とか話題を見つけて空気を変えねば) あ、そう言えば、オマエさん、あんまり私物を持ってないって前言ったよな? 夕飯まではまだまだ時間はあるし、ちよつと買い物してかないか?」

懸命に頭を捻って、なんとか無難そうな行動指針を提示する。

「は、ハイ、その、提督がよろしければ……」

顔を真っ赤にして蚊の鳴くような声で答える“少女”の様子は、著

しく男の保護欲をそそる……って、いかんイカン。

コイツと俺とは同期の桜の友人！今は提督じょうしと艦娘ぶかの関係でもあるんだから、セクハラパワハラになりそうなコトは自重しないと」

「——別にいいのに（ボソツ）」
ん？

そのあと、士官学校時代（むかし）とった杵柄で、プールバーに行つて久々にビリヤードした後、いい頃合いなので秘書艦ズ推薦のレストランに行つて飯食つて……。

で、食後の散策時に、せっかくだからって本人ケイキの希望で、酒（アルコール）の飲める店に入つたところまではハッキリ覚えてるんだが……。

——ズキッ！

一瞬の頭痛とともに脳裏に「その後」と思しき光景が断片的に浮かび上がってきた。

……
……
……

当初、柳沢中佐は同行者（ケイキ）がいる手前、それほどアルコール度数が高くない飲み物を頼み、自重していたのだ。

しかし、肝心のケイキの方がスクリユードライバーを筆頭にゴッドファーマーやホワイトレディ、バカルデイ といった「飲みやすいけど度数高め」なカクテルをパカパカと飲み干してしまった。

ちなみに、外見上、15歳前後、上に見積もつてもせいぜい17歳程度にしか見えないが、彼女は柳沢の同期なので間違いなく二十歳は超えており、酒を飲むこと自体は法律上問題はない。

問題ないが……士官候補生だった頃から真面目小僧だったケイキ（元・軽子坂少佐）は、実はアルコールを嗜む習慣がなく、乾杯時のビール等を少し口にした以外では、ほとんど初の本格的飲酒体験だった。当然「飲むペース」なんてものもわかってるはずがない。

そんなケイキの様子に、つい釣られて柳沢も杯を重ね、店（バー）を出るころにはふたりとも「ほろ酔い以上泥酔未満」といった状況（コ

ンデイション)に陥っていたのだ。

かろうじて残っていた理性で、このまま鎮守府まで帰るのは難しいと判断し、近くの無人ホテルに部屋(もちろんツインだ)を取り、酔いを醒まそうとした柳沢の判断は、決して下心あつてのものではない。

だが——あまり表には出さないものの男にベタ惚れしている女がいて、男の側もそれなりに女に好意を抱いており、かつ酒が入り、さらに同じ部屋でふたりきり……という状況で何も起きないはずもなく。

「ふあつ、やん……く、くすぐりたい」

「ひや、んう！ 指、もそもぞして……ふひやあつ！ そんなつ、穴の中に指いれちゃ……ひやうん!!」

「あつ、あああつ……そんな、そこ……ヒヤツ！ き、汚いですよ？」

「んんう、そ、そんなこと言われても腰が勝手に動いちゃうんですよオ」

「ひやつ、くすぐらないください。ふあつ、あつ、あつ、ダメツ！」

「提督さん、あつ……ひやツ、ふあつ！ ああ、入って……きて、ひいや

あつ、だ、ダメ!!」

「ひいやあああつ……て、提督さんの、大きくて……私の中、壊れちやいそう……あひやんつ!!」

「ああ、激しい……あ、ひヤツ、んああつ！ ふああつつ!!」

「ひいや……も、もう……限かい……です……はあつ、あつ……ひや、ふあんー！」

——ビュクツ！ ビュクルルルルツツ!!

「あひやんつ……提督の熱いのが、私のなかに……どんどん、流れ込んで……あああつ、ああああんつ!!」

「ふう……ふう……こ、今度は私からシますね？ んちゆつ……あむ」

「はむつ、んう……ちゆつ、んんう……どう、ですか？」

「気持ちいい？ それならよかった♪」

「もうっ！ 私をこんなにエッチな女の子にしたの、貴方じゃないですか。それじゃあ、イキますよッ……えいっ♪」

——このあと、明け方まで6回ぐらい『夜戦』した。

……

……

……

お、思い…出した！

——つて、これ、どう考えても憲兵案件（アウト）じゃねーか！

これまで真面目に提督稼業続けてきたのに、それも今日まで。

嗚呼、俺も、稀に見るブラック鎮守府指揮官やセクハラ提督みたく、哀れ憲兵さんに「慈悲はない。イヤーツ！」「グワーツ！」されちまうのか。

そう思つてガクブルしてたんだが……。

あの後、目を覚ましたケイキは「お互い（少なくとも戸籍年齢は）大人だし、酒が入つてのことだから」と笑つて許してくれた。

「こんなコトで提督と変な溝ができる方が、私としては嫌ですし、そうなつたら軍務に支障もきたすでしょう？」

（うう……エエ子や、ホンマ）

その場では、心の中でなぜか関西弁になつてそう感激の涙を流したものの——お互いまったく変化なしというワケにもいかなかった。

まず、ケイキの側。

以前から多少その傾向はあったものの、勤務中も含め、明らかに俺との『距離』が（物理的にも心理的にも）徐々に近くなっている。最近では、秘書艦というより彼女——を通り越して『新妻』つて感じがすることも。

でもつて、俺の方もソレがそんなにイヤじゃない——というか、むしろ嬉しいと感じているのは、否定できない事実なワケで……。

結局、『あの日』から1ヵ月後。休日に再びケイキをデートに誘つた俺は、「海の見える夕暮れの展望台」までドライブして、その場でケツコン（カツコガチ）を申し込んだんだ。

——え？ 相手の返事？

それは、今、俺にぴったり寄り添いながら、幸せそうに膨らみが目立ち始めた（ちなみに今、5カ月目だ）自らのお腹をさすっているコイツを見てもらえばわかるんじゃないかな。

元男の、しかも深海棲艦をモデルにした艦娘が、人間の男性との間に設けた子供ってコトで、いろいろコイツにも子供本人にも苦勞をかけることになるかもしれない。

それでも、俺はコイツと——正式に籍を入れて、晴れて「柳沢螢紀（ケイキ）」となったこの娘（&お腹の子）と、人生を共に歩んでいくつもりだ。

〈おしまい〉

Another 7. 駆逐艦娘・如月は主様に逆らえない

1999年晩夏より、世界中の海に出現し、人類への敵対的行動を繰り返す存在、通称「深海棲艦」。

ABC含む通常兵器のほとんどが、無効化ないしそれに近いレベルまで威力を減衰されたことで、人類はこのまま衰退の一途を辿るのか——そう思われた時、*“それ”*は出現した。

海外では「ウオーシップ・メイデン」、「ネレイデス」、「ラピュセル・ド・ラメール」などの呼び方があるが、*“それ”*が最初に姿を現した日本では、おもに「艦娘」と呼ばれる存在。

外観は普通の人間の少女ないし若い女性とほぼ変わりなく、ただ深海棲艦にも攻撃を*“貫通せる”*武器——「艤装」をまもって戦う戦乙女たち。

彼女達は単独でもそれなりの戦闘能力はあるが、*“艦隊”*を組み、さらに特殊な資質を持つ司令官——通称「提督」の指揮下に入ること、より安全かつ効率的に戦うことができた。

当初は手探りだった艦娘関連の研究や技術も、戦時下ということもあって急速に実を結び、第一、第二を経た現在の第三世代艦娘については、「建造」から修復、改装・改造さらに実際の運用方法に至るまで、ほぼ問題なく揃っているとと言える。

艦娘は、「1000〜2000人にひとり程度存在する、素質のある者（その99.9%が、10代前半〜20代初めの若い女性）」を素体として、「適合処置（改造手術）」を施すことで建造される。

対して艦娘司令官としての「提督」になれる人間は男女不問だが、現在の割合は9：1で男性が多いようだ。こちらは単純に持って生まれた資質によってなれるか否かが決まる。

世界的には数百万人にひとり、日本は艦娘同様比較的素質を持つ者が多いと言われているが、それでも100万人にひとりいるかどうかの、文字通り「選ばれし人材」なワケだ。

——要するに何を言いたいかと言えば、だ。

「提督になれるのは、1に素質、2に才能、34がなくて5に勤務意欲、ってトコかな。人格云々は、ほぼまったく考慮されないね」

「このクズ野郎！」という配下の艦娘からの罵倒に対して、僕はそう嘯いてみせた。

目の前で僕を睨みつけてくるのは、14、5歳くらいに見える少女だ。

クセのない小豆色の髪を腰まで伸ばし、緑と白のセーラー服を着た愛らしい顔立ちのお嬢さんだが、今は普段の優しい気な表情はカケラもなく、僕に強い敵意を向けてる。

「はは、ダメだぞ、如月ちゃん。自分の姉妹がそんなに口が悪いって知ったら、お姉さんの睦月ちゃんや妹の卯月ちゃんたちもビツクリするんじゃないかな？」

「……クッ！」
痛いトコロを突かれたのか、「彼女」は口を閉ざしたが、依然として目つきは鋭いままだ。

しかし、僕はその敵意もどこ吹く風とばかりに、先程した「お願い」を繰り返す。

「ほらほら、もっと大きくまくり上げて、スカートの中をよく見せてよ。お洒落自慢の女の子として評判の如月ちゃん♪」

「ー(くそっ、秘密を守る条件って、やっぱり『そういうこと』かよ……)」

如月の顔が怒りと——そして僅かな怯えで歪むのを見て、僕は内心で快哉をあげる。

いやあ、「女の子を怒らせ、怯えさせること」を悦ぶだなんて、我ながら悪趣味だという自覚はあるんだよ？

でも、まあ、「長年夢想し続けてきた理想的存在」が目の前にいて、自分の思うがままに「料理」できるとなったら、ちよつとばかり悪戯したくなくても仕方ないよね。

——ん？ 「獲物を前に舌なめずりするのはいく流」？ ハハハ、気を付けるよ。

じゃあ、今は目の前の「獲物」に集中しなくちゃね！

「いやあ、それにしてもまさか、君が元は男だったとはねー」

その言葉を口にした途端、如月の表情から、怒りに代わって恥じらいの感情が濃くなる。

そう、基本的には年若い少女しかねない艦娘だけど、0・1%の例外として適齢期外の女性や、適齢期の男性にも、素質が存在することがあり得るんだ。

もちろん、だからって男で艦娘になりたがる奴は、そうそういない——つまり逆に言えば、「極少数ならいる」ってコトでもある。

その稀有な例外のひとりが、今日の前にいるこの娘、如月ちゃんってワケだ。

「随分頑張って女の子になりきってたみたいだけど、俺の目は誤魔化せないよー」

なあんて言ってるが、僕が「彼女」の素性を知ったのは、関連書類を偶然目にしたからだ。

それまでは、ウチの鎮守府で、他の睦月型姉妹とキヤツキヤウフフしてるのを見て「はえー、これが姉妹百合ってヤツかあ」とごく普通（？）に萌えてはいたが、さすがにローティーンの子に手を出す気はなかった。

これは、僕が善良だというワケじゃなく、ヘタに手を出して「憲兵さんコッチです」されたくないが故の小心者だったからだけだね。

だけど、TSクラスタの性癖持ちである僕の部下に、極上の美少女（二元男）がいて、しかも自分の素性を隠そうとしている——と知ったら、僕のベニヤ板程度の良心の壁は、脆くも崩れ去った。

その後に現れたのは、ご覧の通り、部下への脅迫も辞さないセクハラ野郎ってワケさー！

「あ、それとも、実はノリノリで女の子生活を楽しんでた？」

「そ、そんなわけないだろー！」

あれえ、そう言う割に目が泳いでるゾク。

本当は「可愛い自分が、外見通りに可愛く振る舞う」ことに、萌えと快感を感じてたんだよね？ うんうん、わかるよ、TS娘のお約束

もんね。

「な……違うって言ってるだろ、この変態が！」

「おやおやあ、そんな口利いていいのかなあ？」

もし君の正体がみんなにバレたら、きつと大変な騒ぎになるだろうねえ。

そうになると、変態扱いされるのは君の方だと思うよ？」

「くっ……好きに、しろ……」

如月の目に、何かを覚悟したような悲壮な光が浮かぶ。

いや、いきなり”ソコまでヒドい”ことはしないから——少なくとも今は。

「まあまあ、悪いようにはしないよ♪」

せつかく見つけた元男性艦娘だ。時間をかけて、たーっぷり可愛がってあげないと、ね♪

あの日、提督である鷺生少佐に、自らの秘密——元は男であったことを知られ（正確にはソレを知ったと耳打ちされ）、その夜遅く提督執務室に如月が呼び出されてから、およそ半月ほどが過ぎた。

意外なことに、あの夜の提督は、如月に自分の手でスカートをめくり上げさせた以外は何かすることなく（まあ、散々からかったり煽ったりはしたが）、そのまま自室に帰ることを許可してくれた。

それ以来、出撃しなかった日の夜（エース格である如月の場合、だいたい一日おき程度）に、同じように呼び出されて、スカートめくりに始まり、手を握られたり、肩を抱かれたり、髪や頬を撫でられたり……と、セクハラ（？）の過激度が少しずつアップしている。

一昨日は、ついに背後から抱き締められ、発育途上の（それでもBカップ程度はある）胸を、制服の上から優しく揉みしだかれた。

——そう「優しく」だ。

あの最低男は、脅しをかけているとはいえ、無理に手荒なことはしようとはしない。

徐々にエスカレートしているとは言え、それでも段階を踏んで如月の身体を“馴らして”いつているように思えるのは、彼女の気のせい

だろうか？

ある意味、女として最悪の辱めを受けているというのに、如月が提督のことを憎みきれないのは、あの秘密(元は男だったということ)がバレる前までは、提督は彼女を含めた配下の艦娘たちにとって、頼りになる理想的な上官だったからだろう。

本人は「ただの小心者だ」と自嘲するほどの慎重派だが、そのおかげで彼の鎮守府では、未だひとりの轟沈者も出てない。

戦果自体も、飛び抜けて良いわけではないが、戦艦と正規空母がない弱小鎮守府にしては、巧くやっている方だと言えるだろう。

艦娘に対する接し方も、任務中はクールで合理的な上司、けれどそれ以外では比較的ラフで「話のわかる」、下の者にとっては有難い存在だった。

その勤務時間外でも、部下の艦娘に対して、性的恋愛的なアプローチをかけている素振りはなかった(少なくとも如月は見たことがない)にも関わらず、彼を「男」として意識している艦娘は、少なくとも5人ほどいることを、如月は知っている。

——もつとも、驚生提督の側からすれば、「何の『担保』もなく、部下に手を出せるかーッ!」という、単なるヘタレの極みだったという、あまりカツコ良くない真実がその裏にあるのだが。

逆に、その「担保」を手に入れたからこそ、今、如月にいろいろシている——というのが実情だった。

そういうワケで、今夜もまた呼び出された如月だったが、今回は少々これまでとは勝手が違うようだった。

「来たね——じゃあ、如月ちゃん、『提督命令』だ。『いつものように、僕に奉仕しろ』」

提督が、目に力を込めてそう告げると共に、如月は身体が思うように動かさなくなった。

「——はあい、お待たせ♪ 今夜はどんなお仕事がいいかしら?」
(何だ? 口が、身体が勝手に……何をさせる気だ!?)

正確には、「自分の中に自分以外の誰かがいて、勝手に身体を動かしている」ような気がする、と言うべきか。

それでいて、その「別の誰か」もまた「如月」に他ならない——という、ややこしい感覚に、如月は混乱していた。

「そうだね。最初はやはり『スカートめくり&パンモロ』から始めてもらおうかな」

ニヤニヤ笑ってスケベ根性丸出しなことを言う提督に、けれど「如月」は嫣然と微笑んでみせる。

「えっ……もお、司令官も好きなんだから〜♪」

（は？　ちよ、ちよつと待て！　おい、やめろ!!）

慌てて心の（頭の？）中で制止するものの、「もうひとりの如月」は、それに従う気配もなく、恥じらいつつも、そろそろと制服のスカートの前面をまくり上げ、チラリと上目遣いに提督の方を見る。

「うふふ……如月の、ちよつとエッチなおパンツ、どうかしら？」
（……………ツツツ！）

如月が今晚履いているのは、薄いピンク色でやや履き込みの深いものだ。シンプルで地味なデザインとも言えるが、フロントにあるブルーのリボンがいたいたいな女の子らしさを強調している。

「おおおつ、イイねイイね！　とっても素敵だよ、如月ちゃん♪」

恥じらいに頬を染める表情込みで、どうやらこの「如月」の仕草は、提督の心のツボにヒットしたようだ。

食い入るような真剣な目つきで視線が注がれる。

「あはっ♪　そんなにじっくり見ちゃってえ——ねえ、ショーツだけでいいの?」

「如月」がからかうような言葉を投げると、提督はゴクリと唾を飲み込む。

「じゃ、じゃあ、制服の上を脱いで、ブラジャーも見せてもらおうかな」

提督の台詞に「そんなコト、できるかーッ!」と（心の中で）悲鳴をあげる如月だったが、身体を支配する「如月」の方は、どうやら違う意見のようだった。

「ウフッ、ちよつと恥ずかしいけど——司令官なら、見てもいいわ・よ♪」

パチリとウインクしながら、まずは紺色のカーディガンを肩から滑り落とし、続いてセーラー服の左脇にあるジッパーを下ろす。

そのままゆっくりと両手でセーラー服のまくり上げ、グラビアモデルのようにもったいぶった仕草で上着を脱ぎ捨てた。

脱いだ下から現れたのは、白く滑らかな如月の素肌と、年相応よりは少し大きめの胸の膨らみ、そしてそれを覆い隠すピンクのフルカツプブラジャーだった。

「ワンダホー！ すごく興奮するよ、如月ちゃん!!」

提督が鼻息を荒げつつも喜んでいてのを見てみると、先程までの拒否感がなぜか薄れていくのを感じる如月。

（あつ……司令官が喜んでる——なんだか幸せな気分ね。嬉しいわ

♪ 司令官大好き♪）

すでにその思考は、“如月”——本来この身体に備わった「お洒落でちよっぴリエッチで司令官大好きな、如月という艦娘の精神パターン」と、完全に同調していた。

その後、一昨日同様、背後からの胸への執拗な愛撫を受けたことに加えて、今回は背後から覆いかぶさった提督のイチモツを、ショーツのお尻になすりつける形で自慰をされ、さらに出たモノもかけられる。

普通に考えれば（仮に元男でなくとも）、「気持ち悪い」としか感じないはずの行為だが、今の如月に嫌悪感はない。

むしろ、ショーツに沁み込む提督の白濁液の匂いと熱さを感じて、

下腹部の奥がキュンキュンしているくらいだった。

「——じゃ、じゃあ、私、もう行くから……」

「あ、ああ、うん、構わないよ——お休み、如月ちゃん。また明後日に、ね」

「！………はい♪ おやすみなさい、司令官♪」

嬉しげに頬を染めて執務室を出た如月が正気(?)に返ったのは、睡月と共用の個人部屋に帰り、ベッドに腰を下ろして先程の出来事を思い返している時だった。

（あ……ちよ、ちよつと待った！ なんで、オレ、あんな反応し

ちやつてるんだよ!?)

身体はともかく精神的には今でも自分は男だと思っっている如月は、頭を抱える。

単なるセクハラの域を越えた、「あんなこと」をしてきた提督のことを、軽蔑し、嫌悪し、憎んでいてもいい——はずなのに、どうしても、そういうネガティブな気持ち湧いて来ないのだ。

それどころか、ショーツの沁み——それも提督が出した白濁ではなく、自らの股間から滲み出た液体によるクロツチ部分の“湿り気”が、否応なく自分があの場合で「発情していた」ことを物語る。

「ふ、雰囲気呑まれてただけだね？ うん、こんなのAVとか見た時と一緒にだ。フツーフツー！」

誰にともつかず言い訳しながら、早々にベッドに潜り込む。

そのまま（精液のついたショーツを履き替えもせずに）夢の世界に逃げた如月が、その晩、どんな夢を見たかについては、本人が堅く口を閉ざしているので詳しくはわからない。

だが、その日以来、如月が「一日おきに、ちよつとエツチな下着を身に着けるようになった」ことや、「朝礼などで提督が艦娘に挨拶する際、妙に熱っぽい目で提督を見つめている」ことを、姉妹艦の睦月や卯月、弥生などが証言している。

——如月が提督に処女を奪われて一線を越えたのは、彼女が夜の執務室に呼ばれるようになってから、ちょうど一カ月目のことだった。

そして、その頃には、元男だったはずの如月は“如月”——艦娘・如月としてのデフォルトのパーソナリティと完全に同化。

提督の求めるまま、喜んでフェラチオやパイズリ、素股などのプレイに興じるようになっていたため、むしろ「もう、なんで、もつと早く抱いてくれなかったの？」と逆の意味で不満げだった。

その頃には、“ふたりの仲”も、鎮守府内では公然のものとなっていたため、ひと月後に、提督が如月にケツコンカッコカキを申し込んだことが知られても、誰も驚かなかったという。

——おしまい——

Ano t h e r 8. 鈴谷にそそのかさされて熊野に 為った提督の話

いったい自分は どうしてこんな場所に いるのだろう。

「あ、それ♪ んんっ……ふう、気持ちいい♪」

「ふふっ、スズヤちゃんは 本当にキスが好きだよな」

せつかくのオフの日に、なぜか女装させられた挙句、部下のデート（？）につきあわされて、目の前でイチヤイチヤされ……。

「んんっ……♪ 柿崎さん、ホント上手だよね、スズヤ、もう濡れて来ちゃった♪」

「そりやまあ、こう見えてそれなりに経験は豊富だからな」

「やん、イ・ロ・オ・ト・コ♪ でもちよつぱり焼けちゃうなあ」

「はは、でも今はスズヤちゃん一筋さ——ほら、脱がすぞ」

「きゃっ♪」

ホテルにまで連れて来られて、イチヤつきを通り越した、正真正銘の濡れ場をおっ始められて……。

「柿崎さん♪ 中で、中で出して♪」

「わかってるって。全部中に出すからな……ほら、受け取れッ！」

「あああ……スゴい、熱いのがスズヤの中に暴れてるのお♪」

獣のように交わる様を間近で——それこそ、“汁”の匂いが鼻につくほどの近さで見せつけられる。

これは恋人いない歴〓年齢の私に対する、イジメなのだろうか。

「ふう〜〜気持ち良かったあ……って、そんな意地悪なこと、しないよお。そ・れ・に・く、て……アンタだって、スズヤたちがシてるトコ見て、感じてたっしょ？」

！ そ、それは……。

私はゴクリ、と生唾を飲み込んだ。無意識に少し乱れてしまったスカート の裾を整える。

確かにふたりの交わる姿を見て興奮したのは否定できない。むしろ、アダルトAV並みのエロシーンを目の前で見せられたのだから、

劣情を催すのが当たり前だろう。

だが——私は、鈴谷の痴態を見て期待をってしまったのだ。

「彼女を抱きたい」のではなく、「彼女みたいに抱かれてみたい」と。その事実は覆しようが無かった。何時からか気が付けば、乱れる鈴谷の姿に、自分自身の姿を重ねていたのだ。

「柿崎」と呼ばれている男は、ベッド降りて、ゆっくりと私の方へ近づいて来た。

(逃げなきやー！)

そう思うのに、なぜか身体が動かない。

その時の私の脳裏には、先ほどの鈴谷と彼の行為の光景がフラッシュバックし、心臓がバクバクと16ビートを刻んでいた。彼を見つめる目は、(まるで何かを期待するかのよう)潤んでいたに違いない。

あつ、と思うより早く、私の体は彼に真正面から抱きしめられていた。

「ほら、力を抜いて。初めてだったら怖いかもしれないけど、こう見えて、おじさん、結構テクニシャンだから。バージンのコだって、しっかり気持ち良くしてあげるからさ」

少し煙草臭い匂いがするワイシャツをはだけた筋肉質な半裸の男性に抱きつかれるなんて、普段なら嫌悪しか感じないはずなのに、どうしてか今は心地よいと感じてしまう。

それでも緊張からくる身体の強張りを感じ取ったのか、柿崎は私向かってニカツと笑いかけてくれた。

「じゃあ、まずは互いに自己紹介からしてみよっか。おじさんもキミも、お互いの事、全然知らないしな。

言い出しつぺのおじさんから名乗ると、柿崎時雄、31歳。この街の港にある製鉄会社の営業マンをしているサラリーマン、つてとこかな」

肩を抱いたまま、ベッドに並んで座らされ、視線でキミの番だと促されて、少し焦る。

「わ、わたくしはクマノですわ……スズヤの親友、といった所でしょ

うか」

考え込む暇もなかったので、ここに来る前、今の格好に着替えた際に鈴谷から押し付けられた「クマノ」という偽名に応じた、それっぽい設定を「らしい」口調で口にする。

男はふむふむと感心したかのように頷き、さらに語りかけてきた。

「へえ、親友かあ。若いつていいな。それじゃ、クマノちゃん。まずはゆっくり深呼吸してみよっか。はっい、吸ってー」

その言葉に釣られて大きく息を吸い、肺へと空気を取り込む。

——と、次の瞬間、不意に口が何かに塞がれていた。

一瞬何が起きたのかわからなかったが、すぐ目の前に柿崎の顔があることから、彼が自分の唇を奪ったのだと気付く。

ねっとりとした舌が、ねぶるようにしてゆつくりと口腔内に侵入して来た。

それは、未知であるが故の不安ととともに、未だ経験したことのない快感を同時に伴う、奇妙な感覚だった。

口の中は唾液にあふれ、その中を彼の舌が器用にうごめいて私の舌に絡み付いてくる。舌どうしがこすりこすられ、そのたびにゾクリと背筋に甘い痺れが走り、胸が苦しくなっていく。

その感覚に慣れる暇も与えずに、私を押し倒した彼の手が、いつの間にかスカート裾から忍び入り、ペーパーミントグリーンのショーツに包まれたヒップを撫でまわしている。

男にお尻を触られるなんて、普段なら気持ち悪さしか感じないはずなのに、場の雰囲気になされたのか、あるいは本人が称する通りテクニシャンだからか、下半身を中心に、何かむずむずするととても奇妙な感覚が広がってくる。

——いや、正直に言えばソレが「快感」だと無意識に理解はしていた。

むずかゆいような熱いような——端的に言えば性的な意味での気持ち良さが、下半身を中心にじんわりと広がっていく。

「このまま指、入れてもいいかな？」

囁かれた耳元にかかるその吐息でさえ、全身の皮膚感覚が過敏に

なっている状態の私にとっては、快感を高めるスパイスにほかならない。

たまらず、うなづ……こうとして、ふとさ迷った視線の先にいた鈴谷の表情を見た刹那、とっさに私は柿崎を突き飛ばし、部屋から飛び出していった。

* * *

野島照能（のじま・てるよし）は、3年ほど前、政府が実施した大規模資格検査に引っかけり、そのまま海軍からのスズメに従って「提督」として任官した艦娘の指揮官だ。

現在の階級は少佐。有意識艦指揮官たる「提督」は、最初に鎮守府に着任する際に与えられるのが少佐なので、3年間まったく昇進していないことになる。

現在の日本の状況でこれはかなり珍しい（それも悪い方に）と言えるだろう。

（妖精さんによって）提督に選ばれるような人材は、どちらかという^と善人かつお人好しが多く、少なくとも（着任当初に）悪行に手を染めるような人間は稀だ。

そして、現在の深海棲艦との戦況において、平均的な意欲と真面目さをもって「提督」をしていたら、その戦果から、普通は2年、早ければ1年ちよつとで中佐に昇進する例もさほど珍しくはない。

裏を返せば、3年半が過ぎても少佐のままの野島提督は、勤労意欲が足りないか、真面目じゃないか、あるいは昇進したものの、なにがしかのミスで少佐に降格されたのか——という推測が成り立つのだ。

ちなみに正解は、1番目だ。

中高時代の学業成績も、スポーツなどの体力面も、平均かやや下くらい。コミュ障というワケではないが、気の利いた話術や天性の魅力^{カリスマ}を持つているわけでもなく、財力や服装その他のセンスもギリ人並み程度。

一昨年成人式（※この時代は二十歳だった）を迎えた成人男子にしては、背丈もやや低めで、顔もブサ面ではないがイケメン（ついでにイケボ）とは言い難い。

総じて野島照能という男は「中の下」ともいえるべきランクの人間で、かつそのことを改善する意欲や向上心も欠けていた。

その性格は提督となってからも変わらず、結果、大本営から下される「毎月こなさなければいけないノルマ」は果たすものの、それ以上の「仕事」にはあまり積極的とは言えなかったのだ。

当然、日本海軍の意気軒昂たる軍艦の魂をインストールされている艦娘にも、あまり好かれる性質^{タチ}ではない。

とは言え、彼が悪人であったかというところと全然そんなことはなく、むしろ大多数の日本人同様の常識と良識は心得ていたし、犯罪的な行為に眉を潜める感性も持ち合わせていた。

そんな彼だからこそ、それなりにつきあいが長く、信頼している配下^{ぶか}のひとりである重巡艦娘・鈴谷が「援助^{パカ}交際^{かつ}に手を染めている」という噂を聞いて、秘密裏に彼女を呼び出し、慣れぬ説教をしたのだ。したのだが……。

鈴谷との対話の中で、どこをどう通ったらそんな話になるか全く不明なのだが、「鈴谷のデート(?)に(女装して)友達としてついて行って、彼女の「お相手」を見定める」という結論になってしまったのだ。

——その挙句、ふたりの醸し出す淫靡な雰囲気^{アテ}にアテられた結果が、昨晚的一幕、というワケだ。

* * *

あの時、鈴谷の瞳に浮かんだ「わたしのものをとらないで」という懇願にも似た嫉妬心を見過^ごさず、柿崎からの誘いを振り切ったことは後悔していない。

むしろ、ヘンな修羅場(それも男・女・女装子の三者)を引き起こさずに済んだのだから、我ながら珍しく良い判断だったと言えると思う。

ただ、ホテルから飛び出したあと、一応軍人のはしくれ(生身の格闘訓練なんて、半年間通った促成士官学校で、週1ペースでやった程度だが)なのに、夜の街でチンピラっぽいチャラ男に絡まれ、それに対処できなかったのは情けないの一言に尽きるだろう。

偶然通りがかった(本来の)私と同じ年頃の男性に助けてもらえな

ければ、場末のホテルが彼らのたまり場に連れ込まれて、ヒドいメに遭っていたかもしれない。

「本当に有難うございました。お蔭で難を逃れることができましたわ」

「アクシデントの連発で割と気力残量がかつかつではあったが、自分が今、女装中（それも鈴谷の予備の制服を着せられたエセ女子高生姿）であることは、かろうじて意識の端にあったので、熊野っぽい言葉遣いで、男性に礼を言う。

「いや、まあ、無事で何よりだけど——君みたいな年頃の娘さんが、この時間帯にこういう場所を歩いているのは感心しないかな」

成り行きでファーストフード店に入った背広姿のその男性は、女子高生（に見える姿）の私に対して、軽いお説教めいた言葉を投げてくる。

「——すみません、お友だちの付き合いで……」

「ふむ。何か事情があるのかな？」

「実は……」

魔が差したという心が弱っていたのだろう。

さすがに自分が男で本当は成人している年齢だということは隠したが、事のあらまし——「友人」がエンコーしてると聞いて説教したら、逆にそのエンコー（？）相手との逢瀬に連れて行かれて、Hしてるところを見せつけられた（そしてその後、あやうく犯されかけた）——ことを、気が付けば見ず知らずの相手に話してしまっていた。「うーん、とりあえず、君……えーと、クマノさん、だっけ。ちよつと迂闊に流され過ぎ。いくら友達に言いくるめられたからって、そんな場について行くのは軽率過ぎるかな。

相手の男がひとりだから良かったものの、もし相手が知人の男とか呼んで複数で——なんて状況も考えられたワケだからね」

「はい、おっしゃる通りですわ」

もしそうだったら、私は逃げられなかっただろう。そこで捕まり、服を脱がされたら男だとバレてヒドいメにあっていたかもしれないし、逆に「男の娘でもいいや♪」とか言って輪姦されていた可能性す

らある。

その様子を想像した私はブルツと背筋を震わせたが、同時にどこか淫靡な衝動が体内の深奥で熾火のように疼くのも感じた。

「それと、友達のスズヤさん？ その子と男性のやってることって、もしかするとだけど、いわゆる『援交』じゃあないんじゃないかな」「は？ どういうことですか？」

男性の言葉の意味が、わからなくて戸惑う。

「援交——援助交際というのは、一般的には女性が男性に対して金銭等で貞操を切り売りする、いわば『売春』だ。

でも、君の話を聞く限りでは、スズヤさんとその柿崎という男性の間にはそういった金品の授受があるように思えない」

「！ 確かに、そうですね」

「ご飯やホテル代を奢ってもらったとは聞いたが、それくらいは『年長の男の甲斐性』の範囲だろう。偏見を排して見るなら、そのふたりは単なる『歳の差カップル』、最大限卑俗に見ても『セフレ』というヤツなんじゃないかな？」

「あ……」

思い返せば、「鈴谷がエンコーしてる」というのは鎮守府内で流れた無責任な噂に過ぎない。

それを、本人に確認もとらずに頭ごなしに「そんなことは止めておけ」と説教したからこそ、彼女は反発し、自分達の交際の『実態』を見せつけようとしたのではないだろうか？

「——最低ですわね、わたくし。噂なんかに惑わされて、部下ともだちを信じずに……」

俯く私の頭に、ポンポンと軽くはたくように彼の掌が触れる。

「撫でる」というほど馴れ馴れしくなく、それでも相手の不器用な思いやりが伝わってくる優しい仕草だった。

「ま、こんなトコでぐだぐだ言っても、繰り言にしかならないさ。ちっとばかり年長な人間から偉そうにアドバイスさせてもらえば、君はできるだけ早くその友達と話し合って、まず謝り、それから噂の真偽を確認するべきだと思うな」

「はい、ご忠告有難うございます。肝に銘じますわ」

顔を上げ、男性の方を見ると、ニカツと優しい笑みを向けてくれる。

——なぜだろう、その笑顔を見て、一瞬だけトクンと鼓動が跳ねたのは。

「うん、いい返事だ。じゃあ、自分はこれで。」

さつきも言った通り、君みたいな可愛いお嬢さんが、この時間に裏通りをウロウロするのは避けた方がいいから、気を付けてさつきと帰るんだよ？」

男性は立ち上がり、とつくに空になっていたコーヒーの紙コップを手近なダストボックスに入れると、「じゃあね」と手を振り去っていった。

* * *

鎮守府に戻った野島少佐は、普段の服装へと着替えた後、既に帰っていた鈴谷を呼び出して改めて話をする。

そこで判明した事実はやはりあの男性の推測通りで、鈴谷と柿崎は（少なくともふたりの意思としては）「恋人同士（カップル）」という関係であるらしい。

無論、噂を鵜呑みにしてロクでもない勘違いをしていたことを、野島少佐は鈴谷に謝罪し、相手もそれを受け入れた。

多少ぎこちなくはあったものの両者の関係は修復され、元通り「気の置けない上司と部下」の関係に戻った——かと思いきや。

「あ、そうそう。あの制服、提督には無期限で貸しといてあげるから

♪」

鈴谷の方がトンデモない爆弾をブツこんできた。

「はあ!? いや、別にそんな……」

いらぬから返す、と言うつもりだった野島だが、なぜか躊躇して言葉を濁してしまう。

「ニヒヒく、わかってるって。提督、〃目覚め〃ちゃったんでしょ？」

訳知り顔がムカつくが、野島も強く否定できない。

「再び、あの制服をまとって〃熊野（クマノ）〃になつてみたい——

—そういう感情がないと言えば嘘になり、ある意味、まさに凶星だったからだ。

単なる女装癖——とは少し異なる。むしろ「変身願望」と言う方が正確かもしれない。

野島照能は、自分のことがあまり好きではなかった。むしろ、どちらかと言うと嫌悪していたと言ってもよいかもしれない。

体力、知力、コミュ力、誠意や熱意、我慢強さ、面倒見の良さ、^{ルックス}幸運
——そういったものが、すべて「せいぜい平均かやや下」で、^{ツッキ}成人男性としてはやや貧相。特技と言えるほどの特技もなく、才能のなさをカバーできるほどの根性もない。

今でこそ提督として一応は社会貢献しているものの、もし提督になつていなければ、低収入なフリーターか最悪ニートになつていた可能性が高い。

自分がそんなダメ人間だという自覚があり、また提督として身近に接しているだけに、野島には艦娘に対する憧れがあった。

強い護国の意思を持ち、勇気を奮い起こして過酷な戦いに身を投じる、美しき鋼鉄の戦乙女。

無論、ある種のプロパガンダで誇張美化された「艦娘像」であることは分かっていたが、他方、全くの見当違いというわけでもないことも、自分や他の指揮官配下の艦娘たちを見て、よく知っていたのだ。

だから、昨晚、鈴谷にお古の制服を着せられ、その姉妹艦である「熊野（クマノ）」を名乗り、それらしく振る舞った時、野島は、とても恥ずかしかつたのは事実だが、一方で誇らしく陶然とした気分も密かに味わっていたのだ。

あるいは、好きな／憧れのキャラクターに扮するコスプレイヤーというのも、こんな気持ちなのだろうか、とも思った。

そんな背景もあって、「疑似的に熊野に「為る」「体験に味をしめてしまった彼は、鈴谷の悪戯ともお節介とも、あるいは純粋な親切とも言える提案を断ることができず……」。

以後、周囲の目を盗んで、時折（徐々に頻度を増やしつつ）「クマノ」として行動するようになったのだ。

そして、色々と行き違いのあった鈴谷との仲だが、(格好だけの偽物とは言え)「姉妹艦」がいることを喜び、なにくれと「彼女」の世話を焼いてくれる。

年頃の少女としての身だしなみや言動・仕草のイロハを仕込み、時には鎮守府外に連れ立って出かけて、女の子らしい服(主に下着)や化粧品などの買い物にもつきあってくれた。

その甲斐もあって、「クマノ」の熊野らしさ(&女らしさ)は急速に向上していく。

「鈴谷、いま三月堂で桜にちなんだデザートフェアをやっているそうです。ご一緒しませんこと?」

こんな風に、「神戸生まれのお洒落な重巡娘」おせうさまっぽい口調で話すことにもすっかり慣れたものだ。

「あくゴメン、クマノン。今週末は「あの人」が出張から帰ってくるからさ」

「まあ、柿崎さんが? では仕方ありませんわね。そうそう、以前失礼した時のこと、申し訳ありませんと謝っておいてくださいまし」

「オツケー! ま、別にもう気にしてないと思うけどね」

「そうですか。では、鈴谷のことをくれぐれもよろしくお願いします、と言っていたと」

「ソレ、本人の口から言わせちゃう気!?! あ、なんだったら、もっぺん一緒に会ってみる?」

「いえ、わたくし、馬に蹴られる危険を好んで冒すシユミはありませ

るので」
普段の無気力無感動に提督稼業を務めているときとはまるで違う、気のおけない「親友」との気安い談笑は、やりとり「彼女」の心に確かな潤いをもたらしてくれる。

また、この後、仕方なくひとりで出かけた甘味屋の前で偶然、あの日助けてくれた男性と再会。流れで同席し、「安室」という名前と連絡先を教えてもらって、その後、ポツポツ連絡をとるようになった。

その影響(せい)で別の角度からも提督の熊野化が進行したりもするが、まあ今更だろう。

——だが、彼／彼女は、ひとつ重大なことを忘れていたのだ。
艦娘が着る制服は艦装の一部でもあり、安易に他人に貸し借りしてよいものではない。そのことは罰則付きで軍規に明言されてもいる
ということ……。

* * *

「朝おん」という特殊用語がある。「朝起きてたら女になっていった」の略で、男性が突然女性に性転換するという前世紀からある妄想ネタのひとつだ。

オタクとしてさほどヘビーではないものの、ネットの掲示板巡回を暇潰しの手段としている私も、少なくともその言葉自体は知っていた。

——まさか、その「朝おん」を自分が体験／体現することになるとは思ってもみなかったが。

寝間着代わりのロングTシャツ姿のまま、自室の壁にかけられた身だしなみ用の鏡を覗き込むと、絶世の美女……とまではいれないが、「野島照能」の面影はいくら残しつつも、それなりに可愛いと言い得るハイティーンの少女が映っていた。

目線の位置からして身長はほとんど変わっていないようだが、身体の方は幾分骨格が華奢になり（まあ、元から貧弱ボーイの部類ではあったけど）、首から喉仏も消えている。

顔自体は、起き抜けでスッピンなのに、念入りにメイクして「クマノ」に扮した時とよく似ていた。

「それとココも——やっぱりお約束通りかあ」

思わず漏れた声も、女性声優が務まりそうな高く澄んだソプラノボイスになっていた。

確認したのは、こういう時の定番である胸と股間。上が「あり」、下が「なし」という結果だったのは予想の範囲内ではあるが、未使用だった「息子」の消失には流石にちよっぴりショックを受ける。

「ごう」なった原因は、おそらく軍で聞いたことのある「あの」話が絡んでいるんだろうな」

最上級機密というほどの秘匿情報ではなく、むしろ提督クラスの佐

官将官になれば大概耳にしたことのある信憑性の高い「噂」のひとつに、「実は艦娘は、女性だけでなく男性でもなれる（者もいる）」という話がある。

一般的な常識として、「艦娘になれるのは十代から二十代の女性で、中でも実戦レベルに達する適格者は100人に1〜2人程度」と学校などでは教えられる。

ただし、その話には裏がある。「女性よりもさらに低い、おおよそ数万人にひとりくらいの確率で、男性にも艦娘適格者が存在する」というのだ。

「あの話がホントで、私もその「数万人にひとりの艦娘適格者」だったとしたら、〝こう〟なったことも理解できなくはないが……」

体格の変化が少なめだったため、なんとかまだ着れそうな士官用制服に袖を通しながら、私は思考を巡らせる。

ちなみに、胸の膨らみは巨乳とはほど遠い慎ましい大きさ（どちらかと言えば貧乳寄りだが、ブラは必要そう）で、制服の上着は「ちよつと窮屈」程度で済んだが、ヒップの方がかなり大きくなっていたため、スラックスがパツパツで今にも破れそうだった。

「なんでこういうことになったのか、まずは工作艦の明石あたりに話を聞いてみるか」

自分が野島提督だと信じてくれるといいなあ———と思いつつ、明石の仕事部屋である工作室へと向かった私だったが、結論から言うところ、彼女は一と目で私が誰か見抜いてくれた。

それはまあ良かったのだが、その後の事情聴取で明石から色々話を聞かれ、結局鈴谷に貸してもらった制服で女装を（週に2、3度くらいのパースで）しているコトも白状してしまった結果———怒られた。

「ちよつと！ 艦娘の制服は普通の衣服に見えても艦装の一部なんですよ!？」艦娘間で艦装を勝手に交換したりするのは原則禁止ですし、まして、艦娘でない人が艦装を身に着けるなんて言語道断です!!」

* * *

現在の「第三世代型艦娘」は、適格者に手術で霊的なナノマシンを注入・定着させ、艦娘としての船魂を降霊、身体に定着させることで

生み出される。

施術自体はほんの数分で、耳にピアス孔を開けるレベルの気軽さだが、無事船魂が定着すると被術者はいったん眠りにつくので、トータルで2〜3時間程度はかかる。

その眠っている間に身体が艦娘として最適化され、目覚めると艦娘らしい容姿になり、基本艦装を装着・起動が可能になる。

悪の組織の人体改造じみていた第一、第二世代の頃に比べれば隔世の感がある手軽さだが、実は100万人にひとりくらいの割合で、その適合手術すら必要とせず、艦装をまとい艦娘として活躍できる「天然艦娘」と呼ばれる者も、中には存在するのだ。

「私も、その天然艦娘とやらのひとりだと？」

「正確には少し違いますが、広義に解釈すれば、そうなるでしょうね」

工作室備え付けの機器でテストした結果、今の野島少佐は確かに最上型重巡の艦娘・熊野として活動できることが確認された。

実際、少々勝気そうだが品のある整った顔立ちといい、腰の近くまで伸びた焦げ茶色の髪（今はポニテにしている）といい、胸が貧しめの安産体型といい、言われてみれば確かに資料にある「最上型4番艦の艦娘・熊野」とそっくりだった。

こうなると、現状を大本営に隠しておくわけにもいかず、恐る恐る連絡した結果、野島少佐は大尉に降格・減俸のうえ、別の鎮守府で提督補佐の役目に就くか、新たに着任した熊野として引き続きこの鎮守府で今度は艦娘として任務を遂行するか、の二択を迫られることになった。

これは、男性適格者や天然艦娘に関する情報をおおっぴらに公開したくない上層部の意向によるものだ。

ふたつの選択肢を提示された時、野島大尉はほとんど迷うことなく後者を選んだ。密かに艦娘に憧れていた彼（今は彼女だが）にとって、「夢」の実現への道筋が見えたのだから当然だろう。親友の鈴谷と離れることが躊躇われたことも理由のひとつだ。

気がかりなのは、野島の後任となる提督だったが……。

3日後、鎮守府の基地司令室で、新たな提督と顔合わせした。熊野は驚くことになる。

「安室光流少佐、本日ヒトフタマルマル付けで、本鎮守府に着任しました。よろしくお願いします」

司令室に現れたのは、あの日「クマノ」を助けてくれ、その後も何度か顔を合わせたり、ラインで連絡したりしている、男性・安室に他ならなかったからだ。

「安室少佐は、国立の大学を優秀な成績で卒業する間に提督資格が発覚し、正規の士官学校に入って1年間学んだのち着任した、期待のホープだ。よくこの鎮守府に来てくれた。歓迎するよ」

基地司令官の説明じみた台詞（というか、間違いなくこの場の他の人間に聞かせているのだろう）も頭に入らず、目を見開いて彼の顔をマジマジと見つめしめよう。

「本来、新任の提督の最初の秘書艦には、駆逐艦か軽巡洋艦が就くのが普通なのだが——既にある鎮守府を引き継ぐことと、安室提督本人の希望があつたため、熊野、貴艦に秘書艦を任せることにする」

未だ信じられない気分の熊野だが、基地司令のその言葉を聞いて、シヤキツと態度を切り替える。

「！ 承りましてよ。さあ、参りましょう、安室提督♪」

「ああ、よろしく願いますよ、クマノさ…んんっ！ 熊野」

基地司令からの指示では、とりあえず固定で秘書艦をするのは最初の1週間だけ、という話だったが、結局、安室提督は配置換えすることなく、その後も熊野を第一艦隊旗艦兼主席秘書艦として重用し続けた。

7年後に退役するまで、元野島少佐であった艦娘・熊野は、安室提督を公私にわたって支え、退役後は無論、彼と（カツコカリではない正式な）結婚をして、幸せな家庭を築いたのだった。

〈おしまい〉